奇譚クラブ

20

昭和二十五年九月二十五日 印刷
昭和二十五年十月 一日 發行
第四卷 第九號 毎月一回一日發行

魅惑と獵奇



10

奇譚クラブ 魅惑と獵奇特集号 第二十四集

奇譚クラブ 魅惑と獵奇特集号 定價七拾圓





七七ちゃんのヌード

はだかまいり

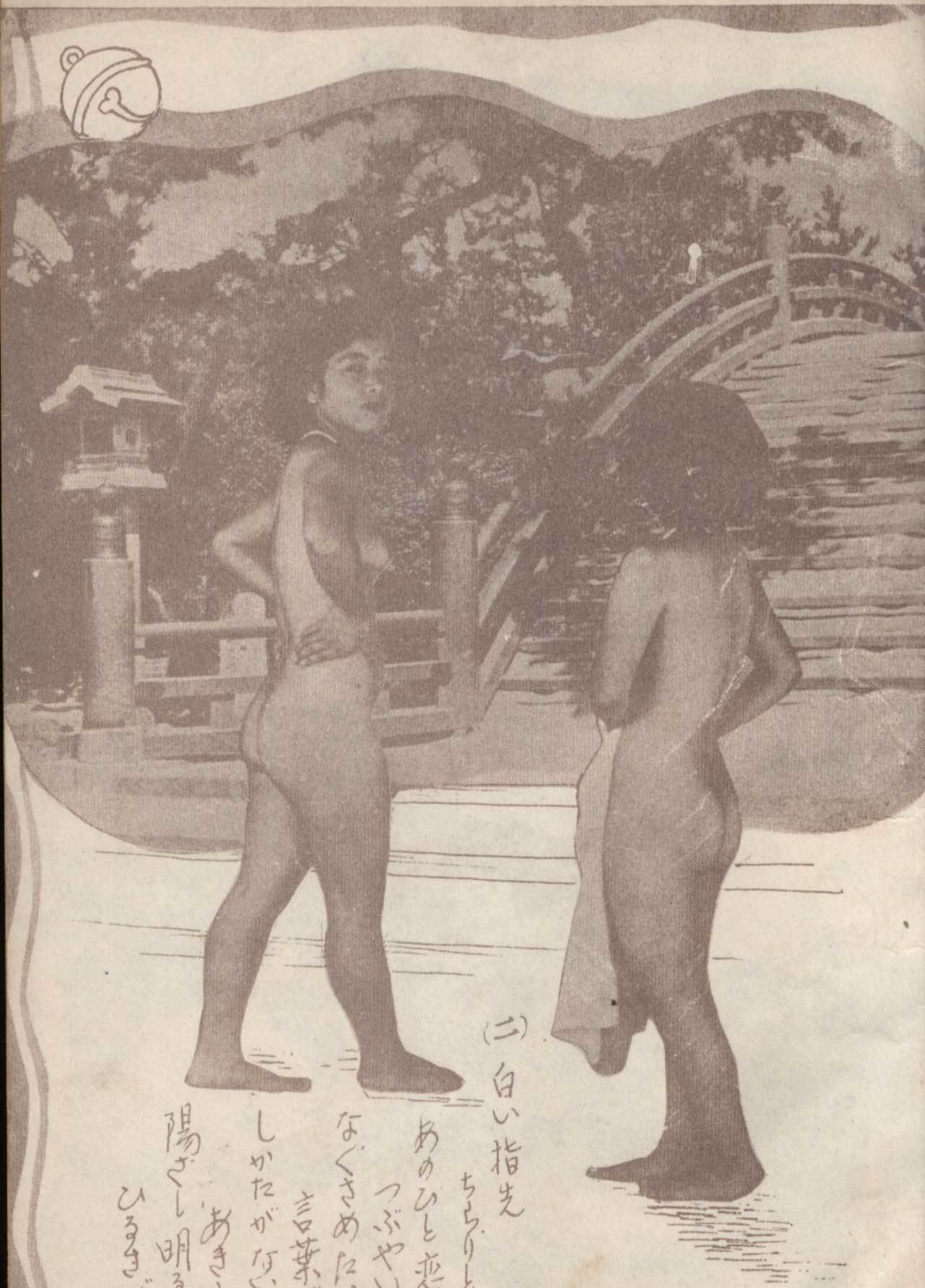
構成　七七ちゃん玲子

写真　片山研二

ハダカ娘（バナナ、娘の節で）

（一）
ハダカ詣りの
娘がふたり
何を祈るか
ひざまづく
見てはいけない
男のひとは
花も恥らう
十九の肌を
見れば乙女の
夢が散る





(二)

白い指先
ちらりと光り
あのひと恋しと
つぶやいた
なぐさめたけれど
言葉がでない
しかたがないから
あきらめた
陽ざし明るく
ひるさがり

(三)

あの娘二人で
恋しあのひと来るかしら
逢はせてほしいと 小声で云へば
オーケーと 神様言ふかしら
何をば祈る
なぜだか娘は
なみだぐむ

変態艶くらべ
強精剤にされた男



紙問屋奈良屋の通い番頭で藤兵衛といふ四十男には永年どうしてもやめられない不思議な道楽があつた。

それは、あちこちの男女混浴の銭湯を何軒となく廻つて歩いて、これはと思ふ女の使つてゐる手拭を、巧みに自分の持つてゐるのと、取り替へて來て集めてゐることであつた。

これは、全く、彼の殆んど病的な趣味であり、眞剣な蒐集でもあつた。

それを一枚づゝこくめいに乾して丁寧に火のしをあてゝ、疊んだものが、專用の二つの葛籠にいつぱいたまつていた。

文・恋々山人
繪・しゆき尺



二

一合ときめてゐた寢酒を飲みながら、女房の眠つくのを待つて、その手拭を代る〳〵出して眺めてはちつと考へこんだり、ニヤ〳〵笑ひながらして、いつまでも享樂した。ある晩のことであつた。

いつものやうに店から家へ帰つた藤兵衛は、そのまゝブラ〳〵と手拭をさげて、すぐ近所の丁字湯へ行つた。



三



五

久しぶりに、今夜あたりは、すばらしい女にぶつつかつたりものだと思ひながら、油断なく、物色(ぶっしょく)してゐた。あいにく、今日の丁字湯は、はなはだ生彩に乏しかつた。



四



孫娘らしいのを伴れた腰の曲つた婆さん、背中一面に灸の痕があつて、皮膚の色の黒く濁つた年増女、外に女の気はなかつた。彼は見たくもないものを見せられたやうに、ヂッと眼を閉じた。

さうしてつまらなさそうに、掌のひらへ手拭をのせて、浴槽の中でベロンとひとつ顔を洗つた。

それにしても、此の前、寶命湯で逢つた女の身体は全く美事だつた。均整のとれた全体の筋肉がきつくひき緊つてゐて剝きたての茹玉子のやうに光澤があつた。





そんな事を考へて湯を出てあがるつもりで岡湯を浴びてゐると、頭髪を櫛巻にして、袷の下へ派手な浴衣を着た川ひ者でもあるらしい二十六七の阿娜めいた女が流しの方へ、背後を向けてスル〳〵と帶を解いてゐた。



それを眼早く見た藤兵衛は再び浴槽に飛び込んで隅の方へうづくまりながら、獵奇に滿ちた眼をみはつてその女の肉体を見つめてゐた。その女が着物を脱ぎ終つてつゝましく、柘榴口へ近づくまでに、彼はその全身を鑑賞する事が出來た。無意識らしく粧つて、その傍へ近づきかける と、丁度その時女は浴槽を出た。彼は再び機会を待たねばならなかつた。

二度目は女は続いて下りの後からすぐ浴槽へ入つた。最初から有利な立場にあつたので、すぐ仕事にとりかゝるには、きはめて容易であつた。



その翌日も、またその翌日もさうであつた。

それから同じ事が毎晩くりかえされた。

どうかして、藤兵衛が湯へ行く時刻が少し遅れた時など、女の方で待つていて、わざ〳〵手拭を渡して帰つてゆくのではないかと思はれるやうなこともあつた。

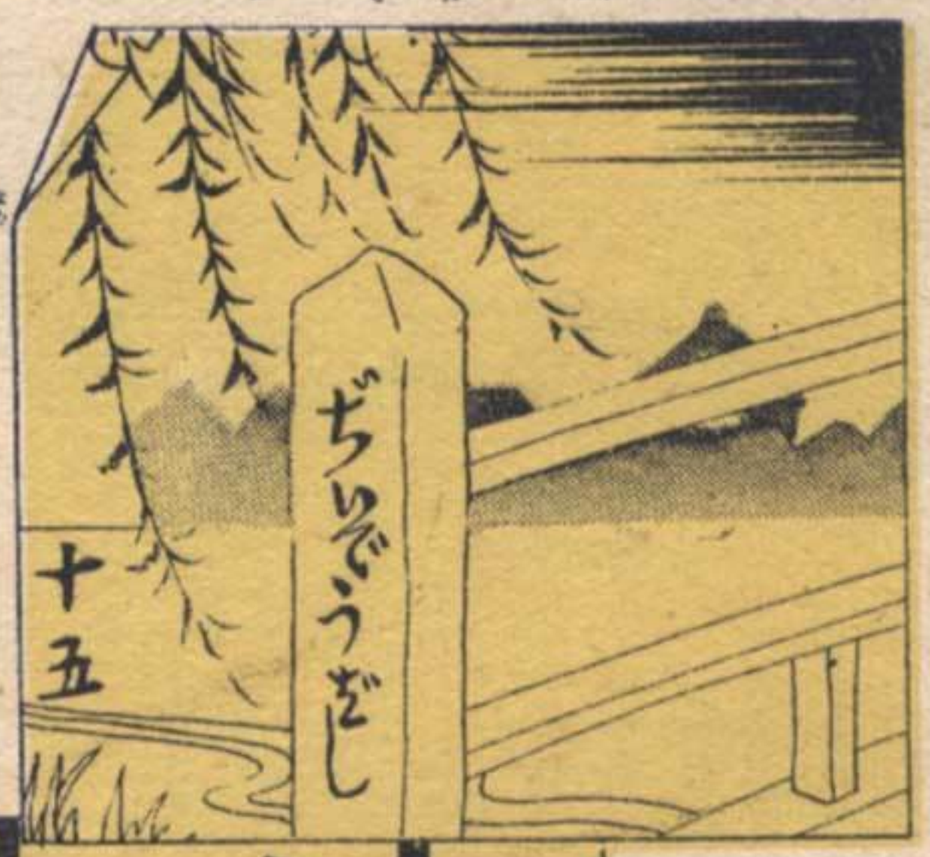
彼は今迄一人の女からこれ程幾度も手拭を得たことはなかつた。今迄あちこちの銭湯を廻つて歩いても、せいぜい月に二三本か、よい時でも四五本位の收穫よりなかつたものが此の頃はグン〳〵能率があがるのですつかり調子づいていた。

が、今では、もう手拭ばかりでは満足されなかつた。



どうかすると、蛇のやうに滑らかにからみつくことのある女の脚が待たれた。その女が湯の中でしてみせる不思議な媚態が彼の頭をフラ〳〵させた。

その晩、いつものやうに寝酒を呑み終つて、その日の手拭を長火鉢の残り火で乾しているとその隅に、なにやら、文字のやうなものが書いてあることに気づいた。

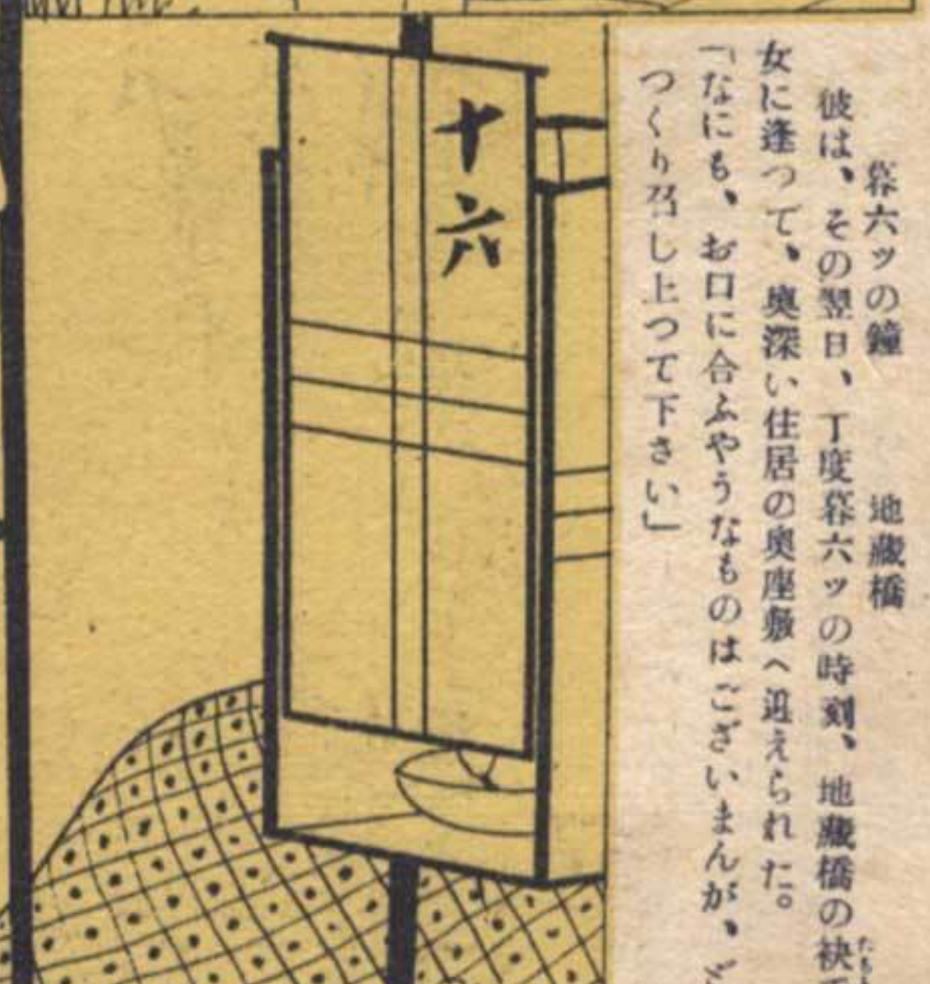




女は愛想よく銚子をとりあげてすゝめた。彼は狐につゝまれたやうな気持ちで盃をとりあげた。

降つて湧いた倖せの馳走酒を夢中になつて十二分に飲んだ藤兵衛は、なにを話しているのだか、自分でもわからなかつた。

炬燵の掛蒲團に顔を埋めて假寝したまでは微かに覚えてはいたが、それから先は、なんにも知らなかつた。



地藏橋

彼は、その翌日、丁度暮六ツの時刻、地藏橋の袂で丁字湯の女に逢つて、奥深い住居の奥座敷へ迎えられた。

「なにも、お口に合ふやうなものはございまんが、どうぞ御ゆつくり召し上つて下さい」

その夜から彼の妻が、女の家の奥座敷に見る事が出来た。それは何故か時刻が限られていた。七ツから八ツの一刻以上逗留する事はなかつた。なかつたといふよりも、出来なかつたのである。

その一刻の間に、彼は姐娼にあたゝながら、酒を飲まされて、それから猫のやうに、女にちやれなければならなかつた。

今度こそ！　と藤兵衛も、最初の中は、ある期待を持つていたのだつたが、この頃では、もうそんな希望も捨てゝ女の命じるまゝに行動をとつていた。





慣らされていたことではあつたがあまり女の悪戯が過ぎる夜は彼の焦慮は極度まで昂じてやまなかつた。

が、いつも、そこ迄くると、何處からともなく、ポン〳〵と手を鳴らす者があつた。

どうも、それは隣座敷から隙見をしている者でもあるとより思へない程、いつも彼の感情が最も高潮した刹那、その手が鳴るのであつた。

それを聞くと、女は直ぐ立つて行つて再び其處には戻つて来なかつた。

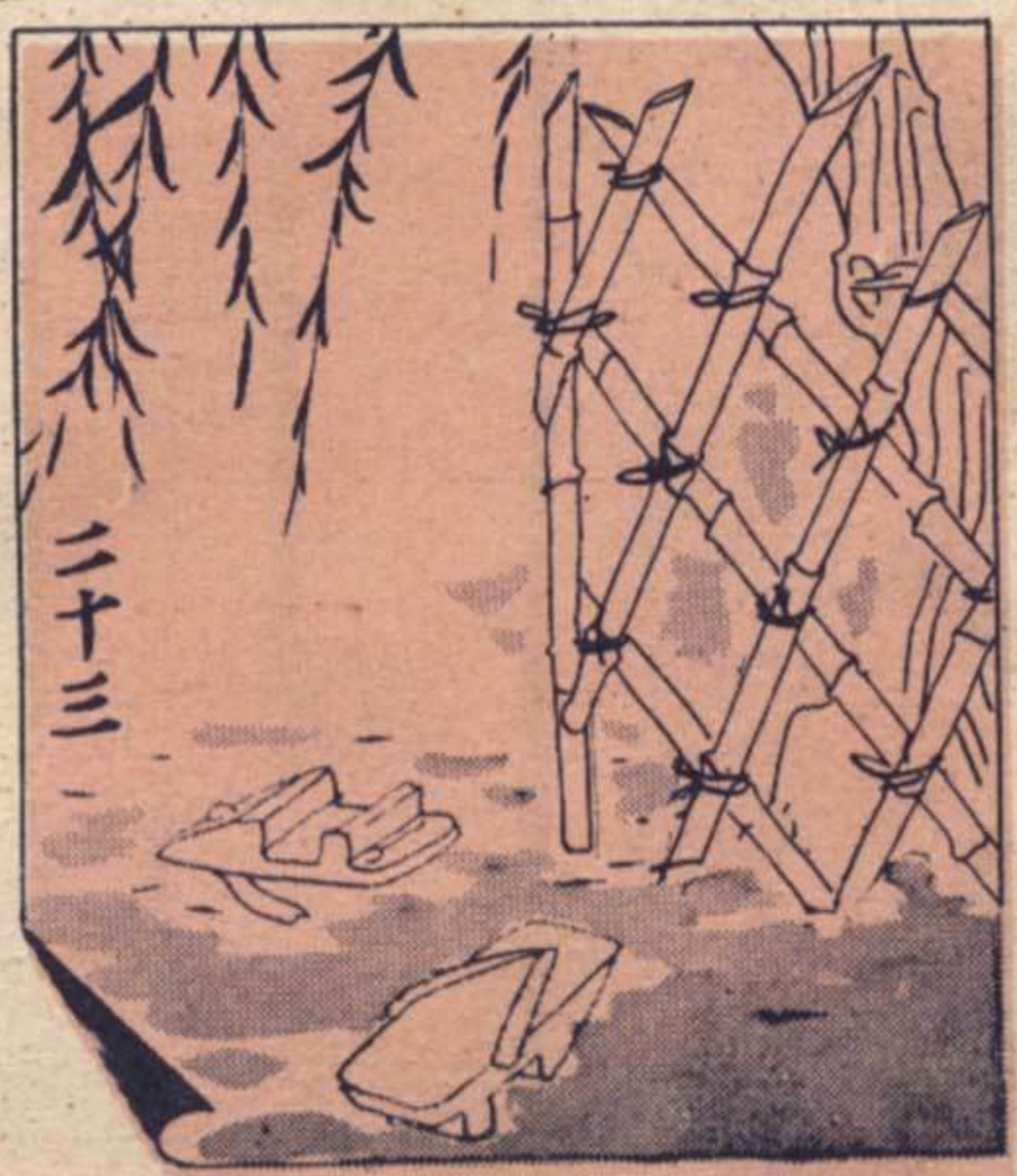
へと〳〵に疲れた彼は下女に促されて悄然と其家を出なければならなかつた。

この家へ通ふやうになつてから彼は眼に見えて憔悴し眼はどんより曇つていた。

しかしいつもの時刻が來ると、網にでも引かれるやうに、女の家へ出かけて行つた。

或る朝、藤兵衛が地藏橋の柳の樹へ冷たくなつてぶらドつていた。

七十近い老衰した主人に倦れていた丁字湯の女は、その主人の性能を滿足させる藥品を急に失つて、第二の藤兵衛を探さなければならなかつた。





ストリツバー

裸体物大流行時代

裸、裸、裸、世はまさに裸体物流行時代、終戦後一世を風靡したりべらるショーは、有爲轉變の激しい芸能界に於て依然として、絶大な人気を持ち続け、夏枯れで青息吐息の小屋も。ストリップのかかる所だけは満員の盛況といつた有様である。

それかあらぬか、アトラクションにりべらるショーをサービスする館迄現れるに至つた。

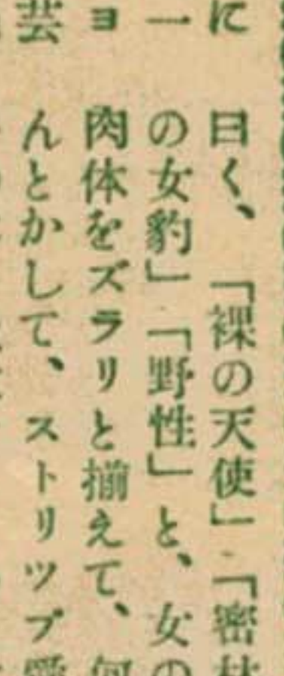
日先を追うことに於て、人後に落ちない、映画製作者が、何んで、此れを拾てゝおこうか。

なんとか、かんとか、ヨジつけて、無理に裸をならべる作品を案出した。曰く、「裸の天使」「密林の女豹」「野性」と、女の肉体をズラリと揃えて、何んとかして、ストリツプ愛好の客を吸收せんものと大童である。

普通作品の筋を替えてなんでも、裸をスクリーンに出させようという姑息的な手段が、斯くゆうストリツバーの特別出演とは相成つたのである。

こんな中途半端な映画ではなくて、最初からズバリと裸を主題に持つて來ようとゆうのが、大胆奔放、今迄にその例を見ない超感能映画。

映画ファン待望の
明石三平原作
「素裸の狂女」である。



女相撲

江戸時代——延享、明和天明の頃——盛んに行われた一種の見世物に女相撲がある。

文政九年の三月、江戸は上野山下（現在の上野停車場附近）で興行されたものは、なんと百人と女の珍相撲であつた。

「奇態流行史」の記するところによると、双方東西に分れて、男女力士十一名づゝ、女は乳母や淫賣婦上りの年増醜婦ばかりであつたが、珍しい興行だというので、大評判、連日大入滿員の繁昌を極めたそうである。

女相撲の興行は、その後各地で行われたが、明治二十三年十一月東京両國回向院内で行われたとき、余り醜態だというので、警視廳が禁止の命令を下したので其の後一時後を絶つたが、何時しか又それが復活して震災前までは淺草奥山にその常設所まで出來たが、大正十二年九月一日の關東大震災と共に、永久にその姿を消した

彼女の失態

秋の夜は涼しくて気持がよい。私は相思相愛の彼女と薄暗い公園の小道を辿つていた

彼女とのこうしたランデブーは數々の甘い思い出を殘して私の胸に宿つていた。

喫茶店、映畫、ハイキング海水浴、しかし愁しみ深い二人は、まだその唇さえも觸れ合つたことはなかつた。



ちよつとまつてネ

夜はようやく更けて、月は愈々冴え渡つた。木の間を洩れる月の光は、私の心をみやしくときめかした。

大きな樟の木の下にあるベンチには、しつとりと夜露が下りていた。このあたりは一入樹が茂つて暗かつた。

私は今宵こそ、思いを果そうと心に鞭を打ちベンチに並んで腰かけた彼女の肩にそツと手をかけた。

彼女も何を期待に滿ちた顔付ながら處女の本能は思わず身を固くするのであつた。

今まさに私の唇が彼女の顔に迫らんとしたこの時であつた。夜の寂けさを破つて、音高く一發、出すべからざるものを彼女は洩してしまつた。

私は抱き締める手をゆるめて、靜かに立ち上つた。月は只、何にも知らぬげに、冴えていた。



傷くすり壹りの歌

1

たにしどの、たにしどの
愛宕參りじやござらぬか
いやですよ〳〵
丁度昨年の夏の頃
どじようどのに誘われて
ちよろ〳〵小川を渡るとき
鳶や鷲やふくろ奴が
あつちや、こつちや突つき
その傷が〳〵
めぐり〳〵りて冬來ればづつくらづつくらうづき出す
何か貰藥ござらぬか
貰藥かづ〳〵ある中に
貰藥は第一の貰藥は
先づ第一の貰藥は
山の上なる蛤と
海の底なる松茸に
みの金玉 狐のはらわた
まぜ合して服すれば
貰驗忽ちあらわるゝ〳〵

キダンロマンス クラブ コーナー

女に甘い男

街路樹の影を斜めに長く投げかけている夕方、私は煙草の煙を空にふきかけながら大股に歩いていた。と、ドスン！と何者かが突き当つて来た。野球でデツトボールを喰つたようなキナ臭い衝動を受けた瞬間、私はヒヨロ〳〵としながらも、その打撃を与えたものにシガみついていて、大声に

「危いツ」

と怒鳴つたもんだ。

そして彼女を見出したのは、其の次の瞬間だつた。

彼女も私と同様に、私にしつかり抱きついていた。そして、その眼は恐怖に震えていた二人は暫くして平静に返つた。

狐につまゝれたような顔をしている、私に弁解する様に

「足のくるぶしをいためたと見えまして、足を踏み出えまして、倒れそうになりましたもんですから。」

私が彼女を助け起こした様に思つているらしい。

まつ毛の長い澄んだ眼、淡紅色の頬の艶と聡明さを表している明るい額。余りとりとして思私はうつとりとして思いに耽つていた。

彼女に会つたのが、遠い遠い昔の様に思えてならない。彼女を抱き止めた触感から来るときめき、懐しい恋人と、別れてゆかねばならないと思われる嘆きにも似た淋しさ。

あんな事からお互に知り合いになることも、名前位聞いておいたらよかつたと悔まれてならなかつた夕刊に

焼ビルに巣喰う不良の女の群と言う見出しの中に、美人に揃られた甘い男として自分の名前によく似た仮名を見出したのは、その次の朝のことであつた。

箱入娘のやまい

伏見の旅館、秋田屋の箱入娘お糸、当年十七になるのが、ふと病名不明の患いで寝こんだ。

薬を持つて行つても食い物を持つて行つても、いや〳〵ばかりして一切口にしない。

さてこそと、当主の茂左衛門がにんまり笑つて、乳母を呼んで心当りはないかと聞いたが一向に、と言う。

「それでは本人に聞いてみておくれ」

本人をきぐらせたが

「そんな、浮いた話でないわいな」

と言つたという。

顔色を日増しに悪くなつて、燈心のように細くなる。

茂左衛門は、労咳な映畫や小説にある種々の場面を想像して、あの時の向うのやり方の拙さを悲しみつ、寝床に入つたものゝ、中々眠れない。

その翌朝、警察署からの呼出状に驚かされて朝食もそこ〳〵に家を出た。

身に覚えが無いだけに警察署へ行くのは平気である可き筈だが却つて気に掛つてならなかつた。

巡査に

「何か盗難に会つた覚えはありませんか」

と聞かれてドギマギした挙句、自分の名刺の入つた財布を見せつけられたり

「今お会わせする人がありますから、知つて居られたら、知つて居ると言つて下さい」

と言つて、夢にまで見た彼女を引き合わされ乍ら

「どこかで見た事がある様ですがはつきり覚えません」

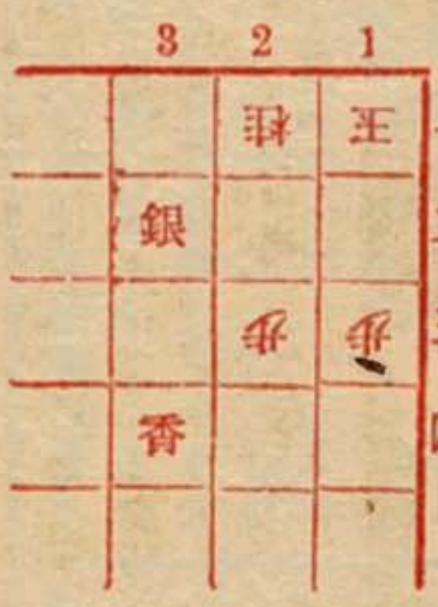
とヘドモドして答えた。

淡い思い出を破られて警察から帰る途で買



詰将棋

第一図



一二三四

持駒 銀、銀、銀、歩

（十七手詰）



大橋虚士出題

山田清香作

笑つてはいかん

どういういまわしい病名を頭に浮かべて、ふさぎ込んでいた。

すると女房が

「お前さん、妙なことがあるんですよ」

今月で二月ほど、離れの便所に赤いものを見ない、どうも体の様子も変だし——というのである。

再び乳母が引つぱり出される。そして、その乳母の返事が意外なものであつた。

この春、お稲荷さまへ参詣した時一の鳥居の下で世にも美しい小姓に出あつたというのである。

と泣き〳〵お嬢さまが白状なさつたとこう言うのである。

「うむ、そうか」

茂左衛門は、その夜脇差を一本腰にぶちこんで、離れの縁の下に忍んだ。

丑満刻、垣塀を眞白なものが跳び越えた。雨戸の前に立つて、トン〳〵と、自然二度戸を打つと、自然に戸が開いて隙間から入つた風に、フツと灯が消えて、間もなく、娘のうなされる声が聞え出した。

出て来るのを待つて「待て、妖怪」と声をかけると「コン〳〵」と言う。

「今更になつて、こんもねえものだ。まあ、こつちへ帰つて下さい。娘の婿になつて貰いましよう」

滴園の中へ、もぐり込んで、眞暗な中で眞赤になつて居りますんで……」

お糸さんは、

「ば、ばかなツ、泥棒ぐらい何んだい、俺が紹介状のない人間には、絶対に逢わないことにしてお前だつて知つているじやないか」

彼「いや、実は出がけに剃つて来たんだけど……」

彼女「ねえ、あんた。せめて私とランデブーする時ぐらい、お髭をきれいに剃つて来るもんだわ」

○愛情管制

「あの誠にすみませんが、表の間の電燈を消して戴けないでしようか」

「あら、また燈火管制が初まつたんですの？」

「いえ、実は、表の障子にお二人影が映りますので……」

○紹介状

妻「あなたツ、起きて頂戴、何んだか、玄関の方でゴト〳〵やつているわ、ねえ、早く起きて頂戴、きつと泥棒よ」

夫「うゝん、ね、ねずみだよ、ねずみにきまつてるさ」

妻「まあ、あなた怖いんでしようきつと、そうだわ、そうに極つてるわ、弱虫シ」

夫「ば、ばかなツ、泥棒ぐらい何んだい、俺が紹介状のない人間には、絶対に逢わないことにしてお前だつて知つているじやないか」

奇譚小話

風流　太郎



○妙薬

看護婦「先生、大変ですわ、この患者さん、いくら注射しても気がつきませんわ」

医者「仕方がない、最後の手段だ、勘定書を見せてやり給え」

○ニセ札

警官「お前どうして、盲になるのをやめたんだい？、盲の方が貰いが多いだろうに」

乞食「この頃ニセ札が流行して居りますんで……」

○待つこと久し



第二図



持駒　銀、桂、香（十三手詰）

第三図



持駒　角、金、桂、歩（二十一手詰）

【解答は十八頁】

マンガ・裸ショー

の夜宴



（一）魔王が主催者となつて土曜日の真夜中に催される魔法使たちの夜宴である。

行われる場所は、森林の中荒野、岩窟、廃城、墓場等である。

（二）大サバットは三ケ月毎につて愈々夜宴が開催されるになると、魔法使の面々は、箒なんかに跨つて、深沈たる夜の空を流星の様に飛んでゆく。

（三）信者たちは不意に何者とも知れぬ強大な力に摑まれて煙突から運び出され熊手や蛙や、山羊の背に乗せられて会場へ運ばれるのである。

（四）一同が会場へ到着する愈々式が開始される。先づ新参者は祭壇に跪いて、神と絶縁を誓い、悪魔の王に心身に打ち委す祈りをする。すると、附添いの者は、信者を裸にして、臭気紛々たる悪魔の膏薬を塗りつける。トカゲの黄、ガマの皮、死刑囚のハラワタ、赤子の脳ミソフクロの糞、其の他怪異な物、嫌悪すべきもの、驚怖すべきもの、等が並らべ立てられている。

（五）一同は呪咀して、あらゆる魔法的行事を行う、それに悪魔の六誡というのがある。

1、淫猥なダンス
2、不潔な饗応
3、悪魔的な交接
4、嫌悪すべき男色
5、復讐のワナ

人生相談欄

○何か金がかゝらないで痛快なことはないでしようか？
（富山、退屈功）

●先づ小便を我慢することですな。苦しくなつたら、行く所へ行つて用を足して下さい。これ位安直で痛快な思いをする法は一寸ありませんね。勿論お金は一銭もかゝりません。

○此の頃、ボクは、奇病にかゝつてしまいました。若い女の人に近づくと妙に胸が苦しくなるのです。
神経衰弱でしようか？
（神戸K生）

●それは大変、捨てゝ置くと生命に関します。左の事を厳重にお守り下さい。
一、黒メガネをかけること
一、鼻の孔に栓をすること
一、耳に綿をつめること

○秋は悩しい。いとさみしき秋よ、なぜ秋はさみしいのでしよう。
（京都大原生）

●それは陽気のせいですよ。これから追々寒くつたらどうだい。

△川柳▽ 八百屋草紙

袖口を握つて噛むは処女でなし
嫌でない証拠は袖で顔をおい
モデル台臍面もなく帯を解き
嫁入りの共の夜障子が穴だらけ
嫁したしの廣告どれも初婚なり
口説かれてあたりを見るは承知なり

笑話

結婚難

——全く俺は驚いたぜ現代の若い女はまるで結婚する意志を持つてないぜ。
——まさか？
——いや、一人としてないぞ俺は断言する。
——へえ、どうして判つたい？
——俺が結婚を申込んでも一人として承諾しよらんわい。

顔が見たい

——おい、彼女は是非君を取り持つてくれつて僕に言うんだが……。
——チエッ、あの顔でネ。相当な娘だよ。一ぺん顔が見てエと傳えておけよ。

秋の風

若妻——ねえ、もしも妾がいなかつたら、貴方はどうなさる？
夫——……
若妻——ねえ、聞かしてよう……たら。
夫——……
若妻——黙つてちや判んないわ。ネ、恥かしいことないから言つてよウ
夫——もつといゝのが貰えたかも知れないよ。

うるさいツ

妻——若し私達自動車が買えたら、まづ、最初何処へ連れて行つて下さる？
夫——下らん夢を言うな妻——夢でなく、現実としたらよ。
夫——現実なら、俺一人で何処かへ逃げるよ。

早合点

戀人——よろこんで下さい。どうやら郵便局に職が見つかつたです。
彼女——あら、いゝわねもう貴方宛のレターには切手いらないのネ。

諦めを待つ

青年——一体いつまで待つたら御返事が頂けるんですよ。これから追々寒く

6、神への冒瀆

宴会が進むにつれて、此れが一同によつて実演されるのである。

悪魔 サバット (SABBAT)



（六）主宰者の地獄の魔王というのは、暗黒の空迄とどく様な二本の角を持ち、その毛髪は叢林のように縮れて、いつも裸で老婆のような乳房を持ち尖つた耳、脚はケモノのように裂けて一ツの尾を持つている。

（七）さて、いよ〳〵悪魔の六誡が、鳴物入りで開始される。

先づ最初に、淫猥極まる、とても人間では考えも及ばぬ様なのが野蛮な音楽につれて、目ぐるましい迄に展開される。

このダンスが高調に達するに従つて、騒ぎは一層乱脈になり母と子、兄と妹、老人と若い嫁若者と老婆といつた極めて破廉恥な関係が行われ、父と子、兄と弟、といつた同性愛の猛烈なもの迄あらわれてくる。

（八）かくしてありとあらゆる神にそむいた不自然的な罪悪行為が、鶏が暁を告げる迄、秘密の大夜会は続けられるのである。

（九）日本では猿の怪物が、眞夜中に辻堂で宴会を開いて踊り狂つて居る所を一人の武士がその巨魁と思われる男、即ち猿の頭目に弓に射かける話なんかは、多少サバットらしい所もあるが、西洋に於ける眞正のものとは大いに距離があるようだ。

身の冗談

○小生に四人の懸人あり、どの人と結婚すべきや？（大阪・美男子）

●この次、一番最初にのシャツも、毛のオーバーもいるじやありませんか。

そんなことを心配すると、どうして期らかになれましよう。

よろしく、ラクダのセーターでも着て、燃いうどんでも食べてみることですな

○小生に四人の懸人あた。手紙を出したいのですが住所がわかりませんどうしたらよいでしようか（内氣な男）

●それは簡單です。思いのありたけを書き綴つて新聞廣告してごらんなさい。若し都會に住んでおられるなら、サンドイツチマンに賴むのもよろしいでしよう。

○當年二十八才の男子、十六の乙女に懸をしましたが、なり易きは世の常ですぞ、御用心、御用心



▽川柳▽ 戰後派草紙

アベックは親子のような組もあり

アドルムと避姙薬とは常備薬

食うために闇の女もアルバイト

エロショーのかぶりつきには禿あたま

競輪と宝くじとで夜が明ける

生れたら捨子をせよと男言い。



でしよう。もうとても待ち切れンです。

彼女—もう少しよ。

青年—えッ？というと……？

彼女—貴方が妾を諦めるまでよ。

それは無理

父—よし、今度だけは拂つてやる。そのかわり二度と借金したら承知せんぞ。

息子—そら無理だよ、あすこのおやじ、この借金拂つたら、又借してやるといつてるんだもの。

長を採り短を補う

—君は丈夫で美ましいよ。幸福とは要するに健康だからなア

—いや、健康でも文無しじやつまらん、僕は金持ちの君が美ましいよ

—どつちもどつちだよ。両方を持つという幸福にはなれンものかなア

—なに訳ないぜ。僕は丈夫だし君は金があるこゝで一つお互いに持ちよつて、二人一緒になりや何んでもないや。

桃色セクション

いんちき見世物

六尺の大いたち

これは、現在では、どんな田舎へ行つても絶対に見られないしろものが、明治末年までは、まだ残つていた。盛り場や、縁日などで鉦や太鼓をどんちやん打ち鳴らして

「そーら見た〳〵、六尺あまりの大イタチ、稀代の怪獣だ、これは日光と筑波の山の間で捕れた前代未聞の大イタチそれ〳〵〳〵今が雞を喰うところだ！」

しきりに怒鳴つている香具師先生。

客がその声につられて、ひよいと見ると、成程、小舎には大きな絵看板が上つている。恐ろしい形相をした大イタチが、今や将に百姓家の裏手にあらわれて、雞を一羽喰い殺そうとしている。

それに木戸口に座つた男が揚幕の網の端を摑んでちよいづれそのぐる度に中が見えて、いかにも土間には怪物が絵の通りの凄味を発揮していそうに思われる。

木戸銭は二銭か三銭、あまり高くないので、つい好奇心につられてぞろ〳〵と入場する。

が折角入つた見物人はあまりの事に呆然とする。と言うのは、一向イタチらしい動物も居らず、白鼠などが退屈そうに小車を廻しているではないか、

「こいつはおかしい……」

とよく〳〵見廻わせば、すぐ足下に置いてあるのは、六尺ばかりの一枚の板である。その眞ん中にべつたりと血が塗つてある——。

という馬鹿々々しいもの、

「あつ！」

と、客は思わず自分自身の間抜けさ加減に感心する。

「何んでえ、ベラ棒奴、六尺あまりの大板血……成程」

「こいつは一杯喰つちやつた！」

それでも笑いながと、さつさと退場する。

ろくろ首

極彩色の看板を見ると、奇麗にお化粧した美女が愼ましく肘掛に凭れて居眠つている。

又その傍で、侍女らしい女がニューヌル〳〵とまるで大蛇のような長い白首をのばして、一間も先にある行燈の油を赤い舌を出してペロ〳〵と舐めている。

黄昏れた七面様の御堂にはカン〳〵と百目蠟燭が立ち、どんつく〳〵と太鼓の音につれて、南無妙法蓮華経の声のやかましい縁日。

「さあ〳〵、入つて御覧。この絵の通り稀代のろくろ首だ。孫子の代まで話の種になる娘……それそれ今返事をする。おーい花ちやんや、花ちやんやい」

小屋がけの木戸口で嗄れ声をしぼつているのは、おなじみの香具師である。すると、声に応じて中から可愛いゝ女の返事がある。

「あーい、あい〳〵」

こうなると、勿論、孫も子も父も母も子供もあつたものではない。ぞろ〳〵と十銭五銭の木戸銭を払つて入場するのが安價な群衆心理であろう。

さて〳〵この不思議、よく〳〵見れば、成程場内一段と高いところにろくろ首娘が控えている。

どこをどう見ても普通の人間、少しの怪しいところもない優しい娘がにこ〳〵笑いながら、ぺんぺこ〳〵ぺんぺん〳〵……と三味線を弾いている

「そら〳〵〳〵、初まり〳〵〳〵」

不意に揚げる世話人の大声に、度肝を抜かれる間もおそし、ぬるへのびてゆく不気味さ。これには全く驚かされる。確かに生きて物

秘色セクション

言う首が長く〳〵伸びるのである。

だが、この種明しは、極めて簡単即ち、二人の人間で一人に見せて仕事をしているのである。

一人の娘は、顔を着物の中へひつこめて、手だけ出して三味線を弾いている。又もう一人の娘は、その背後で、眞綿でこしらえた長い首を頸からたらして着物の襟に入れ、顔だけ出して客に見せているのである。

そして伸びる時には、幕の中から梯子をのぼり順々に腰をのばし、様つて首を引き上げるのである。

物を言う生首

大道小屋がけは例の通り、鉦や太鼓をどんがらがんと騒々しく打ち鳴らして、さも天下の一大事でも出來たような様子で、木戸番がなり立てるというのも一つの常套手段。

「さあーい、南蛮渡り、吉利支丹伴天連の秘法だ。看板に嘘はない。斬られた娘の首が物を言う……そら〳〵斬つた〳〵今が首を斬るところだ代は見てのお帰り」

言いながら、綱を引き揚幕を五寸引き上げて、たかつている群衆に一寸なかり中の様子を見せる。

すると、どうやら大の男が、向う鉢巻で、白刃を閃めかしているところが、チラツと見える。

そこで絵看板と口上の性急さにつけ込まれて、何がなし、ぞろ〳〵と中へ入るのが見物人である。

だが、看板に嘘の無い筈の首を斬ると稍して少しも、そんな模様がないのが、この見せ物の特徴とは、昔はいざ知らず今では子供だつて、こんな事位知つている。云おうか。入場者は先づ既に首を切られてしまつたかと思われる十二三才の少女が、土間に置いてある高さ二三尺、疊半疊ほどの脚の間三方を硝子ばりにした台の上に生首をのせて目をパチクリしているのを見るのである。

「え――、此の通り、台は硝子だ透きとおつている。何の仕掛もないところが南蛮渡り吉利支丹伴天連の秘法だ、切つた首が生きている。物を言う。ハイ……花ちやんやい」

香具師の女は大抵花ちやんに定つている。

「はあ――い」

と哀れつぽい声で生首が答える。

「さあさ、お客さんに唄を一つうたつて聞かせて下さい」

「あい〳〵」

生首はすぐに何か安つぽい唄を歌うのである。

「ハイ、よく出來た、さ、パンをやろう」

世話人が口の中へ菓子を入れてやると、生首がにつこりと笑うという趣向。

此の見世物のからくり、反射鏡利用の硝子張りの中へ女の兒が首を出して入つているのだということは、昔はいざ知らず今では子供だつて、こんな事位知つているのだ。

只、可哀相なのは、この女の兒長時間、箱の中に閉じ込められて小便を垂れ流しているというのが人の知らない樂屋の苦労である。

幽霊屋敷

先づ小屋をかけて、その中に池を掘り、橋を渡し、山を築きづきさて一面に笹を植える。

その合間〳〵にいろ〳〵と珍奇な張子の人形、化物等を据えるのである。墓場があるかと思えば、番町の皿屋敷がある。安達ケ原の鬼婆が居ると見れば魔の影がある。

さながら百鬼夜行の図を拵えあげて、さて幕で蔽うて眞暗にして客を呼ぶのである。要所〳〵には人を置いて、來た客を脅す仕掛になつている。

客は十錢、二十錢と高い脅かされ料を拂つて入場する。そしてさんざん度肝を抜かれて出場するのだが、人を喰つたことには、看板者も強くなる。強い者でも、この化物屋敷を無事に驚かずには通れにはあつたら代は拂わなくていんだが、「度胸鍛錬化物屋敷、弱い者が



前号詰將棋解答

第一図



持駒　銀、銀、桂

（前号誤植がありましたので、玉方六四桂追加して新な出題としました）

詰手順

八三銀打、九一玉、八二銀打、同龍、同銀成、同玉、八三飛打、九二玉、九三飛成、八一玉、八四龍、八二歩合、九三桂打、九一玉、九二歩打、同玉、八三桂成、九一玉、八二成桂、同玉、八三龍、同飛、同龍、同玉八三飛打、九二玉、八一飛成、九三龍迄。

二七手詰

第二図



持駒　銀、銀、銀、桂、歩

詰手順

二六桂打、同龍、一五歩、同玉、二三銀、同竜、同馬、同玉、三四銀、三二玉、三三銀、四一玉、四二銀成、同玉、四三銀打、三一玉、三二飛打、二一玉、三三桂、一一玉、三一飛成、一二玉、三四馬、一三玉、一二龍迄。

二十五手

第三図



持駒　金、銀

詰手順

一三銀打、二二玉、一一金打、同玉二三桂打、二一玉、三一桂成、同玉三二金、同龍、同角成、同玉、一二飛打、二三玉、二二飛成、三四玉二四龍迄

十七手詰

解說……

一三銀打、一金打が肝要、最後の一二飛打にて詰に至る。

他手にて、二三銀打と打てば、二三銀打、一一玉、一二金打、同龍同銀成、同玉、二三桂成、二一玉、二二飛、同金、同玉、四三銀打、三一玉、三二飛打、二一玉、三三桂、一一玉、三一飛成、一二玉、三四馬、一三玉、一二龍迄、一一玉とされて詰まない。

第一図（詰手順）

一二歩打、同玉、二一銀不成、同玉三二銀打、一一玉、一二銀打、同玉二四桂、同歩、二三銀打、一一玉、二一銀成、同玉、三二香成、一一玉二二成香迄

十七手詰

第二図（詰手順）

一五香打、一四歩合、二四銀打、一二玉、一四香、同桂、一三歩、同桂二三銀成、同桂、二四桂二一玉、三二馬迄

十三手詰

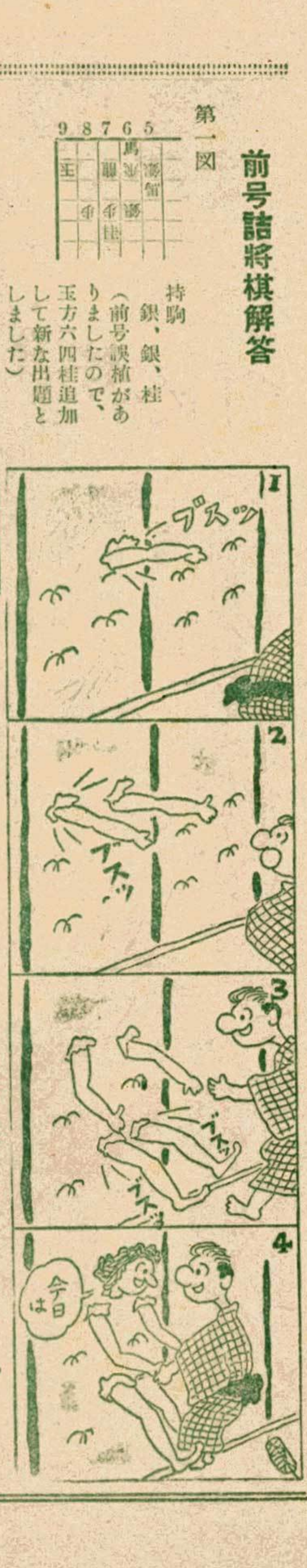
第三図

八三歩成、同玉、九四角打、同飛、七三金打、九三玉、八五桂打、同金同桂、同角、八三金打、同金、同金同玉、七五金打、九三玉、八二銀不成、九二玉、九三歩、同飛、八四桂トビ迄

十三手詰

漫畫　素裸

山田清香（丁度、裸だつたもんで！）



本号詰將棋解答

（十二頁の分）

小話

相殺

風流太郎（桑名）

▲彼奴、嫁さん貰つたばかりだと思つて居たら、もう腹がせり出して来たじやないか▲▲その代り、奴の眼がひつこんじやつたよ▲

銀行女房

▲おい君、バカに元氣がないね、それに少し痩せたようだね、美人の女房を貰つて少々度が過ぎるんじやないのかい？▲▲それがね、女房の奴、銀行に勤めて居たもんで、一度入れたら、最後迄据置きにしろつて、仲々拂出して呉れないんだ▲

あゝ、紳様よ

夫▲おーい、頓むからいゝ加減にきりをあげてくれよ、早く出かけないと、間に合わないぜ▲

妻▲そんなにせかせるもんじやないわ、いま、やせ藥を呑んでるところよ▲



目次（十月号）

奇譚クラブ　魅惑と獵奇
女学生の私刑（リンチ）
肉体を弄ぶ女學生たち　片矢　薫……20
浮浪者の戀　喜多　玲子　ヱ……26
都會の盛り場　赤野夢比古
夜八時から朝の九時まで　秋田　玲光　ヱ……32
嬌態秋宵五人娘
韓國密航者哀話
捕えられた密入國者　階堂三次郎……37
南方いざこざ繪巻　第三話
色事の手引　喜多玲子　画……38
現代艶笑狂演譜
五百圓の價値　星　夢二
若き女性の肉体を狙う　明石　三平画……46
誘惑魔百態　津村　進三
こんな話もあります　明石　三平画……48
でんすけに肉体を賭けた女……48
流行作家の実相を暴く
藝術を腐蝕するもの　覆面　作家……52
偽刑事横行時代　永見　隆二……54
地方奇譚
祝言と石地藏　花本　史郎……65
逃げた二人の妻　岡　安子
須磨　利之画……58

戀愛百貨店

あぶな繪と春画　夜草　京介
現代好色化物ものがたり　明石　三平畫……62
美人局開業　笠置良夫……66
或る情死未遂者の告白
邪戀の果　殿村　泰三
本牧夜話　色道女鑑　利之畫……64
いんちきたん
淫痴奇譚
怪奇實話　飯場の飯焚き女　伊藤　昭光
秋の夜の　森　あきら画……78
或警察署で　紐男の陳述　此花大助……80
裸の踊り子アラベスク　戸見野一……84
枕草紙　女と契つた翌朝　清少納言……85
番台娘の男湯のぞき　西原津夜子　沖研二・画……86
おんなたて
女俠裸道中　緑猛比古……88
シベリヤ軟派風景、二題
シベリヤのオツパイ小僧
シベリヤ女の貞操　穴吹　武……94
變態遊傳　コレクション　兵庫一平
青空晴子手柄話　明石三平　ヱ……96
日本開國秘話　天使の犯罪　杉山清詩
領事ハリスとお吉　喜多玲子　ヱ……98
海川映二……104

片戀慕・七花多玲子

女学生の私刑！



玲子先生

後に小高い山を控え、一年中まともに太陽を浴びることのない校舎、排水設備のない爲に僅か一日の雨で、二三日は水溜りの残る狭い運動場。これが青城女学院の姿である。

経営の困難から修繕も出來ない校舎は、硝子は破れ、羽目板は千切れ女の学校とは見えない荒廃ぶりであつた。

河島あきはその女学院の四年生であ

る。あきは十八だが、高い上背と胸のふくらみなどは、女学生とは見えなかつた。殊に風呂から歸りの襟を落した着物姿では、その艶しさに成熟した女の匂いがあつた。顔はあまり美しくはなかつたが勿論早熟だつた。父親は花柳界の女で、二三年前に或る男に落籍されて待合をやつていて、あきはそこから通学していた。

あきの性格は異常であつた。彼女には他人の幸福が憎いのである。それが自分達と離れた世界の手のとゞかないような感じの幸福であればある程それを許せない気持を持つていた。

プラトニックラブとか淡い初恋などといつた文句は見たゞけでも虫ずが走つた。そんなものには縁がなかつたからである。もう一つは非常に冷酷であつた。この性質は子供の頃からである。彼女の住む界隈では絶えず喧嘩があつた。金にからまる恨みから、或は面子の問題から、更に女出入の喧嘩は多かつたが、あきはそんな喧嘩を見るのを好んだ。

血の流れるような凄しいものであればある程わくわくとした昂奮で眺めていた。子供の頃友達と遊びの歸り途、廓の入り口で大きな喧嘩に出合い、外の子供達は恐れて逃げ歸ろうとする中にあきは平気でそれを眺めていた。その中の男の一人が腕をねぢ上げられ、妙な音を立てゝ骨が折れると、子供達は一せいに袂で目を蔽つたが、あきはその音に恍惚としたような眼付で顔をゆがめて笑つた。

そんなあきであつたから、学校に入つてからは常に女王であつた。女の世界にも暴力は通用するとは信じていたし、彼女の経験から又事実でもあつた。あきは常に憎み合い、呪い合うことのスリルを好んだ。若し男ならば背一杯の刺青で脇差一本をたよりに花を唸かせて見るのにと女に生れた不運をかこちさえした。

があきの住む世界では眞剣に双向つてくれる相手は無かつた。頬を一つ撲れば直ぐ泣いた。上級生でも髪の毛を持つてひきづり廻すと手をついて謝つた。そんな時にはあきは相手が弱けれ

ば弱い程、後味が悪く妙に良心をちくちく刺されるような無燥に狂暴になるのが癖だつた。それにあきは確かに先天的に喧嘩がうまかつた。一度重ねる毎にいろいろと考えた。あきにはそれが最大の楽しみであつたし、熱心でもあつた。

そんなあきは忽ち学校中の評判になつた。下級生はあきの傍を通る時は、丁寧なお辞儀をすると、こそこそと逃げるように立去つたし、上級生はわざと目を外らして通つた。

があきにはそれが又気にくわなかつた。皆が自分を恐れているのではなく女の範囲から除け者にして軽蔑しているに違いない、と歯をくいしばつていらいらした。

無論あきとて一沫の女への郷愁があつたからである。

こんなあきであつたが、男と喧嘩をすることは全然無かつた。それは子供の頃から度々父親に折檻された記憶が男の暴力というものに対して先入意識として及ばないことを知つていたし、尚一つはせめて男にだけは普通の女として見て貰いたい気持が動いていたからである。あきは男の前では普通の女と何等変る所がなかつた。

が男と手を組んで街を歩く女を見るとつい腹が立つた。男の手をふりほどいて、女の顔を二つ三つ殴つたらどんなにせいせいすることだろうといつも思つた。

或る日、学校がひけて帰り途、公園の下の道を一人で歩いていると、前を学生らしい男と、これ又セーラーの服装をした女学生とが連れだつているのに出逢つた。スマートな服装で、髪をのばした背の高い男であつたが手にはバンドに縛つた教科書らしいものをぶら下げていた。一方の女学生は編んだ髪を両方に分けた品の良いタイプで腰幅の廣いのが後からみると何か性的にいやらしい感じであつた。

公園の古い城跡の下からガードの下をくぐつて公園の入口まであきは黙つてついて行つた。女学生は時々甲高い聲を上げて笑つた、屈託のない笑い声であつた。手を上げて男をぶつような恰好もした。男は笑い乍ら逃げる眞似をしてみたりして楽しそうな二人連れだつた。黙つてついて歩いていたあきは次第にいらいらし始めた。追い越して通り過ぎようとしたが、横を下水の流れている途は狭く、二人並んだゝけでせい一杯の幅しかなかつた。

あきは仕方なくそんな二人を眺めている中に、許し難い行爲だと憤が立つて來たのだ。勿論嫉妬もあつた。その中には全く男の学生には見向きもされない私立の女学校の生徒である卑下がその女学生に対する憎悪を倍加していた。

心の中では同じ女学生であり乍ら猥らな風紀を平然として醜し出しているこの娘に忠告を与えなければならないと一応正義派めいた言い訳も持つていた。

やがて公園の入口を通つて車庫の裏手迄來ると、男は軽く手をあげて、お別れの挨拶らしく、女とは別の横の途へ外れて行つた。その女学生は名残を惜しむように、男の姿が街角を折れて見えなくなる迄其処に佇んでいたが、後からぽんと背を叩かれると驚いて振返り、あきの顔を不思議そうな眼差しで見た。

「あんた何処の女学生なの？」

女学生はあきの聲に何かを感じて一瞬顔色を変えたが、やがて同じ女学生らしいのに安心したのか、

「そんなことあなたに問われるわけがないわ」

幾分甲高い調子でさえあつた。

「そう、ちよいとこちらへおいでなさい」

あきは落着いていた。女学生は流石顔色を再び変えたが、勝氣らしくそれでも黙つてあきの後からついて來た。車庫の裏は廣い原つぱであつた。土管やたんぼゝがちらちら咲き始めて、もう陽も落ちそうな夕暮の光に淋しい影を造つていた。その中を分けて原つぱの材木を積んである陰まで來ると、あきはたち止つた。

「あんた、女学生のくせに晝の中から男とふざけて恥しくないの？」

あきの言葉に女学生はかつとした屈辱の表情を見せた。少し蒼ざめた顔に血の気がのぼり、面長い上品な顔立ちが春の夕陽に映えて美しかつた。あきはそれを見ると益々この女学生に対して憎悪を感じた。腕力でしか勝つことの出來ない感じがあき自身を忘れさせた。あきは女学生に近づくと、物も言わずに膝頭でスカートの上から下腹部をしたゝか蹴り上げた。「あつ」その女学生は持つていた通学鞄を思わず落して下腹部を押えて其処へくづれるようにしやがみ込んだ。低い呻き声が歯の間から洩れた。あきはその綺麗な襟元を上から見降し乍ら、

「謝つたらどう？」

と顔をゆがめて笑つた。その笑いはこんな時に必ず浮ぶ笑いであり、一種の優越と、然もその優越が充分満されない焦燥と、罪を重ねたような自嘲の錯綜した複雑な笑いであつた。女学生はしばらくすると、かゞみ込んだ下から、

「女の癖にどうしてそんな乱暴するのよ」

と切れ〴〵な口調で言つた。あきはその声から暴力しか持たない自分の急所を嘲笑されたように再びいきり立つた。

「何だつて、まだ反抗する気なの」

あきはその女学生の襟を摑むと、ず〳〵と引き起し、前と同じ所を再び膝頭でつき上げた。今度は耐え切れず女学生は二三間後ろへよろめいて仰向けに引つくり返つた。スカートがめくれて白い太腿が見えると、あきは汚いものを見たかのように唾をはいた。女学生は顔をゆがめて、それでもすぐ上体を起すと、スカートを手で引き下し「わつ」と泣き伏した。

両方に分けた髪が草の上に落ちて、しやくり上げる度に草がゆれた。あきは默つてそれを見ていたが、女学生が泣き出すといよ〳〵冷い表情になつた。

「また謝らないの」

と再びあきはつめよつた。泣き伏していた女学生は草を踏んで近付くあきの足音を聞くと、脅えたように涙でぬれた顔を起すと、恐怖の色を浮べて後ずさりした。

「もうやめてよ」

と弱々しい聲であつた。があきは止めようとは思わなかつた。

こんな場合中途半端であればあるだけ後から來る焦立たしさがたまらないことをよく体驗していた。三度あきは女学生の襟に手をかけた。

「もう堪忍してよ、謝るわ、謝るから許して」

女学生が叫ぶのと同時だつた。あきは手を離したやつとしなければならぬことが済んだような気がしたのだ。

こんなことが度重なるにつれて、このあきの行爲はあくどいものになつて行つた。我を忘れて徹底的に腕力を振わなければだん〳〵気が済まないようになつて來たのである。丁度モルヒネ中毒の患者が一回毎に量を增して行くのに似に現象であつた。そう言えばあきは確かにサディズム的な要素を多分に持つた女のようでもある。今迄は自分の不器量をひがみ、自分の不幸を呪つて、その憂憤を他人にはらして心を慰めていたものが、次第にその行爲自体に異常な快感を持つようになつたのである。どんな富豪の娘でも、あきの暴力の前には無力な一人の女に過ぎなかつた。

あきの足下に伏して泣いて詫を乞う一つの動物でしか過ぎないのであつた。あきにはそれがたまらない快楽となつた。

だが一面あきのような女には見当外れの幼稚な博愛心とも言つたようなものがあるものだ。同病相憐れむといつた親切気がある。あきはこんな興味を一人で独占せず他人にも分けてやり度いと思うようになつた。

これが黒百合團の結成になつた。

ある意味では智恵の働くあきは、自分と同じ学校の、極く容貌のよくない然も早熟な生徒達を次々と語り落して仲間に入れた。あきの感は鋭く集つた九名の女学生達は皆あきと同じような考え方を持つていた。あきを入れて十名の女学生はすぐ結束して黒百合團と銘打つた。頽廃し切つた女学生の風紀粛正を、モットーとするのだ、とそれでも昂奮して語り合つた。

最初はいろ〳〵と浮いた噂に上る女学生の調査から始められた。こんなことはこの女達には何よりも面白く生き甲斐のある仕事のようだつた。あきの指揮の下に喜んで活躍し始めたのだ。あきは無論首領格、つゞいてひさだつた。ひさはあきと同じ四年生でひどく肥えていて馬鹿力があつた。米屋の娘で、圍の米を一俵近く運ぶという。それに近子、瀧枝、とつゞき、小夜という可愛いゝ名前の生徒もいた。

一週間足らずでこの女達は一通りのブラックリストを作り上げ、それを參考に毎晩これらの生徒達はあきの部屋に集つて計画をこらした。あの子は何時どの場所でこんなことを、と報告は綿密を極め、報告する娘はその時だけ生き生きとした顔色を見せた。

その顔色の中には自分達の行爲を反省することなく、たゞ單に他人の幸福を嫉み、他人の人格を無視し、他人の樂しみを妨げさえすればいいという狂暴な発作があつた。「断然やりましよう」と机を叩く者さえ居た。然も誰もがこの行爲を悪いと反省してみる気さえもなく、たゞまつしぐらに猪突する歪んだ情熱に燃えて同調した。あきはそんな友達を見廻し乍ら彼女達はこれで幸福なんだと思うと、いゝことをしたような気になつて、嘗て幾ばくか感じた良心の後めたさも全く麻痺してしまつていた。

その晩あきの部屋に集ると、いよ〳〵実行にとりかゝる打合せが行われた。部屋から見える表通りの遊廓らしいネオンに刺戟されて、一人一人が皆映畫のヒロインであるかのような幻覚にわくわくしてブラックリストをひろげた。リストの一番最初には、山添眞弓の名前が乘つている。眞弓はあき達とは同級生で、引揚げ者だつたが急に入る学校が無く、この学校に入つている生徒である。この学校には珍しい品の良さが下級生から慕われて、所謂姉妹の縁を結びたがる生徒が多かつたがあき達はそれを取り上げて罵り合つた

「女同志で戀人だのお姉さんだのつていやらしいつたらありやしない」

とひさが言い、「同性愛なんて最も憎むべき罪悪よ」と瀧枝は勿体ぶつて顔をしかめた。

あくる日、学校が終り掃除が済んで下校のベルが鳴ると、近子が校門の前で眞弓を呼び止めた。眞弓がにこ〳〵と近づいて來るのを見ると、

「ちよつとお話したいことがあるの、裏まで來て呉れない？」

と誘つた。何にも知らない眞弓は一寸けゞんそうにしていたが「いゝわ」と近子の後から連れ立つた。学校の裏には嘗て盛んな頃造つた寄宿舍があつた　今は壞れ果てゝ物置同然で学校園から採れる野菜など入れる場所になつていたが、その中へ眞弓を連れ込んだ。其処にはかねて打ち合せの通りあき以下八人の黒百合團のメンバーが待ち受けていた。その物々しさに眞弓は一寸たじろいたが、思い直したように入つてくると、

「皆さんこんなところに集つて何してるの」

と無邪気に呼びかけた。

あきは一歩進んで、「山添さん、わたし達はこの学校の風紀を粛正するために集つたの、わたし達山添さんに忠告したいことがあるわ、」

と切り出した。それを聞くとその雰圍気のたゞならぬのに気附いて眞弓は顔を硬ばらせたが、「わたしあなた方にそんなこと言われる覚えなんかないわ」はつきりした言い方であつた。あきは意外だつた。この学校にいる生徒であきの名を知らぬ者はあるまい、あきがそう言えば恐れおのゝいてあやまるものと思つていたのだ。



まるだろうと高をくゝつていたからである。然も先刻は充分凄味を利かせて言つた心算なのに、と思うとあきは急に悔しさに目を覚かせた。「ぢや、謝らない心算ね・わたし達の制裁を受ける心算ね」、

「だつて詫る理由が何処にあるの？」

眞弓は言つた。

「生意気ね」

横合いからひさが取つて、

「あんたは一体何人の妹を持つてるの女同志でいちやいちやして、今迄この学校にそんなけがらわしいことはなかつたわ、あんたが來てからよ、」

「わたし妹だの何だのつて言われても何にも身に覚えはないわ、たゞなつくから遊んでやつてるだけよ」「ぢやどうしても悪くないと言いはるのね」

「ちつとも悪かないと思うわ」

蒼さめた顔乍ら眞弓も強硬であつた

「悪かつたと言わせて見せるわ」

とあきの手が眞弓の頬で激しく鳴つた。眞弓はよろめいたが、それでも

「何すんのよ、乱暴な、」

と反抗の気配を見せると、後から近子が髪を摑み共処へねぢ倒し、傍に落ちていた繩で眞弓の腕をねぢ上げて後手に縛つた。

「何すんのよ、止してよ、どうしてこんな馬鹿な眞似するのよ、畜生」

眞弓は必死に暴れたが、到底かなう筈もなかつた。やがて眞弓を縛つた繩は天井の梁を通されると、眞弓の足があき少し床を離れて吊り下げられた。あきは平然と眞弓の前に立つた。

「悪かつたと思わないの」、

流石の眞弓もその尋常でない暴力に脅えてか今迄のように口を開こうとしなかつた。

「どうなのよ」

ピシリとあきが眞弓の頬をぶつ、二つ三つ、自由を失われて、なすがまゝの恰好の眞弓は、顔をそらせてあきの手を逃れようと焦つたが、あきの手は正確であつた。

「ど、どうして私をこんな目に遇わすの」

眞弓は必死に絶叫したが、あきには問答無用であつた。

「ようし、強情をはるのね」

あきは鞄の中から革バンドを引き出した。いつか不良のチンピラが酒を飲んだ後で、あきの家に忘れて行つたものである。チヤラ〳〵金具もついていた。それを見ると眞弓は恐怖に身体を硬ばらせて、見栄外聞も忘れてしまつたかのように、

「謝るわ、堪忍してよ、私が悪かつたのよ」

と宙吊りになつた身体を揺つて喚いた。があきは落着いていた。

「もう遅いさ、ちよいと黒百合團の私刑の味も覚えときなよ」

悠々眞弓の眼の前で二三度振ると、ピシツと眞弓の白い頬に当てた。

「あれー」

と悲鳴を上げて泣き出したのを耳にも入らぬ風で、更に二つ三つとぶつた眞弓の頬は、その度にバンドの型そのまゝの赤い跡が残り、みるみる腫れた。

「どう、少しはこたえた？」

ひさが眞弓の顔を覗き込んだ。

「堪忍してよ、どんなことでもして謝るわ」

と眞弓は繰返した。

「こんなこと先生や親達に話すと、私達もつともつとひどい復讐してよ、わかつた」

と脅し、縄を解いた。

眞弓は醜く腫れ上つた頬を涙で濡らして帰り、次の日から暫く学校も休んでいたが、どう言いつくろつたのか、あき達のことは洩れなかつた。

これをいゝことにしてあき達の暴力は次々と犠牲者を求めて擴がつた。が然しあき達の悪どい遊びに似た行動は直接身に受けた者以外は誰も知らなかつた。幼い乙女心に受けた衝動が却つてそれを隠させたのか、復讐の言葉におのゝいたのか、黒百合團の噂はちらと学校の中には流れたが、そのような暴力沙汰に及んでいることは噂の中にさえは無かつた。学校当局も黒百合團の噂をとり上げて、職員会議の席上にも出されたが、てんで相手にならぬ教師もいたし、單に子供らしい何とかごつこの名前だろう、と問題にはならなかつた校長自体が何でも悪いことなら一人前に眞似て見たがる年頃でなあ、と強い眼鏡をずり上げ乍ら結論した。

そうしている中に、あき達はそんな平凡な私刑にも飽いて來ていた。つまらない、と言う者もいて、もつと強い刺戟を求めたいと言い出し始めた。メンバー達はいろんな方法を授業中と言わず、家へ帰つてからと言わず、頭をひねつた。彼女等自身がどきまぎするような強烈な刺戟を感ずる私刑の方法は、と一心に相談した。

「裸にしたらきつと面白いよ」

と流石口にしにくいことを近子が口火を切つた。

「女つてものは何より裸にされることが一番こたえるものよ、羞恥を與えるのさ。それが女の致命傷さ」

これが可愛くあるべき女学生の言うことかと思うことを平気で言うのだつた。

「そりや面白いよ」

賛成する者が出て女らしい猥談に花が咲くと、満足したように別れる日常であつた。

その頃になると、あきの顔には子供らしい影はすつかり消えて、一目見てぞつとするような残忍なそして淫蕩な色が刻み込まれていた。目の光は渇れて、脂切つた身躰は思わず男の目をそむけさせるような肉情的な姿態になつていた。もう一人前の成熟した女であつた。

遊里の巷で酔つた男に誘いかけられると、意のまゝに従つた。地廻りの若い男に泊り込まれると、その男にも身躰をあづけた。がそんなあきには尚他人の幸福を嫉む辞はとれなかつた。自分は常に不幸であるという先入観念がどうしてもあきを満足させて呉れなかつた。彼女の精神はすつかり分裂作用を起していたのだ。そんな自分が風紀是正の旗印をかゝげているという矛盾については、考えて見たこともなかつた。もう考えるだけの良心も無くその必要もなかつた。彼女はたゞ自分のサディズムを満足させれば足る。一ケの呪わるべき存在でしかなかつた

ある日、瀧枝が一つの情報を持つて來た。それは隣の縣立女学校の生徒が男の学生と一緒に公園の草叢にねていた現場を見つけたというのだつた。然もその女学生の名前までちやんと調べ上げて周到なものであつた。何処の生徒だつていゝ、学生の癖に、と一様に憤慨し、日本の女学生全体の面子にかけて、と大きくいきまいた。

血に飢えた狼が獲物を待つように、あくる日、瀧枝は早速その女学校の校門の前迄出向いて行つた。彼女らの言葉によれば、所謂「よび出し」をかけに行つたのである。

場所は何時もの裏であつた。あき達はそこで、瀧枝がその女学生を連れ込んで來るのを待つていた。二階の天井には鼠が大きな音を立てゝ走り、部屋の隅々には腐れ果てた藁ツパだの大根などが捨てゝあつた。

二時間程経つと、どう言いくるめて來たのか、瀧枝が一人の女学生を伴つて來た。黒い健康そうな顔色の女で、滑らかな肌が首から襟元へかけて目立つていた。瀧枝は、

「これが昨日の深井美代よ」

と背を思いきり突いた。不意を襲われた型で美代はよろよろと部屋の中へ入つたが、初めて直観的に身の危険を感じたものか身を飜して逃げ出そうとしたが、二度瀧枝につき飛ばされるとへな〳〵と其処へ坐り込んだ。

「黒百合團がお前さんの來るのを待つてたんだ」

小夜が芝居の台詞もどきに凄味を利かせて言うと、美代は瞬間さつと顔色を失つたが

「わたしに何の用があるの？」

と言つて声は幾分ふるえていた。すかさず瀧枝は言つた。

「昨日公園の草の中で一体何してたのよ、ちやんとわたいが現場を見たんだよ」

「何もしなかつたのよ、たゞねころんでいたゞけよ」

「白々しいことを言うのね、だけど何はともあれあんなことは女学生の身分でいゝと思つてるの？」

「だつてあんた達に関係したことじやないわ」

「何さ生意気な、黒百合團が怖くないのかい？」

瀧枝はいら〳〵として言つたがあきはそれを止めて口を開いた。

「わたし達は女学生全部のためにしてるんだよ、一人でもお前さんのような汚れた女がいると皆が迷惑するからね」

美代は何か抗弁したいように口を動かしたが、あきの視線に合うと黙つてしまつた。暴力の前には理論のないことを予感したものであろう。

「とにかく、女学生全部に代つてあんたに制裁を加えるわ」

何度も何度も言い慣れたゝけに底に重味のある言い方で、不気味な声音であつた。

「乱暴すると警察へ言うわよ」

美代は逃れんと必死であつた。

「言えばいゝさ、そうすればお前さんの行狀だつて明るみに出るんだからね」

これも言い馴らした文句であつた。美代は四五人に押えつけられてもがいたが、びくともしないのに大声で泣き出した。小夜は美代の口の中へ繩屑を押し込むと上から手拭で猿轡をかませた。「裸にするのよ」ひさはそう言つて、セーラー服を脱がせ、シヤツを剝いだ。小麦色の肌の色はなめらかで可愛いゝ乳房がその下から現れた。上半身を裸にすると、後手にしばり上げた繩は柔かそうな肌にきつく喰い込んで美代は身をもだえたが、「うゝ」と手弐の下で呻くだけで声にはならなかつた。それを前にして皆瞬時ためらつたが、一人が思い切つてスカートに手をかけると忽ち美代は全裸にされてしまつた。流石の美代の顔には屈辱と羞恥の色が激しくみなぎつた。あき達は頬を紅潮させて昂奮した言葉で「生意気なやつだ」

「黒百合團の私刑をうんと思い知らせてやれ」

と声高に喚き合つた。



素裸の美代の身体は、腹部の下に飛箱の台を入れてしばりつけられた。身体は二つに曲り、マンドリンを二つ並べたような肉附きのいゝ臀部が露出された。

「臀をぶつんだ」

ひさはあきのバンドを借りると、ピシリと力任せに美代の臀を殴つた。白い臀部に赤い筋がみる〳〵浮いて見えた。ひさは狂つたようにバンドを振りつゞけた。美代は苦しい息の下から「ヒーヒー」と呻いた。ひさが疲れると瀧枝が代つてぶつた。肉に喰い込む革の音は皆を攪乱した。

「あたいにもぶたせて」

と次々バンドをふるつた。

古く朽ち果てた建物の中で、こんな気狂いじみた行爲が繰返されているのも知らぬげに、まだ日の短い早春の夕暮れは早く、あたりを薄暗く染めて行つた。

美代の臀部はひどく腫れ上つていた美代は飛箱台にしがみつくようにしてぐつたりとなつていて、それでもぶたれる度にかすかに身躰をよぢらせて苦痛の表情を見せた。小夜が猿轡をとると、美代はぜい〳〵とかすれた声で呻つた物を言う元気もないようだつた。

あきは始終それをぢつと見ていたが何のためにこの女を撲らねばならないのか、とふと思つた。何を偉そうに、とふり落そうと頭をふつたが、この女は皆が神秘としてもてはやすことをやつてみたかつたゞけなのだ。何の意味もない行爲を憧れただけなのだ。今ではきつと後悔しているに違いない。きつと、あきが何時も感ずるあの虚脱した、味気ない気待を味つたのに過ぎまい。あきが一生かけて憎み呪つて來た幸福は結局誰にも無いのではないかしら、結局皆同じなのだ。

あきは頭を押えた。

目の前でぐつたりしている美代の裸体は即ちあき自身の姿なのだ。それをいぢめて何があるのか。あきは今迄にやつて來たことが自分自身を虐むものでしかないと願みた。そう思うと今にも気が狂いそうであつた。大声でわつと叫んで頭をそこらの羽目板にぶつけてしまい度い衝動にふら〳〵した。

いつそ思い切つて洋服を脱いで美代のように飛箱の上に腹這いになり、この臀を鞭で思い切り殴つて貰えばいくらか気が晴れるかも知れないと思つた。

——終——



亀

亀が此の金塚山に巣喰つてから、はや一年になる。金塚山と云つても、市中のちよつとした丘で、頂上に小さな稲荷が祭つてある。亀の小屋は、松林の裾の草むらの中に、気弱く建てられた一坪たらずのトタンにしてもが、古板にしてもが、亀は仲間の制圧に堪えながら、あつちこつちから拾い集めて來たものだつた。

亀は復員軍人である。彼は南洋のチモール島と云う所におつた。あまり身体の強くない彼が、彼の地で二度もマラリヤをやりながら、よく無事で内地へ帰れたものである。しかし、彼の頭は、マラリヤのせいか、少し呆けたような感じがなか〳〵抜けない。人は彼を阿呆になつたと云う。亀自身もそうらしいなと思う。

亀の郷里の岡山は散々やられていた年老いた母も、女房のお近も、一粒種の六才の可愛いヽイサオも、悲しい戦災死しておつた。

亀の頭は混乱して、一時狂気した如くなつた。しかし、やがて元通りの痴呆的に帰つた。岡山から三里ばかり離れた西大寺町に、亀の妹がおつた。がそれも彼の出征中に死んで、妹の亭主であつた男は、新しい女房を迎えて、亀の來訪を快よく思つていない。

亀は大阪へ出た。大阪こそ自由の天地だと思つたからである。所が大阪でもなか〳〵仕事にぶつつからない。亀は自由労働者になつた。それとて三日に一度ぐらいしか仕事がない。が、それも出來る間はよい。亀の頭は呆んやりしておるし、それに肝心の右腕に神経痛が出て來た。亀は三十三才、まだ若いには若いが、何となく人生に厭気がさして來た。亀は浮浪者となつた。そして丘の上に小屋を建てヽ、吞気なその日〳〵をおくつた。

亀は孤独である。しかし、ちつとも淋しく思わない。彼は食糧は繁華街の料亭旅館で残り物を貰つて來るので、他のルンペンの如く塵埃箱を漁り廻つたりしない。

松林の中は夏は涼しかつた。冬ともなれば亀は山の下腹の赤土の丘に出る此処は南の陽を一杯に受けて、その暖かいこと、温室に入つているようだ。彼はそこで質屋の若女房お絹さんと知り合つた。質屋はその丘をだだら下りに出た角ツ子にある二階建の一軒家だつた。亀の小屋から座つていても、その丸芳質店の看板が見えた。

お絹さんは、その丘へ赤ん坊を抱いて日向ぼつこに來て、亀と二言三言話している内に、同じ郷里である事がわかつたのだつた。亀の身なりも、ルンペンと云いながら、度はづれの不潔さは無いし、同郷の親し味が、お絹さんの気をゆるめた。

亀はお絹さんを女神の如く美しく尊とく思つた。話しておると、自分が下界の者で、お絹さんが上界の者に考えられて、神々しい気持にさえなつた。

お絹さんは終始立てつた儘であつたが、どうかした拍子に赤ん坊が泣き出すと、腰を跼めて白い胸を開いた。その初産の美しい乳房を、亀はこわ〳〵覗き見て、何となくブルツと慄えた。亀は一生けん命お絹さんの乳房を見ないようにして、赤土のだんごをこさえた。折よく質屋の看板の横から、旦那の姿が見えて、おうい！、お絹よウ！の声で、お絹さんが立上ると、亀は救われたようにホツとする。

お絹さんの去つたあと、亀は大の字になつて大空を見上げる。亀は空を見る事が好きだ。困つた時、悲しい時、淋しい時、どんな時でも空を見れば、空は空虚な彼の心を融めて呉れる。青い空、雲の流れ、そんなものをぢつと眺めていると、知らず〳〵亀の心は晴れやかになつてくる。

マラリヤの爲に、亀の頭は、女房のお近が気強い女であつた事も忘れている。一粒種のイサオは無性に可愛いかつたが、女房もお絹さんのように優しく、姿形も同なじようにさえ思われてくる。彼の頭ん中では、女房へお絹さんがオーバアラップして、どつちがどつちだかわからなくなつてしまう。天女のようなお絹さんが、女房でない事だけはたしかだが、死んだ女房の昔の姿は、あんなではなかつたかと、亀に錯覚している。

亀の女房は生きておれば三十才。お絹さんはどう見ても二十二三才。女房の豚肥りの丸顔に反して、お絹さんよ中肉の瓜実顔なのだが、南洋呆けの亀の頭で、今はその差別さえ明瞭しない。

亀はお絹さんにタオルを貰つた。古シヤツを貰つた。時に菓子さえ貰つた亀は全くお絹さんに感謝している。彼女の姿を遠くから眺めるだけで、有難く満足している。

お絹さんの亭主と云うのは、学校出の若僧だが、理財の道に秀れていると見えて、立派に親譲りの商賣をやりこなしている。まだ三十にはなるまいと思われる痩せ型の男だ。お絹さんの亀に対する好意に就ても、只、神経質そうな眼を、フチナシメガネの奥からパチ〳〵するだけで、何とも干渉しなかつた。

亀はお礼心に、ボロホウキで、丸芳質店及その界隈を、毎朝、早い内に掃除するのを常例としておつたが、時偶お絹さんの亭主の市太郎に会う。亀は町噂に挨拶するのだが、市太郎は知らん顔してスタ〳〵行つてしまう。しかし、亀は恨らみに思わない。それがお絹さんだと、

「まア〳〵有難う。いつも奇麗にして呉れて……」とニツコリ笑つてくれる。それが亀には無性に嬉しいのだ。

亀にはこのお絹さんの微笑みと、空を見る喜びとの二つがあるので、彼の気持は穏和であり、生活はのんびりとしたものであつた。



亀の流浪

秋田玲光 画



此の亀の平和境へ、突然、虎が訪れた。丁度初夏に入つて、日中は蒸暑いまゝ亀は小屋の傍の樹蔭で、涼風に気持よくごろ寝していたが、誰だか人影が小屋を覗いたので、起き上つて声をかけると、五十がらみの小がらだがズングリした強そうなオヤヂが近よつて来たオヤヂはボロ〳〵のズボンをはいて、此の暑いのに毛のジヤンバアを着ている。おかしな事に頭に矢張り冬物の鳥打をかむつておる目の大きく、いかついのに亀はギヨツとした。

「何ぞ、用かいな？、お前はん……」

亀の間伸びした声をきくと、オヤヂはニタリと笑つて、

「まア一本吸えや……」

とツギハギだらけのジヤンバアのポケツトから、ちびた煙草を出して、亀の前に差しつけた。亀はオヤヂのスコツプのような掌につゝまれた煙草へ、無表情な目を向けた。

「お前、吸えへんのか。そらお門違いですまなんだな。だが、こうしてると此処は好えとこやなア……」

オヤヂは煙草を一口吸つて、フウツと吐き出した。

「お前はん、何ぞ用でもおまんのか？」

亀の真剣な顔付へ、オヤヂはふわあ〳〵笑いつけた。

「何や、お前。何も心配する事あれへん。俺はお前の友達やないか。そんな情のうせんかてえゝやないか。ルンペン同志の仁義と云うもんがあるで……」

「そうかて、こんな狭い小屋、私一人でも一杯や。」

「かめへん〳〵。これから外でもけつこう寝られるさかい……、ま、二人になつてみい。何かにつけて便利やぞ。仮に俺が婿はんやつたら、お前が嫁はんや。二人で手分けしてせいだい稼いでみい……おもしろい生活が出来るで……」

オヤヂは最後に日をキヨロリと光らせた。亀は圧倒されてしまつて、手も足も出ない。

オヤヂはボロジヤンバアを脱ぐと、手近な松の小枝に引かけた。色のどす黒い汚ない肌であつたが、筋肉はまだシツカリしていて、ゴツ〳〵と肩や脊や腕に盛り上つている。鳥打をぬぐと一面のごま塩頭だつた。

オヤヂの名は虎と云つた、播州高砂の生れ。当年とつて五十九才と云つたが、どう見ても五十そこ〳〵にしか見えない若さと元気である。

「播州高砂は松の名所でなア。高砂の松、尾上の松ちゆウたら有名なもんや。こゝらのへぼ松とわけが違うさかいなア……」

虎はこんな事を云いながら、亀の小屋へ居座つてしまつた。

虎が来てから、亀の貰いにも虎がついて廻るようになるので、今迄亀の人がらを好いて、何かと衣食を呉れた人達は、虎のキロ〳〵光る大きい目や、いかつい身体付をけむたがるのか、次第に收入が減つて来た。亀が一人で廻ると云つても虎はきかなかつた。貰いはガタ落ちとなつた。流石の虎も悲鳴をあげて、此処は俺が廻るさかい、お前飛田を廻れ。と命令的にほざく。亀は、何云うてんね。此処は本当は俺の縄張りや。お前こそ飛田へでも何処へでも行つてけつかれ……と思い切つて怒鳴ると、忽ち虎は凄い顔つきを示しながら、何やと！、何ごて〳〵ぬかしくさる。阿呆たれ！、俺が飛田廻れたらこんなとこへ来るかいや！　お前本当に飛田廻らんつもりか？

筋くれだつた腕ツ節を見せびらかしながら、つめ寄つてくる虎の物腰の前に、元上等兵の亀も、マラリヤあがりの弱体では、如何ともなし得なかつた。

亀は飛田を廻りはしなかつた。飛田には飛田の縄張りがある。勝手におかしな事をしたら大変である。虎は俺の名前を出せと云つたが、そんな事は亀は問題にしなかつた。

亀は大きな邸宅の塀際に凭れて、好きな空を仰いでいる間に、いつしかウトウトと眠つた。

亀は小屋へ帰るのが厭であつた。貰いも無いが、それはそれでいゝ。虎の暴圧が辛棒出来なかつた。彼を何とか

して追拂いたいのであるが、幾ら考えてもよい智惠が湧いて來なかつた。此の上は殺すより手が無い……そんな事がバク然の脳裡をかすめたが、どうして殺すか、などと考えると大変面倒な事になりそうで、その考えはその儘で忘れてしまつた。

湯文字

亀が裏道づたいに小屋へ戻つてくると、虎は居ない。何気なく下の方を見おろすと、大變なものを見た。いつも閉まつている丸芳質店の裏木戸が開いた儘になつている。亀はとつさに變事を予感して、轉げるように走つた。裏木戸から飛込むと、お絹さんと虎がいた。お絹さんは何故か小さくなつて、洗濯盥を抱え込むようにしている。淡紅色の湯文字と白い膝頭が覗いて、彼女の傍近くの踏み込んだ虎の目が、そいつを射すように睨んでいる。亀は常に無く強く叫んだ。

「虎！　何してけつかんね？」

お絹さんはホツと救われたように立上ると、その儘奥へ入つた。

「虎　帰ろ。早く帰ろ！」

虎はギロリと亀を睨むと、無言でユツクリ立上つた。いかにもふてぶてしい態度であつた。

「亀！　貰いはあつたか？」

小屋へ戻ると、虎は殊更いぢわるそうに、亀を見返つた。

「そんな事、どうでもええゝ。それよりお前、質屋の裏で何してた？」

「何にい！、どうでもええゝ？　亀！本気でそれぬかすのか？」

「ぬかしたら、どうすんのや？　俺を殺そとでも云うのんか？」

いきり立つた虎も、ちよつとタヂ〳〵となつたが、それでも凄い目を亀から離さない。

「お前みたいな無茶な奴あれへん。お前が來てから、俺の信用はサツパリになつた。ま、それはそれとしても、お前、質屋の嫁はんに何無理云うてたんや？」

「けツ！心配さらさんかてええゝわい。あの嫁はんに、ちよつとだけ乳を貰おとしとつたんやわい。」

「乳やて？　乳をどないすんねん？」

「ちよつと入用やさかいや。」

「お前がのむのんか？」

「のんでもええゝ。あんな好ゝ女子の乳やつたら、しやぶり甲斐があるやろ……」

「あほ！　どきちがい！お前、正気か？」

「正気や。俺は鳥目やさかい、鳥目に女子の乳がええゝさかい、あの嫁はんに頼んでみたんや……」

「お前が鳥目やなんて嘘や。」

「嘘なら嘘にしとき。ともかく俺は嫁はんに乳貰えるとこやつたのに、お前が飛込んで來てゴチヤにしてしもたんやぞ。」

虎は如何にも残念そうに唸つた。

「あの丸芳はお世話になつているさかい、そんなあほなまねすんのやつたら今日限りお前はんどつかへ行つてんか！」

亀はあの優しい天女のようなお絹さんが、このドラ猫のような虎に、弄られかけようとした危機に間に合つてよかつたと思つた。

虎はずんぐりとした脊を見せて、なんかしてけつかんねと煙草を吸つていた。

翌朝、亀はいつになく丸芳の旦那から話かけられた。朝寝坊の虎が起きない間に、亀は丸芳の外路を掃除していたのだ。旦那は例に依つて神経質そうに、細い目をメガネの奥から頻りとパチ〳〵して見せながら、亀の顔を見たり、地面を見たりしての立話だつた。

「亀さん。こんな事を云うのも何だがどうもあの虎と云う人が來てから、裏の木戸がよく開いていたり、ちよつとした物が無くなつたりして困つているんだ亀さんを別にどうなぞ思つてやしないが、どうもあの虎さんには弱るよ。昨日も僕の留守中、家内に何か無理を云つたそうだ、僕も警察へ届けようかと思つたが、亀さんの事もあるから、いちがいにそれも出來ず、まア辛抱しているんだ。亀さんからよく虎さんへ忠告して呉れないか、今の所それが一番いゝ方法だね。」

旦那は眉に立皺を見せて、仕方なさそうに軽く笑つた。亀としては只もうへい〳〵と畏まつて、三拝九拝するより手がなかつた。

思えば虎の図々しさは憎みても〳〵あまりある小屋一杯に逼ましい裸体で寝そべつている虎の姿を、こいつ殺つてしもたろか。と睨んでいると、ごろりと寝返りして、虎が起き直つた。

「亀！　すごい顔してるやないか？俺の寝首かこ思てたんやろ。お前でも人殺し出來る度胸あんのかいな。」

虎はフンと笑つた。亀はくそツ！と思つて虎を睨めようとして、ふと虎の股倉に新聞包がはさまれてあるのに気づいた。

「虎やん。その新聞包なんや？」

「何でもええゝわい。お前のもんやない。」

「そんなら見せてみいや。ほんまにお前のもんなら見せたらどや。」

近寄つた亀の気配に、狼狽して虎は新聞をポロリと落とした。包はサツト開いて、中から淡紅色の湯文字が色つぽく飛び出した。

「これお前のんか？」

亀は鋭く虎の顔を見た。虎はその視線を図太く受けて、

「俺のんや、いや、俺の嬶のんや。」

「お前の嬶てどこにおる？」

「飛田におるわい。何をそんな事ききさらすねん？」

虎の目に怒りが漲つておる。それは何かをごまかす目色でもある。

「嘘やろ！　それ丸芳の嫁はんの、盗つたのやろ。嘘吐いてもあかんぞ！」

亀は自信を以て、ズバリと浴せた。

「あほんだら！　こいつ何処迄俺に楯つきくさる……」

虎は立上つて來て、防ごうと片手をあげた亀の腕を、そのまゝ逆に捻ぢあげた。おそろしい力だつた。神経痛の出てくる亀の右腕は赤ん坊のそれと同なじである。亀は痛さに顔をしかめて

唇を噛んだ。

嫁入まんぢゆう

亀も虎も貰いに出すに、松林の中から下を見おろしていた。表面仲好さそうに並んで腰をおろしているが、思いは別々だつた。

あれ以來、亀は飛田へ行きもせず、虎も強いなかつた。亀は看視の意味で虎と同伴で貰いに歩いたが、ギヨロリと光る虎の目が禍して、收入はとこと ル迄減收だ。亀はもう廻る勇氣も失せた。彼は虎を殘しておいては気がかりなので、小屋をこわして、虎を連れてどつかへ行つてしまおうか、と考えている。鄉里の岡山が浮かんでくる。薄情な妹婿であつた男のおる町……そこは大きな川が流れて、廣い河洲に草原地帶がある。あそこへ小屋を建てゝ棲んで、毎日毎日妹婿であつた男の家を訪ねてやろうか……虎のような無茶者を差向けてやつたら、どんなだろう。亀はそんな事を空想していた。

丸芳の裏木戸が開いて、赤ん坊を背負つたお絹さんが姿を現わした。手拭で頭を姉さんかぶりにして、何か干物を抱えている。丘の方へ近づいてくるそこに亀の手でこさえた三段構えの干物台があるのだ。お絹さんは手を伸ばして仕事に夢中だ。白い豊かな二の腕までがめくれて、亀と虎は思わずゴクリと唾をのみ込む。十文字の胸の紐に噛み出された双の乳房がブルン〳〵と揺れるのも仄見える。干物をし終つたお絹さんは、陽を眩しそうにしながら松山の方を仰いだ。亀はギヨッとして視線をそらしたが、虎は喰入るようにお絹さんを見ていた。お絹さんはそのまゝしつとりとした足付で帰つて行つた。裏木戸がパタンと閉まると、何故か亀はホツとした氣持だつた。彼は又放心したように空を眺める。流れる雲……雲……雲……そうだ。岡山へ行つてやろう。虎も連れて……。

「虎やん。どや？　旅して見いへんか岡山へ行こ！　岡山は俺の鄉里や。もつと好ゝ事あるで。」

虎は何かを思案しておるようすであつたが、亀の言葉に氣がついて、乘気の無い顏をした。

「旅やて？　やめとこ。この暑いのに何やいな。旅なんかしてられるかいやお前一人で行つといで、俺は此処で結構やさかい……」

「貰いの少いのに、どないしてやつていけるのんや」

「そら何なと仕事考えんとあかん。このまゝではあかんと、俺も先刻から考えとるんやが……」

虎には珍らしく仔細げな話ぶりだつた。

「虎やんは労働出來るかも知れんけど俺あんこには向けへんよつてなア。」

「労働？、そんなあほな事するかいな

魅惑コント

マダム桃色溫泉武者修業

徳南坊

避暑地や溫泉地へ行かれた年配の方は、必ず一度や二度はそうした事を経験されていることゝ思う。（若し、そうでない方があつたとしたら、きつとケチにしていらつしやつたか、さもなければ、残念ながら余り風采の上つた方じやありませんね、オツト、これは失礼）

マダムと言つてもいろ〳〵あるが、彼女は社交喫茶の女將であつた。主人の死によつて二号とゆう八年來の腐れ縁を断ち切つてしまうと、目抜きの場所の店を早速賣り拂つてしまつて、いよ〳〵此れから諸國桃色武者修業と出かけたのである。

今日は軽井沢、明日は熱海と、世の中には到る所青山もあれば、溫泉もある。そういつた所へ出かけて、溫泉に浸りながら面白おかしく遊んだならば、そのまゝ死んだところで何の心残りもなかろう。

と、そのマダムは考えたのである。然しもと〳〵賢明なる彼女のことであるから、旅をするにしても金を費つてするのなら誰でもする。費わないでする所に眞の旅の意義があるのであると考えた。

マダムは先づ或る溫泉街の大ホテルへ自動車で乘りつけた。番頭の出迎え、給仕の案内、室は特別上等な所にきまつて、さて、入浴マダムは飛び切り入念にしかも上品に化粧をした。



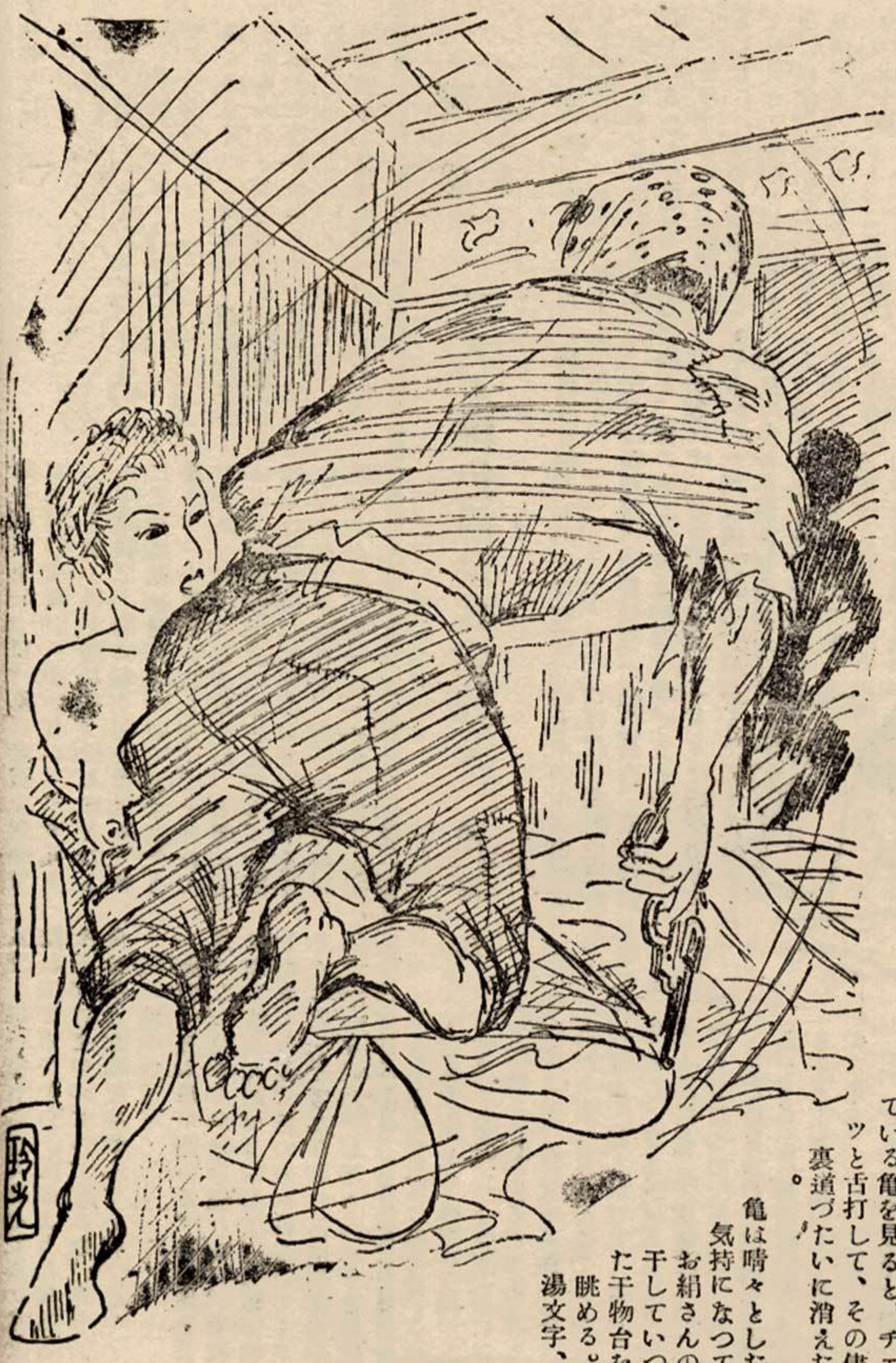
そして例えば何処の未亡人が湯治にでも來ている様な風をして、ベランダへ出て編物をしているのである。

すると、誰でも「旅の恥は」と言つた気でこの美しい婦人に話しかけたくなるものだ。さてマダムはいとも上品にそして応揚にあいづちを打つのである。

それから室の訪門のしつこ。それから扉の鍵、いともスムースに進行してゆくのである。

そして愈々となれば、相手も相手、彼女も又、そこらの小娘とはワケが違う。溫泉の滯在費は勿論のこと当分の小使いには、心配はいらない。

身体も心もゆつたりして保養が出來るというわけである。



俺はなア、此頃ちよつと宗旨変えたろ思うてんね。太う暮すのも、細う暮らすのも、同じ世の中や。俺もグズグズしてたら六十に手が届く。直き死んでしまうんや。死なん間に、うんとうまいもん喰べて、好きな女子を抱いてえゝ事しとかんといつ閻魔はんからお迎えがくるかわかれへん。俺はこないに考えたんや。亀！強盗でも何でもやろやないか？」

「あツあツほ！　なツなんかしやがるねんーようも〳〵そんなあほたれが云えたもんやな。今日こそ辛抱出来ん。どんな事があつても出て行つて貰う。なぐるならなぐれ！　何ぼでもなぐらしたるさかい。お前にはあいそもこそもつついた！」

亀の絶叫に、虎は例の目をギョロリと光らせたが、不思議におとなしく立上つた。

「そうか。そんなら別れたろ。その方が俺にもえゝ。お前みたいな意久地無しといつしよにおるのん、えゝ加減飽いたわい！」

虎は小屋ん中へ入つて、暫らくゴソ〳〵してお る様子だつたが、亀は知らん振りをしていた。虎はそつぽを向いている亀を見ると、チエツと舌打して、その儘裏道づたいに消えた。

亀は晴々としたが、不思議におとなしく立気持になつてお絹さんの干していつた干物台を眺める。湯文字、シャツ、じゆばん、むつきなどが、風にへんぽんとひるがえる。亀は次第にゆかいとなつて来た。俺が一人で此処におるのなれば、何も心配はない。思えば虎の奴め、随分俺を苦しめやがつた。が、もう大丈夫や。元通りの俺の天下に戻つたんや。亀は両手をあげて万歳を叫びたい気持だつた。

と裏木戸が開いて、再びお絹さんが出て来た。亀の足はバネ仕掛のように立上ると、はやお絹さんの身近に駆け下りていた。

「御りよんさん！　虎が去にました！もうあの小屋に居りまへん……」

乾いたむつきを持つて帰りかけたお絹さんは、感動した面持で、まアそウ……と答えて呉れたのが、亀にはとてもの喜嬉しかつた。

「これ、虎さん去んだお祝だす……」

と笑いながら云つて、お絹さんが木戸の合間から呉れた紙包には、赤と白の大きな嫁入まんじゆうが三つも包んであつた。

亀は空腹のまゝ、そのまんぢゆうを二つ迄喰べた。一つは晩の楽しみに残しておこう。亀は一つになつたまんぢゆうを大切に包み直して小屋の隅においた。そしてごろりと横になると、急に疲れが出たのか、ぐう〳〵と高いびきだつた。



妙なもので、虎が去つてから、亀の

貰いはぼつ〳〵恢復していつた。丸芳の旦那も今迄になく、朝の散歩時に、折々小遣錢を與れたりした。丸芳には近頃小さなテリヤ犬を飼つて、そいつが旦那のお供をして、チヨロチヨロ走り廻つていた。

お絹さんからも何かと貰い物が增えた。もう九月も半ば過ぎて、段々涼しくなるだろうからと、旦那のお古らしいチヨツキとズボンを貰つた時、龜は実に嬉しかつた。龜の身裝は小ざつぱりとなり、皆の親切に応える爲に、出來る限り町内の爲に働いた。と云つて龜には町内を清掃し、自分の手製のゴミ車で滯留勝の町内のゴミを、遠くのゴミ捨場迄運ぶのが、せい一杯の御禮心だつたが……。

龜は幸福だつた。ほがらかだつた。

龜は今迄遊びになど出た事なかつたが貰いの多かつた日は、新世界へブラリと遊びに出るようになつた。そうした龜の様子は、どつから見ても、ルンペンのようでなく、職工か何かに見えた龜の眠つたような心の中で、向上心がタツ〳〵と湧いて來たようである。

その日の夜、拾つたビラ券で、龜は新世界で映画を見た。西部劇と云うのだろう。アメリカの牛飼男が、馬に乘つて走り廻り、矢鱈にピストルを撃ち合うと云つた筋で、龜は小供のように面白がつた。

龜が映画館を出て、ブラ〳〵金塚山へ歸つて來たのは、相當遲い時間であつた。裏道づたいに小屋へ迴りつくと前の章むらへ立小便をした。その時、下の丸芳貸店で、頻りに犬の吠える声がした。その吠声の合間に、女の悲鳴のようなものも、かすかながら龜は耳にした。彼はギクツとなつて、丸芳の明るい軒灯を見すえた。龜はとつさに小屋ん中へ飛込むと、出歯庖丁をタオルに包んでふところに入れ、一散に山を駈け下りた。果たして丸芳の裏口の錠は捻ぢ切られて、木戸は光の隙間を見せていた。庭ん中を、テリヤ犬が狂つたように吠え廻る白い姿が、ちらつく。龜は容赦なく疊へあがつた。台所口、茶の間、廊下、階段……階段の下へ來ると、二階でウームと云う唸り声と、女のヒイ〳〵泣く弱い声を聞いた。龜は出歯庖丁を取り出すと、躍り上るように階段を踏んだ。

二階の六帖に飛入ると、旦那の市太郎が荒繩でがんぢがらめに縛られて、おまけに猿ぐつわ迄されて、床柱につながれている。市太郎の目は哀願するように龜を見た。龜は直ぐと市太郎の繩をブツブツ切つた。市太郎は無言で次の間を指ざすと、よろ〳〵しながら階段の方へ這つた。次の間の合の襖は半開きとなつて、裾の方に赤い物がチラツと覗いた。龜は電気仕掛のように躍り込む。

虎ごつた。虎はいつもの倍以上の凄い顔をして、龜を睨みすえようとする龜も、怒りと憎しみのいつぱいの目で虎の目を挑ねかえす。あろう事か、あるまい事、虎は長じゆばん一枚のお絹さんを横抱きにしている。お絹さんは恐怖の爲に半ば失心している様子、赤ん坊は疊の上へ放り出されたとも知らず可愛いゝ手をひろげてスヤ〳〵寢入つている。

「龜！　邪魔さらすとこれやぞ！」

虎は片手で拳銃を龜の方へ凝した。

「何！　撃つなら撃て！、こら！　虎！　御りようさんを放せ！　こら！　放せ！」

「あほツ！　俺の傍へ來やがつたらズドンやぞ！あつちへ行つとれ！」

虎は龜をけん制する間にも、片手で抱きしめたお絹さんに力を加えてはなさない。二人の荒々しい会話に、漸く気づいたお絹さんは、熊の掌のような肌触りに思わず飛起きようとして、虎に抑えられた。長じゆばんの脇がビリリと裂けて、そこからポツテリとした乳房が匂わしい顔を出した。裾が乱れて、すんなりとした脛から豊かな股の邊り迄覗く。

虎はニヤリとした。瞬間、龜の出歯庖丁が虎の胸へ……。危ない所で、虎は横へ避ける。同時にダアンと銃声。銃弾は龜の肩を掠めて壁へブスリ。虎と龜は組み合つた。龜は直ぐ組敷かれる。打つ。なぐる。ける。噛む。大乱闘だ。龜は平素の弱気に似ずなか〳〵負けない。だが体力の差は如何せん、拳銃の台尻で一撃を喰つてクラ〳〵とした。血が額を流れる。その時、秘かに階段を数人が上つてくる気配がした虎は逸早く覚つて、龜を蹴り離すと、六帖の方の窓口から、外路へ飛び出ようと、焦りながら雨戸をはづした時、警官の帽子と拳銃がぬツと部屋へ這入つて來た虎は振り向きざまにダアンと撃つ。

ダアン！ダアン！と銃声と硝煙のやりとり。ガチヤガチヤンとガラスの破れ落ちる音。ブス〳〵唐紙や壁に銃弾が喰込む。茶ダンスと机をバリケードにして、虎は盲滅法に撃ちまくつたので、銃弾は直ぐ盡きた。警官側の方では二人負傷者が出來たので、廊下迄引退つて、そこから応戦していたのだが虎は素早くその間隙を狙つて、窓から屋根へ出ようとした。あツと叫んで、今迄拳銃戦を傍観していた龜、納戸の間から飛び出すと、虎の腰へしつかと抱えついた。血だらけの顔と、血だらけの手。警官側はハツとして思わず二三発撃つてしまつた。二発は虎の頭へ一発は龜の脊中から肺部へブツスリと突き抜けた。折重なつて倒れる二人。龜は這い出るように疊を掻いて、悲壯な声で叫んだ。

「御りよんさん！　御りよんさん！」

死に行く者の弱々しい声だつた。

部屋の隅の長火鉢のかげに、小さくなつて慄えていたお絹さんは、

「御りよんさん……」と叫ぶ龜の三度目の声に、乱れた姿の儘やつと彼の傍へ居座り寄つて來た。

「龜さん！　しつかりして！」

龜は消えるような声で、まだ何かを呟いたが、お絹さんには聞きとれなかつた。

お絹さんはかまわず、龜の頭をその艶な膝へ抱きあげた。龜の草のような顔色のなかに、ほのかな笑みが浮かんだが、その儘ぐつたりなつた。

お絹さんの目からホロリ涙が落ちた

——了——



一、處女の味

腕時計は正に8時。勤めの人ラッシュアワーが一しきり終ると、さすがの阪急前の混雑も嘘のように靜まり、東は中崎町から西は櫻橋あたりまで、名物の夜の天使がうろうろしはじめる。

秋宵一刻價千金、たゞでさえむずむずするのに、あいにく女房は親戚の嫁入りの手傳いとかで、子供をつれて、四國の田舍の実家へ行つてもう五日ばかり留守。いまから帰つたところで、郊外の寂しい住宅地のわが家で飯盒飯をパクつくだけのことだ、ちえつ、くだらねえ……といさゝかの謀反気がむらむらと起つたのがいけなかつた。

いつもなら会社を退けるとすぐ北浜の交叉点へかけつけ、バスにぶら下つて一路わき目もふらずに阪急へいそぐ（嘘をつけ！）習慣の僕が、ふつと鬼の留守の洗濯とやらで、同じ阪急へ歸るよその課の女の子をさそい、ぶら〳〵と難波橋から中之島公園へ抜け、堂ビル前のしるこ屋へ入つたのが發端である。

いつもは兄妹みたいに物を言いあつて居る女の子だし、喫茶店へは何度もつきあつたのだからそんな気持になるはずもないのに、秋情あいもよおし候とかで、しるこ屋を出てから、うすぐらい街路で、ぎゅつと力まかせに抱いてしまつた。

「あら……、いけませんわ！」

とか何とか口先だけで拒みながら、ふだん処女と云つて居るが、怪しいもので、頤に手をかけて仰むかせたら、ちやんと眼をとじて唇をつき出して居た。

チヤンス到来、さつそくどこかのホテルへ引つぱりこんで……とむらむらと野心は起きたものの、待てよ、こんな十九ぐらいの娘にスタンプを押してある会社をクビになるような噂が立つちやソロバンが合わんし、女房とちやんばらを展開させてもつまらない。まあいつやあとはいつでもこちらのお好みや、まあ待て待て……とそこはアン次第、まあ待て待て……とそこはアンゲールの厚かましい分別で、そこらのお菓子屋で、百円ほどのケーキをつゝませ、

「今日は僕ちよつとよそへ行くのでねさあこれはおみやげ」

と女の子の手に押しつけた。

「だつて……、いやあ、このまゝ帰るなんか」と鼻を鳴らすのを、何とかかとか云いなだめ阪急神戸線の出札口へて、ほつと一息ついた。

彼女の後姿が消えてゆくのを見とゞけさて、これからが一芝居、ふうつと一息ついたのが正に8時二十分と云う

次第だ。女房と別居してもう五夜、若い女の子のふわふわしたゴムマリみたいな身体と並んだりしたものだから、よけい昂奮して鼻血が出てきそうだ。僕は曾根崎署の横を東へまがると、ずらりと並んだ一杯屋へ、のれんを分けて首をつゝこんだ。

二、代用パン助

うだうだ云いながら、おでんをつゝいたりビールと燒酎をちやんぽんしたり小一時間。

「にいさん、おあいそだ」

「へい、えゝと……ビールが二本、燒酎が三杯、おでんが……十串だしたなしめて、四百六十五円」

「よしきた、つりはチツプだ」

一万二千円のサラリーを月三回に分けて拂うビンタレ会社に勤めてると云う憂うつはどこへやらポケツトのサラリー袋をぴりつとさいて、手の切れそうな百円札を五枚。

ふらりと屋台店を離れる。秋のなまあたゝかい夜、チカチカとネオンがまたゝき、アルコールが腹の中で燃えているから、矢でも鉄砲でももつてこいうーいと両手を伸ばして深呼吸をしたら、うつとしい課長の顔も、きらいな畫間の仕事も一べんに掻き消えた。

「ちよつと、ちよつと……、兄ちやん、あそんどくなはれ」

すうつと幽靈のようにすりよつてきた女が僕の肩越しに熱つぽくさゝやくパーマネントに眞赤な唇と、予想して、ぐるつとふりむくと、はて？と肝をつぶした。おかつぱ頭にみじかいたもと、メリンスらしい兵古帶に、ちびた下駄と云う見すぼらしい十五六の女の子。ニヤツと恥しそうに笑うのに、こつちの方がいさゝかドギマギして、

「ふうん、君がかい？、お客をとるの？」

と声を落せば……、

「……お客さんがかまへんなら」

と消え入りそうになる。冗談じやないよ、いくらなんでも……と云いたいこちらの機先を制して、

「姉ちやん病気やさかい、ほんまは姉ちやんがくるんやけど……」

とクスンと鼻を啜りあげた。

「いくらだい？　値段は」

とからかえば、まじめくさつて

「知らんのかいな、時間で五百円、とまりで千円……」

こちらはぷつと腹の底から吹き出したのをこらえて、

「……どうせお茶を引くのだろ、ゲンをつけてやる」

ひと度封を切つたら、一瀉千里のだゞら遊びの金、百円札二枚をすつと引きぬくと

「……なんかあまい物でも買つてお帰りそれから、姉ちやんにな、ちよつと高いけれどペニシリンを三本うつように云つておくがいゝね」

「そやかて、たゞもろたらいかんさかい」

と追いすがつてくる。

「いゝんだ、いゝんだ、かまわない、がふえて來た。人通りはいよ〳〵少ない。今度は大阪駅前から南へ、元の引揚援護館跡をぐるりとまわれば、天下に知れた梅田自由市場。秋の夜のいたゞら心に、アルコール気分が手つだつて、軒をつらねたバラツク飲屋の、あけつ放しの戸口から招く女たちがとてもきれいに見える。

こゝら一帶は日本人にしては言葉の調子の妙な連中の巣だという。妙な店へうつかりまぎれこんで、女にチヨツカイを出したら、たちまち近所の荒くれ男がどかどかと入つて來て、客を外へつれだし、なぐるやら蹴るやら半殺しにした上に、着ているものも有金もすつてんてんにまきあげるらしい。

友人の中でもこの災難にあつたのが居るから、僕は怖さは怖し、と云つて一ぺんこゝらの女のかわつた味も知りたい気がする。僕は店の看板の名前でたしかに純日本人？　らしい店をよりながらぶらぶらと行きもどりしたあげく、とうとう決心してその一軒めざしてとびこんだ。

ペニヤ板の壁に、

「湯豆腐三十円」「おでん一串二十円」「つきだし一皿十円」「清酒一合九十円」「燒酎一杯三十円」等とハツキリ値段が貼つてあるし、女はおとなしそうなマダムと、すこし顔色のわるい女給

酔つぱらいのおじさんがくれたと云つたらいいんだ」

足ばやにその代用パンパンから遠ざかりながら、とたん、じーんと熱い涙が滲んで眼鏡がくもつた。

だまされてもいゝ、眼をつむつて、こんなときにはだまされてやるもの……こんなのを多情佛心と云うのか。阿呆の僕よ！

三、屋根裏の姫君

午後9時。そろそろ大戸をおろす店

都會の盛り場 夜の8時から 朝の9時まで

二人。二坪ほどの土間に、スタンド風に高い椅子がしつらえてある。

「おいでやす、なににしましよ？」

とニツコリ笑う二十七八らしいマダムの大阪弁にほつと安心して

「そうだなあ、熱いやつを一本、それなんかあつさりしたつき出し…」

と注文した。

スタンドの奥が料理場になつて居りいきなり二十五六のコツクが白い割烹衣で、鼻唄をうたいながら、マダムのお通しを

「アイよ、合点」

と受けた。先客は一人、僕と同じ年配のサラリーマンらしいのが、おとなしくコツプ酒をなめ、つき出しの浅草海苔をつまんで居た。どうやらこゝは僕の希望通りの純日本人？　の店らしい。

しばらくすると、バーテンダーの後の段梯子をメキメキならして女の子が降りてきた。苺を食つたような眞赤な唇、濃いドーラン化粧、まぎれもないパンパンである。

「ねえさん、大きに…」

と挨拶すると、風のように外へ出て行つた。

つゞいて、ドスドスと、大分酔つた男が、段梯子を降りてきた。すかさずマダムが

「どないだす？　えゝ子だしたやろ」

と酒のおかんをしながら声をかけた男はその声が聞こえたのかどうか、眞赤に酒でほてつた顔をトロンとさせ、ふらりふらりと夢遊病のように出て行つた。



蛇の道にはヘビ、たちまち僕の第六感にピーンとひびいたものがある。

「マダム、スペシヤルルームがあるんだね？、上つてもいゝか」

僕が冗談のように云うと、マダムはぎよつとしたように黙つて僕の顔をまじまじと穴のあくほど眺めるのであつた。料理場の小窓からもコツクが怖い目でヂロヂロと僕を眺めて居る。

「あはは、心配しなくてもいゝよ、刑事とちがうし、税務署から調べに来たのでもない」

「…ほんまだつしやろな？、このごろちよい〳〵知らん顔して調べに来やはるさかいに」

「どうだい、時間で遊ばせないか？」

「おつれさんは？」

「マダムに任すからね、うまく頼むよ…」

「…ほな、どうぞ」

マダムがちらりと目くばせると、二人の中から顔色の悪い方の女給が、僕の合オーバと鞄を持つて起ちあがつた

「急な段梯子やさかい、足許があぶのうおまつせ…」

と、僕の後から彼女もあがつてくる。上つてみると驚いた。外からみると、ちようど看板でかくされて居るが天井裏を上手に改造して、三疊の間が二つ出來ていて、片隅に人絹の夜具が積んであり、なまめかしい鏡台や、小机も置いてある、壁はベニヤ板、穴ふさぎに映画俳優のスチールなどがべたべた貼つてあつた。

「あつち側はマダムの部屋、こつち側はわたしらの部屋だんねん…」

「だつたら、あなたら女三人で晩寝ているのか？　用心が悪いだろうな…」

「且那はんは意地悪やなあ、そない云うとかな、ほれ…警察が調べに来たときにぐあいがわるおまつしやろ」

女給さんは灯の下でさしむかいになつてみると、どこか若山セツ子みたいに眼のクリクリした可愛いゝ娘である。この娘となら文句はない。僕は、

彼女の肩に手をかけるとぐつと引きよせた。すると、

「…ちがいまんね、いま呼びに行つてまつさかい、ちよつと待つとくなはれキスぐらいはかまへんけれど」

とくすくす笑うのである。

「へえ？、君のつもりだのに」

「…ふつうやつたらかめしまへんけどあたしいまアレの最中だすのもう一人の子はちよつと怪我してるさかいにお客とれしまへんし」

「…いつそ、あのマダムを」

「うふふ、マダムはあきまへんわ、旦那はんが料理場に居やはりますもん…」

あつそうか！、コツク即ち若い燕だつたのか。

「呼んでくると云つて、近所に女の子が居るのかね？、いくらで來るの？」

「時間で五百円だすわ、私らかて同じ…、さあ、いまころやつたら、みなお客さんつかまえたやろさかい、えゝ子残つてるか知ら？」

「…日本人の娘さんだろうな？」

「あほらし、ちやんとした子はいま時分、みな賣切りだすわ…」

「へえ？
そしたら、
あの？」
「半島の娘さ
んだすがな」
「ゲエッ？、僕ね
ちよつと便所へ行く
からね、あ、ちよつと
そのオーバーを貸して、
風邪をひいてるからな、おつ
つと、鞄の中に紙も入つていた」

僕はひつたくるようにオーバーと鞄を受けとると、段梯子をころがり落ちけゞんな顔をするマダムに百円札を五枚わたすと、ほうほうのていに逃げ出したのである。



四、お多福娘

午後10時——。にぎやかなのは國鉄大阪駅だけで、阪急も阪神も人影は至極まばらである。僕は駅の賣店へ入つてゆくと、つゞけざまにソーダ水を三杯のんだ。どうやら胸がスウツとする。さつきから失敗つゞきで、まだ一人の女の子もつかんでいない。こんなヘマをやるくらいなら最初の会社の女の子をどこかへつれこめばよかつた……なあに、用心すれば腹ぼてにする心配はないしまかりまちがつて馘首になつたつて、どうせ月給の遅欠配つゞきのボロ会社だ。ながく尻を据えて得になるはずもない……、ちえつ、しまつたと後悔のヘソを噛んだがもうおそい。

警察の刈りこみが厳重なものだからこのごろはパンパンも戦法をかえたらしく、二三年前みたいに、いきのいゝピチピチした闇の人魚が自身で客をあさらない。たいていがゾツとした薄きたないおかみさんや、お婆さん連中がポン引をやつている。

「どないだす、旦那」
「安うしときまつさかい……」
「素人の娘のアルバイトだつせ」

いやはや、こちらの鼻の下が長く見えるらしく、二三間あるくあいだにがやがやとよりたかつてくる。桑原々々その手にのつてたまるもんか。豚小屋みたいなところへ案内されて、人三化七みたいなのを押しつけられてはあほうの骨頂だ。

そうおもいながら、大阪驛と阪急の中途にある有料公衆便所の横まで来たたしか去年の秋ごろ、この辺で、酔つ拂いがルンペンに絞め殺され、着ていたものを身ぐるみ剝がれて、死体となつていた。それをおもい出してぞつとして足早やに通りすぎようとすると、芝生の木陰で、誰かうずくまつてごそごそしている。身体は大きいが胆つ玉の小さい僕がどきりとして眼を凝らすと、どうやら女らしい。

好奇心と冒険とごつちやになつて、こわごわ近ずくと、まだ十七八の若い娘が、芝生にうずくまり、何か風呂敷包のようなものに顔をあてゝ、しくしく啜り泣いて居た。

「もし〳〵、どうしたんだい、気分でもわるいのとちがうか、お腹が痛いのだつたらカオールをあげよう」

どうも若い女にはやさしくて甘いのが僕の缺点だ。

「……」

「こんなとこに居ると人があやしむからね、ちよつと明るいとこまでおいで相談があつたら薬つたあげるから……」

たのまれもせんのに、娘の背中をかるく叩くと、うれ切つた西瓜みたいにホンボンと弾むぐらいはち切つた肉付きである。

なんとか彼とか謂るのを促して、駅前にまだ店をあけているうどん屋へつれて行つた。熱いきつねうどんを一杯やがやとよりたかつてくる。桑原々々その手にのつてたまるもんか。豚小屋みたいなところへ案内されて、人三化七みたいなのを押しつけられてはあほうの骨頂だ。

「あなた、家出をして大阪へ来たのだろ？」

それがそのものズバリと的中して、わかりにくい松江弁でボツボツ娘が白状したのによると、別に複雑な家庭悲劇やなんかで、せつばずまつたのでなく、フワーツとした娘心で、友人と二人で大阪へ職を求めに来たのらしい。現金は田舎でも不自由だから、あるだけの着物を風呂敷に包んで、大阪で金に換えるつもりだつたと云う。

「そりや、だめだよ、衣料品はいま投げ賣り時代だし、金ずまりで古着みたいなものを誰が買うものか、たとえ古着屋へ持つて行つても、物資購入通帳

がなかつたら怪しんで買わないよ」
まさにその通り。あてにした古着は買れないし、職業安定所は長蛇の列だし、今朝ついてからいまゝでうどん一杯食べていないのだつた。友人の行方もわからないらしい。
「こんなことをしていたら、不良につきまとわれるもとだよ、警察へ保護願をしてもらつたら一番いゝのだが、事がたいそうになるからなあ…、どうだい、このまゝで松江へ帰つちや？、いま汽車に乗つたら明日の朝に着くよ」
二杯目のうどんを注文しながら僕はすゝめた。
「わたしも早う帰つた方がえゝと思うんやけど…」
「汽車賃がないのだろ、おじさんが立替えて出してやるよ…」
こう僕がなぐさめてやつたとたん、娘はうわん…と箸をもつたまゝ、チヤブ台に顔を伏せて赤ん坊のように泣き出した。よつぽど嬉しかつたのだろう。こんなウブな田舎の処女を宿屋へひつぱりこむほど僕は悪党じやない（…実はお多福みたいな娘の御面相に食欲を失つたのが本音だが）。
田舎者はよく食べるらしいから、僕はうどん屋のとなりのすし屋で二合入りの折詰を買つて娘の風呂敷に押しこんだ。代金二百円、今度は右手に娘の手を曳き、左手に風呂敷包をぶらトげて駅の切符売場で、山陰線松江までの切符を買つてやつた。友人のことは明日でも警察に保護願を出してやることにした。
「大きに、大きに。國へ帰つたらすぐ汽車賃は送り返します…」
と、僕のやつた名刺をたいせつに帯の間く挟んで、プラツトホームの石段を上つてゆく娘のぶりぶりした後姿を見送ると、僕はさつきサイダーをのんだ時よりもつといゝ気持になつた。

五、連れ込み宿

腕時計は午後11時ヂヤスト。四人の娘を抱く絶好のチヤンスを見逃したゞけで、僕のサラリー袋はもう二千円ばかりになつて居た。歩いた距離も大阪駅を中心に三里以上ぐるぐる歩いた気がする。
「おうい、リンタク！」
「へえい、旦那どこまで」
威勢よくペダルをふんで、がた〳〵近ずいてくる車夫に
「どこでもいゝから、きれいな女の子を抱いて一晩寝かせてくれるところをたのむ、祝儀も一切合財入れて二千円しかないんだ。袋ぐるみ君に預けとくからな、うまいことやつてくれ」
「えへへ、へい、承知の助！」
車夫にサラリーの袋ぐち渡して、すつからかんになつた僕は、リンタクの幌の中へころがりこむと、疲れと酔いが一ぺんにでゝ、こくりこくり居眠りを始めた。
がた〳〵と妙に暗い街をいくつも抜け、どこか判らん町の、軒燈が眠そうについているしもた屋風の宿屋につき出迎えの女中さんとリンタクの車夫に靴をぬいでもらい、廊下をヨクヨタと奥まつた四畳半まで運ばれたことはおぼえている。そのあとが夢うつゝかすこぶるぼんやりしている。たしか背廣をぬいでくれ、布團の中へ入れ、電気を消し、それから
「まるでグニヤ〳〵やわ、よつぽど酔うてはる」
とつぶやいた。娘は？、いつたいどんな顔だつたのかもおぼえていない、
とにかくその翌朝、顔にかん〳〵あたる日光に眼をさますと、布團の中にぷうんとあまい香水のにおいが残つてたゞけである。
僕はまだふらふらする二日酔の頭をふりながら、女中に送られて宿の外へ出た。とたんにあつと息を呑んだ。よつぽど遠い町へ来たつもりだつたのに眼の前に阪急百貨店がそびえて居るではないか。こんちくしようめ、リンタクの車夫は、同じところをグルグルまわつたあげく、北野劇場裏の宿屋に僕を送りこんだのである。
ポケツトをさぐると、クシヤクシヤの十円札が三枚残つて居た。それで十本入のハツピイを買うとそれこそビタ一銭も僕の身には残らなかつた



のである——、但し酔つて居ても流石にサラリーマンの心得、腕時計と鞄はオーバはしつかりと身につけて居た。
四千円使つて、秋宵一晩に五人のちがつた娘とつきあつたのは決して高くはなかろう…と僕はうらゝかな大空をゆつくりと見あげた（終）

捕えられた密入國者

韓國密航者哀話

階堂三次郎

韓國人李玄羊は、十二年間住馴れた日本と戀人が忘れられず五月十三日の夜、同志十五名と共に小さな帆前船をあやつり途中幾度か海荒に會いつゝもようやく山陰の沖合まで漕ぎつけた。

それは本國を發してから八日目の夜の十時頃であつた。十五名のうち三名は、今年の冬一度日本へ密入國を企て直ちに日本の警察に捕えられ本國に送還された密航の經驗者だつた。

トランプ占いが吉と出て、そこで早速彼等は運を天に任せてしずかに船を海岸へと進めた。曇天なので、海岸の砂濱がわずかにほの白く見えているだけだ。最近とみに警戒がきびしくなつていると聞いているので、はやる同志を靜めながら頭分の三人は愼重に事を運んだ。

やつとなつかしの日本の地を踏んだのが午後十一時頃、三人を除いた十二人はほつと安堵の色を見せたが、危いのはこれからだと知つている三人は、こゝで結束を解いて各人思いの場所へ逃げて行く事を言い含め、疲勞のからだに鞭打つて散り〳〵に別れて行つた。

李玄羊の戀人は三里ばかり隔つた倉吉に住んでいる。その町には彼の知つている同國人も住んでいるし、またあつても捕えられはもうないし、彼は夜を徹して危險が大であるから、町へ急いだ。

未明のうちにどうしても町へ着かねばならない。町へ行きさえすれば、彼をかくまつてくれる同國人の家はいくらでもある。戀人は癩病の父を持つ日本人で、豐子といつて彼よりは五つ年下の醜い女であつた。公然と渡航出來るようになるまで彼を待つていてくれる約束をしていた。その彼女のむつちりとふくらんだ肢体を想い浮べながら李玄羊は暗い道を急いだ。



東の空が白けだした頃、彼はやつと町外れまで辿りついた。戀人の家も、同國人の家ももうすぐだ。

棒のようになつた足をひきずつて、先づ同國人の家を叩いた。この前捕つたのは大阪行きの汽車の中でだつたが今度はもうここまで來た以上は捕りはしないだろうと彼は思つた。

日本に居るとき、兄弟のように親しくしていた同國人は心よく迎え、捕えられぬための色々の注意を拂つてくれたとう〳〵やつて來たのだ、という氣持が實感となつて胸中に溢れると、彼は無聞と涙が流れて仕方がなかつた。その家に二、三日滯在していたが、日本の警察は彼等の密入國を知つた樣子もないので、日本へ來てから初めて町を步いて見た。意識して胸をそらした。

夜だつた彼は戀人の家を訪ねた。豐子は困つた顏つきを一瞬して見せたが喜びに有頂天になつている彼はそれに氣ずかなかつた。

その夜はそこに泊り、眼の見えぬ中風の老婆を隣りにして何月ぶりにか忘られぬ女の肌に觸れてみたかつた。

が他に愛人の出來た女は、普通りの滿足を與えてはくれなかつた。

彼は、變つた彼女に氣がつくと、言い知れぬかなしみに閉われた。何のために日本にやつて來たのか、彼自身にもわからぬような氣持になつて來た。

滿されぬ焦立たしい心で彼は蒲團をひつかむつて壁を立てずに泣きぬれた。

女は、彼に背を向けて寢ていた。その背からは何か冷いものが李玄羊には感じられるのだつた。彼は大阪に行けば以前彼に撮られた同國人の女が居る筈であつた。

その次の夜、あまり氣が進まなかつたが彼は最後の氣持で戀人に會いに行つた。彼女は前夜よりもやゝ喜びの色を見せた。然しそれは彼女の僞りであつた。靴を脫ぎ終つた頃、五人の武裝警官がいきなり踏み込んで來たのだ。

謀られた！　と思つたがもう遲かつた。女の顏を見ると、嘲笑している感じがぴんと來た。

警官は、寄つてたかつて手錠をはめた。

彼は、抵抗をする氣持さえなく警官のなすまゝに任していた。本國に送還されても、彼は日本の國に心殘りはなかつた。强いてあるといえば、昔振つた同國人の女に會えぬことくらいであつた。

彼は聲をあげて泣いた。そうしなければ胸中の空漠さは埋められなかつた泣きながら、（十四人の同志よ、何處へでも逃げてくれ、最後まで逃げてくれ）と叫んでいた。

李玄羊はやがて夜の町を、五人の警官に守られてよろめくように步いて行くのだつた。

（終）

南方いろ〳〵綸巻

色と手の引

第三話

月尾屋静史

画 玲子

窓を開け、パンツひとつになつて胸毛を風にそよがせながらポリシー（巡査）のドラが昼寝をしているときであつた。

「タベ（今日は）タベ・トアン・ドラ！」

甘つたるい女の声がしたのでハツと眼覚めたドラは、ねむたそうなヤブにらみの眼をこすつて振り向くと、役所の書記ムスキタの妻君が窓際に立つてにつこりしている。

黄色い花模様のネツカチーフに包んだ愛くるしい丸顔、しかし、笑うと眼尻と鼻のつけ根に小皺ができるので矢張り三十女らしい感じだ。

「どうしたんだね、奥さん、こんなまつ昼間に」

ドラは、ランニングシヤツを着ながら表を開けた。

「じつは大変なのよドラ、純金の瑪瑙の指輪をなくしちまつたのよ」

「へえ？——」

ドラは、ヤブにらみの眼玉を剝いた

頭がかつしりして男性的でなかなかいい男だ。

「で、いつ、それが分つたんで――」

「それが、今朝なのよ、昨夜、たしかにはめていたはずなのに――」

「昨夜、誰かきたことはないんですかい？」

「それが全然ないの――あれは、うちのひとがくれた婚約指輪なのに、ねえ探してよ、もし、みつけてくれれば、たんまりお礼するわよ」

「まあ、そんなことはどうでもいいがしかし、奥さんいつみても別嬪だね」

「まあ、ほほほ、おじようずだこと」

妻君は、色つぽくドラをにらんだ。すると、ドラが、いきなり、妻君の手をとつて、ぐつとひき寄せた。

ふたりは、ムスキタの留守中、ちよい〳〵取つ組み合いをやるほどいい仲なのである。

ところがである。

五日ほどしてから、また、鼈甲細工師のハシムという若い男がやつてきて指輪を盗まれたから探してくれと頼みにきた。

どんな指輪だと聞くと、純金の瑪瑙の指輪だという。変だと思つて、どこで手に入れたというと、死んだお袋の片身で、自分の只一つの財産だから是非探してほしいと眞剣な顔でいう。まんざら嘘でもなさそうなのだ。

「ぢや、いつなくなつたんだ」

「昨夜でございます、たしか、夕方、ヤンデー（水浴）をしたときにあつたんですが、今朝、ふと気がつくと悪魔にさらわれたみたいになくなつてるんです。それに、昨夜は、わたしひとりきりで寝ていたんですが――」

どうも、同一犯人らしい。しかし、それからいくら聞き訊しても捜査の手掛りになるようなことは、ひとつも摑めなかつた。

「よし、なんとか探し出してやろう、しかしだ、いまいつたことに、ちよつびりでも嘘が混つていたら牢屋へぶちこむぞ！　いいか」

「へへえ」

「ぢや、ひき受けた、安心しろ！」

そういうと、ハシムは、嬉しそうにペコペコ頭を下げて帰つていつた。

眼鼻だちの整つた、小柄のおとなしい男なので、ドラは、疑う気になれなかつたが、どうもハシムは色男なのでよく女共が押しかけるという噂があるから、ひよつとして、その辺が臭いんぢやないかと思い、明る日から、そういつた女共を探つてみたが、それでもかいもく、手掛りは得られなかつた。

今日も、ドラは、無駄足を踏まされて、珊瑚礁の白いチカチカした道をガニ股で歩いていると、ちようど、ムスキタの家の前にさしかかつた。

この二週間ほど、ムスキタが泊りがけで近くの島へ遊びに行かないものだから、トンと妻君の肌に接する機会がない。せめて顔でもと妻君の部屋の窓辺をみつめながら、ゆつくり歩いていると、白ペンキに赤いふちどりをした表戸が開いてバブ（女中）が出てきた

「あらー　トアン・ドラ、どちらへ」

ピンクのバジユ（上衣）に包まれたくりくりした肉体が、いかにも十六のお生娘らしく、お月様のようにまんまるい顔に、ちよこんと納まつた團子鼻や細い眼が小豚のように愛くるしい。

「ふふふ、散歩だよ、おめえこそどこへ行くんだ」

このバブをみると、ドラはいつも氣が晴れるのである。

「ちよつと、奥様のお使いで、パイナツプルを買いにゆくのよお」

そういつて、バブは、ドラに近づいてくると、いたづらつぽく片眼を閉ぢて声をひそめ

「オクサマ、コンヤモ、ダメヨ」

「こいつ！」

そういつて、ドラは、バブの、ソーセージのような手をぎゆつと握つて振り廻した。

「アレ！　いたいよお、トアン」

バブは、摑まれた手をもぎ離して、さすりながら丸つこい掌を握りしめて殴る眞似をした。

と、ドラが、突然眼の色を変えて叫んだ。

「ややツ！　そ、その指輪は？」

素早やく、振り上げているバブの手をひつ摑むと、指輪をひき抜いて

「た、たれのだ！　おまえのか！」

バブは、驚いて、眼をパチクリやつたが、急に、恥かしそうに、猪首を曲げて、ケケケと笑い

「いいぢやないの、そんなことお」

酒樽のような胴をくねくねさせた。

「バブ、おめえ、まさか、盗つたんぢやねえだろうな」

「まあ、なにをいうのよこのひとは」

「ぢや、どうして手に入れたかそれをいえ」

「言わねえな、よし！　そんなら、しよつびいてゆくが、いいな！」

「いやあんよ〳〵」

「嫌なら言えー」

ドラは、遂に肩をいからし、うおツとサイレンのような声で咆哮つた。

「いわねえなあツ!!」

バブは、縮み上つた。

「いうわよ〳〵トアン――あのおー――ジョンゴス（下男）の、アリーがくれたのよお」

「よし！　分つた！」

ドラは、鉄砲玉のように家の中へ駈けこんだ。

と、バブも、大慌てに後を追つかけ

「トアーンートアン、まつてちようだいつたらよおー」

二

炊事場の前の廣場で、ジョンゴス（下男）のアリーは、長い味付パンのような顔をにやにやさせて薪を割つていた。昨夜、可愛いいバブと遂に許嫁の契りを結び、指輪まで与えてやつたことを、樂しげに想い出していたのである。

と、そこへ、ドラが血相変えて駈けこんでくる。その後から、何か悲痛な声で叫びながら、むつちりしたからだのバブが、お乳をぶたぶたさせて追つかけてくるのだ。

さては、わがチンタ（愛人）に何か重大事件が起つたに違いない。

そう思つて、アリーは、斧を投げ出して立上つた。

「トアン・ドラ！どうしたんですかい？」

「どうもこうもねえや！」

駈けつけてきたドラは、いきなりアリーの鼻先へ指輪をつきつけ

「この指輪、貴様のか！」

そこへ、バブが駈けつけて、肩であえぎながら

「アリー、トアン・ドラは、その指輪をおまえが盗んだと思つてるんだよおねえ、お母さんから貰つたんだわねえ」

「そうだよ、お袋の片身だよ、だからさあ、可愛いいおまえにやつたんだわなあ」

「やいやい！てめえのお袋つてのは、めくらのコーと挽きだつたぢやねえか縄のれんみてえな着物きやがつてよおへン、眞鍮の耳飾りひとつ持つてやがらなかつたのを、おれや、よつく知つてるんだぞ」

ドラは、がに股をふん張つて叫んだ

「でも、トアン、ほ、ほんとに貰つたんでさあ」

「ぢや、いつもらつた」

「そ、それは、死、死んだときでさあ」

「馬鹿野郎！あのときやあ、てめえまだちつぽけなガキで、素つ裸になつてよお、海岸で、やどかりと遊んでたぢやねえか」

「そ、そうか知らねえが、貰つたのはたしかでさあ」

「馬鹿こけ！この大嘘つき奴が！白狀しろ！——しねえとあらばぢや、さかさにつるして塩水ぶつかけるが、いいか！」

「そ、そりや、トアン、あんまり、ムゴイや」

「むごいもへつたくれもあるか！こい！」

ドラは、アリーのゴボウのような手を掴んでひきたてようとした。

「ひえー　か、かんべんして下つせえ！」

アリーは、弓のように折れ曲つて逃がれようとしたが、あまりに、力みかえると、腕だけ残りそうなので

「ト、トアン、申上げやす、じつは、ジョ、ジョホーラに貰つたんで」

「なに？　ジョホーラ？　あの美人の淫賣にか？」

「へえ、いつわりは申しません——あツ！　バブ、な、なんでもないんだよお」

しかし、バブは、驚きのあまりブタブタ震え、蛸のように唇をとがらし、羽根の中で風船がふくれてから、きゆうつと鳴りだす、あの笛みたいな声で

「まあ！　アリーツ、ジョホーラみたいなけがらわしいアマと——くやしいツ！」

細い眼を吊りあげ、爪をたててアリーに飛びかかつた。

で、ドラは、さつとアリーの前に立ちはだかり、怒り狂つているバブを、まともにぎゆつと抱きとめた。

「まあツ！　けがらわしいツ！」



バブは、身もだえしたが、ドラが、ヤブにらみの眼をしかめて気持よがつているので、いきなり、その眼玉に、ベツと唾のめつぶしをくれてやつた。

「うへえー　ベツベツ」

ドラは、眼をパチパチやつたり、唾を拭いた手をズボンになすりつけたりした。

「へへへ、まあいいや——おい！　アリー一緒にこいツ、ジョホーラの家へ行くんだ」

そういつてドラは、アリーの後に廻り、乱暴に小突きながら歩き出した。

三

ジョホーラは、この島随一の美人で淫賣だが女神のように優しい女であつた。

小さいときから轉々と人手に渡り、邪悪な人々に虐めぬかれた孤児の彼女としては、こういう商賣をするよりほかに生きてゆく道がなかつた。

彼女は、海岸の椰子林の蔭にポツンと建つている赤屋根の、扉や窓に綺麗な色彩のほどこした家に住んでいた。

ジョホーラに惚れているあらゆる職業の男達が寄つて建ててやつたものである。

ドラとアリーは、海岸傳いにやつてくると、コソ泥のように、ぬうつと入口へ首を突込み、応接間の豪華な調度品をきよろ〳〵見廻してから、ゴク叮嚀な言葉で

「ノーナ（娘さん）ノーナ」

と声をかけた。

「どなた？」

奥の方から、ジョホーラの甘つたるい声がした。
「俺だよ、ポリシーのドラ」
「あら、トアン、お這入りなさいな」
「いいのかい？　へへへ、貧乏人はこんな家は這入りにくくつてな」
静かに扉を開けて、一歩部屋に這入つた。と、ドラが、突然、眼を丸くして立止つた。
ジョホーラは蚤寝をしていたらしくピンクのサロンひとつきりで寝台に横たわり、大きな　ふわふわした枕に肘をついて、ピョンと飛び出たお乳も露わな上半身をくねらせてなまめかしく笑つている。
「こりや、たまらねえ」
「ほほは、いいぢやないの、トアーンおかけなさいな」
ジョホーラは、透き通るような白のバジュ（上衣）をとつて、琥珀の裸身にまとうと、寝台からふわりと降り立つた。
「アリー、おめえも這入れよ」
「はい、トアン」
アリーが、恐る〳〵長たらしい顔で這入つてきた。
「まあ〳〵、アリーもきてくれたの、さあ、おかけ」
「おつと、ジョホーラ、じつは、ちよつと聞きてえことがあつてやつてきただけなんだ」
「まあ、聞きたいつて、どんなことなの？」
ジョホーラは仕方なしに椅子にかけた。
「じつは、これだがな」



ドラは、指輪を出してみせた。
「あら、この指輪はアリーにやつたんぢやないの、アリーは、あたしとおなじみなし兒ぢやないの、弟だと思つてんのよ、だから、トアンムスキタの家のバブと結婚したいつていうから、この指輪をあげたのよ、ね、アリー」
「うん、それなのに、トアンドラは、俺が盗んだと思つて――」
アリーは、悲しそうな眼でジョホーラをみつめながらいつた。
「そうかい、そりや悪かつたなあ、しかし、ジョホーラー、その指輪、どこで手に入れた？」
「――」
ジョホーラは何故か返事をしない。そして、急に寂しそうにうなだれると指先で純金の腕輪をいぢくつた。
「どうした？――ジョホーラ、いえねえのか？」
「しらないツー」
突然、ジョホーラは唇を噛みしめてプイと横を向いた。
どうしたのか、涙をこらえているらしく、柔い肩が波うつて、耳飾りがかすかにふるえている。
ドラも、アリーも、一瞬息をのんだ。
こんな、つきつめたジョホーラの顔は今までみたことがなかつたのである。
「おい、どうしたんだ、ジョホーラ、まさか、おめが盗むとは思われないがなあ、いつてくれ、誰から貰つたかを――」
すると、ジョホーラの美しい睫毛にチカツと涙が光つた。
「トアン、あたし、あたし、ハシムのを盗んぢやつたの」
「な、なんだ！？」
と、ジョホーラが、美しい顔を悲痛に歪めたと思つたら、突然、両手で顔を掩つて泣き崩れた。
ドラは、呆然とした。
「ふうむ――これは、ハシムのかな？この間盗まれたといつてきたが――しかし指輪ぐらいくさるほど持つているジョホーラが盗むつてのが分らねえ」
ドラは、腕組みして首をひねつた。
「よし！　ハシムに聞いてみりや分るだろう」
そうつぶやいてドラは、
「ジョホーラ、邪魔したな」
立上つて出てゆこうとすると、ジョホーラが、涙で白粉の剝げた顔をあげて叫んだ
「トアン！　どこへゆくの？」
「ハシムの家だ」
「駄目ツ、いつちや駄目、ね、お願いここへ呼んできてくれ」
「はい、トアン」
ひと廻りしても半時間とかからない島だから、アリーは、すぐに鼈甲細工師のハシムを連れてひきかえしてきた

「ハシム、這入れ」
ドラがいつたので、アリーのうしろでもぢ〳〵していたハシムは、仕方なしに秀でた眉をしかめながら、のつそり這入つてきた。
と、ジョホーラの美しい顔が、ポーツと赧くなつたのである。
「ハシム、そこへかけろ」
「はい、トアン」
ハシムが、憂鬱な顔をして掛けると急にジョホーラが立上つて、大慌てに顔をかくして化粧室へ逃げこんだ。
「おお！　ジョホーラ」
ドラは立上つて呼びとめた。が、ふと、何かに思い当つた風に
「ふふ、惚れてやがるな」
つぶやいて、また、椅子にかけた。
「ハシム、おめえの指輪つてのは、これか？」
ハシムは、覗きこんで
「あツ！　こ、これです、ど、どこにありました？」
「ジョホーラが盗んだといつてるんだが」
「へえ？——妙だなあ、トアン、じつは、この指輪、ジョホーラにやろうと思つていたんですぜ」
「ど、どうしてだ」
「こうなんです、まあ聞いて下さい、たしか、一週間ほどまえでした。仕立屋のエカンのおかみさんが、夜中、わたしんとこへやつてきて、いうことを聞いてくれつてせがむんです。いやだというと、指輪をやるからと、それを差し出すんです。で、わたしは、ちよう ど金につまつていましたから、つい承諾しましたんで。」
「ふうむ、ちや、この指輪はエカンの女房のか？　てへツ、ややこしくなつてきたて——」
「しかし、どうしてジョホーラの手に入つたんでしよう？　ひよつとするとアラ！のおひき合わせかな？」
「そうかも知れねえよ、ハシムそれにおめえは分らねえだろうが、ジョホーラは、おめえに惚れてるらしいぞ」
「ええツ？　そ、そんな馬鹿な」
ドラは、愉快そうに、カラカラと笑つた。
「おおいツ！　ジョホーラ、おめえのチンタ（愛人）がきているのにどうしてるんだよ」
すると、化粧室のドアがさつと開かれて、眼のさめるようなグリーンのドレスに着替えて花かんざしをさしたジョホーラが上氣した顔で、キツと唇を噛みしめ、狂つた女神のように駈けてくると
「ハシム！　ハシム！」
叫びながら、ガバ、とハシムの首つ玉にかぢりついた。息をはづませて
「あたしは、あの女が帰えるところをみて、腹だちまぎれに、おまえの指輪を盗んだんだよ、きつと、あの女に貰つたと思つて、カンニして、ハシム、もう、誰にも、渡さない、あたしの、可愛いいハシム、うわあん」
泣き叫びながらジョホーラは、ハシムの唇や、頬つぺたや、頸筋に、荒つぽい涙と接吻の雨を降らせた。
で、顔一面、涙でこすり廻されたにハシムは、すつかりのぼせ上つて、涙にぬれた眼をパチパチやつていた。
「やれやれ、こりやたまらんて——アリー、退散だ、おめえも早やくかえつてバブにくつついてこい」
ボンとアリーの肩を叩いてドラは、早や、ガニ股で、肩をいからせながらのつしのつしと砂浜を踏みしめて去つていつた。

四

女好きと、なまけ者で有名な仕立屋のエカンが、今日は珍らしく、切り屑だらけになりながら忙しそうに手ミシンを使つていた。
傍で、三月まえ、やつさもつさで貰つた妻君が、ボタンつけをしながら、めそめそ泣いている。どうも、いつもの大乱闘が納まつた直後らしい。
「チェツ、くそいまいましい、一日や二日家を開けたつてどうだつてんだ」
至つて氣はいいんだが、むかつ腹たてのエカンは、まだプリプリしている
「よおう、エカン、精が出るなあ」
ポリシーのドラがやつてきた。
「いよおう！　トアン・ドラ！　これはノ〳〵どうしていたんです？　さあ



〈上つてくんねえ」
もう、仕立物をおつぽり出して立上り、セカセカと椅子をすすめる。
「エカン！　やめろツ」
ドラが叫んで、エカンの腕をむんづと摑まえた。
「いや、そうしてはいられねえんだ」
そういつて、ドラは、這入つてくると、土間を突つ切つて妻君の傍へゆき
「奥さん、今日は」
「おめえの怒るのは尤もだ、しかし、おめえだつて、まんざら夜這いを知らねえ男でもねえだろう」
金もないのに、また、エカンにコーヒでもいいつけられると思つた妻君は返事もしないで泣面を伏せた。
「な、なにをいうんだ、トアン、このが、ドラは、屈みこんで、指輪を眼カンカラカンの堅助をつかまえて」
の前に突きつけ
「そうか、しかし、この指輪、どうして手に入れた」
「おめえさんのだろう？」
「お袋の片身でさあ」
妻君は、泣きはらした眼で、チラツ「な、なに？　てめえにお袋があつたのか？」
とみたが、あツと口を開いて、手にした仕立物をポロリと落した。
「馬、馬鹿にしなさんな、カンビン（山羊）から出たんぢやあるめえし」
「ややツ？!!　トアンドラ！ど、どこにあつたんです？　ちよ、ちよつとみせて下つせえ」
そのとき、妻君が喚いた。
エカンは、蛙のように飛び出た眼玉「トアン！　この宿六の大嘘つき奴はをかあつと開けて覗きこんだ。
なにをいうか知れないんですよ！　どうせ、どつかのあばずれからふんだくつてきたに決つてますのよ！　ちくしようツ」
と、たちまち眼の色を変え
エカンが腰骨をたたいて口惜しがつた。
「た、たしかにこれだツ、ト、トアンこりや、あつしが、婦にやつた指輪なんですぜ、ちくしよう！　いま、このことで大喧嘩をおつぱじめやしたんでね、どこのヘナチョコ野郎が持つてやがつたんです？」
「こ、この野郎ツ」
「ハシムだ、鼈甲細工師の、しかし、こりや、おめえのか」
しかし、エカンは、ドラに腕をとられているので、妻君は、日頃の鬱憤を晴らすのはこの時とばかりに機関銃のようにまくしたてた。
「そ、そうですよ――チエツ、このアマ！　どうでえ、俺がいつた通りちやねえか、どうもハシムの野郎とチョネチョネしてやがると思つたら俺の大事な指輪までやりさらして、コラツ！」
「トアンドラ！　この宿六奴は、あたエカンは、大きな鉄をひつつかんでしというものがありながら、毎晩々々酒をくらつてあたしに腰巻ひとつ買つてくれないくせに、ろくでもないあばずれを追つかけ廻したり、夜這いの手びきをしたり、あたしが、ちよつとでも口答えすりや打つ蹴る殴る、よくもいままで呼吸がしていられたと自分でも不思議なんですよ、だからあたしだつてたまにやいい男のひとりぐらいこしらえたつてあたりまえでしよう、ねえ、トアン」
ドラは犬も喰わねえ夫婦喧嘩の相手もしてられないので早く切り上げようと
「エカン、ほんとのことをいいねえ」
と、ヤブにらみに物をいわせて、じわりとおどしをかけた。
「へへえ、トアン、ぢや、申上げやすがね、ちよ、ちよつと」
そういつて、エカンは、キョロ〳〵と妻君をみてから、ドラの耳元へ尖つた唇をもつてゆき
「じつはね、トアン、その指輪、ムスキタの家の、バブがはめてたんですよへへへ、悪気はなかつたんですが、つい、盗んぢやつたんで」
「な、なにツ？　嘘つぱちもいい加減にしろツ」
「トアン！　正眞正銘、ホントのマコトですぜ、しかし、ここちや、婦がいるから具合いが悪いんで、ね、出ましよう、どうせバブのところへゆかないとケリがつきやせんから」
「ちよ、ちよつと待て、バブだとすると、ええ――と、元にかえつちまつたぢやねえか、てへツ、ますますややこしくなつてきやがつたんで――」
ドラは、ヤブにらみをしかめて首をひねつた。
妻君は、全身、これ耳にして、立つたり座つたり、首を家鴨のように伸ばしたり縮めたり。
「おい、ちよつと出かけるぜ」
形勢不利とみたエカンは早口にそういつてドラをせきたて、アタフタと表へ出た。

五

支那店のあるゴタゴタした通りを抜けて学校の前の白つぽい道路に出るとエカンが早速喋り出した。
「チエツ、トアン、こういうことになつたのはもとはといえば、あの、ムスキタのせいなんですぜ」
ドラは、頭がもやもやしているので歩きながらトントンおでこを叩いていたが
「それがどうしたつてんだ」
うるさそうにいつた。
「まあ聞いて下せえよトアン、かんじんかなめつて話ですから、ね、ムスキタの野郎、あんなドテシャンの妻君がありながら、どこがいいのか、小豚みてえなチンチクリンのバブに惚れやがつたんですぜ、へへ、馬鹿な野郎で」
「なに？　ムスキタが？　ふうむ、それから？」
ドラは、頭にちよつとした穴ができて、もやもやしたものがシュウと出てゆくような気がした。
「ところが、バブの野郎、おつそろしく堅いんできあ、で、ムスキタが、なんとかしてくれつて俺に頼みやがつたんで――しかし、あつしだつて只ぢやかないやせんから、もし承知させたらご相伴にあづかりてえといつたんできたねえ野郎だなあ」

「へへえ、で、あつしや、それからというもの毎日々々バブのくりくりしたお尻を追つかけ廻して、やつとこさ承諾させたんでがすへへへ、フフフ」

「馬鹿野郎！　はやくいえ！」

「へえ、で、いよいよ、その夜でござんす、あつしがまだか〳〵としびりを切らして待ちかまえていやすと、ムスキタの野郎、バブのところから、ふらふらつと出てきたんでさあ」

「ど、どうだつた？」

とあつしが聞くと

「うむ——ええ、湯加減ぢやつた」

「青息吐息でこうぬかすんで、あつしや、もう、ほくほくして吹つ飛んでゆきやした。そうして歸りしなに、何か掻つ拂つてやれと、暗がりを手さぐりでバブの指輪を、こつそり抜きとつてやつたんでがす、へえ」

そういつてエカンは、飛び出た眼玉をギラつかせてにたあと笑つた。

「なんて野郎だ、てめえは、しかし、よく白狀した——おつと、もうきたぢやねえか、バブの野郎、思いつきりとつちめてやらなくちやなんねえ」

ドラは、腕をさすつてムスキタの家へ這入つていつた。

「おう、ごめんよお」

「ドナタアー」

甘つたれたバブの声がして、青ペンキ塗りの柱の陰から、小豚のような顔が、にゆつと現れた。

「あれツ、エカン」

蛸のような唇を開けて叫んだと思うと、くるりとお尻をみせて逃げ去ろうとした。

と、ドラが、猛然と襲いかかつて、いきなりバブのサロンをひつつかんだ。

「あれえツ」

バブは、くりくりしたお尻を丸出しにしてひつくりかえつた。

「この大泥棒奴ツ」

ドラは、乱暴にバブを引き起こして叱鳴りつけた。

「まあ、どうしたのよ」

そこへ、妻君が、何事が起つたのかという顔をし大慌てにやつてきた。

「あつ、奥さんとうとう指輪泥棒を摑まえやしたぜ、この、バブでさあ、ほら、みて下せえ、この指輪を」

ドラは、得意になつて指輪を差し出した。

「あら！　ほんと、これだわ、まあ、よくみつかつたわね、でも、バブが盜つたつて？　この氣立てのいいバブが——」

妻君は、眼をみはつて、子供のように泣きじやくつているバブの丸い肩をみつめた。

「あつしも、最初は、そう思つて、うまくたぶらかされやしたが、もうその手にや乘りませんや、エカンというりツパな証人がいやすからね」

「へへへ、奥さん、コンニチハ」

エカンは愛想笑いをして、河鹿みたいな細腰をへし折つておじぎをした。

「まあ、こんな狐馬にのせたようなエカンが、どうして証人なのよお」

妻君は、不服らしい顔でドラにつめよつた。で、ドラは、いきさつをすつかり話した。

すると、妻君が、切れ長の眼をくるくるさせて、バシバシ膝を叩き

「あんれ、まあ、バブや、どうしましよう、おまえのかわりに、ほら、あのことよ」

そういつて、苦しそうに笑いころげた。

「奥さん、わ、わけを話してくんねえど、どうしたんだ？」

ドラは、腹痛患者みたいな顔をしていつた。

「ほほほ——じつはね、ドラ、バブの身代りになつてやつたのよ、あんまりムスキタがバブを追つかけ廻すから、でも、エカンがきたのは知らなかつたわ、ほほほ、そういえばちよつとおかしいと思つたわ、ムスキタならいつもドボンをつかつたら、ろくに洗いもしないであがつてしまうのに、ほほほ、知らなかつたわ」

ドラは、くしや〳〵と顔をしかめて叫んだ。

「ちよ、ちよつと、まだ、なんだか、分つたような、分らないような、ああツ、また、頭がもやもやしてきた、もうすこしはつきりいつてくんねえ、頼む」

ドラは、両手で頭を抱えた。

「ぢや、バブ、いつておやり、疑われちや馬鹿らしいから」

「はい、奥様」

バブは、泣きはらした顔をしかめ

「でも、ひどいわ、トアン・ドラ、知らんもんの半分も知らないくせに、あたいを盜人だなんていつて、押し倒して——」

「バブ、悪かつた、謝る、なあ、いつてくれ、頼む、俺や、もう、なんだか頭が変になつてきたよ」

ドラは、ヤブにらみをしよぼつかせし哀願した。

「ぢや、いつたげるわ」

バブは、もう気嫌を直して、雀のような声で話し出した。

「あたいが、こちらへ寄せていただいてからというもの、旦那様つたら、いうことを聞いてくれとばつかし——でも、あたい、イケスカないからピンピンはねつけてやつたわ、すると、このど助平のエカン奴が、旦那様に頼まれて、毎日々々やつてきて、ひつこいつたらおちようずにゆく間もないほどべたべたくつついてきて、旦那様に従えといいさらすのよお、だから、あたいとうとう奥様に打ち開けちやつたの、そしたらご親切な奥様は、バブや、あたしや、おまえをジョンゴスのアリーとめあわしてあげようと思つているのだが傷物になるまえに知らせてくれてよかつたわねえ、これも、おまえの、石より固いこころのおかげだよ、でもどうすればいいだろうね。そういつて奥様は、お鼻のつけ根に、可愛いいお皺をおよせになつていらつしやつたけど、突然、両手で、パンとお腰をおたたきになつて、おお、そうそう、バブや、いい考えが浮かんだわよ、あの、ど助平のエカンにこういつておやり、そんなにあたいのお風呂がお気に召したのなら、ようございます、今夜十時辺ぎでしたらお待ちしておりますと傳えておくれつて——そして、おまえはジョゴス（下男）のところでおやすみ

あたいが許してやるからね、そして、その夜は、あたいのところで奥様がおやすみになつて下さつたのよお」

「うへえツ、すると、あの夜の――てへツ、指輪も――」

エカンが眼を白黒して恐れ入つた。

「そうだつたか、これで、すつかりもやもやがとれた――すると、エカンが犯人だ」

そういつて、ドラは、始めて呼吸を吹きかえしたような顔をした。

そして、キツとエカンを睨みつけて

「この大泥棒奴ツ!! 色事を手引をするだけならまだしも、奥様の、おからだまで、あまつさえ指輪まで盗むとはこの野郎! 三年の懲役だ!」

「おつと、トアン、そりやムゴイ、あつしや、なにも知らずにやつたんですぜ、そもそも、こうなつたというのはあのムスキタのためでがしよう、あいつさえ俺に頼まんけりやこんないざこざは起こりつこねえんですからなあ」

「しかし、指輪を盗んだ罪は消えねえぞ!」

すると、妻君がいつた。

「ドラ、許しておやり、第一ムスキタが悪いんだから、いづれ、うんと仕返ししてやるけど（妻君は、そういつて、意味ありげな流し眼で、ドラをみた）それに、こんな指輪もういらないバブにあげる」

「あらあ、奥様、有難うございます」

バブは、膝まづいてにたにたしながら、王冠でもいただくみたいに手を差し伸べた。

と、隣りの部屋から物凄い足音がして太つちよの狸みたいな顔をした、ムスキタが憤然と現れ、ヤタラに腕を振り廻しながら

「ヤイヤイツ、エカン! よくも俺の女房を寝とりやがつたなあツ、コナゴナにして、火吹き竹で吹いてやろうかツ!!」

つまり、ここで、一番馬鹿をみたのは、いざこざの張本人ムスキタ大人であつた。

バブを見事に射落したと思つていたところが、隣りの部屋で様子を聞いているとはつ知りぬいて、股ぐらのホクロまで知りぬいているはずの自分の妻君だつたのであり、おまけに、頼みこんでわざわざエカンの盗まれてしまつたわけだつた。

――（終り）――

本牧夜話

色道女鑑

「ハマもすつかり變つたもんサねえ」

と仇つぽく微笑むは、本牧のキヨホテルでその昔、盛名を謳われた一代女のお春女史、もう三十の坂はとつくに過ぎてる筈なのにニユールツクの着こなしも板について唇が眞紅に彩られているのを見ると、どう見ても二十代の女としか見えない。

「なにしろ、伊勢崎の裏の原つぱで、トウシロ娘人だけしか相手にしないが平つちやらで客をとる高級のあれだろう?」

「ほゝお、そりやお仕合せでお芽出とう。だが貴女が見ても、やつぱり近代に誤解しないでね」

「あれつて……失礼よ。オンリーワンは、つまりオンリーワンつて、一光輝あるセコンド奥さんよ。昔のお馴染さんが、また此方へ來てねわたしいまその人と暮してるのんなに目に余る程ヒドいんですか」

「ふふふ……勇敢すぎるわよ。私なんか田舎娘でね。ヨコハマのホテルへ給仕女に行くというので黒い制服に白ナプキンをつちやつてね終戦前にはいつはし名前が通るようになつたのサ……」

「男をとる時に、天井の節穴を見て居れ、木の目を算えておれば、一日に何人とつても疲れないつて事、本當かい」

「ほんとうよ。わたしなんか、今でこそ、身体がいうことをきかないけどこれでも四五年前當時なら一日にこの身体で二三十人もの男の御相手してたわよ。今のスケみたいにスキ心を出してたら、一晩に七八人で、身体がいうことを、きかなくなつちやつていたね……」

半年、一年と經つ中に、だん〳〵女慶胸もついちやつてね終戦前にはいつはし名前が通るようになつたのサ……」

「男をとる時に、天井の節穴を見て居れ、木の目を算えておれば、一日に何人とつても疲れないつて事、本當かい」

「ほんとうよ。わたしなんか、今でこそ、身体がいうことをきかないけどこれでも四五年前當時なら一日にこの身体で二三十人もの男の御相手してたわよ。今のスケみたいにスキ心を出してたら、一晩に七八人で、身体がいうことを、きかなくなつちやつていたね……」

「ところで姐さんは、いま何にしてるんだい」

「わたし? いやだよ。女の生きる道なんてきまつてるじやないか但しおかげさまでオンリーワンよ」

「オンリーワンつて、一番初めのハマの姉さんは、そんなに目に余る程ヒドいんですか」

「ふふふ……勇敢すぎるわよ。私なんか田舎娘でね。ヨコハマのホテルへ給仕女に行くというので黒い制服に白ナプキンをつちやつてね終戦前にはいつはし名前が通るようになつたのサ……」

「男をとる時に、天井の節穴を見て居れ、木の目を算えておれば、一日に何人とつても疲れないつて事、本當かい」

「ほんとうよ。わたしなんか、今でこそ、身体がいうことをきかないけどこれでも四五年前當時なら一日にこの身体で二三十人もの男の御相手してたわよ。今のスケみたいにスキ心を出してたら、一晩に七八人で、身体がいうことを、きかなくなつちやつていたね……」



現代艶笑狂演譜

五百圓の價値

星夢二作



夫のへそくり

社の帰りに酔つぱらつて行つたパン宿の女が忘れられなかつた。女はの妻君の持たないテニックを数多く持つていたからだつた。

そこで彼はもう一度あの女のところへ行つてみたいとそればかり考えていたのである。

しかし給料袋のまゝ妻君に渡す習慣になつている彼は五百円の金さえ捻出することが出來なかつた。そこで毎月の煙草代の中から少しづゝ節約して、本の頁の間にはさんでかくしておいた三ケ月の後、彼は遂に五百円の金を溜めることが出來た。

そこで土曜日の晩、いよ〳〵探險と思つて本を取り出してみると、はて不思議、虎の子よりも尚大切な五百円が紛失してしまつているのである。

彼はすつかり悲觀した。勿論細君が掃除の際發見してとつた事は明らかだが、後暗い金であるからして、聞き糺す訳にはいかないのであつた。

彼は又引續いて三ケ月煙草を節約しなければならないのだ。

さて彼の細君、御亭主の臍くりを発見していさゝか憤慨したが、どうせ見つけたからには、私のものだとゆう気持になつた。美しい帶や着物とまではゆかなくとも、百貨店の食堂の誘惑が彼女を待つていた。

癪だから、夫が出社してから、三越へでも行つて、美味しいものでも食べてこよう、（おゝそれはなんといい復讐だろう）

細君はいろ〳〵とかくし処を考えた果、その百円札五枚を夫に奪い返えされぬようにと新聞紙に包んで、下駄箱の隅にかくしたのだ。

こうしておけば紙屑としか思えぬだろう。

さて三日の後、彼女は街へ出ようと思つて盛裝をこらして下駄を出し、さて、大切の五百円を探すと、あら〳〵、不思議や、何時の間にかその金は消えてしまつているのだ

彼女は、なかば泣き出しそうになつて、隅から隅まで探したのだが、影も形もあらばこそ……。

遂に大枚五百円は行方不明細君とても、後暗い金、誰に聞くわけにも、ゆかなかつた。

細君の弟で、新制大学に通つている学生がアルバイトをしながら居候をしていた。

彼は、ふと下駄箱に五百円の大金を見つけて、欣々然として街の女の所へとんで行つたのである。勿論その金は、捜索さるべき性質の金でないことを、彼はよく承知していたのであつたから。——

——金とゆうやつは、やつぱり女のために使わるべきものらしいですね——。

遊閑令嬢行狀記

夕刊大阪新聞に次の三行廣告を依頼すると直ぐその足でミナミのホテルに行つて部屋を申込んできた。

求緣 女流画家廿才容姿優美、資有年輩後援者望ム明日午後四時來談願う 難波駅前、蓬南ホテル内、ルミ子

その日の二時頃、彼女はけばけばしい派手な着物を好色的に着こなしてホテルへ出かけて行つた。

どうせ避暑にもゆけない憂鬱を毒草園のような都会の中でふつとばそうとゆう気まぐれな遊びである。なるたけ芝居じみている方が面白い。

彼女は不貞くされた図々しさで、部屋に案内されて行つた。

終戰後、簇立したホテル、旅館の群、それはゆうまでもなく桃色ホテルなのだ。女のいない料理屋に、過ぎないのだ。

彼女が四時を待つ間に、未亡人らしいのと学生、女給と會社員、女中と職人、等と、そういつた数々のアベックが頻繁に出入りするのを見せつけられた。

四時を廻つた頃。商店の旦那風、にやけた好色紳士等、





大枚五枚の唇

吉木が、いつものように夜の河岸を散歩していました。すると、岩蔭から突然彼の前へひらつと飛び出した者がいました。はつとした彼が驚いて身構えると

「おほゝゝゝ、そんなに驚かなくてもいゝのよ」

と言つて吉木の側へ寄つてきました。夜目にも美しい娘なので彼は思わずニヤリとしました。

そして若い二人が、肩を並べて歩き出したのは当然ですところが、その若い女が突然予期しないことを言い出したのです。

「あなた。切符を買つて下さらない？」

「切符つて、何のですか——音楽会のですか」

「まあ嫌だ、そんな野暮なものじやないわ——、これは、肉体のテイケツトよ」

「ええ？肉体の……」

「そう、一枚五十円よ、一枚いかが」

「しかし、いつたい、そ、それは誰に通用するんですか」

すると、女は黙つて自分の唇を指さしました。……

さて、この翌夜、これを聞いた吉木の悪友四人が隊伍を組んで押しかけて行つたのです。来てみると、その岩蔭には、ゆうべの女が立つて煙草をふかしていました。

「おい、あれだな」

一人が、吉木の肩をそつと押しました。

「うん、あの人だよ」

「美人だなあ」

皆が感心しているすきを見て、一人がいきなり駈け寄ろうとしました。

「おいこすいぞ」

「僕が先だよ」

時ならぬ先陣争いが起りました。すると佇んでいた間題の女はそれを認めるが早いか

「來たわよ——」

と俄然大きな叫び声をあげたんです。まさか、そんな大きな声を出すことは思いも寄らなかつた皆が、虚をつかれて、ぽかんとしていると、どや〳〵と足音がして、怪しげな風態の男が、六七人駈けつけて來ました。

言わずと知れた土地のヨタ者です。暫くして皆の財布が空になつていました。

「どうもありがとう」

女は巻き上げた財布を手にすると、ゆう然と立ち去りました。

「悪く思うなよ」手下の連中が、頸をしやくつて、こう言いました。皆が呆然としてそこにいつ迄も立ちつくしましたが。やがて気がついたように

「驚いたなア、僕はそんな計画があるとは思わなかつた……」

「キスと言うのは餌だよ」

「損害はいくらだい。皆小使しか持つて來なかつたからよかつたねえ」

「總計四百九十八円……」

「おい、ちよつと待つて、僕は金の外に葉書を一枚持つて行かれたよ」

「何に？葉書——じやあ、〆めて大枚五百円也か」（終）

得体の知れない求縁者が五人ほど押しかけて來たが、「もう約束が出來ましたから」と断つてしまつた。

最後に現れたチヨボ髭を生した小肥りの五十位の男に彼女は堪らなく好感が持てゝしまつた。頭が半分光りかゝつていたが、洋服だつて小ざつぱりとして「パパ」と呼ぶにふさわしかつた。

差し出した名刻には、「金山商事株式会社取締役社長金山好三」とある。

「後援とゆうとどれ位必要じやな？」

貧しい女流畫家の内幕を話すと、金山氏はにじり寄つてきた。

「毎月八千円もあれば十分でございます」

「それだけであんたの活殺権をワシが握れるのじやな」

「ホ、、、、」

「そう何も恥しがる必要はない。万事は取引じやて。さあ、何処かへ行つて前祝いとしよう——。」

彼女は罪のないパパと連れ立つてホテルを出ると、心斎橋へ來た。大きいところを見せようとしているらしい彼は心斎橋で紀念としてダイヤの指輪を買つてくれるとゆうのだ。

それから久しく行かなかつた光風亭で、三千五百円の支那料理にいじきたなくパクついた。

少し飲んだ老酒がトテモ朗らかにきいちやつたので、直ぐホテル行きを希望しているパパを無理に引つぱつて、フロリダでじやん〳〵踊つてしまつた。

ホテルへ走る車の中で

「ねえ、パパ、頭が痛いの」

「寢れば快くなるよ」

ホテルへ着くと彼女は化粧室へ飛び込んだ。部屋へ戻るとパパは、にや〳〵しながら上着を脱いでいた。彼女はパパの首へ腕を巻いて

「今夜、わ、た、し、メンスなの」

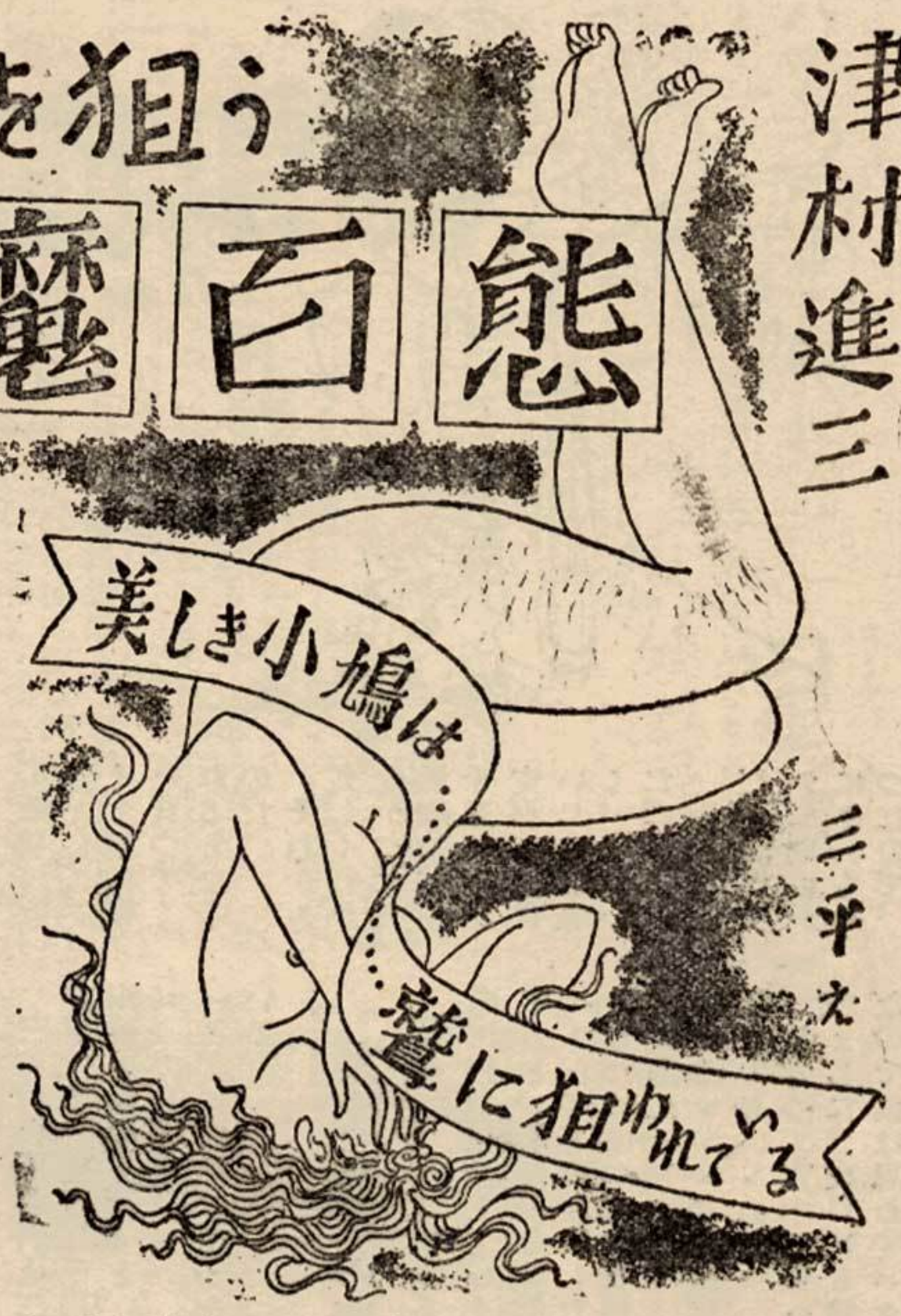
一週間後の再会を約してホテルを出た。

三百円の廣告料と二百円の部屋代で、壹万五千円もする指輪と晩餐と踊りとで、一寸スゴイでしよう。

彼女は次のプランを樹てゝいる。

女性の肉体を狙う 誘惑魔 白態

津村進三



一、職業婦人を釣る廣告の裏

孝子は洋館の大邸宅を訪れていた。彼女は新聞で「婦人秘書採用」とゆう廣告を見て、履歴書を送り、今朝面談したいとゆう手紙を受取つて、早速その廣告主を訪れて來たのであつた。

先づ彼女を驚かしたのは、その堂々たる邸宅であつた。そして、そこの主人の秘書になる自分を考えると、孝子はその身なりのあまりにもみすぼらしいのが悲しかつた。

玄関に立つた彼女は、思いきつて呼鈴のボタンを押した。奥の方にそれが反響すると間もなく一人の少女が取次に出た。

「あの私お手紙を頂いて參つたものでございますが……」

「どうぞお上り下さい」

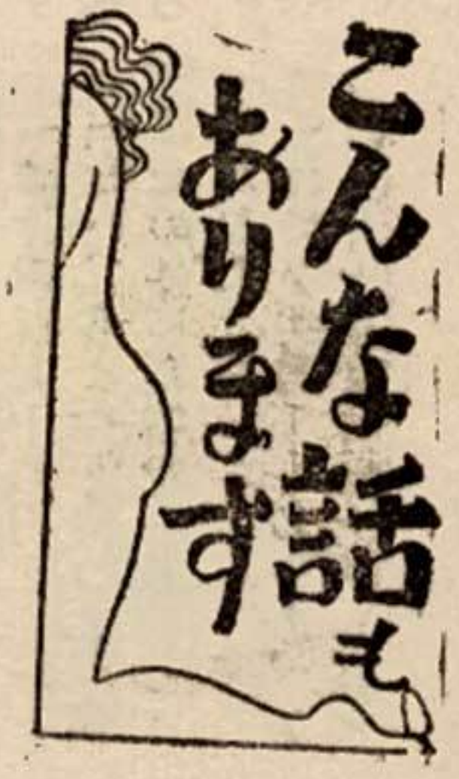
立派な応接室で暫く待つていると、今度は又別の少女が見えて、主人の室へ案内して行つた。孝子が恐る〳〵入つてゆくと、主人は打ち解けた態度で彼女を迎え入れた。

「あゝ、あなたが岩佐孝子さんでいらつしやいますか、大へんいゝ御体格ですね。私のところでは健康が何よりですから、あなたのような体格の方なら、もうそれだけで理想的です。一つお働き願うことに致しましよう」

主人は立ちどころにきめてしまつた。仕事とゆうのは書述の下調べと、往復文書の整理とゆうことで、月給は最初四千円、なるべく泊込みを歡迎するとゆうようなことを、彼女は聞かされた。

両親弟妹を混えて五人家族が狹い裏長屋の六疊一間に團子のようになつて暮していた孝子は飛び立つばかりに喜んだ。そして翌日衣類や化粧道具等一通りを小型のトランクに詰めてその邸宅に移つて行つた。

二三日はこれとゆう仕事もなく、新聞や雜誌を讀んで過した。たゞ主人の話相手をして一緒にお茶を飲んだりするのが悲しかつた。



でんすけに肉体を賭けた女

でんすけ賭博——

ピースの箱三個の中の一個に白く抉つて印をつけこれを新聞紙を貼つた石油箱の上で、賭博屋が、手練の指先で操作しつつ、竝べたピースの箱の、どの一つが背中が白いかを当てさせる賭博だ。

「白当り、青ダメ、これ白、背中白い、これ無いのみなダメ。そら白どつこい行つた。これ当る。五百円賭ける五百円渡す。千円賭ける千円渡す。私たち親分ある。金いくら出しても親分の金。私、損ない。いくら賭けても出す」

とやつている。日本人でもわざと自分の國の言葉をカタコトにしているようだ。

この賭博は全國津々浦々盛り場という盛り場には必ずこの連中が見世を張つているから、皆様も見られた事と思う。

群衆の肩を押し分けて、これを見物するのが私は好きだ。

百円札四枚をカシワに折り五枚目をその帶に逆に折り込んだ五百円包を無操作をポケツトに放り込んで、出し入れしているのを見て

ることが日課のようであつた。

「こうしているうちに、追い〳〵仕事の方がわかつて來るんだから……、あなたは何が一番お好きでしたね」

いつもそんな事を訊ねて、微笑している主人であつた。彼女はその堂々たる態度、その親切そうな様子。それよりも遊び半分らしいその仕事が何よりも嬉しかつた。

そして主人の秘書として、やがては多くの使用人の中に尊敬される自分を描いてみたりした。そうした日が一週間も続いた。この間に孝子が不思議に思つたのは、前からいた三四人の美しい少女が順に姿を消して、一週間の後には一人も残つていないとゆう事実であつた。

女專出身とゆうタイピストは四日ばかりで見えなくなつた。彼女を最初取次いだ少女もいつの間にか邸から姿を消しているらしかつた。

一週間過ぎた夜。彼女は自分にあてられた室で一人讀書に耽つていた。するとドアをノツクする音がする。この夜更けに何事かと耳をすますと、「岩佐さん」と呼んでいるのは、たしかに主人の聲であつた。

「夜更けですまないが、少し急用が出來たので、お頼みしたいんですが、もうお寢みですか」

「はい、只今、開けます」

孝子はドアを開けて主人を室へ導き入れた。主人は前に幾度もその室へ訪れているので、彼女は別に不思議とも思わなかつた。

「どんな御用でございます」

「いや、大したこともないのですが、少しお話したいと思つてね」

それから主人は話を進めて、遂に初心な彼女が顔を眞紅にするような淫らな話題を持ち出してきた。そして突然に彼女の手を捉らえて引き寄せようとした。彼女は夢中で爭つた。

髪をふり乱した彼女が跣足のまゝでこの邸を脫出したのは、怖ろしく更けた寒い冬の夜であつた。

二、スターを夢みた彼女の末路

市の女学校を卒業して、田舎の家にいる百合枝には、華やかな都への憧れが、火のように燃えていた。

こうして田舎で朽ちてゆくことが、生甲斐のないように思われる、悩ましい日がつゞいた。平凡に嫁入ることを一生の破滅であるかのように考えているので、どんな縁談にも応じようとはしなかつた。

百合枝はその日も、ぼんやりと考えながら何気なく新聞を手にとつて讀むともなしに開いていた。ふと彼女を強くひきつけた文字。——新人映画女優募集——高女卒將來スターたらんとする熱意ある方、地方出歓迎——履歴書近影急送採用諾否返事す——

彼女は幾度も〳〵その文字を讀み返えした。そして一人で自分をスター候補者にきめて考えるのだつた。……女学校は優等で出ている。身体は丈夫、音樂も文芸も自分なら……それに此の容色、このスタイル、映画のスターに……大丈夫なれるわ——。

そう思うと、百合枝はもうスターになつたような気持になるのだつた。机に向つて、ペンをとると「宮城百合枝」と書いてみた。それがもうスターの名であるかのように、思えるのだつた。

彼女はすぐに志望を述べた長い〳〵手紙に履歴書、写眞を添えて、発送した。それからの彼女は家人に怪しまれる程、そわ〳〵していた。

××プロダクションからの返事は百合枝を有頂天にさせた。彼女を理想のスター候補生として採用したい、とゆうような意味が、若い女の心を躍らせるような美しい文字で綴られてあつたそして上野驛から××プロダクションとゆう所までの案内地図までも封入されてあつた。

父母に相談すれば、一も二もなく反対されるのはわかりきつている。遂に家出を決心し、着物の用意やら、貯金を引出すやらして、秘密に準備を整えた。

彼女は近所の友達を訪ねるといつて家を出たまゝ、上野行の列車に乗つてしまつた。さすがに鄕里を離れる彼女は寂しかつた。けれどもそれは華やかなスターの夢に消されて行つた。

上野驛からリンタクに乘つて直ちに××プロダクションへと急いだ。彼女は、或る狹苦しい裏通りに、ようやくいると、如何にも金の値うちのないように思はれて面白い。

これは、私が今年の七月大阪から三十分ばかり東へ行つた郊外電車の急行停車駅の夏祭りの時だつた。

こゝの祭礼でも、やはり何軒もの「でんすけ」が出していた。その中の一軒へ、田舎から出て來た女がひゝかかつた。

三十台のおかみさん風の女だつたが、初めは金を賭けていたのだが、それをスツテン〳〵にされると、今度は自分の軀かけたんだ。その拳句が、蔭聲張りの掛茶屋の蔭で九人の男に自由にされたというんだ。

おかみさんは後でしばらくその掛茶屋の床几に休んでいたが、やツと夕方になつて、少しばかり買つていた子供の土産を持つて帰つて行つた。

これは、私が、実際に目撃したのだから、間違いない話だよ。



その看板を見出し、そのあまりに貧弱なのに軽い失望を感じたがもうどうにもならない。彼女は思い切つてその家に入つて案内をたのんだ。

「はあ、そうですか、ようこそ。何にしろまだ創業早々でね。こゝは仮事務所なんです。さあ、お上り下さい」

一人の青年に導き入れられた室、そこにはいろ〳〵ポスターや、スチールが壁一杯に貼りつけられてあつた。

「僕は此処の主任をしている月岡とゆう者です。みつちり勉強して下さい。あなたには非常な期待をかけておりますす」

彼女は改めて挨拶し、それから映画女優を志す動機や、覚悟などを問われるまゝに話した。やがて月岡は話を轉じて、彼女の宿所のことに及んだ。

「いゝえ、私別に親戚も知人もございませんのです」

「そうですか、ではと――あゝ、そう〳〵丁度この事務所に空いている室がありますよ、当分の間、こゝに泊つていられては如何です。現在、東京では家も中々見つかりませんですからね」

唯一のたよりとして、遥々上京してきたプロダクションであつた。彼女はその親切に感じて、何の疑いもなく、そこへ落ちつくことになつた。

青年は、それから虹のような気焔をあげて彼の計画や映画界の批評で、夜の更ける迄百合枝を煙に巻くような話をつゞけた。

彼女の期待する練習も、撮影も、始まらぬうちに、彼女はこの月岡とゆう青年のために処女を捧げ、いつの間にか夫婦のような関係で生活するようになつていた。

今更後悔したけれど、どうすることも出來ない。それに月岡の言葉はいつも元気で、將來の大きな計画に燃えているようであつた。百合枝は、彼を信じないわけに行かなかつた。世間とゆうもの、裏を知らない彼女は、やがてスターとして活躍する夢を、なお幻に描いているほど、男の甘言に魅せられていた。

しかし、その幻もやがて無殘に消え去る日が來た。或日外から帰つてきた月岡は、井常に悶えている様子だつた。百合枝は優しく慰めることを忘れない。男は頭を抱えて言つた。

「困つた。僕等の計画は、めちや〳〵になつてしまう。金がほしい〳〵。」

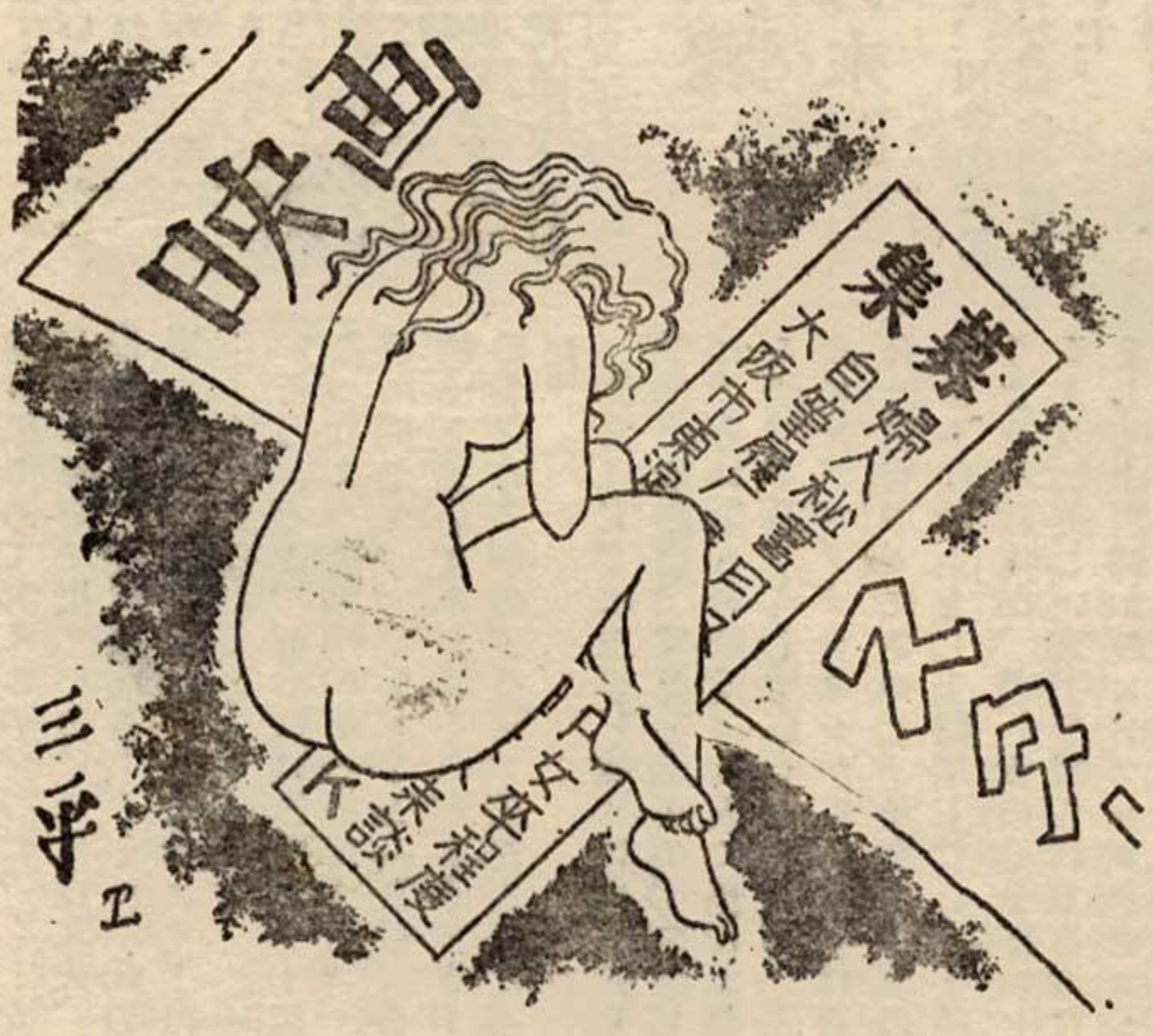
「まあ、どうなさいましたの」

「いや話しても駄目だ君に話したつて、只心配をかけるばかりだ」

「あら、私に話して下さらないの、私、どうせお力にはならないでしようけれど……」

「いや、君怒つたね」

「だつて、話して下さらないんですもの」



「あゝ、そんなら聞いて貰おう、実はこうなんだ」

彼の話す所によれば、近く撮影にかゝろうとする××プログクション第一回作品が原作者へ拂う金が間に合わぬために、撮影不能となる。そして、その撮影権は他に独占されてしまうとゆうのだつた。

「たつた五万円、その金が今夜のうちにできなければ駄目なんだ。郷里へ言つても、電報や何かでは意味がわからない。行つて來るにはもう日がない。もうあきらめた。」

「五万円、どうにかならないでしよう

女という動物は
騙されるのが好き

「妾なら、そんなの嫌いだわ。男つ振りがよくてお金がふんだんにあつて気前がいゝなんて……そんな三拍子揃つた男で女にもてた験なんてないんですものネ」

たいてい女が、一応ひそかに空想を描くところの男性を物の見事にノツク・アウトする超アプレゲールの彼女もある。

「僕は三拍子何一つとして揃つていません」

などゝ變にヤニ下つて跪づこうものなら「フン」とハイヒールでその長い鼻の下を蹴られ、まかり間違えばビンタの一つ位は擲られる。

そして、若く麗わしき女性の紅唇から「年の若い男つて頼りないのネ」と絶叫せしめられる。

何が一体頼りないのか、生理的にか、心理的にか？然るに豈計らんや、「どちらも頼りないデス」と彼女たちは言う。

あゝ処女よ何処へゆく、と青年達は憂う。

彼の説く所によれば

「女と言うものは、誠意ある男をよ……と、いつも口癖にしているクセに、なぜ、あゝまで騙されることの好きな動物であろう」

「女という動物は、いかもの喰い

か」

「あ、百合枝さん、君はほんとうに僕のためにやつてくれますね」

「えゝ、何でも私にできることなら」

「ほんとうですか、じやあ、僕ね、君に一生のお願いなんだ。僕のために、否、僕等の××プログクションのために、君、すまないが犠牲になつてくれないか」

「犠牲？」

「ハ……、いや驚くことはないんですよ。君の体をしばらく貸してくれないかとゆうことです」

「私の体を？」

百合枝はこうした甘言で巧みに口説かれてうか〳〵と魔窟へ賣り飛ばされてしまつた。

たゞの勤口と思つたのは、私娼窟でスターの夢さめて、はじめて、我に返つた時は、もうとりかえしのつかない身体になつていた。



三、一家の犠牲となつて轉落

久子の家は戦争前迄は雇人を五人も使うほどの店だつた。そして彼女には未來の夫ときめられた遠縁の大学生があつて、幸福そのものゝような生活をしていた。

戦災で丸焼けとなつた一家は、父の眼病と弟妹の相つぐ肺患とで、相当の貯えも忽ちのうちは消費盡されてしまつた。

彼女は自分が働いて一家の生活を支えるとゆう雄々しい覚悟から、最初電話の交換手になつた。けれども僅かな收入では、一家五人が生活することが出來ぬので、やがて銀行の事務員となつたが、それでも生活費を得る事が出來なかつた。

その銀行の重役が久子の境遇に同情してもつと收入の多い仕事を探してくれたのが、麻布の料理店であつた。

彼女はそこの女中として住込んだが、思つた程の收入もなく、着物等の費用が嵩むので、やはり一家の生活費を稼ぎ出す事は困難であつた。

彼女は四度目にキヤバレーの女給になつた。給料は僅か千円であつたが、月々平均して八千円位のチツプが入るので、これなら一家を支えられると、はじめて安心した。

これで漸く父と弟妹には藥も与えられるようになつた。けれど、彼女の平和は永く続かなかつた。

金がほしい〳〵と思つていた彼女は客に誘われるまゝ、郊外の散歩に連れ出され、温泉宿の一室で処女の誇りを失つてからは、金のために、一家の生活のために、客と肉体関係の取引きをする惨めな行爲をやめることは出來なかつた。

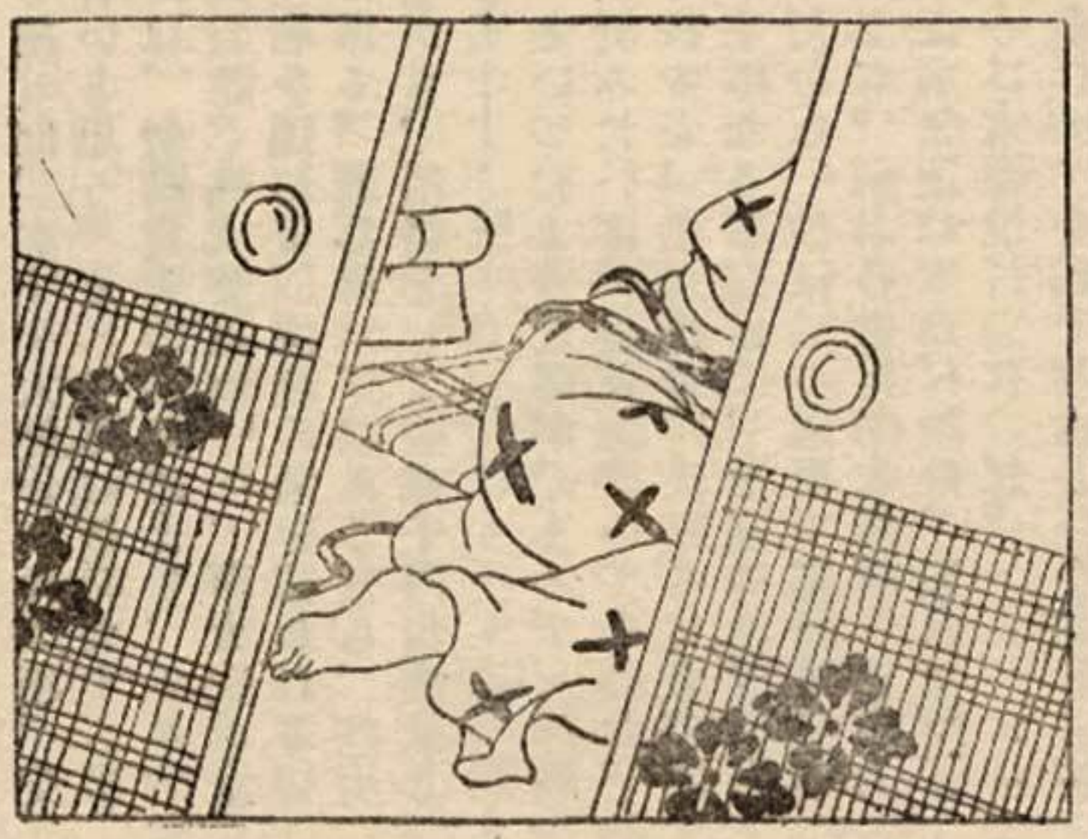
とう〳〵彼女は、色街に近い場末の酒場に移つて、そこのマダムとグルになつて酔つた客から金を絞り上げるために、酒場の二階に密室を設けて、夜毎、異る嫖客に媚を賣るようになつたのであつた。

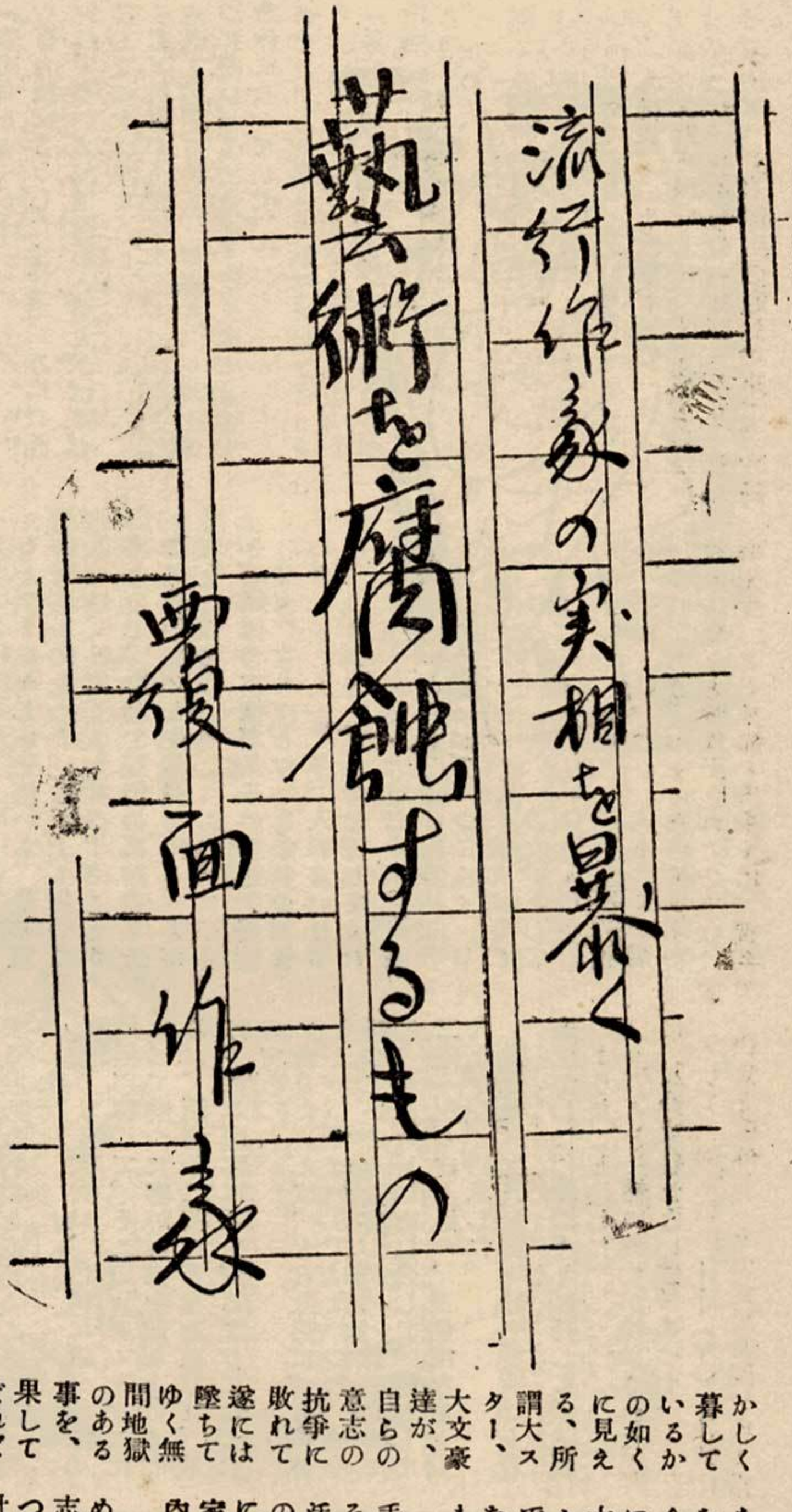
金さえ貰えば、どんな男にでも肉体をまかしたばかりではなかつた。金を持つていそうな客が酒場へ飲みに來ると、マダムとしめし合して、酔わして二階へ引つぱり込み、翌朝になると莫大な金額を請求した。

持合せがないと腕時計や背廣の上着迄脱がした。地廻りと結托して美人局のようなことも迄した。

マダムと一緒に彼女が検挙されたのは、半年も経たない間であつた。

——（了）——





かしく暮しているかの如くに見える、所謂大スター、大文豪達が、自らの意志の抗争に敗れて遂には墜ちてゆく無間地獄のある事を、果してどれだけの人が、知つている事だろうか？

盛一も、その一人だつたのである。

彼が、本を讀むだけでは飽き足らず、これ位の事なら、僕だつて書ける。そう思つて、仕事の余暇に原稿用紙を取上げ、讀切百枚の「金環蝕」なる一篇を書下して、東京の文芸讀物社へ送つてみたのは、彼が二十六、昭和二十三年の秋の事だつた。

一ケ月たつても、二ケ月たつても、何の便りもないまゝに、やはり駄目だつたのか、と思つていた所へ、その年の冬に、

「貴作発表致したく、就きましてはあのまゝではダメだが、編輯部で改作を施せば、必ずや大傑作になる事、受合いと思う。そしてそれを発表する事には、勿論貴方の名前により、世界的大雑誌、「文芸讀物」に、諸大家と堂々名を連ねて、揭載の栄を担われるのである。若し御承諾願えるなら、些少ながら、稿料として金貳千円也進呈します——。」

といつたような事が、まるで女郎の手紙みたいに、長々と書いてあつた。

それでも、処女作の時代なんてものは活字になる事だけで、感涙にむせぶものだから、彼は二つ返事で応諾する事にした。何しろ世界的大雑誌に、諸大家と名を連ねるんだから、正直な所、内心は大満悦だつたのだ。

それに、金貳千円也という金を、始めて雑誌社から頂戴した事も、文学を志すものの夢として、又有難い極みだつた。この二千円也というのは、その社の原稿募集の廣告に、採用の分には一枚二百円以上の稿料を呈す。という一文があつたのだが、この何円以上という奴は、僕の経験によると、それ以上は絶対に拂いませんという、断り文句みたいなものらしい。だから百枚で二万円、二千円だから、規定の十分の一に叩かれた訳である。

そしてその翌年の三月に、贈呈のハンコを捺した怪しげな雑誌が、彼の手許へ送られて來た。まア超学術雑誌なんだから、三文文士諸兄よ、以て冥すべしであろう。成程一流諸大家の名前も見えたが、一場面傑作集で、挿画の側に

（一）

盛一は、小さい頃から、小説を讀む事が大好きだつた。閑さえあれば本を讀んだし、暇がなくつても、親に隠れ勉強をサボつてまで、文学書を漁つた。

夏目漱石、芥川龍之助、菊地寛、吉川英治、吉屋信子——何だつて構わない、手当り次第、程度の高いものでも低いものでも、大衆書だろうが文学書だろうが、小説であり、文学でありさえすればよかつた。昨日高山樗牛の瀧口入道を読んでいたかと思うと、今日は佐藤紅緑の少年小説を讀み、明日はトルストイの訳文が見たい、といつた風だつた。

その彼が、ふとした事から、一躍無冠の帝王として、文壇に躍り出したとしても、何の不思議でもない訳だが、偶然というのか幸運というのか、彼が功成り名遂げたのは、あまりにも早過ぎ、しかも、彼には夢想もしなかつた恐ろしい世界に、自らを葬つてしまおうとは、思えば奇しき輪廻とも云えよう。

文壇に、芸能界に、人氣と名声の脚光を浴びて、華やかな人生を、面白おのまゝではダメだが、編輯部で改作を施せば、必ずや大傑作になる事、受合いと思う。そしてそれを発表する事には、勿論貴方の名前により、世界的大雑誌、「文芸讀物」に、諸大家と堂々名を連ねて、揭載の栄を担われるのである。若し御承諾願えるなら、些少ながら、稿料として金貳千円也進呈します——。」

といつたような事が、まるで女郎の手紙みたいに、長々と書いてあつた。

それでも、処女作の時代なんてものは活字になる事だけで、感涙にむせぶものだから、彼は二つ返事で応諾する事にした。何しろ世界的大雑誌に、諸大家と名を連ねるんだから、正直な所、内心は大満悦だつたのだ。

それに、金貳千円也という金を、始めて雑誌社から頂戴した事も、文学を志すものの夢として、又有難い極みだつた。この二千円也というのは、その社の原稿募集の廣告に、採用の分には一枚二百円以上の稿料を呈す。という一文があつたのだが、この何円以上という奴は、僕の経験によると、それ以上は絶対に拂いませんという、断り文句みたいなものらしい。だから百枚で二万円、二千円だから、規定の十分の一に叩かれた訳である。

そしてその翌年の三月に、贈呈のハンコを捺した怪しげな雑誌が、彼の手許へ送られて來た。まア超学術雑誌なんだから、三文文士諸兄よ、以て冥すべしであろう。成程一流諸大家の名前も見えたが、一場面傑作集で、挿画の側に

活字で五六行抜粋されており、菊地寛作「愛憎の書」舟橋聖一作「男」小島政二郎作「三百六十五夜」吉川英治作「鳴門秘帖」等々々、成程大先生達が妍を競つているには違いない。但し本文の方では、あまりお目にぶら下つた事もない、新鋭新進鬼才連中が覇を争つていた。

それでも、始めて自分のものが、活字になつたという事は、若き血潮の奔騰する程に、嬉しいものである。だから、さぞかし、木葉ミジン、痛快無惨に大改作されているだろうと思つていた。盛一は、編輯部のお手並拝見とばかりに、何度読み返してみても、一字一句も添削の跡を留めず、うまい具合に、合法的詐欺に一ぱい喰わされたと思つても文句一つ言わなかつた。

もつとも肚の中では、何が世界的大雑誌だい。このインチキ野郎奴！とは思つてはいたが——。

（二）

しかし、運命のいたづらなんて、どこでどんな具合に曲つてゆくか分つたものではない。その世界的量気楼雑誌を、純文壇の編輯屋が、偶然にも目を止めて、

「貴作一篇御送付下さい——」

という、恐ろしく簡單な手紙を寄せて来た。それでも、始めての雑誌社からの註文であり、しかも相手は一流中の一流雑誌、「小説新潮」盛一はブルブルツと武者振いして、すぐ愼重の筆をとつた。三十枚の「発狂」なる一篇だつたが、すぐ採用の通知が来て、六阡円から二割税金差引で、稿料が送られた。

しかもその一文が発表されるや、盛一の独特の筆致と、心理的な深察、香りの高い余情などを大きく買われ、一つのセンセーションを文壇に投じて、更に第二弾の世に出るや、彼のマンネリズムは大きく受け、好評嘖々、一躍新文壇の鬼才として、大きな存在を築くに至つた。

どうも雑誌社の内幕ばかり暴く事になるがこの作家のものは讀まれる。この名前を連ねれば賣れると思うと、文芸だの芸術の爲にだのと、一応は聖哲みたいな御託を並べる事は知つていても、やはり根は商賣人、營利根性だけは棄てきれない。これは、大臣だろうが、高位顯官だろうが、人間が人間である以上、物慾から超越出来る本当の聖人君子は、古今東西あまり見当らないようである。ましてや出版社のオヤジ風情に於ておや。——失言取消。

織田作之助が死ぬと、いつの間にやら世紀の大文豪に祭り上げてしまつたし、太宰治が多摩川淨水の水を飲むとすは文壇の巨星墜つとばかりに、太宰治全集を刊行して、日記の端だろうが落書だろうが、何でもかんでも、彼の書いたものを家宅捜査して、活字にしてしまつた。

彼の「斜陽」以外に、どんな見るべき巨作があつただろう。彼の生前に、彼の名前を知つていた人が、一体何人あつただろう。つまらない雑文まで、彼の作なりと世に出されたのでは、太宰先生、さぞ成佛も出来ずに、黄泉で頭を掻いて、罪な出版社を咲いてられる事だろう。それを又彼の作だと云えば、猫も杓子も、分りもしないのに感心したり、つまらない愚作まで買つて讀んだろうが、当てた出版社こそ、それが文芸向上に貢献しようとしまいと、太宰治大明神様々であつたに違いない。

そう言う次第だから、盛一が一たび人気を得るや、是非一篇、是非私の社にも、当方雑誌にも、と引ぱり凧。

弊社の爲に先生の玉稿一滴。何卒お恵み下さいますよう——と、贈り物を恭々しく奉呈して来るもの、多額の前金を押付けて帰るもの、昭和二十四年正月に、田村泰次郎が一ケ月に十二社の原稿を頼まれ、強引にデッチ上げた事があつたが、流行作家たるもの、又辛きかなである。

そう同じ作家ばかり酷使せずに、手が空いて困つてる作家クンへも、一つ二つおコボれを頂戴したいものでアルあゝ——。

忽ち金と名声を獲得して、若きホープとして祭り上げられると、誰だつて多少は自惚れるものだが、盛一はまだ若かつたし、俄成金には、すぐ酒と女の味が教えられた。

それも、先方から無理に教えてくれたのである。雑誌社は競つて原稿を得ようとして、彼の歓心を買う爲には、手段などを選ばなかつた。豪華な宴席にも招かれたし、映画会社とタイアップして、何も書かないうちから映画化決定と喧傳し、その長篇原稿を取る爲にある映画女優が、一夜を彼の前に提供された。

雑誌社の締切と註文とに追われて、ついうるさいまゝに家をあけ、温泉宿へ出かけて行けば、そこにも遊蕩と享楽と、不純な環境とが待つていた。

苦節十年。未だ名を成さざる新人群は、こうした境遇を、或は羨ましく思われる人が、あるかも知れないが、もう暫く最後まで讀んでほしい。流行作家の実相は、皆が皆までとは勿論言わないが、華やかな舞台裏というものは成上つた地上の浦島太郎というものは皆が想像している程には、幸福でも満足でもないものなのである。

（三）

盛一は、ある程度の名声を維持する爲には、やはり努力し、やはり冴えたものを書かねばならなつた。その爲には烈しい頭脳の酷使も必要だつたし、また、体面を維持する上の、交際にも忙しかつた。先生々々と慕つて来る門人達にも、眼をかけてやらねばならず何人かの情婦にも、夜毎の愛撫が必要だつた。原稿は殺倒する。座談会、講演会、何々会、何々会と、身体が幾つあつても足りない忙しさの上に、酒と女と肉体の酷使と、全く彼はもう古爲以上に疲れ切つていた。

その、普通なら死んでしまつていたのである。雑誌社は競つて原稿を得ようとして、彼の歓心を買う爲には、手段などを選ばなかつた。豪華な宴席にも招かれたし、映画会社とタイアップして、何も書かないうちから映画化決定と喧傳し、その長篇原稿を取る爲

い。麻薬の害はよく知つてはいたが、自分の名利と仕事の爲には、止むを得ないとしていたのである。そして昭和二十五年五月、遂に原稿執筆中、自分の書斎で卒倒してしまつた。

前にも二度ばかり、こんな事があつたので、それ以來、附近に住んでいる愛人の明子さんを煩して、ヴイタミンとホルモン劑を注射してもらつていたのだが、月のうちの大部分を徹夜で通す彼の心身は極度の疲勞を來し、もう榮養劑の注射も、効を奏さなかつたのであろう。

彼は附近の病院へ入院したが、全くの危篤狀態で、原因は過勞という事だつたが、本當はヒロポンの濫用が、禍いしたものらしかつた。

近ごろ、ヒロポンやアドルムの注射が、街に流行を極めている。ことに原稿執筆に追いまくられる文士や、徹夜のロケ、或はステージで踊つたり笑わせたり、お客にサービスする爲に、骨身をけずる芸能人に多いようである。また一部の作家の間ではヒロポン中毒になることが、まるで、「作家のたしなみ」ででもあるかの如き、奇異な現象を呈していた。

大阪の女漫才師ミス・ワカナが、一日六十本を常習的に射つて死に、永田キングが日劇の樂屋で倒れ、関屋五十二が廿の扉で失敗し、松平晃は麻薬で声をつぶしてしまつた。」

また、マキノ正博が、愛妻の灘夕起子に愛想をつかされて、夫婦喧嘩の末別れてしまつたし、霧島昇、松原操夫妻や、灰田勝彦なども常習者だつたが

死んだ織田作のボン中も御承知の通りで、昭和二十一年、讀賣新聞に「土曜夫人」を連載していた当時には、銀座裏の佐々木旅館に止宿していたが、その頃で一日二十本に達していたし、彼の肺をあんなにも昂進させたのも、麻薬の力が大きかつたと言える。

太宰治も、アドルムやヒロポンの錠劑を、一度に百粒ぐらい、ペロツと服用したという話を聞いているし、田中英光は、カストリ雜誌にメチヤクチヤに書きまくつた頃、ボン中常用者に加つた。アドルムの數死量は二〇錠位だが、その頃の彼は五〇錠を越え、自分でも吃驚していた程である。この時分から彼は狂暴になり、飲み倒しと喧嘩の名人として、文壇に勇名を轟かせたが、遂に愛人山崎敬子を刺して、松沢精神病院へ、送られてしまうに至つた。

また、有名な坂口安吾事件も、東大神經科に入院中、窓から飛降りて自殺を計つたという。デマがどこからともなく飛んで、本人を憤慨させたものだが、当人は悠々と、その日は野球見物をしていたので、この流言は納まつた代りに、彼もやがてはアドルム中毒が昂じて、狂暴になり、家人を追廻して戸外に飛出し、暴れ廻つて、近所の人達からも、狂人扱いされているという。

悲慘な例は數限りもないが、盛一もまた、一日二十本を越えて、この廢人の群に加わり、生ける屍と化してしまつたのだつた。

（四）

しかし、雜誌の原稿に追われている彼は、入院しても、落着いて靜養する事も許されず、四・五日目からは、ベツドの上で、原稿を書き出した。

しかし、もう彼の人気は下り坂だつたし、愛人達も、疎遠になり、焦れば焦る程、快心作は生れなかつた。もう精魂を消耗し盡した彼には、それが精一杯の力量だつたのかも知れない。

なまじこのような地位を獲得したばかりに、当人の苦しみは、一層深かつたろう。

怖ろしさを悟つて、專らビタミンとホルモン注射に轉向したという事である。

芸能界に拾えば、麻薬に骨の髓まで荒らされている連中は幾らでもある。今年の正月元旦の朝に、漫才師林田五郎が、アドルムで死んだし、最近では三遊亭歌笑が銀座で死んだ。彼も麻薬患者でなかつたら、あの若さで、あんなにも簡單には死ななかつた事だろう。

シナリオ・ライター小國英雄。監督では亀井文雄、軽演劇の藤尾純、櫻むつ子、山茶花究、歌手では近江俊郎、小畑実など、落語の三遊亭金馬、死んだ歌笑。声帶模写の木下華声、講談の一龍斎貞山、舞踊家の荒木陽、アナウンサーの和田信賢、ETC、ETC……その他無名のバンドマンや、裸シヨウの女達のヒロポマニアは、莫大な數字に上るだろう。

作家仲間では、新進佐竹龍夫が、自分で「ヒロポマニア」という小説を書いて、自分で怖ろしくなつて、止めてしまつた。

世相諷刺

僞刑事横行時代

永見 隆二

場所―公園附近
時―晴れた秋の夜の十時過ぎ
人物―
大學生 二十四五才
百貨店女事務員二十才
第一の男二十五六才位
第二の男 四十才位
第三の男 三十才位

「とも角二人共、此方へ出ろ」

右手の暗い木立の中から荒々しい声がしてよごれた鳥打帽の男（第一の刑事）その後から制服姿の大學生と風呂敷包を抱えたワンピース女が登場、二人共うつむいている。

第一の男「君達が何をしていたか、僕はちやんと知つとる。公園の中であんな眞似をすることは悪いかいゝか知つてるだろう」

大學生「知つています。然し僕等は何も……」

第一の男「默れ、僕は刑事だぞ、だが、今夜は許してやる……お前は大學生を裝つている不良少年じやあるまいな」

かりに他人にはどんなに幸福に見えたか知らないが、彼自身の苦悩は、全く想像以上のものがあつた。

しかもなお、最後の生命の余燼をかき立て、ヒロポンとアドルムの亡靈と化しつゝ、自らのペンによつて、永かるべき生命を縮めて行く、流行作家の宿命を正視する時、慄然たらざるを得ないものがあつたであろう。

彼は今、全てのものの行詰りに直面して、病床に苦悶し、呻吟しつゝけている。彼がこれからいつまで生きられるか、どれだけの大作品が生れるか。それは私にも分らないし、彼自信も知らないだろう。しかしその肉体と頭脳が、どの程度の耐久力を残しているかは、もう彼にも大体分つているだろう。

まるで花火線香のようだつたこの二三年が、目まぐるしい程に明滅して、或は白晝夢を作り、或はシンダレラの夢を誘つている事だろう。

シンデレラ姫よ。時間は迫る。魔法はもう切れようとしている。その醜骸を衆自にさらすまでに、汝よかまどの隅へ帰れ！、もう過去の僥倖は、再び戻つては來ないだろう。

彼は今日も病院の孤独のベツトで、半狂乱のようになつて、原稿を書いている。

三文文士諸君。共に喜ぶべし。流行作家にならなくてよかつたぞ。

芸術を腐蝕するものをこそ、何よりも恐るべし！

—了—



大学生「ハイ」

第一の男「よし、じや行つてもよし」

二人行こうとする。

第一の男「おい、おい、お前はまだ調べが済まないんだよ」

刑事、女の手を執る。大学生それに構わず帽子を眞深かにかぶると急いで去る

第一の男「お前は許されんぞ、お前はパンパンか、性病予防法に触れるからな」

女「あの……」

と泣き出す。

第一の男「泣かなくともいゝ、僕はお前が本当の事を言えば許してやらんこともないが」

女「あの、ほんとに。」

第一の男（にやつとしながら）

「ほんとうだよ」

女の肩へ手をかけながら

第一の男「さあ一寸其処迄一緒に行こう」

女「でも……」

第一の男「行くんだよ」

突然木立の中から、黒い上衣の男（第二の男）が現れる。

第二の男「おい、貴様は一体なんだツ」

第一の男（ぎよつとして相手の堂々たる風采に気を呑まれた形）

「うむ……」

第二の男「貴様、さては偽刑事だな」

第一の男は次第に身しざりして、やがて脱兎のように走り去る。

第二の男「馬鹿奴……、君、危いところでしたね、夜更けてから、こんな処を一人で歩いちやいかんね。……。あゝゆう偽刑事が出てくるから。でも君はよかつた。僕が出なかつたら、どんなになつているか判らなかつたね。心配しなくてもいゝ、僕は新聞社にいる者だよ。さあ送つてあげよう」

女「ありがとうございます。もう送つて頂かなくつても妾一人で歸ります」

第二の男「一人で帰る？君は僕の厚意を無にするんだね、君は僕が助けて上げたことを感謝しているのかね。送つてあげるんだ。僕は——。」

いきなり女の手をとつて林の中に入る。

女「あれツ」

林の中で争う声。

駈けつけた第三の男。林の中に飛び込む。暫く格闘の音、捕縄をかけられた第二の男、その後から女が出てくる。隙を見て女逃げ出そうとする。

第三の男「馬鹿ツ、逃げる奴があるか、一緒に來るんだ」

女「でも、貴方も偽刑事でない？」

第三の男「僕か、ハゝゝ一緒に出口の交番迄行けば判る。おい、しつかり歩かんか」

——幕——

宵闇の公園の樹立は悩ましい。幾組ものアベックが喋々喃々。そこへ突如として現れた男が……

地方奇習

祝言と石地藏

花本史郎…

山陽線尾ノ道驛から下り列車で四つ目の、山間の一小驛にしては案外乘降客の多い河内驛から、美しい沼田川沿いの景色を窓外に眺めながら、バスで約一時間も行けば、「草井」の茶どころとして知られている神田村に達する。

この村は戸數僅か五百戸足らずの、それこそ今も昔ながらの貧しい純農村ではあるが、この村は、祝言の宵、緣起を祝つて賑やかに附近から、大小多數の石地藏を持ちこむ風習があるので、特に郡下ではその名を知られている。

もと〳〵祝言の宵石地藏を持ちこむということは、花嫁が嫁入先で、どんな辛い、苦しいことがあつても、凝乎と一所に居坐つて、動かない、辛棒するということを石地藏に結びつけたもので、こうした緣起から、出來るだけ有名無名、大小樣々の石地藏を持ちこまれることを、何よりも大きな祝言として喜ばれている。

たゞあくせくとして働くこと以外には、なんの刺戟もない、明け暮れる單調な農村のことだから、

「やれ、いつ、どこそこには祝言があるそうだ」

となると、噂さは噂さを呼んで、忽ちの中に村の大きなニュースとなることは云わずもがな、

「仲人はどうの」

「結納はどうの」

「仕度はどうの」

と、輕まれもせぬせんさくに、根堀り葉堀り、いやはやその五月蠅いことゝ云つたら。

さていよ〳〵祝言の日取りが近くなつたことを誰か聞き出して來ると、待つていましたとばかりに、青年達の活動が始まることになる、無論祝言に對してのお祝いの方法であるが、その眞つ先きに取り上げられるものは、石地藏の問題である。それには田舍では未だにやかましい家柄だとか、平素の附き合いなどを考慮して、運ぶべき石地藏の數なり、その大小なり、或はそのある場所について話した上、大体の見當をつける。

それによつて村内のものから隣村へ、更に隣村へと、有名無名、大小樣々の石地藏が夜中、牛車や、馬車や時にはトラックなどで、面白い程村の一ケ所に集められる。

いよ〳〵祝言の當夜ともなれば——戰爭前までは、簞笥 長持 挾箱など花嫁道具一切、一家眷族で引いたり、擔いだり、それに花婿方の出迎えも加えて、花嫁は美々しく飾り立てた牛の背に跨りながら、まだ陽の高い中に一生一代晴れの豪華な、そして古式豊かな花嫁道中を繰り展げたものであつたが——今では流石に花嫁は簡便主義の世の中とあつて、ハイヤーを利用し、荷物はトラックで運ぶといつた味も素つ氣もないものになつてしまつた。

だがそれでも、花嫁來たる——となると、村境まで予め見張りに出ていた青年が、法螺貝を威勢よくブーツと長く吹き立てる。するとそれをきつかけに、第二、第三の法螺貝が、次から次へとリレー式に、或は高く或は低く連續的に吹き鳴らされる。こうなると村人はやりかけた仕事も放り出して、花嫁見物にと駈けつけて來る。無論村境に入れば車は除行しなければならないが、この時花嫁もまたいよ〳〵祝言の當夜ともなれば——戰爭前までは、簞笥 長持 挾箱など花嫁道具一切、一家眷族で引いたり、擔いだり、それに花婿方の出迎えも加えて、花嫁は美々しく飾り立てた牛の背に跨りながら、まだ陽の高い中に一生一代晴れの豪華な、そして古式豊かな花嫁道中を繰り展げたものであつたが——今では流石に花嫁は簡便主義の世の中とあつて、ハイヤーを利用し、荷物はトラックで運ぶといつた味も素つ氣もないものになつてしまつた。

だがそれでも、花嫁來たる——となると、村境まで予め見張りに出ていた青年が、法螺貝を威勢よくブーツと長く吹き立てる。するとそれをきつかけに、第二、第三の法螺貝が、次から次へとリレー式に、或は高く或は低く連續的に吹き鳴らされる。こうなると村人はやりかけた仕事も放り出して、花嫁見物にと駈けつけて來る。無論村境に入れば車は除行しなければならないが、この時花嫁もまたりと愛想のいゝ笑顔を第一印象として、彼等に送らなければならない。というのは若しそうでもしない場合は、予めかくもあらんと用意した、足袋を入れた竹籠を容赦なく車の中に放りこむ。

これはこの地方では、竹籠のことをホボロと云い、また花嫁が、嫁入先から辛棒出來なくて實家に逃げ歸ることをホボロを賣る、というので、度々ホボロを賣る——という嫁がらせである。

また悪どい悪戯になると、空の肥桶を天秤棒でこすり廻して、キー、キーという嫁な音を立てる。これも「度々ホボロを賣る」という場合と同じように「お前のような無愛想な嫁だと、いつも嫁入先で苛め通されて、キー、キーと悲鳴をあげなければならぬぞ」といつた、御念の入つた嫁がらせではあるが、肥桶を持ち出すところなど、如何にものんびりとした微笑ましい、農村向きの悪戯とも云えよう。

ところで第一の關門を通過した花嫁は、いよ〳〵花婿側の賑やかな出迎えを受けて、——出迎え提灯に迎えられて、一旦婿方の用意された部屋に案内されるが、所持の花嫁道具は所狹ましとばかり緣側に並び立てられる。これは道具見せといつて、村のハーチャン、ミーチャン方に自由に供覽の上、品評とり〴〵祝つて貰うことになつている。だがこれも惜しいことには、段々と金づまりの世相を反映して、昔程の豪華版な道具見せもなく、極く最小限度だけの道具に限られ、どうかすると近頃ではそれさえも、さつさと花嫁到着と同時に、部屋の中に持ちこまれるようになつたので、余程大きな祝言でない限り、そうした昔懐しい飾り立ての道具見せも、今では滅多に見ることが出來なくなつたが——。

着がえ、化粧直しも濟んで、やがて三々九度から親類盃ともなれば、いよ〳〵用意された問題の石地藏が、夫々頬冠りをした青年達の手によつて、どん〳〵と緣側に持ち運ばれる。緣側が一ぱいになると、庭先に莚を敷いて、所狹きまでに並び立てられる。

この間式の行われている座敷では、どんなに冷えようと、寒むかろうと、外から見えるように戸、障子を明け放して置かなければならない。これは「ワッショイ、ワッショイ」と一生懸命になつて、石地藏を運びこんでくれている青年達への禮儀である。

全部運び終つてしまうと、青年達は庭先に並んで、今までかぶつていた頬冠りを取る。すると代表の一人が前に進み出て、

「お芽出度うございます」

と、簡單に挨拶を述べながら、毎夜々々、丹誠こめて作り上げた、いとも巧妙な彫刻の大きな鶴と龜を捧げて緣側に置く。

この時新郎新婦は、酒と盃を手にして座を立ち、緣側から庭先に並べ立てられた石地藏に、お祝いの酒を一々頭上から注いで廻らなければならない。この間相當時間がかゝるが、座敷からも庭先からもみんなの眼が新郎新婦の一擧一動

に注がれる。時には衆人監視の中で、余り固くなつた花嫁が、思わず徳利を取り落したり、石地蔵に躓いたりなどして、思わぬ失敗から、折角芽出度い祝言が、翌日はぶちこわれて破談になり、悲しい破鏡の嘆きを見なければならないといつた例もこれまでにある程で花嫁たる者迂闊には出来ない儀式？である。だが、なんだ、馬鹿らしい——と、一笑に附されぬところに、現代の観念ではどうしても割り切れぬものがあるに不拘、こと程左様に神聖視されているところに、矢張り「祝言と石地蔵」の切つても切れぬ關係は、この村に關する限り、今後も長く續けられて行くことであろう。

余談はさて……、この儀式？が終つて、二人共元の座につくとそれを合圖に用意の酒肴が、座先に持ち出される。所謂「振舞酒」である。一口に振舞酒と云つてしまえばそれだけだが、これ一つによつて、どこ、そこの祝言はよかつたの、悪かつたの——と、後々まで村の評判となるのだから、いゝ加減な酒肴でごま化す譯には行かないし、その接待如何によつては、家の格式にも關わるというので、こうした祝言の時の接待係には、特別氣の利いた者に一切を委せ切りにしている。

こうして座敷では親類や近所の人々——といつてもこの場合、近所の人々は男のみに限られているが、——に對する披露宴が、何度目かの花嫁の色直しの中に行われ座先きでは膳をあざむくような簿火の側で、次から次へと補充される酒肴を圍んで、青年達の賑やかな酒宴が、夜の更けるまで續けられて行く。

仲人は宵の口から、といつた粋なことも、都會あたりで披露宴中途から、新婚旅行に發つ、といつた、新郎新婦の二人だけの樂しい語らいもあらばこそ、花嫁花婿はいつ果てるとも知れぬ酒宴に、その酒間を取り持たなければならないのだから、無粋も無粋、全くたまつたものではない。

大抵このあたりの祝言は、秋の收穫も終つた頃から、比較的農閑期の冬の間に行われるので、まあ一年中での夜長の時でもあるが、それでも明け方の二、三時間を、初夜としての床を同じくするだけで、翌日は近所の婦人だけを招待しての披露宴があるし、子供の菓子貰い、もあつて、なか〳〵自由に羽根を伸ばす譯には行かない。この子供の菓子貰い、というのは祝言の翌日村の子供達が連れ合つて、花嫁の見物がてら、菓子を貰いに來ることを云うのだが、ぞろ〳〵と澤山やつて來る——中には一人で二、三回もやつて來る悪戯者もいるが、なにしろ人數が多いだけに、菓子といつても、なか〳〵馬鹿にはならない。物の豊富にあつた時代、菓子のはんらんしていた時代はそれでもよかつたが戰時中からこの方は大抵代用品で濟ましているようである。

この菓子は、お芽出度う——と云つて來る子供達に、花嫁は直接「有り難うよ」と云いながら、にこやかに笑顔を見せて、一々子供に渡してやらなければならない。

若し万一、無愛想な顔でも見せようものなら、子供は正直だ、そのまま噂さは子供を通して、村中の噂さとなり、花嫁たるものゝかなえの輕重を問われるのだから、子供だからと云つて、夢々おろそかには出來ない。

これを子供の菓子貰い、とも云い、別に子供のというところを見ると、どこまでも花嫁の第一印象を探ろうという、いつた緣起のいゝ由緒ある地藏にまつわる風習のように思われる。よくこの事情を知らない町からの花嫁が「なんの田舍のチンピラが……」と、いつた風の態度を見せて、すつかり村の人氣をなくしてしまつたという例も、これまでであつたくらいで、特にアプレゲールの子供達に對しては、用心第一ということになるだろう。

兎に角全部運び終るまでは、花嫁の責任であつて、「都合のいゝ時」「手間のある時を見て」といつたことは許されない。だが時には、翌晩引續いてどこかに祝言がある、といつた場合もあるのでそのまゝにして置けばいゝこともあるにはあるが、こうした都合のいゝことは、まあ滅多にないものと見てよかろう。だから花婿たるもの〳〵苦勞も並大抵のものではない。

それに祝言から三日目には、里歸りで、新郎新婦は連れ立つて花嫁の里に出掛けるから、どんなことがあつても、二日の間には全部返却してしまわないことには、兎に角、花婿の責任は果たされない。

新しい思想がどうの、いや、主義がどうの——と、めまぐるしい變遷の中に、時代の潮は同じように、どこにも滔々として押しまくつている今日この頃、こうした奇習が地方によつては、今も尚平然として行われているのだ。

その風習の是非は兎に角としてこれは物好きな都會人に、とつては何かしらスリルに富んだ、一掬の清涼劑にでもなるのではなかろうか。

（了）





（一）

「私姙娠したらしいの、」

誰もいない静かな喫茶店の隅で、艶子は卯一郎をながし眼で見乍ら言つた。

男は予期せぬ事を言われて、信ぜられぬ様に小さい目をうろ〳〵させた。顔見知りの喫茶店のマダムは、意味あり気な二人のひそ〳〵話に気をきかして、カウンタの隅で本をよんでいる。

卯一郎には結婚して十年になる妻があるが、子供に恵まれなかつた。妻の菊代は一年に一度しか月のものを見ず病身で、彼は仲人に欺されて、肉体的缺陥のある妻と一緒になつた。だから健康で正常な男の自分が、他の女性を求めるのは無理ではない。然し菊代は自分の病身が男に不満を與えている事に卑下して、内気であり、忠実に彼に仕えるので、不具の女であるけれど飼殺しの積りで、別れずにいるのだ。と人に言つていた。

親も兄弟もなく、医者の車引きから自動車の運轉手に、そして終戦後のインフレのどさくさにまぎれてヤミ屋の親分になり、店先を借りて古着屋を始めた。相当悪ごすく世渡りして來た彼も、人並みに子供がほしい、という気が起つていた。四十男の図々しさとするさが全身にみちている卯一郎も、艶子には心から打ちとけて、気をゆるして物を言う。

艶子は彼と同業の古着屋の娘で、廣島で芸者をしていたが、朝鮮に渡り、かなりいゝ旦那をつかんで、贅沢な生活をしている中、終戦の爲、内地に引き上げて來て、ブラ〳〵していた、素人離れのした着付、化粧のうまさは、野暮つたいヤミ屋町ではきわだつて人目についた。

男から自分の体と引きかえに金をとる術しか知らぬ社会を泳いで來た女故内地へ戻つて來ても、独身女の地味な暮しが出來る筈もなく、ヤミ肥りの卯一郎に得意の手練で身を投げかけていつた。

「私は子沢山の親の爲、芸者になつてあの社会のおきまりどおり、旦那をとつて生活してきました。けれど一度も姙娠した事などなかつたのに、貴方との初夜で直ぐ姙娠してしまつたのです

もの、本当に二人の愛情が、いまゝでの誰とよりもすぐれていたからですわ私本当に嬉しいの――」

「僕も、嬉しい、四十過ぎになつて、始めておやぢになるんやから、僕は君によつて人生の生き甲斐を知らされた。」

（二）

艶子の姙娠を知つてから卯一郎の心は増々彼女に傾いて郊外の我が家には用のある外は帰らず、大阪市内の二階を借りて夫婦として住んでいた。

妻の菊代は夫から

「僕は同業者の娘の艶子という女と関係して子供が出来る、お前には子供がないのだから、出来た子を籍に入れるから、その積りで、」

と知らされてから、気分がすぐれなくなつた。病身の我が身故、この様な屈辱にも甘んじねばならないのか、艶子という女は二十七で私よりも若く、まして花柳界で勤めて来た人だから、男を引きつける術も上手なのだろう。

私にも子供さえ出来れば、あの人も家庭に落着いてくれていたかも知れない。夫にそむかれた孤独の毎日は心重たく、胸が悪くなつたり、悪寒がしたり、このまゝ寝込んで死んでしまうのかと思われ尚悲しく、一人泣き暮していた。

あまり体が悪いので、とう〳〵菊代は医者の診断を受けて見た。

ところが医師の診断は意外であつた

「姙娠です。」

「えつ、本当ですか、先生、」

彼女には信ぜられぬ事だつた、石女として夫から不具者扱いをされ、自分もそうだと悲しくあきらめていたものを、

「六ケ月です、初産の方はよく知らないものですよ、まして自分は子供が出来ない、と思いこんでいる人は、六月になつても気が付かない事はよくありますよ。」

菊代はどうして医師の門を出て我が家に帰つて来たのか知らなかつた。頭がボウとして生れて一度も経験したことのない、体中の血がおどり狂う喜びであつた。自分は不具でなかつた、一人前の女だつた、艶子さんがどんなに美しくても花柳界で色々な男に接して来た女だもの、血のきれいな子が出来るものじやない。私の体にはあの人の血だけしか受けていない純潔な子供を産んで見せます

彼女は女としての全甲斐を始めて知つた。

艶子が菊代の姙娠を知つた時、彼女は卯一郎を恨んだ。

「貴方という人は、私の愛に救われたとおつしやつていたくせに、たまに家へ帰ると、菊代さんとも仲よくしておられたのね。私の子供と菊代さんの子とどちらを可愛いと思う？、私の姙娠を知つて、あの様に喜んだ貴方が、私一人を愛して下さらずに、菊代さんとも関係なさるのですもの、貴方の私にいつた言葉は皆嘘だつたのね」

「お前にそういわれると一言もない。男はいやしいつて事にきまつているのや、俺だつて菊代に子供が出来るとは思わなかつた。」

「子供が出来なければ、菊代さんとは全然関係していないと私を欺せたというわけでしよう。」

「そんなに怒るなよ、これが男というものだ、十年もつれそつた女とそう急に他人になれるわけがないやないか」

「貴方は卑怯だわ。」

「俺は君の方が好きだ。神様が俺を困らす為に、不姙症の菊代をはらませたのだ。何の愛情も感せずに、本能だけでした事なのに、何という運命の皮肉か、――その為、お前にはこの様にいじめられるし」

たまに石切の我が家へ帰れば、

「どうぞお願い、子供の為に帰つて来て、」

と妻にせがまれ、男にとりすがる様な必死に哀願する目を見れば、やはり不びんな気にもなる。そうかと言つて崩れる前の牡丹の様に咲きほこる艶子の肢体を離れる事は、阿片患者から阿片をとり上げるに似た苦痛である。

（三）

艶子は月足らずの男の子を産んだ。体重は普通より少し少かつたけれど、二月も早く産まれた様には思えぬ健康な子だつた。

卯一郎は本当に俺の子だろうかと疑つた。

「貴方は私を信じて下さるわね。」

と、大きい黒目勝の瞳に涙を一ぱいためて、乱れた髪を枕にはわしている彼



これで一杯です

スター異聞

大映の「密林の女豹」のスチールに、女の太股までむき出しにして映したのがあつた。

女ターザン物のひどい映画と言われるだけあつて、腰にボロをつけた女が木から木へ飛んだりするんだから、まあ、その位のスチールも出てくるわけだ。

これをとつたのは荒川さつき、というニューフェイスの處女？スター・マンは、カメラのピントを彼女のボロの褌をめくり上げた白い脚に合して

「も少しめくつて、もう少しめくつて」

と、ドン〳〵股の方までめくり上げさせた。

荒川さつき恥しがつて

「あたし、あの、ズロースをはいて来てないわ」

と言い出したが、いたづら好きなスチール・マンはどうしても承知しない。

「もつと、もつと、それじや感じが出ません。もうちよつと、めくり上げて下さい」

で荒川さつき、とう〳〵泣き聲を出して

「だつて、だつて、もうこれで一杯ですわ」

女を見ると、俺の子だ、艶子は俺を愛していているから疑がわれるのを辛がつている。世間に八月子は多いし育つものだ。と思つてしまつた。

十日程して彼女が退院する時、卯一郎は自分で子供を抱いた。軽いフニヤ〳〵した動物が、まだ目も見えぬくせに、春の光りが眩いのか、眉をこころもちよせて目を半開きにしている。可愛いゝと思う、これはやつぱり俺の子だ。寄りそつて歩く艶子は、薄化粧で黒地に大きい花模様のお召をさりげなく気こなして、つゝましく見える、卯一郎はすつかり楽しくなつていた。

妻の菊代は三月遅れて女の兒を産んだ。

卯一郎は呼ばれて歸つて来たが、二三日いると、商賣が氣にかゝると大阪にいつてしまつた。

卯一郎は二人の女から責められるのがさに、どつちの子も自分の籍に入れなかつた。

卯一郎の大阪の店には、子供を抱いた艶子がいつも彼によりそつていた。子供に手がかゝるのだろうか、素顔の時が多かつた。化粧をせぬ彼女の肌は蒼ざめた荒肌で、五つ位老けて見えたおむつの洗濯をしている時、乱れた髪の頂に、五円玉位のはげが顔を出して、彼女の過去を教えている。夜になると膝から上のつんつるのシュミー一枚で往來を歩いた。

普段にでも、駒よりのお召を粋に着こなして、髪もその時の流行に型よく結つて彼女に禿のある事など知る人はなかつたのに、子を産めば女はこうも変るものか。

風呂で見かける裸体も、筋ばつた、肉付の乏しい青白い肌で、乳房も貧弱に垂れていた。

（四）

終戦後のインフレに、ヤミで稼ぎ、筍生活のサラリーマンから、足許をつけこんで、捨て値で買つた衣類を田舎に賣りつけぼろい儲けをしていた彼も近頃はさつぱりで、妻へは金を送る事もしなくなつた。

菊代は子供を背負つて、艶子の親の家へ、卯一郎を、私の処に歸してくれる様にと、しば〳〵頼みに行つたけれど、彼は滅多に歸つて来てくれなかつた。

そのうち菊代の子は一年程して死んだ。その時は流石に彼も歸つたけれど父にも看護されず死んだ吾が子の不びんに、彼女は卯一郎の冷たさを深く恨んだ。

子供を生んでからの菊代は、今までよりずつと健康で、急に女らしい魅力に溢れた体付になつて来た。子を産んだ爲、新陳代謝がよくなつて、彼女の体内にとゞこおつていた、あらゆる病源を押し出してしまつたのだろう。見違える程血色のよい顔で、卯一郎は不思議に思つた。昔の菊代でない別の女が自分を慕つている様だ。

或日、一日中艶子は店に姿をみせなかつた、何時もなら、住家と店とは近いのでよく子供を連れてやつて来て、食事の仕度をする頃に歸つて、彼の歸りを家で待つていてくれたのに、その日は食事の仕度もしてなく、いつまで待つても歸つて来なかつた。

艶子の親元へ行つてみると、子供が一人で遊んでいる。

何か胸に嫌な物がこりかたまつている様な、變な気持になつて家へ歸つてそこらを見廻してみると、外出用の履物はないし、着物はと見て見ると、あつ——これは、タンスの中は殆ど空つぽであつた。

流石に肝を冷やして、下のおばあさんに尋ねて見たが、うす馬鹿の彼女は「朝出ていきはりましたで」

というだけで何も知らない。

お湯から歸つて来た、おかみさんに「うちのはどこへ行きました。」

と聞くと、

「あら、貴方御存知じやありませんの体が悪いから田舎へ養生に行つて来ますと、異動証明とつて来て、行李に着物詰めて、いきはりましたがな、」

卯一郎はあつけにとられて、ボカンとおかみさんの顔をみつめていた。

「そう〳〵、それに、貴方の頼みだからと言つて一万円、うちの人から借りていきましたで——」

「それは、ほんとでつか、」

「まあ、貴方は何も知りはれしまへんの、」

おかみさんは呆れて、目を丸くした

「僕、聞き始めです。」

「そんなら、まあ、あんたは、うちの家賃が五つたまつてる事も知りはれへんのでしやろな、」

さて、いよ〳〵撮影である。本物の湯の入つたバスに眞裸になつた京マチ子がその豊満な身体をとつぷりと浸した。

と、ところがである。カメラのフイルは生憎くと終りで、新しいのと取りかえねばならない。

その間に湯の方はグングンと熱さを増すのである。とう堪まらなくなつた彼女はバスを飛出してしまつたと、トタンに今度はクランクが廻つたのである。

こうしてフイルムに十駒程クッキリと京マチ子の裸体が入つたのであつた。

スター異聞

ハダカ寫眞



「痴人の愛」で、その肉感的な身体に物を言わしてエロチシズムに發散して、戰後第一の肉体スターとして賣り出し、今度は又、「羅生門」で三船敏郎と情熱的なシーンでファンをうならす京マチ子。

これにすつかり參つてしまつた某監督。簡單なホの字ではおさまらず、何んとかして、彼女の裸体を見たいものと、いろ〳〵思案の果ての名案が浮んだ。

それは「痴人の愛」の入浴の場面以上の凄いシーンの脚本を作り、それを彼女にやらせることであつた。

「えつ、家賃がたまつてますか、ぼくはあれに渡しておいたのに、」
「人にはいろんな事情もあるもんやし催促するのも悪いと思つてましたんやけどな、」

（五）

日が経つにつれて、あちらから五千円、こちらから二千円、と借金の催促に來た。

皆彼の知らない借財である、卅二三位の男と歩いているのを、よく見掛けた、という人の噂もよく聞いた、

卯一郎は、子供もその男の子だろうと思つた。時鳥が自分の卵を鶯に抱かす様に、おれはまんまと欺されていたのだ。

あんなにまで可愛がつて、抱いたり手を引いてやつた子供の守が嫌わしくなつて、艶子の親に預けつ放しにした。流石に彼女の親は恐縮して、無條件で子供の世話を引き受けた。子供は気散じで一人でよく遊んだ。

二年間も我が子と信じていたのは、外の男の子であり、妻が生んだ実の子は可愛い盛りに死んでしまつた。

一ぺんに二人の父親になつた晴々しい気持だつたあの時から、僅か二年、二人の子供を失つてしまつた。やつばりおれは子無しの孤独な男になる因縁を持つているのだと思う。

卯一郎は貧乏に育つたので、芸者の様な金のかゝる女を持つ事を、一種の見栄だと思つていた。細心に頭が働くので、女を欺した事はあつても、欺された事はない。

あの女はおれより遙かに役者が上だつた。嫌でも認めざるを得ない。

借財のある二階をいつまでも借りているわけにも行かず、借りている店先の一帖程のゆとりのある所で寝起きした。

一度に妻子を失つた一人寝の味気なさ彼は菊代を思い出して、後悔のほぞをかんだ。

夫を失い子を失つた彼女も、きつと今の自分と同じ心境だつたに違いない。

そうだ。もう一度菊代の許に帰つて、いゝ子を産ませよう彼女は喜んで俺を迎えてくれるだろう。健康な女の笑顔が目にちらついて、一日も早く菊代の廣い、暖かな胸に抱かれてみたい慾望に、彼は久し振りに石切の家へ歸つていつた。

ところが石切の家には知らない人が入つていた。隣の人に聞いてみると、

「まあ、随分お久し振りですこと、あんた奥さんのこと御存じやおまへんのか、」

「何ぞ変つたことでもおましたのか」

「十年振りに出來た、可愛い子供に死なれて、菊代さんは淋しそうにしてはりましたが、そんな苦労した女なら、よくしてくれるに違いないと、この町の有力者の多田さんの後妻に見込まれていきはりました。多田さんは先妻との間に子供がなかつたので、菊代さんも後妻いうたかつて新婚見たいなもので、えらい仲ようて、いつて直ぐ姙娠して今三月だす。ほんまにえゝ奥さんになりはりました。こゝにいては時は、毎日一生懸命ミシン踏んでよう働いてはりましたがな心掛けのよい人には、えゝむくいがあるものですわ、」

子供がないからと、籍にも入れてやらなかつた妻、十年目に子供が出來た時は、艶子に気兼ねして、子供の籍すら入れてやらなかつたのだから、自分が寄りつかねば事実上離婚であり、菊代が自分に断らず再婚しても、文句の持つていき処もない。

石切の町はずれの、芒がかすかにゆらいでいる土堤のあたりを、彼は放心した様に歩きつゞけていた。——了。



恋愛百貨店



一、昇降機とセコハン娘

「皆様、毎度ご來店下さいまして、有難うご座います。次は六階でご座います。呉服、洋服、化粧品、裝身具、御家庭用品賣場へお越しのお客様は、六階でお降り下さいませ皆様、混合まして恐れ入りますが、懐中物にご用心下さいませ」

エレベータ係のナンバーワン奈美子嬢も、これを一日百万遍唱えてハンドルを廻さないと、月末のサラリーは戴けない。一見樂なようで、その実一日立ちンぼの彼嬢達は、定刻の六時にならないと、自由な世界に解放されない、まつたく鐵詰同様の箱入娘なのである。

だが、此の箱入娘には、チヨイ〳〵変な虫がつく。二階に降りる様子もなく、三階に来ても尚その気配のない、一往復の直通組は、たいてい戰後派の接触狂なのである。

制服が夏の薄物に変つて、肌の色が透いて見える程、腰の輪廓がクツキリと浮び上るとの、余程警戒を嚴にしないとそうになるのを、何度こらえたかもしれないのだ。そうして格子の中の処女？は、丁度安物の寒暖計のように、鮨詰の超満員で蒸されては昇り、同輩達に冷かされて降りるのだ。エレベーターは上昇する……。

「次は七階でご座います。書籍、写眞機、時計、運動具、電気器具賣場でご座います。只今当店でお買上げの時計は修理無料サービス中でご座いますから、どなた様も精々ご利用下さいませ」

七階の賣場で扉を開くと、妙齢の美人が香料を漂わせてシヤナリ〳〵と降りて行く。

から押して来る。

臀部に妙な重圧を感じて、ヒヨイと後を振返えると、案に違わず眼尻を下げた痴漢がニヤリと北叟笑んでいるのだ。

ジーンと悪感が腰を顫わす、それでも大切なお客様だと思うと、いきなりその肩をポンと叩かれた。振返つて見ると、空つぽになつたエレベーターに、意外や高野君が微笑で立つている。

「まあ？意地悪ッ、びつくりしたぢやないの、蔭に隠れてたのね」

故意と恐りを誇張して、ツンと邪慳にそつぽ向く、だが喧嘩の出來る間柄は、たゞの仲ではありえない、二人つきりのエレベーターは音もなくスル〳〵と扉を閉じると、七階と八階の中間で、器用にピツタリと止められて了う、いや止つたのだ。それも当然、奈美子嬢はハンドルならぬ長身の高野君の胸に、力一杯獅噛付いているのである。眼を閉じて、背伸びをして、それから……

「ね、妾昨日産婦人科で診て貰つて來たのよ。矢張り駄目だつたワ、子宮後屈なんですつて……」

「へエー、愈々そうすると絶望かい？よつぽど君の機械は悪いんだね」

時計屋の技師高野君は、すべて複雑なものは皆キカイらしい

「まアー機械だなんて、嫌だワ、……妾をセコハンにして置いて、貴男が無理をしたからよー」

高野君の迂濶な一言に、すつかりつむじを曲げた奈美子嬢。だが、此のキカイばかりは流石の技師の高野君も手が出ないのか、舌禍撤回に、三拝九拝の詫びキツス……

一方、迷惑したのはお客様達である。昇降口に殺到したものゝ一向動く気配がない

「どうしたのでしようね、上りも下りもしませんが？」

「多分機械の故障なんでしよう」

「ハ、ハア……随分無理をして使つたンですね」

二、戀は將棋盤の上から

讀者諸氏はデパートの女店員諸嬢のストツキングに、時々異狀の有ることをご存じであろうか？電線（ケーブル）ではありませんゾ、それでは何？

えゝぢれつてえ！　つまりその、セイリビにストツキン

グが變ると云うンです。何故生理日に靴下を取換えるかつて？　そ、そこまで云わせたらもうしまいです。百聞は一見に如かず、それでも疑惑のあるご人は、一ケ月間女店員のおみあしに注意なさるといゝ、自ら筆者の言を肯定されること請合。いや、デパートの事情に精通されているご人なら、即座に納得がゆかれると思う。

「弓子さん、一寸レジスター頼むわよ。妾大急ぎで便所（ハコ）へ行つて來るから」

「アラ、あんたさつき行つたばかりぢやないの、また？」

すると弓子嬢は臆面もなく片脚を挙げてニヤツとした。

なるほど、肉色のストツキングが黒色に変つている。赤いお客様が訪れた証據なのだ。

「まア、ソメヤ（月経）だつたの、何日から？」

「今日から……妾ゆうつになるワ、女なんて本当に面倒臭いもンね」

「ほゝほゝあんたばかりぢやないワ、私だつてもう四五日もしたら、おつきあいするわよ」

斯んな密語は二千人の女休を擁している丈に、物珍らしいことではない。水密桃のようなお尻りを左右に振つて、パタ〳〵とハコ（便所）の中へ馳込んで行く。一方男子の店員達は、彼女等のストツキングに異變を認めると俄かに鋭敏な神経を動かす。お客様の前では実に石部金吉然として、勤直な物腰である彼等も元々木の股から生れた子ではない、ニキビとラヴレターの過度期が過ぎ去ると、曲りなりにも一応の性智識を身に付けている。異性の生理にタツチしたがるのも無理からぬ話だ、経期間に於ける性的欲望が非常に旺盛であることも、又受胎の懸念の無いことも、知つてゝ知らぬ顔の半兵衛だ。

「オイ君、彼女は今日からクロかい？またハコへ馳込んだぜ」

「君も仲々隅には置けないな、はゝはゝ、どうだ今晩あたり誘つたら？安心して行動が出來るゾ……」

「まさか？……然し彼女は確かに美人だね。ショツプガアルで置いとくのは勿体ない」

「だからやれと云うンだよ。僕の叔父きは産婦人科医だ万一の時には」

「オイ〳〵そりや本当かい？……実は僕ア彼女が……」

「分つてるよ。好きなンだろう？どうだ短刀直入に切り出してみないか、嫌だと云われたつて引込むンぢやないぜ、玉手、玉手と、詰めて行きやあ、戀愛將棋も終盤だよ、はゝゝゝ」

囲碁、將棋賣場の片隅で、とんでもない秘策を授けているのは、醜男の方では人後に落ちぬ前田君、けしかけられているのが好男子だが気の弱い佐川君。近くの賣場のレジスター係、デパート随一の折紙をつけられている、麗人弓子嬢を陥落させんとして先程からの作戦である。参謀は勿論前田君、突撃隊は佐川君、目差す肉体の山河へ匍匐して華々しく夜襲戦を敢行しようと云うのであるが、肝心要の突撃隊佐川君の戦意が仲々挙らない。



それと云うのが弓子嬢のあまりの美しさに、自信の無い気おくれがしていたし、もう一つは、彼女が最近どうした訳か、急に服装が素晴らしく豪勢になつてきたことの疑問だつた。だがそんな理由では前田君が承知しない、これ見よがしに將棋盤を叩いて、

「オイ、手合せもしないで駒を投出す奴があるか、悲觀するな、こゝに名人が着いている。対局はさしすめ今晩のホテルだな、はゝゝゝ」

哄笑一番、前田君には何か深い魂胆があるらしく、無理矢理に駒を持された形でその夜佐川君はとう〳〵対局？のホテルへ押込まれて了つた。

「あら、佐川さん隨分お待ちしていましたのよ、」

扉を開ける迄半信半疑でいた佐川君は、にんまりと口許をほころばせて、濃艶なベツトの中からシユミーズ一枚で立上つた、花のような弓子嬢に迎えられると、あまりのことに呆然として棒立になつた。

「ふゝふゝ、どうなすつたの変な顔なさつて？妾がお厭や？でももう帰さないワ」

盛り上つた二つの丘を憎ましく肉迫させて來た。

「あ！ど、どうするンです。ぼ、僕を……」

翌朝佐川君は悄然として將棋賣場に出勤した。睡眠不足の青い顔である。

「オイ佐川始段、昨夜の対局はどうだつた？香車の一手で攻めたンだろうなハゝゝ」

「……ところが君、一寸歩兵の悪い將棋になつたンだ。後で金將を取られてね」

「何？金を請求した？……フ1ム、それぢや彼女はパン助

画春と繪なぷあ

三泰村殿



浮世絵とゆうものが見直されて、一時あちらでも、こちらでも五十圓も、六十圓もの観覧料をとつて展覧会をひらいた事があつた。中には猟奇畫室等ともつたいぶつて、その実なんでもないものを並べて、好色人士を集めたものであつた。

見たところそれは大体あぶな絵に属するもので、宣傳につられてつめかけた人達の満足すべき種類のものではなかつた。

あぶな絵といえば一般人の想像する春畫のことではない。しかし又普通の美人立姿のようなものとは違つて、男女相愛の図とか、風に裾を吹かれている図、猫がじやれて裾が乱れている図のように、如何にもあぶない姿態を扱つた絵をさすのである。

あぶな絵とゆう言葉が如何にも「危険」のといつた意味が響いているので面白い。

風に裾を乱しているのも風呂から上つて浴衣を引掛けていても、階段を登つて白い脛が現れても、すべて肉体の中、乳、肩、脛、とか或はもつと裸体に近い程その言葉の意味が深刻になつて、秘戯圖を連想させるといつた働きもするのである。

それでは、何故あぶな絵といつたものが起つたかと思つた」

前田君は意外な報告に、忌々しそうに唇を噛んで、隣の賣場のレジスターを睨んだが、彼女の姿は今日は見えない。

「佐川君濟まなンだな勘弁してくれ……何しろ相手ア金を取込む、レジスター係だ……」

前田君はそう云つて額をゲンコでこつンと叩いた。

三、パイプ咥えた女店員

ひと頃猫も杓子も不如意な懐中を無理をして、持たぬは紳士ならざりと津々浦々に迄風靡した、街のダンデイ、シガライタアも、戯れの恋人に捨てられたように、今ではパツタリとその賣行が中絶しているが、相も変らず根強い隠勢を示して、喫煙具界に君臨しているのは、なんと云つても紫煙の寵児パイプであろう。

宣なる哉パイプには文化の裏付がある。シガライタアの唄はなくても、パイプはメロデイの波に乗つて人口に膾炙されてるではないか。

戀の潮風が吹き、波止場が歌われ、錨の帽子をシツクに冠つて、好漢マドロスが颯爽だつたンか……道理で話が分ると思つた」

前田君は意外な報告に、忌々しそうに唇を噛んで、隣の賣場のレジスターを睨んだが、彼女の姿は今日は見えない。

「佐川君濟まなンだな勘弁してくれ……何しろ相手ア金を取込む、レジスター係だ……」

前田君はそう云つて額をゲンコでこつンと叩いた。

三、パイプ咥えた女店員

ひと頃猫も杓子も不如意な懐中を無理をして、持たぬは紳士ならざりと津々浦々に迄風靡した、街のダンデイ、シガライタアも、戯れの恋人に捨てられたように、今ではパツタリとその賣行が中絶しているが、相も変らず根強い隠勢を示して、喫煙具界に君臨しているのは、なんと云つても紫煙の寵児パイプであろう。

宣なる哉パイプには文化の裏付がある。シガライタアの唄はなくても、パイプはメロデイの波に乗つて人口に膾炙されてるではないか。

戀の潮風が吹き、波止場が歌われ、錨の帽子をシツクに冠つて、好漢マドロスが颯爽と現われると、ベテランの作詞家は決してパイプを忘れはしない。マドロス＋パイプ＝ヒツト盤。正しく作詞道の方程式なのである。ところで此処にパイプで当てた大ヒツトの特ダネが、此のデパートの喫煙具賣場から放たれたのである。

「そも〳〵パイプとは、吸う物に非らず咥える物なり」

廣告宣傳史上、不朽の名言を吐いた喫煙具賣場勤務の松村君は、流石大学の文科卒業文に仲々穿つたことを云う。

「ねえ松村さん、小説や映画にはよく性愛を取扱つてあるけれど、私悲しい事には、未だ恋愛や性愛なるものの正態がハツキリと摑めないの、何か具体的な例を挙げて、私に説明して戴けません」

同じ賣場の眞世子嬢から、突然大胆極まる質問の一矢を放たれて、松村君もいさゝか恐縮の苦笑を洩して了つた。

無理もない、これが戰後派の巷に濶歩する、パスコン組のレデイの台詞ならいざしらず、彼女は嘗て華胄界に於いて名門を謳われた由緒正しき深窓の令嬢。今は沒落の悲劇をかこつて、ショツプガアルに身を落してはいるが、元は社交界に綺羅を飾つた権勢比なき斜陽華族なのだ。輕卒に

春画がゆうものは一種の教科書に過ぎないもので、それが爲に特別に風教上悪影響を及ぼすものとは考えられないが、あぶな絵の強調された作品からは、罪悪がとび出さないとは言われない。

人間の心、殊に男性の心は、露出されたものに対しては、それほど刺戟されないが、赤と白との関係からは特に強烈な魅力を感じる。病的になつてくると、不良性が露骨となつて春画よりも強い影響力を持つのが、あぶな絵である。

あぶな絵は、春画への序幕だから、春画本の序曲一枚は、必ずあぶな絵式の絵が加えられていた。この序曲だけを独立させて、多少の手心を加えて、禁令に触れない企てをしたもので、禁止令のおかげであぶな絵が生れたと言つて過言ではない。

従つてその製作の動機からしても、すべて好色的とか色情狂的見地に立つて、女性の姿態を眺めたものだから、特殊な画題として研究したり鑑賞することが必要である。

浮世絵とゆうものを見る場合、あぶな絵を度外視することは、むしろ春画以上に価値を棄てることになる若しも浮世絵から春画とあぶな絵を除いたら、残るものは、女の肖像画、役者の似顔、風景畫、靜物画、戰争画、歴史畫等で魂の抜けたものとなる。



此の意味であぶな絵と春畫とゆうものは、好色的な方面ばかりでなく十分注目に値するものなのである。

絵を勉強する人が、その修業時代に浮世絵特に春画をその習作の材料とする事は、公然の事実であり、物故した或る有名な畫伯の未亡人が畫伯が無名時代に畫きなぐつた行李一杯の春畫を賣つて安楽に余生を送つたという事は有名である。

扱えるお嬢さんではない、高度な教養を身に付けていても凡そ性愛のセーの字も彼女の青春からは隔壁されていたのである。

したがつて二千有余人を算える女店員達の中で、これ正眞正銘の純潔無垢の処女なりと、大言してあまりある子女は彼女を措いて他に無い。だから松村君も困惑して了つたのである。性愛に無智な彼女を啓蒙するのに何か好個な材料は轉つてはいまいかと、其処ら邊りをキョロ〳〵物色し始めた。ところがあつた。彼は雜多に並んだパイプの中から、いとも珍奇な恰好を呈した、太いパイプを取上げて、

「眞世子さん、君は此のパイプを見て、何か体に反応を感じる？」

尋常な手段ではまぬるいと思つたのか、彼はそれを或る場所へもつていつて、見事な表現をして見せた。ところがである、アツと羞恥に頬を染めて両手で顔を蔽うと思つたら、彼女は圓い眼をパチクリとさせて怪訝そうに見守つている丈なのだ。松村君が思案あまつて、最後の手段を講じたのは、実にその夜のホテルだつた。

途端に彼女はびつくりして

「アラー！松村さん貴男ポケツトに何か入れてらつしやるの？お尻りに堅いものが当つたワ」

頓狂に呟く詰問に狼狽して

「いや、これはその、実はパイプなんですよ」

眞つ赧になつてどうにか云い繕ろつたものの、軈て予定の行動に移つて、愈々二人で入浴にと思つた時、チラツとこぼした彼女の秘密を見て、又もや第二の難関が襲来して来た。慌てた松村君は裸だけに処置がない、矢庭にタオルで擬装したけれど、

「まア、何を持つてらつしやつたの、それ？」

「あ、これ？パ、パイプなんですよへへへ」

「アラ！お風呂の中に迄パイプを持つてらつしやるの？呆れた方ほゝほゝ」

松村君は愈々堅くなつて間題のパイプをその夜の褥にソツと持込んで行つた。

その翌朝、眞世子嬢は晴々とした顔付で、松村君に囁いた。

「ねえ松村さん、パイプつて妙なものね」

そよ風のような彼女の言葉を、微笑の面持で頷いて、彼はパイプをふかし乍ら自作の名言「パイプとは吸う物に非ず咥えるものなり」を悠々と胸中に反芻していた。

——おわり——

美人もたせかけ 現代好色 ものがたり 化物 いぎょう 業 番良夫



けんじ画

一、眼玉の飛び出た男

湯舟にこつぼり頸までつかり、雑布のような手拭で顔をこすりながら、古田留吉は、寺田菊三の巧みなお喋りを

「へえ――なるほど」

と感心して聞いている。

「飲み屋くれえするなあボロクソだ。おいッ、頼むぜ、はいよお、てなことで、あつしの顔をもつてゆきやあ、指んと湯舟につかり、熱いものだから、物屋の源助なんざあチョンチョコチンの仲良しだから屋台店のひとつぐらい今いうて明日慥えてくれるし、看板ときちや学者の米吉に書かせる、奴は靴磨きだが字はうめえんだぜ」

默つているのと凝としているのが死ぬより嫌いで、年中白轉車で飛び廻つている寺田菊三は、筋肉質のもり〳〵した躰でしやんと立上り、頭のてつぺんから、ぶるん〳〵と顔を振つて早やどぶいつものくせで、食いしばつた歯のすきまから、シーシーと息を吐いている。

留吉は、頬の垂れ下つた貧乏くさい佛面を振つて

「あつしも、何か、いい儲け口を探してるんですが、どうも――」

と、歯切れの悪い声でそういいながら栄養失調のむくんだ躰を、湯舟につけ、湯気のこもつている天井を見上げながら、厚い唇の両端を掌でこすつている。

一年ほどまえ、菊三が、一番風呂にドブンと飛びこんだとき、悠々と天井裏を眺めながら、掌で、いまのように唇の両端をこすつていた留吉の佛顔に飛沫をかけたことがあつた。

が、留吉は、いつこうに驚いた様子もなく、蛙に水をぶつかけたように、力のない細い眼をパチパチとやつたきり微動だにしない。

こりやてつきり、大きな会社の重役か、それとも役人だつたら部長級の人間に違いないと思つた菊三は

「ひや――こりや、どうも、つい、薄暗くて、いやはや、かんべんなすつて――」

と、ぺこ〳〵頭を下げた。

「いや」

留吉は、相變らず、掌で唇を撫でたりつまんだりしている。

それから菊三は、持ち前の気のよさと軽口で、腹の底まで断ち割つた話をペラ〳〵とまくしたてた。

「なんてたつて今の時代はブロカーが一番できあ、右の物を左へやるだけで元手はいらねえ、税金はかからねえ――いや――」

しまつた、この男、税務署長ぢやねえかな？と菊三は、キョロ〳〵とよく動く眼玉を剝いてチラツと留吉の顔を窺つたが

「ブ、ブロカー？て、なんでござんす」留吉は、そんなにいい商賣の名前を知らなくちやあと思い聞いてみた。

で、菊三は、ホツと肩の荷をおろし得意になつて、包み紙の新聞で覚えたむづかしい單語をちよびり混ぜて説明

てやつた。

「タン的にいえばですな、ツマリ、仲買人のことでさあ、あつしや、衣類のブローカーをやつとるんですがね—失礼でがすが、あんさん、ご商賣は？」

「屑商をやつとります」

「へえ？　屑商——というと——ふうむ」

菊三は、たまげてしまつて、飛び出た眼玉を剝くと、悠々とうそぶいている留吉の横顔をつくづく眺めた。

薄暗くてはつきりしないが、どこかでみたような顔だと思つたら屑留だ、剝げちよろけの國防色の上衣に繼ぎだらけの汚いズボン、板のような下駄をはいた垢だらけの足を引きずりながら大きな屑籠を背負つてだら〳〵歩いている姿を思い出したのだ。

しかし菊三だつて学校が嫌いで尋常六年のとき無断で家を飛び出し、呉服屋の丁稚小僧にもぐりこんでから二十五年、轉々と職を変え、魚屋をやつていたかと思うといつの間にかトラックに乘つて肥桶の運搬をしている。

終戰後だつて、闇屋にブロカーに保険屋と相變らず轉々と駈け廻つているがいつこうに金が溜らない。少し纏つた金が入るとすぐ家具を買う、料理屋からご馳走をとる、友達を呼んで気前よく振る舞う、すつからかんになれば褌まで賣りとばしてしまう。

こんな調子だから女房になつた女は長くて半年、短いのは一週間で逃げていつてしまう。で、いまだにひとり身だ。

その後、菊三は、留吉の家へいつたことはなかつたが、留吉の方から毎日のようにやつてきて、その頃から、留吉は、屑買いをやめて高尚なブローカーに轉向したのであつた。

しかし、最近、衣類が急に下落してきたし、菊三の手をくぐつた品物だから、その分だけ一割方高いものだから尙のこと留吉の商賣は上つたりで、ごろ〳〵寢そべつている女房と二人の生活にも窮してきた。

このままぢや、飢え死してしまうから、ここらで一番、焼芋屋でもおつ始めたら——しかし資本が一文もねえ——女房だつてへそくりひとつもつてる柄ぢやねえし——。

そう思うと、いま、菊三が、飲み屋を始めるといつたのが羨やましくてならなかつた。

二、狐の指輪

古ぼけた折箱を並べたような十軒長屋の格子戸をガタピシさせて這入つた所が三疊で次も三疊、その奥が四疊半裏は板塀に突き当つて犬でも尻尾がすれて充分に暴れてられないような狭いごみだらけの庭と便所。

中の間までくると、时を枕に女房がこちらにお尻を向けてエビのように折れ曲つて寢そべつている。

「おかねツ、おきろツ」

風呂屋で、菊三と話していたときと大した違いである。腕をくんだまま、足で、アツパツパのまくれあがつている女房のお尻をポンと蹴る。

「あツ！」

女房のおかねは驚いて飛びあがり、吊り上つた眼をキヨト〳〵させて苦虫をつぶしたような留吉の面を不思議そうにみつめ

「まあ、あんただつたの、あたしや狐かと思つたわよ、ね、けつたいな夢みたのよ、眞つ暗な松林を、とつとこ〳〵歩いていると、叢に、チカツと光るものがあるの、なんだろうと思つてくしたるので、口の重い留吉は、突込んでゆく余地がなく、仕方なしに、どつかりと胡座を組んで聞いていたが、やつと鉾先が納まつたので、すかさず

「おいツ！」

敵の脳天を、ハツシとひつぱたくように怒鳴つて、ます機先を制し

「聞いた風な口を聞くなツ！　おめえのような化物、仲居になろうとパン助になろうと、やき餅なんが妬くものかい」

「まあ——よくもいつたわねえ、化物？」

「ま、ま、怒るなよ、口の彈みというもんだ」

「よしてちようだいツ、そりや、あたしや、眼が吊り上つてるから狐の化物みたいだけど、そんな女に惚れたのは誰なんだい？　その、むくんだ、貧亡面の、おまえさんちやないか、あたしも馬鹿だつたよ、年中腹ぺこで、ああ、いつそ、首でもくくつて死にたいよ」

かねは、綿のはみ出た布團の上へ、四十にしてはむつちりしている腕も露わに肘をつき、だらりと垂れた両手の上へ顔を乘せて泣き出した。

寝巻兼用の、皺くちやのアッパッパの下に息づいている肉体は、まだ、五年や十年女として通用しそうな弾力が残つている、しかし留吉は近頃、頓に精力が衰え、大きな声を出したり、ちよつと急いで歩いたりすると直ぐ呼吸ぎれがするほどだから、さして慾情も起らないが、十五年この方惚れ通したかねに、いやらしい男の相手をさせるのは嫌だつた。もつと、まともな副業がさせたかつたが、家が貧しくて、小さい時からろくに学校もゆけず、子守から女中、それから女給になつて留吉と一緒になつたんだから裁縫ひとつできないし、といつて、夕刊賣りや靴みがきのような仕事は水商賣をいちどでもやつた彼女は、とろくさくて性に合わず、だから、かねは、仲居になるといいはるのだ。

——よし、商賣のもとでさえ出來ればやめさせればいい——。

留吉は、そう思つて、急にやさしく

「おい、かね、もう泣くなよ、俺や、ちよつといいすぎた、な、かんべんしろよ、今度思いきつて商賣替えをするその資本が出來るまでいいから、ひとつ、やつてくれるか？」

かねは、むつくり頭をあげて、垢と涙で汚れている、ソバカスの浮いた眼の縁をこすりながら

「ええ、どんなことでもやるつもり——いくらあつたらいいの？」

「まだ、そこまではきめてねえんだが今日、鳳呂屋で、菊三に会つたら、飲み屋をやるつていつてたから、俺もひとつ、いや、飲み屋なんて大それたことをするにや、少なくとも五万円はいるから、焼芋屋でもお つ始めようかと」

「駄目よ、焼芋屋なんか、ね、飲み屋やりなさいな、もちろん屋台店よ、とんかつ、つて粋なのれんを吊つて、そんなら、あたしやひとりだつてできるしさ、あんたは、仕入れをやつてくれれば——」

「それにこしたことはねえんだが、第一、資本が——」

「だいじようぶよ、五万ありやいいんでしよう？　あたしや自信あるわよ、これでも、風呂屋で磨いて、こつてり化粧すりや——ね、ほら、いつか話してたみどりさん、あんた知つてるでしよう？一緒に女給してた、長い顔の、茶目の——」

「うんそうだつたかな？——」

「みどりさんは、大きなことをやつてんのよ、輪タクの運轉手と一緒になつて——大したものよ、その亭主が客を呼んでくるの、素人の奥さんという布れ込みで、あきれちやうわね、でも、ひと晩で、万という金にぎることもあるつて話よ」

「まさか、おまえ、そんなことするつもりぢやねえだろうな」

「でも——あんたのためだつたら、したつていいと思つてるの——あたし、もう、お婆さんだし、あんただつて、もう、あたしのからだ、そう、ねうちがあるとは思つてないでしよう？——ね、もとでいらずで嫌だつたらやめればいいんだし」

「そ、そんな、無茶な——」

ぢや、もとで、どうするの？　仲居だつたら五万とまとまつた金、二年したつてたまりつこないし——」

「焼芋屋でいいぢやないか、それなら五千か一万で——」

「しみつたれね、あんたは、同じやるんだつたらもつと大きなこと考えたらどう？　あたしや、こんな貧乏世帯、もうコリコリだよ、ね、たつた五晩でいいのよ、あたしだつて、そりや、そんなことしたくないわ、でも、あんたのためを思つて——それに、あたし、不感性だからいいぢやないの——」

「おい〳〵」

「なぜとめるの？　とめる甲斐性があつたら明日からでもたんまり白いご飯がいただけるような儲け口探しとくれツ、へツ、できもしないくせに、あたしはね、あんたのために、このからだをギセイにしようとまで思つてるのよ——いいわ、そんな分らず屋の亭主だつたら、今日かぎり出てゆきますから」

「そ、そりやあおめえ——」

留吉は、そういつてじつと、いつもに似合わぬ悲痛な面持でじつと考えこんだ。

三、女は化物

女房の奴、みどりとかいう淫賣女の家へ通い出してから、もう五晩目だ。

風呂へいつて、ちよつと小綺麗に髪を結い、四十面さげてべたべた白粉を塗りくさつて

「いつてくるわよ」つてカラコロ〳〵下駄の音させて出て行きやがつたとき、土間まで飛び降り、はだしで追つかけようとしたが——チエツ、なぜあのとき、呼び止めなかつたんだろう——やつぱし金だ〳〵、五万円の金



欲しさに、五晩ぐらいよその男に貸したつて減るものぢやねえし、と、たしかそう思つて、布團をかむつて口惜しがつて寝たつけ——それから、朝方、「ちよいと、おまえさん」つて表戸を叩きやがるから、慌てて開けてやると女つて化物やなあ、十五年も前、惚れたときとおんなじ面で、きゆつと眼を吊りあげて、ソバカスや小皺を厚化粧でかくし、下唇だけまんまるく口紅をつけて、にいつと笑やがつたつけ、眼鼻もまともにくつついてるし、根が色白だから「齢は三十つてごまかしてきたの」つてぬかしやがつたが、どうして〳〵じゆうぶん通用すらあ——。

それから、借物の、眞つ赤な長襦袢ひとつになつて、白粉くさいからだで俺の傍へもぐりこみやがつたつけ、うへえ、俺や、昔にかえつたように胸がうづいたな——そうだ、惚れ直したんだ——いけねえ〳〵、ちくしようツ——それからだ、男といちやついた話を、眼にうつるように、こまかく話しやがつて、まて〳〵、俺も、妬けてたまらなかつたからつい根堀り葉堀り聞き訊したんだつけ——でも、今日こそ帰えつてみされ、金輪際許しやしねえぞ——。

トントントン。

「おまえさん、あたしだよ。」

いつの間に寝入つたのか、そんな声にふと眼を覚ますと、もう明け方らしく、破れ障子がぼうつと明るんでいる。

「おまえさんたら、はやく開けとくれよ」

「うるせえな、待つとれツ」

留吉は、ぶつくさいいながら表戸を開けると、あばら家に鶴でも飛びこんできたみたいに女房のかねが派手な着物の袖を翻えして這入つてきて、色がつきそうなボロ疊の上を新しい白足袋の足でツツツと奥へ進み、嬉しそうに声をはづませ

「おまえさん、いいものを貰つてきたよ、さあ、おたべよ」

そういつて、奥の間へべつたりと座り、すしの折包みを万年床へ置く。

——ちくしようツ、どうしてくれようと留吉は、女房が、あまりいそ〳〵しているので恐しく不機嫌な顔をしながら、のつそりと奥の間へひきかえすときよつとした。

近年匂いもかいだことのないすしの折包みを前にして女房が、花のようにこちらを向いて笑つている。

「なんだ、そりや」

「すしですよ、さあ、おあがりなさい」

女房は、もう、紐を解きにかかる。

「おつととツ待ちねえ」

のどから手が出ているのをぐつと抑えて留吉は、

「いつのもの男に貰つたんだろう——いらねえぞ」

そういつて、ゴクリと唾を飲んでうそぶいた。

「まだ妬いてんのね、おまえさん、ほほほ、今日は、たんまり貰つてきたんだよ、ほら、二千円だよ、いつもならそこから輪タクのおつちやんと間代に半分もひかれるんだがね、ねだつて千円も貰つたんだよ、ふふふ、あの男つたら、自轉車屋の息子だけど、すつかり夢中になつて毎日会いたいつていうんだよ、いくらでも金持つてんのねえ」

「馬鹿野郎ツ——おめえ、惚れやがつたな？——」

「まあ、なんてこというんだい、あたしや、どれだけ辛い思いをしているかー」

「辛い？——どこが辛いんだ若い男に惚れられていい気になりやがつて、なんでえ、その助平面は、さあ、約束通り五晩目だ、かくさずにとつととと出せツ、五万円溜つてる筈だ、」

留吉は、嫉妬に眼がくらみ、ぐつと右手を突き出してがなりたてた。

「出さねえかツ！」

と、女房の細い眉がキリキリと震え瞼が赤くなり、今にも涙が飛び出しそうになつた。

「まあツ！く、くやしいツ！」

叫んで、かねは、狂つたように留吉の胸倉へむしやぶりついた。

「な、なにをするツ！」

慌てて、留吉は、傍のすしの折箱をひつつかむと、いきなり女房の頬つべたをひつぱたいた。

「きやツ」

女房は、トテツもない声をはり上げて両手を掩うと、どつとその場へ泣き崩れた。

留吉は、ちよつと、顔色を變えて立上ると、つかれたように表へ飛び出していつた。

そして、狭い裏通りの、ちつぽけな家の前までくると、格子戸をトントンと叩いた。

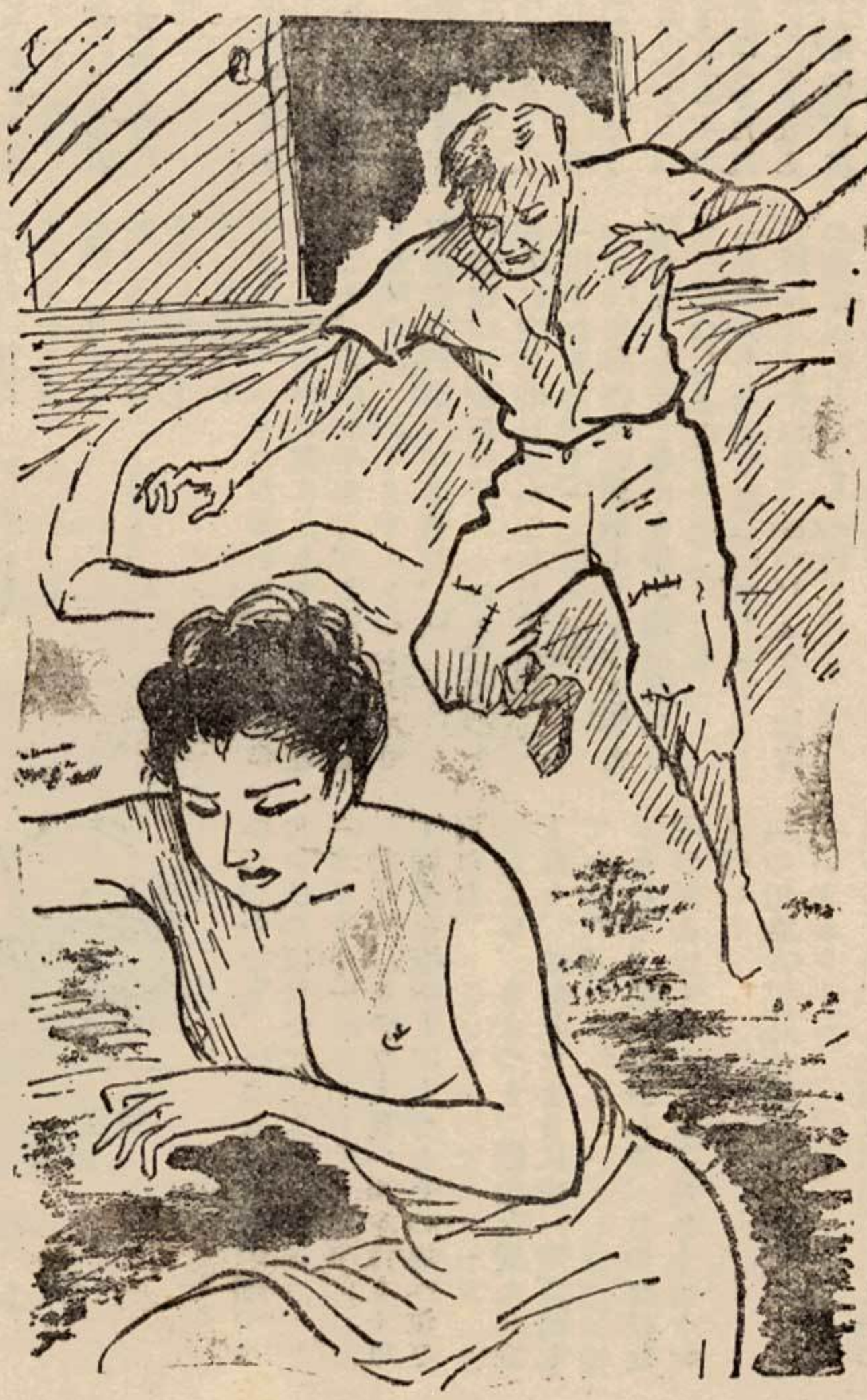
「寺田さん、——菊三さあん」

「いよおツ！」

おつそろしく元気な声がしたと思つたら、床がへし折れるような音がして



障子の破れ目から飛び出た眼玉がぎょろりとのぞき
「やツ、留さんが、はいれ〳〵」
ガチヤ〳〵と錠を外して
「いま飯を炊いてるところだ、さあ、上りねえ」
留吉は、美味そうな飯の匂いに、鼻をひく〳〵させながら、腰を屈めて中の間の三疊までやつてくると、胡座をくんで、じろ〳〵となんにもない埃だらけの室内を見渡した。
「ヘツヘツ、きれえなもんだろう、昨日すつかり賣り拂つちまつたんだ。どうだ、でけえことおつ始めようと思つたら、こういう思いきつたシヨチをとらなくつちやあ駄目だ、もう、ぐいツと札束握つてるんだぜ、近い内に飲み屋おつ始める、いま場所をセンテイ中だ、それさえきまりや明日からでも、へいツ、いらつしやいツて景気のいいところをだして、なあに俺がやつたらひとに負けるもんか、友達だけでも三百人、どうだ、留さん、驚いたか、まあ店開きにやつてきな、きゆつと一杯いや、銚子の二本や三本ただで飲ませるぜ」
「ほ——すまないね」
「さあ、飯だ、留さん、食いねえ、ほら、昨日買つてきたこんぶの佃煮といかの塩からがある」
新聞紙にくるんた竹の皮をガサ〳〵拡げて留吉の前へ置き、せか〳〵と立上つて流しにひつくりかえつている茶椀をひつつかみ、首に巻きつけた汚ならしい手拭でちよつと拭いて
「さあ、食いねえ〳〵」
「いつも、すまねえな」
飢えた狼のようにガツガツと、みる〳〵うちに一升飯を平らげると菊三は竹の皮包みを新聞紙ごと丸めてポイと土間に抛り投げ
「さあ忙しい、ちよいと出かけるぜ」
もう立上つて、菊三は、表の方へゆこうとする。
「あ、ちよつと、菊三さん」
「なんです？あ、用事があつたんだろうな、朝つぱらからやつてきて、さあ聞こうぜ、いつとくれ」
そういつた菊三は、貧乏ゆすりをしながら眼をキヨロつかせている。
「じつは、困つたことが起きたんだが」
そう前置して、留吉は、女房のいきさつをすつかり話した。
ふん〳〵と噛みつくような勢いで聞いていた菊三は話が濟むと
「なあんだ、そんなことけえ」
と、障子が響くような声でカラカラと笑つた、と、たちまち眞顔になつて留吉の顔を覗きこみ
「留さん、しつかりしなせえよ、おまえさんの目の前にや、いま、福の神がぶら下つてるんだぜくよ〳〵しなさんな、女つてもなあ、幾ら使つたつて石からな、さあて、おめえ、知つとるかな？　水月、連れこみ專門の宿屋だ」
「あそこなら知つとる、十年ほど前一度泊つたことがある」
「そりやいい、で、そこへ男を引つぱり込むんだ。杉浦つて自轉車屋の伜だつたな、むしか電話がある筈だ、早速おかみさんに電話をかけて貰つてそこへ泊めるんだ」
「そしてどうするんだね」
「うといなあ、おまえさんは。それからだ、あつしがついてるから安心しねえ、あの近くにうどん屋があつたな、



あそこで、張つてるんだ、おかみさんと杉浦の伜がてくてくやつてくると、水月へ這入つて、四疊半で、その頃を見計つて、おめえが乘り込むつて寸法だ」

「えツ？——」

「まあ〳〵しまいまで聞きねえよ、そこでだ、おめえ、むくんでるから、暗がりぢや堂々たる格福にみえる、ちよいと髭でも生やすといいんだが——まづそこでだ、ガラツト襖を開けて、そつくりかえつてな、やいツ！ひとの女房とりやがつて、打ち殺してくれるわツ！と思いきり大声で怒鳴るんだ」

「ちよ、ちよつと待つてくれ」

「うるせえな、すると、杉浦の坊主、気が弱えから平あやまり、しかし、おめえ、気をゆるめちやいけねえ一段と大声で殺してくれるわツとがなりたてるんだ。すると、あつしが、パタ〳〵と駈けていつて、まあ〳〵ご両人と、そこはまかしときねえ、ベンゼンにかけちや、こつちのもんだ、ペラ〳〵とまくしたてて、うまく四五万ばつくつてやるからな、なあ、あいつら五万や十万紙屑ぐらいにしきや思つてねえから喜こんで出すよ、どうだ、立派なケイカクだろう、そうすりや、おめえと二人で仲良く軒を並べて一杯屋としやれこめるんだぜ」

留吉はあまりも素晴らしい菊三の頭脳にすつかり感心してしまつた。

「どうだ、俺が尻押した、大船に乘つた気で、パアツとひとつやらかそうぢやねえか、おつと、おめえはここで待つてな、俺がうまくおかみさんに話しつやるからな、ぢや、いつてくるぜ」

「あ、ちよ、ちよつと——」

「留さん、でけえことは思いきりが肝心だぜ、おとなしく待つてな」

もう、菊三は、表戸をガラ〳〵と開けて、表へ出ていつてしまつた。

秋宵猟奇　博徒の婿入奇譚

博奕打ちの息子で目と鼻が一處に寄つたような世にも珍しい男があつた。

その兩親が、息子の行末を案じている時、ある金持の家でその一人娘に天下一の美男子を婿にしたいと言つて求めているということを傳え聞いて、自分の息子を婿入りさせたいと思い、それに應じたので、金持の家では非常に喜び、何んな素晴しい美男子であろうかと樂しみにしながら、結婚の日取りをきめてしまつた

愈々婚禮の夜となつた。それだの借りて来た衣裳を息子に着せ、月明りに顔を見せないようにして、家に入つた。

そして花嫁花婿がいよ〳〵一緒に寢るという時、博奕打ちの一人が、金持の家の天井に上つて、二人の寢ている部屋の天井裏をみし〳〵と音を立てゝ歩き廻り、恐ろしげな呻き聲をあげて、

「一体、お前は命と顔とどちらが惜しいと思うか」

と訊いた。そこで、婿はどう答えたものであろうかと、嫁の兩親にきくと、

「顔なぞどうでもよいたゞ命だけ助けて貰いなさい」

と言つた時天井の鬼が忽ち怒號して去つた。婿は顔を抱えて伏し轉び苦しんだ

人々は驚いて灯をともして婿の顔をのぞくと、此れ又、目と鼻と一緒になつた天下一の醜男であつたので魂を消す程驚いた。

一方、男は自分の顔を鏡に映しながら

「こんな家に婿入りしたばかりに、美しい顔が、こんなになつてしまつたのだ」

と歎いたので、嫁の兩親はその儘りであるという事に氣がつかず、心から氣の毒がつて、その後末長く可愛いゝ嫁の婿として大事にしたという。

四、白狐登場

女房のかねは、すしの折箱で頬つぺたを叩かれて、

「ちくしよツ！」

狐のように眼を吊り上げ、唇を尖らせ、ギロツと鋭く留吉をにらみつけ喰いついてやろうと振り向いたが影も形もない。

「ど、どこへ失せやがつたツ出てこいツ」

けたたましく叫んだが返事もない。

で、腹立ちまぎれに立上り、水屋の上にある目覚し時計を摑むとチヤンチヤラチヤンと土間へ投げつけ、破れた網戸に手を突つ込んで茶椀を三つ四つ摑んで投げたが、

この時、忙しそうな足音がして表戸がガラ〳〵と開き

「今日あ、奥さんツ、いらつしやいますか」

と菊三が、眼を剝いて突立つている。

「あらツ！」

かねは驚いて菊三の顔をみ上げた。

菊三は、どしんと胡座をかいて

「いま、留さんから、お宅の話をすつかり聞きやしたが、まことに、はやいおや？　眼の緣、どうなさつた、はれてますぜ、大変だツ」

ペロツと指先を舐めて、唾を塗つてやろうとするので、慌てて身をいざつたかねは

「いいんですのよ、いま、唾をつけましたから」

「そうでずか？——ぢや、タントウ、チヨクニユウに申しやすがね」

菊三は、立て板に水を流すようにケイカクの内容を微に入り細をうがつて喋りたてた。だまつて聞いていたかねは、こんな、狐を馬に乘せたような男に家の秘密を話し、その上あたしを利用して美人局までやろうと企らんでいる留吉が、益々憎くなつてきた。

それに、菊三も、裏で、どんなことを考えているか知れないのに——。

そう思いながら眞面目な顔を裝い、

「承知しました。早速電話をかけて——ええ、たいじようぶよ、あのひとつたらあたしの手足みたいなんだから」

「そ、そうですかい、すみませんなあ留さん小踊りして喜びますぜ、さあ、忙しい忙しい」

そういつたかと思うと、シャンと立上つて、もう表へ飛び出している。

くすりと笑いながら、菊三の後姿を見送つていたかねは、これは面白くなつてきたと、自分も慌てて立上り、下駄を突つかけると表へ飛び出した。

先づ腹をこしらえてからと、近くの料理屋へ這入つてうなぎ丼二杯たいらげ、

「ちよつとお電話を」

そういつて、杉浦源吉を呼び出すと女のような黄色い声が

「OK、ぢや、すぐ行くから松竹座の前で待つてておくれ」

かねは、ガチヤリと電話を切つて、ニヤリと笑つた。

五、狐の踊り

映画館を出ると、打合わした時間まで間があるので、すし屋の二階で腹をこしらえてちよつと晝寢をしてから、ぶら〳〵歩いてゆくと、案の定、薄汚いうどん屋のよしずの蔭に、留吉と菊三が、狐に化かされて牛の尻でも覗いているような恰好でこちらを覗つている。

かねは、おかしくなつて、袖を振つて合図をしてやると、二人は、踊り上つて、掌で口を掩つて姿をかくした。

案内を乞うて旅館水月の二階の六疊に落ちついて、女中の出した冷たい茶をすすると、まだ明るかつたが、邪魔の這入るまでに——

と、かねは、早速帶を解きにかかつた。

杉油の腕の時計をみると九時五分前そろ〳〵やつてくるな——よし、卒倒するような場面をみせてやろう、とかねは、耳を澄まして外の気配を覗つた。

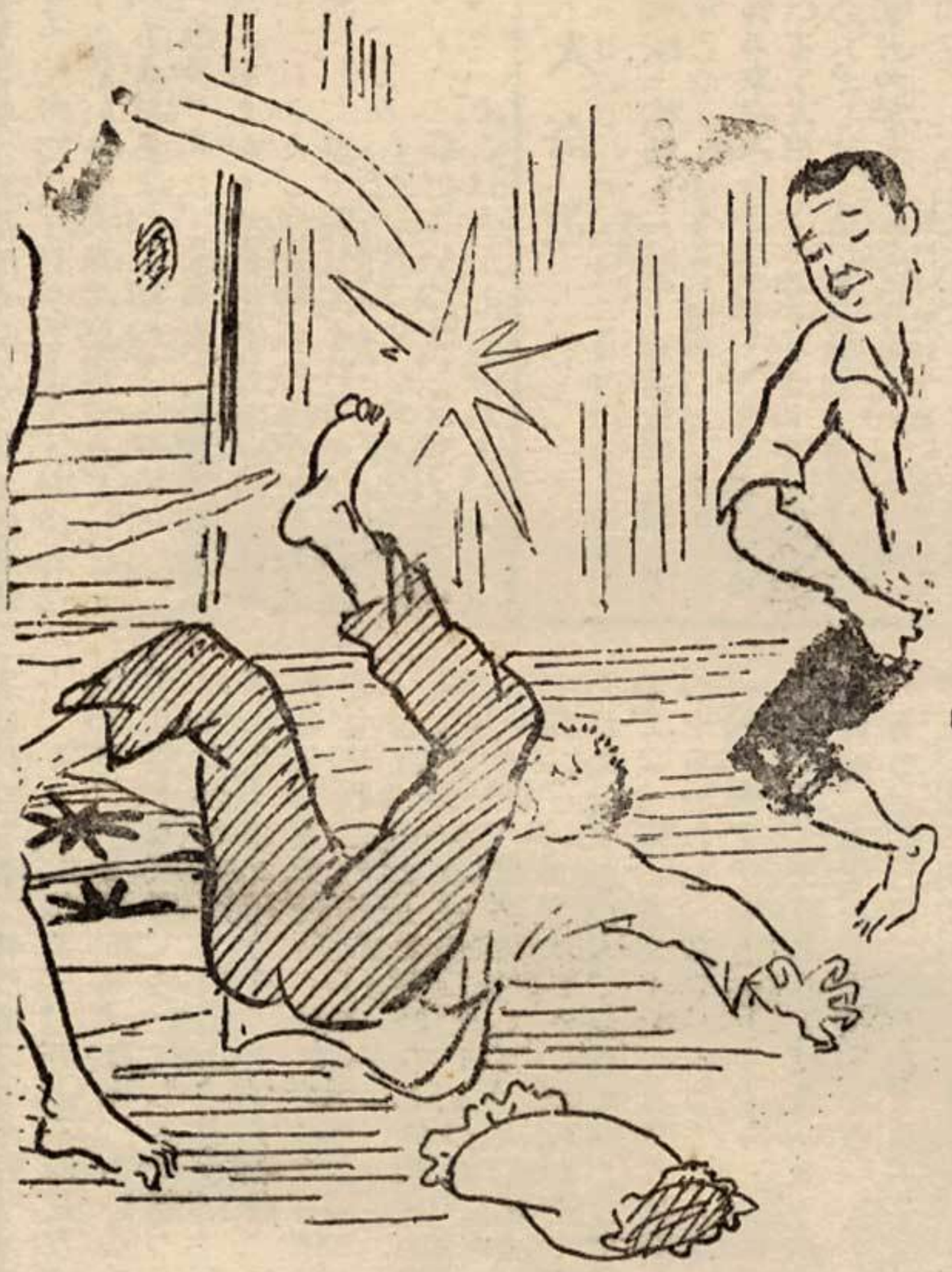
留吉は、故意にかねが細目に開けておいた障子の隙間に顔を寄せ、片目を閉ぢて、そおつと中を覗きこんだ。

「ふうむ、ち、く、しよう！」

留吉は、かあつとのぼせ上り、ガラ〳〵ツと障子を開けると

「おかねッ！」

「きやツ！」



かねは、眞つ赤な腰巻をパツと飜えして股も露わに三間あまり吹つ飛んだ。

杉浦は、猟犬のように飛び起きると素早やくかねとは反対側の隅つこにかがみこんで、いつの間に摑んだのか灰皿持つて、キツと留吉の様子を覗つた。

留吉は、女房があられもない恰好で慌てて起き上り、狐のような眼を大きく開け、前を合わしたり膝をさすつたりしているのをみると、火の玉のように逆上し、猛然と駈けより、崩れた髪を引つ摑むと、ぐいつと引き寄せ

「この野郎ツ！　殺してくれるわツ！」

痛いので、両手で髪をつかんで悲鳴をあげて暴れ廻るかねの横つ面を、呼吸もつかずに殴り飛ばした。

——がつちりした凄えからだをしてやがる。うかつに寄れねえ——。

杉浦源吉は、そう思つたけれど、こう乱暴に取扱われちや、色男として手をこまぬいているわけにはゆかねえと摑んだ灰皿を、留吉めがけてハツシと投げつけた。

「いてえツ！」

尾をひいて飛び散る灰と共に、留吉の石頭にぶつかつた瀬戸の灰皿は、粉みじんにくだけ散り、パツと吸殻と灰が雨のように留吉の頭から顔、肩と一面に降りかかる。

「プツプツプツ！」

留吉は、灰を吹きながら、頭を抑えたり、灰を拂いのけたりしていると胸ぐらを、物凄い力で摑まれ、あツと思つた瞬間、すうつと躰が宙に浮いて吹つ飛んだ拍子に、襖に突き当り、どしんと隣りの部屋で尻餅をついたが、それつきり、うーんと唸つて眼を廻してしまつた。

バタバタバタ

忙しい足音がして、菊三が、飛び出た眼玉をきよろつかせて駈けつけてきて、汚い乱杭歯を剝き出して

「ちよつと待つたあツ！」

野球のセーフのように腰を屈めて両手を擴げ、留吉と杉浦と、おろ〳〵しているかねとを、キヨロツキヨロツとひと通り見廻してから

「杉浦さんとやら、ま、まあ、そこはあつしにおまかせなすつて——奥さん

！　そんな格好ぢやみつともない、」
脱き捨てた着物を摑んで、ポイとかねに抛つてやり、折から
「ど、どうしたんですのよ、騒々しい」
叫びながら駈けつけて來た女將さんの肩をポンと叩いて階段にまで突き返えし、
「女將さん、なんでもないんだ、慌てちやいけない。さあ下へ降りたり降りたり、あとはあつしが、うまく取りつくらうからな」
そういつて、とう〳〵女將を階下へ押しやつてしまい、留吉の傍へ駈け寄ると、
「留さんツ！しつかりしねえよツ！」
蒼つぽく首つ玉を抱えて抱き起こし背中をびしやツとどやしつけた。
「おツ！？？」
正気にかえつた留吉は、とぼけた狸のような面でキヨロ〳〵辺りを見廻したが、急に顔を掩うと、わあ〳〵と子供のように泣き出した。
「なんだ、みつともねえ、さあ、おめえが、いちや話が出來ねえ、降りた〳〵」
留吉の腕をとつて引きずるように部屋の外へ押し出し、ピタリと障子を締め切り、
「さあ、杉浦さん、おかみさん、ちよつとそこへお座りなせえ、すんだことは仕方がねえ、なあ、杉浦さんとやらおめえさんもひとの嬶を默つて寢とり亭主を部屋の外まで抛り投げ、運よく呼吸を吹きかえしたからよかつたものの、もし、あつしがいなくつて活を入れなかつたら、おめえは死刑か無期徒刑だ、いや〳〵、おめえさんだつていいてえことは山程あろうが、盜人も三分の理窟、こりや誰が考えたつておめえさんが悪い、そこでだ、おめえさんも悪いと知つたらすつぱりと諦め、慰藉料といやあ聞こえが悪いが、ほんの鼻くそほどでいいから五万円ほど金庫の中で唸つている札束の端くれを引つこ抜いて留さんにホドコシてやりや留さんだつて、なあに、あつしが得心させるから、どうですい？　たつたそれだけでパンパンと片がつくんですぜ」
杉浦源吉は、ケロリとした顔で、唾を飛ばしてまくしたてる菊三のひよつとこ面を面白そうに眺めながら、スパリ〳〵と煙草を吸つていたが
「話はよく分りました。もういうことはありませんか？——ぢや、おかねさんゆきましよう」
立上つて二人が出て行こうとするので、慌てた菊三が、パツと杉浦の着物の袖を摑んで
「待つたあツ！　杉浦さんツ！　それぢや、あつしは、狐につままれたようなもんだ。さあ、五万円、出すか出さんかはつきりいつて貰わなきや、この袖死んでも離さねえツ」
菊三は、歌舞伎役者のように片膝ついてぎよろりと眼を剝いた。



「ホホホ」
女のように笑つて杉浦は
「ぢや、五万円渡すからそこ離しとくれ」
ひよいと袖を拂つて廊下へ出た。
「ま、まつたあツ！　杉浦さあんツ！　い、いつ渡すんだあツ！」
追いすがつて、また杉浦の袖をとらえようとするので、パンとその手を叩いて杉浦は
「おとといおいで」
「な、なにツ！」
菊三は一生一代の跳躍を試みて、ひゆつと杉浦めがけて飛びついた。
「あツ！」
飛びのいたかねは、白いかたびら姿の杉浦が、ついそこにいた筈なのに、どしん！　と大きな音がして長たらしい菊三のからだが手足を思いきり伸ばして蛙でもぶつけたように俯伏している。
「おかねさん、早やく」
いつの間に吹つ飛んだのか杉浦源吉の白いかたびら姿が薄暗い廊下の彼方で、手をひつこめた袖口をひよい〳〵振りながらまねいている。
おかねは、夢でみた白狐をふと思い出して
「きやあツ！」
叫ぶと同時に、堅く手を握りしめたまま卒倒してしまつた。
「間男するな淫賣するな」
おかねは、昏睡狀態の暗闇で、大きなダイヤの指輪の中に無數の白狐が、太い尾をぴよん〳〵振りながら踊つている夢をみていた。」
——終——

或る情死未遂者の告白

邪恋の果

三部 貶



一

嫂は容貌は特に美しいとゆうのではありませんでしたが均整がとれてむっちりと脂肪ののつた白い肩や胸、お厚く盛り上つた腰や太股などは今でも私の情欲を唆るには、余りにも刺戟が多過ぎるのでした。

嫂は二人兄弟の私の兄の嫁で、兄と結婚して半年も経たないうちに、兄を戦場へ送り、二年目に兄を中支の戦線で喪つたのでした。

つい最近、私が復員して来る迄、七ケ年とゆう長い間、味気ない砂を噛るような月日をよんどころない空虚さに甘んじながら、年老いた私の両親を見守つて来たのです。

嫂は私が復員した時から何かと親切にして呉れましたし、私の世話をすることが何か楽しい様でもありました。私も又この三十才前の未亡人の行末を案ずる気持で一杯でした。

だから、嫂の実家から——子供もないところから——と引き取りに来た時も、

「まあ、いゝじやありませんか、七年もの間随分苦労されたんだから、嫂さんの気の向いた様にしてやりましようよ。」

と双方の親達を納得させたものでした。そのして嫂の安心しきつた淋しい顔を見ると、それで満足していた私でありました。

そんな或る日の夕方、私に着物を着せかけていた彼女が、

「まあ、透さん、あんた、とても主人に似てるわね、私、どうかした時思わず間違えることがあるのよ。」

と冗談ともつかず言つた事もありました。

そんな時に限つて、しみじみこんな境涯にある女の哀れさを感じるのでした。

そして一ケ月は夢のように過ぎました。此の頃になると、戦争病でぶく〳〵蒼腫れしていた私の身体もどうやら元通りになつてきましたし性来の商売気から、自家の田畑の少いのを理由に隣村の釜田炭坑の市場に店を出すことにしました。

品物は野菜や果物でしたが、品物が少なかつた頃だつただけに、私の思い切つた身体の使い方が効を奏したものか、半年も経たぬうちに、もう幾らか余裕が出来て来ました。

それは蒸々する夜でした。私はいつもの様に店仕舞すると、その夜に限つて妙にアルコールが欲しくて、同じ市場のおでん屋で、したゝかカストリを飲み、いゝ氣持で家に帰つたのはもう八時を過ぎていました。

嫂は茶の間で一人で待つていましたが、私の帰るのを待ち構えていたようにに言いかけました。

「合田の伯父さんが急に悪いとかで、晝から迎えにお父さんもお母さんもお出かけになりましたが……」

「あゝ、そうですか、で嫂さん御飯まだでしよう」

もう八時過ぎだとゆうのに、夕御飯も食べずにいる彼女が不憫で、伯父の安否も訊かず私は想わずそう問い返しました。

「はあ、でも、私はいゝんですの」

やつれた首筋を見せて、はにかみ乍らうつむきました。そんな仕草の中に私は今迄にない思いにかられ、しいんと静まり返えつた人里離れた百姓家の寂けさが、息づまるように迫つてきて彼女と二人で相対坐しているのさえ居たたまれない気持に襲われるのでした。

今迄じつとうつむいていた嫂が

「透さん、私、相談があるんだけど」

とふつくらと肉の盛り上つた膝の上にのせていた両手を揉みながら顔を上げたのです。

「はあ、何にか、私に出来ることなら」

「えゝ、実は私の事ですの、何にか私に出来る仕事はないものでしようか、出来ることなら透さんの仕事、手傳わして戴けないかしら」

私は初め彼女の言うことが、何のことか分らず返事をするのもためらつていました。

「もう此れ以上、このまゝの狀態では皆さんに迷惑をかけるばかりですからそれかと言つて……」

「それかと言つて、嫂さん、何にか」

私は咄嗟にそこ迄言いかけてハツとしました。丸顔の彼女の顔がサツと崩れたと思うとわツと泣き伏したからです。

私は余りの突然さに狼狽して、どうしていゝか爲すすべも知りませんでした。親切にすればする程、泣き沈んでゆく嫂を抱きながら気がついてみると何時の間にか自分自身取り乱しているのに気がつきました。

それから三ケ月、二人の間は急速に結びついてゆきました。來る日も來る日も、両親の眼をぬすんでは、二人きりの悦楽に耽つてゆくのでした。

七年もの間、じつと空閨を堪えてきた爛熟期の女と、悲慘な抑留生活から開放されて帰つてきた逞ましい男との邪戀は、もう嫂とか義弟とかゆう垣はありませんでした。

時には私の市場の奥の六疊で一夜を明かすこともありましたが、そんな時には、彼女は父母の起きない朝早い中に徒歩で十五分もかゝる家へ歸つてゆくのでした。

二

私と一緒にいるとなんとなく心がはづむ様でしたし、何時も私の傍でじつとしているだけで滿足している彼女でした。

しかし今朝の嫂の口から飛び出した言葉には驚きました。姙娠だとゆうのです。しかも三ケ月だとゆう嫂の告白。いつもなら、とつくにこの市場から家へ帰つている筈なのに、今朝はその事で帰りきれないのでいる彼女だつたのです。

「ふゝゝゝ。透さん、なんなの深刻な顔をして」

窓から斜めに射し込んでいる午近い陽ざしの中で、同じ寝床にはらばい乍ら煙草を吸つている私の肩を、嫂はむき出しの丸い脂肪の乘つた肩をすり寄せて、私の顔をまじ〳〵と見つめるのでした。

「うん、何んでもないサ、一寸商賣のことが気になるもんでネ」

「ふゝゝ嘘、嘘、私がお腹のことなんか話したもんだから、厭になつたんでしよう」

「そ、そんな、馬鹿だなあ……嫂さんそんな事あるもんですか」「そうよ。きつとそうだから、「いやだなあ、そんな一人きめ……」

とは言つたものゝ、事実私はその時この爛れきつた生活を精算しようとそしてお腹の子供もなんとか処置しようと、——何度も彼女に話しかけようとして、その度毎に嫂の瞬間的な驚きを思い浮べて、どうしても言い出せないでいるのでした。

私はこれ迄の嫂との夜毎の情痴にもさ程の醜悪さを感じなかつた筈なのに改つて姙娠を告げられてみると、どつと反省みたいなものに襲われ、所詮一緒になれぬ二人であつてみれば、と、自分の今迄の迂濶さに口惜しいのでした。

「嫂さん、いつそのこと流そうかね」

私は思い迷つた挙句、家でどんなに心配しているか知れない両親を思い浮かべながら、思いきつて口を切りました。

「ねえ、そうしよう、嫂さんも今迄に一度だつて後指をさゝれた事のない人だし、將來のこともある事だから、ね、え、嫂さんそうしよう」

私がそこ迄一息に言いかけた時

「えツ、何なの透さん！」

彼女は大きな声で飛び起きると、如何にも腹立たしい様にシミーズ一枚の姿で坐り直すと、私の顔をまじ〳〵と見つめるのでした。

「私、いやよ、私いや、どんな事になつたつて流すなんていや貴方に捨てられたつて、それだけはいやだわ。」

まるで憑かれたようにいきなり私にむしやぶりついて泣き伏したのです。

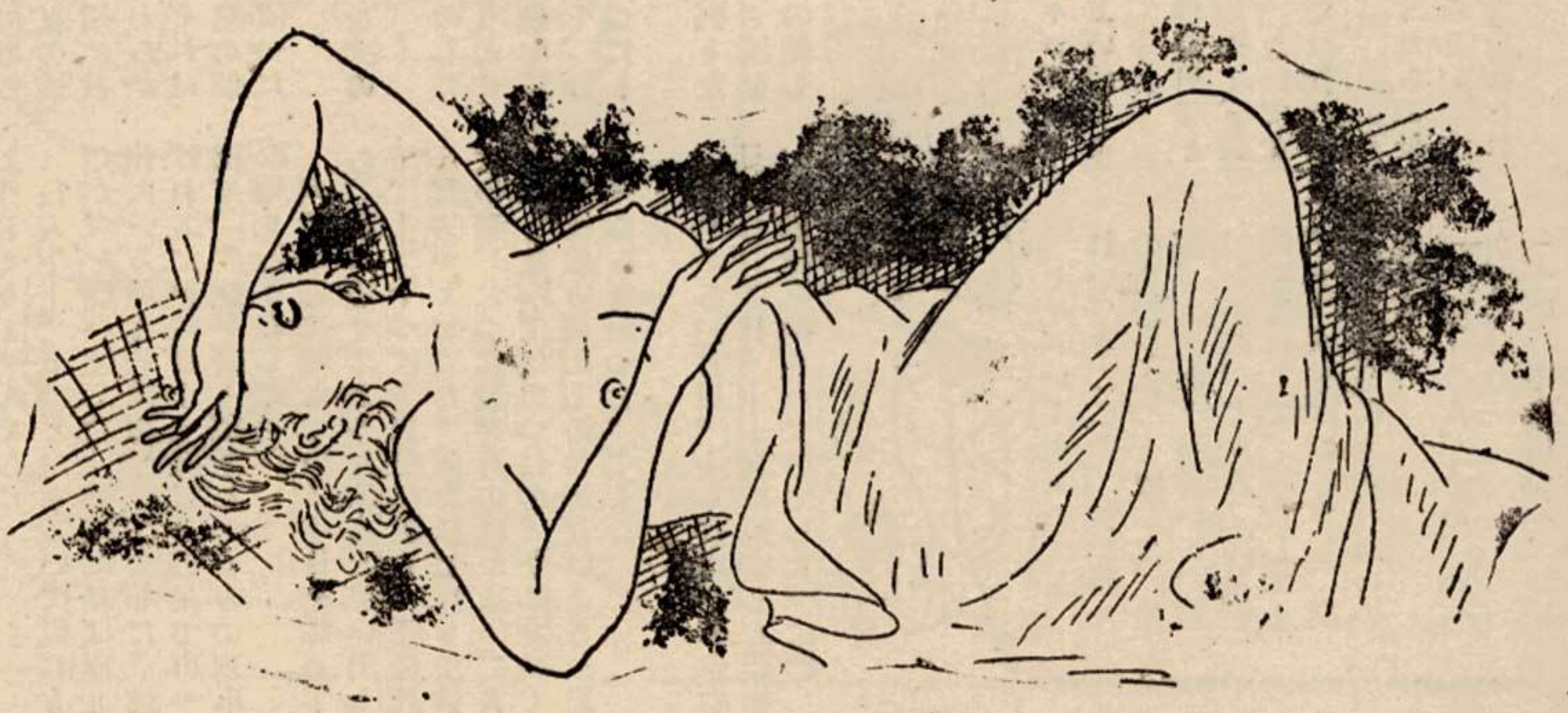
今更、私になだめる何んの言葉がありましよう。子供のように激しく嗚咽をつゞける嫂の半裸に近い姿を見つめるより外に方法がありませんでした。

短かいシミーズの下にはち切れそうな太股の白さ。さつきからの激しい憤りにも似た困惑と痺れるような邪欲の渦との相剋に私は狂わんばかりに惱むのでした。

三

夏も過ぎ、十月の声をきくようになつた午后。まだ日中にはきびしい暑さは残つているけれども、この北九州にある三主山は、さすが奥山だけに涼しい空気が流れていました。

私と嫂とは陽当りのよい大き



な杉の木の根元に腰かけたまゝ語り合つていました。私の右手には猟銃が握られていました。久しぶりに店を休んで嫂をつれて、猟にゆくといつてこの山中に來た私は先づ彼女に別れ話を持ち出しましたが、彼女は応じようとはしませんでした。

「じや、嫂さん、心中しよう、それより外に方法がない」

私は蒼白になり乍ら予定通りそう言つたのです。だが彼女は一寸驚いたようでしたが、

「えゝ、いゝわ。透さんとなら、どうせ私も此れ迄、何度も死のうと思い立つてたんですから……」

と落着いて答えるのです。私は初め心中を持ち出したら、いくら嫂でもきつと狼狽して諦めてくれるだろうとたかをくゝつていました。だが、どうでしよう。今の彼女の言葉はあつさりと心中を同意したのでした。

さすがの私も此れには二の句が告げないのでした。どうすればよいのか、私は戸惑いました。それに、なんと落着いた嫂の表情でしよう。

暫くすると、彼女の白い手が静かに私の胴に廻つて來ました。冷たい掌でした。

「ねえ、透さん、死にましよう、それとも貴方、後悔してるんじやない？」

「私は、何にもそんな……」

とは言いかけたものゝ何うしていゝのか分らない私でした。死を言い出した自分が今更どうしようも抜き差しならぬはめに陥つて狼狽している有様でした。

「まあ、いやね、そんなむづかしい顔して」

そう言い乍ら、づしりと量感のある嫂の肉体が全身の力を抜いて、私の膝に寄りかゝつてきました。私の頬に彼女の簿いワンピースを透してやわらかい乳房が触れたかと思う瞬間、それは本当に突然の事でした。轟然一発の銃声が鳴ると、嫂は鮮血に染つてばつたりと倒れたのです。

供述書には此の時の私の心境を次のように書いております。

「まるで夢のようでした。自分のした事がなんであるか、まるでわかりません。とにかく右手に持つていた銃を膝の上に乗せていたのは事実ですし、確かその時、嫂の脇腹に銃口があつたものと思います」

私は一瞬の出來事にしばし茫然となりましたが、眼の前に倒れている嫂を見ると、もう虫の息でした。手の施しようもありませんでした。

殺人——。ぞつと身ぶるいに似たものが私を襲いました。咄嗟に私は南九州にいる戦友の顔が浮かびました。逃げれるだけ逃げよう私はその足で市へ出て、猟銃を賣り捌きその夕方の列車に乗り込みました。

列車の窓に燃えている夕日を眺め乍ら、嫂の蒸せるような体臭を思い出して、——やつぱり自分は嫂と一緒に死んだ方がよかつた。何かひたむきな彼女の姿、たつた数ケ月のはかない二人のいとなみではあつたが。今になつてみれば取り返えしのつかないように思えてならなかつた。——

それから三日目。——嫂の死体が発見された翌日。——私は殺害した現場を徘徊中逮捕されたのでした。(終)



ワテほんまによう言わんわ
＝とてつもない話＝

岸本俊次

彼はいつものように、街の曲り角の電柱で賣薬の廣告の下に「何事も押しの一手」と書いてある格言を讀んでにやりとした。

色ごとと金儲けは押しの強いのに限る。厚かましいのが成功のもとである。——とゆうのが彼が色気付いて以來の人生観である。美男変遷史によれば、いゝ男の標準は、今や色白の、のつぺり型がすたれ、色黒のがつちり型の時代になつた。顔なんかどうでもよい、炭坑から今出て來たような顔丈一点張りが、世の中である。

——とゆうのも彼一流の説で、この点一寸彼は誰にもひけをとらぬ自信がある。

体重十九貫五百匁、筋肉は隆々、色は浅く迄も黒くて面だましいは、キングコングと親類に丁度よい位である。

アプレゲール型美男子としての自信に、加えて、押しの自信又満点、これで女に振られるようでは世の中は闇である。

ところが、まゝならぬ世の中は闇であるらしい。事実は厳として彼は振られたのである。

キヤバレー丸玉の女王(クイン)、れい子さんこそ、彼の諸々の自信をふつとばして、冷静、水の如き振舞いに、彼はいかに、じやん〳〵月給袋を空にして、前借してまでチツプをはづもうと、文字通り歯牙にもかけないのである。

「れい子さん、まあ、此へかけなはれ」

「へい、あてだつか、おお



けに、又寄せてもらいまつさ」

これでは如何に彼が、おやじの財産を蕩盡して、伯父さんの地所をごまかし、おばあさんの臍くりをくすねても、れい子さんなるものを陷落させることは至難である。

――あゝ、世の中は闇である、俺ほどのいゝ男を空しく埋れさして置くとは――

流石の彼も悟りをひらかさるを得なかつた。齒には齒を、眼には眼を、こゝに彼は一世一代の智謀をめぐらしたわけである。

彼は、彼をめぐる五人の惡友と共に、意気揚々とキヤバレー丸玉の入口をくぐつた。

御注文はこうなれば、俄かに知る金錢の有難味で、人間は元より天邪鬼に出來ている。で、れい子さんも、彼の意外な強気に妙な興味が自ら湧いて來たのである。そこで番の暇を盜んで、彼等のテーブルに行つた。

「まあ、えゝもんを持つてはりまんな」

れい子の方から口をきいたなぞは、彼が通い初めてから嘗てなかつた事であつた。

「うん、正ぼんに似合わんえゝもんや、金の鈴や、純金やで」

と五人の惡友は、れい子さんを煽りつけたのである。彼は浴衣の懐をひろげて、手先で一つの金色の小鈴をひけらかした。

金の鈴は仁王様の胸元に鈴虫がとまつによう、彼の毛むくじやらの胸板の上でチリン〳〵と朗らかな音を立てた。

「まあ、うち欲しいわ。お呉れえな」

れい子さんの温かい柔かな掌が彼のふところに飛び込むと金の鈴を摑んだのである。れい子さんの掌の温か味が、彼の胸にほのかに殘こされ、金の鈴は朗らかな音を立てながられい子さんの指先に手ぐられて、のふところを離れていた。

ところが、彼は、とたんに浴衣の裾から臍の上までくるりとまくり上げて、キヤバレー丸玉の建物中に響きわたる程の聲はり上げて叫んだ。

「これ、見てみい、れい子！　なんでワイの褌の紐をほどくんねん、いやらしいことせんといてんか」

れい子さんは立て込んでいるテーブルの間に立つたまゝで言つた。

「そんないけず言わんと、れい子さんを睨みながら叫んだ。

紐離しとくれやすな」

れい子さんは立て込んだ恥しさに顔を眞赤にして逆上しそうになつた。鈴は褌の紐と続いて長く気取つた手に摑まれているのだ。

「ワテ、ほんまに、よ言わんわ」――おわり――



怪奇実話

飯場の伊藤昭光

飯盛女の怪

（画）木村あきら



賭場の怪

山陰線鳥取駅より支線の若櫻駅から徒歩で約十粁――兵庫縣境に程近い、落折部落に、建設省戸倉國道改良事務所の落折工事場がある。

戸倉峠を改良して、鳥取、姫路間の交通を簡便に仕様というのがこの工事の目的なのであつた。これが完成されれば鳥取大阪間はバスで五時間半で行ける。使役される人夫約百名、大半は地元の連中であつたが、部落の一角に建つ人夫小屋には、あちこちから流れ集つたガラの悪い熊のような荒らくれ男達が、二十数人寝泊りしていた。

八月下旬のむし暑い或る夜、人夫小屋の一と間では、十数人の男達が褌ひとつの素つ裸で車座になつて丁半の掛け声に眼を血走らせていた。

「チョツ、どうして今夜はこげに負けどおしかな、糞面白くもねえ」

膝前の札が、相手の手に引いて行かれるのをいまいましげに睨みながら、毛虫の様な眉を寄せてそう呻つたのは人夫頭の荒田である。

この十疊の間にギツシリ詰つた十数人の土方連中、天井の丸太に吊された二ソのランプの薄明りに、魔物のような影絵（シルエット）を破れた疊に投げかけている。

「チエツ」

大きく舌打ちしていま〳〵しげに周囲を見廻してみたが、荒田は腹わたが煮えくり返る気持である。そこへ調子ずいた松島が再び挑戦してきた。

「うゝむ、よおし」

額に玉のような汗を浮べて荒田は応じる。

だが、ますます不思議、依然として骰子の目は彼の期待を裏切るのである。

「どうも変だ」

荒田は骰子を手に取つて見るが、幾年間使い馴れて來たカラクリの全く無い、骰子なのである。

「うむむ、わからねえ」

骰子を睨んで荒田が腕を組んだ時、どこから落ちて來たのか一匹の鬼蜘蛛が、彼の膝を這い上つて來た。

「何んだこ奴、薄気味の悪い野郎だ」

荒田は指先で土間に弾き飛ばしたがその瞬間、ランプの光りがぱたぱたと大きく明滅したような感覚に襲われた。彼はギクリとし、物の怪に包まれた気持が見る見るうちに拡まつてき

た。

幾日か前の夜の出來事を荒田は憶い出したのだ。すると今夜の不思議さが解けていく感じだつた。人間一匹の命を奪つた罪意識は、眼前にあの夜の光景をまざまざと画いたのである。

飯焚き女

前科三犯の罪狀持ちの、荒田の人夫支配力には頭が上らなかつたのだ。

発破でズレた（崩れた）岩石を二十間ばかり離れた崖下迄トロッコで運ぶのだが、トロッコ道は急な坂になつている。

その日――。

「おうい、出るぞう」

とロッコの出発点から声が上がる。

「よつしやあ」停止点から応ずる。

快い一筋の音を繰かせてトロッコが下つて來る。

「ストップ」

が、どうしたわけかブレーキが掛らない。そのまま進めばトロッコ諸共崖下に落下してこなごなになつてしまうのだ。ほん此間一人死んだばかりなのだ。

乘つていた二人は、トロッコがレールを離れる直前飛び降りた。が次の瞬間、高い呻き発して一人の人夫はうつ伏せになつた。

地上に轉がつている枕位いの石に胸を打たれたのだ。

その男は呻きながら、しばし動かないでいた。

現場監督も人夫頭も、多勢の人夫に混つて集つて來る。倒れた男は、板に乘せられて工事場近くの休憩小屋に運ばれて行つた。

傷は思つたよりも軽く、脇腹に打撲傷を受けただけだつた。

「なあに、心配するこたあねえ、明日たになりや癒らあ」

お澄に手傳わせて、手ずから傷の手当をし終ると、荒田はそう優しく慰めて、小屋を出て行つた。こういう場合の彼は至極親切だつた。

「大変だつたですね、どう傷は痛みます？」

お澄は荒田の後姿が外へ消えて行つてから、男の顔をふかぶかと覗き込んで訊くのだつた。

「胸を打つた時は、もう駄目かとも思つたが、大分呼吸をするのが樂になつた」

男は山川と云つて、苦味走つたちよつといい男だつた。生國は山口縣で、年は三十一、勿論独身で此所へ來る迄四つの工事場を歩いた経歴を持つていた。けれど、そんな経歴に似合わず、性質は至つて穏健で仲間からの気受けはよかつた。他人の嫌がる仕事を彼は默々とやり、場合によつては自分の方から進んでしたりした。

だがしかし、　等の誰よりも異性としての立場からふかく山川に心を寄せている者があつたのだ。それはお澄であつた。彼女の山川への思慕の情は彼女が山へ登つて來た日、晝飯で人夫達が休憩小屋に集り、中に混つてどこか孤独の憂いといつたまのを仄めかしている山川と、顔をチラリと見交した瞬間からだつた。

お澄は胸底で、今日こそは、の思いを高ぶらせる。小屋の中には二人だけ。これが絶好の機会でなくて何でであろう。誰も見ていない。誰も。時刻は午後三時過ぎ、仕事の終る迄にあと三時間だ。打ち明けようか明けまいか。こんな職業の女には珍らしいお澄の内向型の性格として、煩悶するは当然だつたが、けれど幾らかの間を置いての後には、とうとう恋情の奔流は堰を切つて流れ出たのである。

「山川さん、私、あんたが好き……」

苦しい心の内を、お澄はそう表現した。

「有難う、俺あ女のひとから好きだと云われたのは初めてだ」

山川は感激を籠めて答えた。好きだと云われて、身内に藏されていた何ものかが燃え上つたのだ。

「ずつと前から……この山に來た時から、何となく、他人と思えない、気持でした」

お澄は咽喉の奥からこみ上げて來る感傷的な熱いものを、瞼に浮べて男の手を握つた。これだけの会話で、今迄の長かつた悩みは一度に吹つ飛んだ気持のお澄だつた。

好色の觸手

それ以來、お澄と山川との仲は、急速に親密になつて行つた。と同時に皮肉な事には荒田のお澄に対する言動が次第に露骨さを加えて來るのだつた。

荒田は、お澄と山川との仲を知らない。口には出さなかつたが二人共、その関係を仲間に知られてはまずいと思う意識がお互いの秘密を保つていたからだ。

六月の末の或る晩、勘定を貰つた人夫小屋の土方連は、例によつて賭博に耽つていた。荒田はドブ酒に酔つ拂つた体を上坐に据えていたが、酔うと好色になり、途中で骰子を捨ててお澄の

宿へはしつた。今夜こそは思いを遂げねば、どうしても治らないものが体中に沸きかえつているのだつた。

お澄の宿は部落のはずれ、藁葺きの平家が三軒余程の間隔を置いて建つていた。耳の遠い腰が弓のように曲つた老婆と、そのひとり娘がお澄の宿の家人だつたが、娘は唖の上に肺を患つて年中臥床についたきりだつた。

お澄は酔つ払つた荒田の顔を見ると気を害さないようその用件を戸口に佇立した儘訊いた。

「なあに、仕事の事で、ちつとばかしこみ入つた話があるんだ」

荒田は無遠慮につか〳〵と入つて行き、お澄の部屋と感じられる、そこへ坐り込んでしまつたのである。

お澄はどう応対してよいのか判断がつきかねた。

荒田はゆつくりとバットを咥え、火を点けた。お澄の顔を上目使いにじろりと眺め、アルコールの臭いと一緒に煙をふつと吐いた。

「女ぼかりの家つて、危ねえな」

荒田は宿の様子を、いつの間にか知つていたのだ。

「ところで」と荒田は話題を変える前置きをして、

「給金を上げて貰いたくないか」

お澄の顔を覗き込む。彼女は顔をそむけ、

「それは、上げて貰いたいのは山々ですけど、仕事の少しか出來ないのに、今の儘で結構です」

「遠慮せえでもええよ、え、おい、現場監督の松島なんぞ、俺の一言で頭を下げる。工事主任なんてからつきしだしな、どうだい、上げてやろうか」

工事場での権力は彼が完全に掌握している事を、誇りに満ちた顔つきで荒田は云い、お澄へにじり寄つてやにわに手首を握り寄せた。

「何をするんです。大きい声を出しますよ」

「出せるものなら出すがええ」

遂に荒田は仮面を脱ぎ捨てたのだ。お澄は前後の意識なく、助けを求める声を上げた。

その金切声は、さすがの老婆に聞えたらしく、破れた襖の陰から顔を覗かせ、呆れた声を発し、男をなじつた。肺病の娘も、血の氣の全然ない蒼白な顔を老婆の後に見せていた。荒田は舌打ちし、残念そうに手を引込めた。

下唇を噛んだその口辺に、薄気味の悪い笑いを刻み、

「今夜は見逃がしてやるが、覚えてろ」

喧嘩と人夫使役とで鍛えた、錆のあるバスで、ぐんと圧迫する語調でそう言い残し、肩で戸を押し開けて帰つて行つた。

そんな事件があつてから、荒田のお澄への態度はガラリと急変した。淫らな微笑も、甘い優しい言葉も、彼女を庇護するようなゼスチュアも、そつくり消え去つてしまつたのだ。

「おう、お澄、お前土方連中からチヤホヤされて、いい気になつてるんじやねえぞ」

憎悪の籠もつた口調も荒く、荒田は時折そんな嫌がらせを言つた。

そうかと思うと、仕事中に不意に小屋に入つて來て、いつかの夜のような行動に出ようとしたり、下心ある口吻で甘言を弄したりするのだつた。

こんな事が何日迄続くだろうか、とお澄は深刻に考えて見、進退窮まつた惨めな気持で仕事に通うのだつた。

山川の事は絶えず脳裏を離れなかつたが、人目を忍んで会う場所とて無く有つても土方連の目が恐しかつた。多勢の土方連の中から、愛する男の姿を見つけて、瞳と瞳とでうなずき合うのが関の山だつた。

秋の夜の或警察署で

紐男（ひもおとこ）の陳述

悲劇の導火線

此花太助

山川の傷がすつかり癒えた八月初めお澄は彼と会つてしみじみ話して見たいと思つた。

晝飯に土方達が集つて來た時、お澄は紙片に鉛筆で次のような事を走り書きした。

貴方のお傷すつかり癒られましたとの事、就きましては、祝という大袈

ヘイ、何もかも申上げます。

私はこの女の亭主でございます。ハイ内縁の方で。お察しの通りその紐をやつていますヤクザでハイ。

で、今夜も、嬶がいゝ鴨、左様でございます。二十七八の役者のような奇麗な旦那衆でございました。例の通り材木の奥へ連れてゆきましたが、何時になつても出て來ません。もつとも、勝手をよく知つている客ならずつと材木の間をくぐつて遠くの方へ抜け出るんですから、必ず入つた所から出るとは限りませんが、今夜に限つて何故か時間が遅過ぎたようです。ヘイ、たいていは十分間位しましたら、必ず出て來るんですが、

はゝあ、奴、いゝ男だものだから意気投合しやがつて、と甚助を出しましてね此の商賣で嫉妬は禁物でありますが、三十分も四十分も待たせられちや、どんな辛棒強い紐男でも、むたいていた起そうじやありませんかねえ、旦那、

其処で、忍び足で、奴の仕事場へ寄つて見たんです。ところが、もう客の姿はなく、奴一人で大の字にいゝ気持ちで寝込むなんて太いこの女奴と、飛んで行つて、矢庭に頭を蹴つたんです。

だが、うんとも、すんとも言わねえし、枕を外して動かないじやありませんか。

愛なものではありませんけど、私の心ずくしを差し上げたいと思いますから、今夜私の宿迄来て下さい。

山川様

お澄より

お澄はその紙片を、山川が飯場から出て行く時、他人の目を避けてそつと渡した。

山川は軽く眼顔で頷いてそれを受取り、仲間の眼から遠ざかつて讀んだ。その喜びは、彼が三十二になるこの年まで味わつた事の無いものだつた。

山川は作業の鐘が鳴つた時迄、茫然と、歓びの心持に酔つていた。だから紙片をどこに藏つたのかも意識出來なかつた。彼はいそいそと作業に就いたのである。

「出るぞオ！」

「よつしやあ！」

各々の專用のトロに二人づつ乘つて岩石まじりの土を積んで、ダダダダと降つて行く。一歩誤れば数百尺の斷崖に呑まれる。この工事始まつて以來三人の歸らぬ犠牲者を出した。働らく彼等の気分も荒れきつている。

空になつたトロを押して、レールの坂を上る。

「よいしよ、よいしよ」

途中で小休止し、ふと後を振り返つた。

おやつ？　と山川は脳裏に閃めを感じた。そうしてその刹那、シャツのポケットを見、ズボンを探つた。無い！お澄から貰つた紙片が無いのだ。

確かに、仲間に囲まれたその男は紙片を持つている。荒田の一の乾分と自稱する力造だ。仲間達はわい〳〵騒ぎ山川の方に顔を向けて、大口開けて笑つたり冷かしたりする。

「畜生！」

怒りと、情無さとが同時に、怒濤の如く山川の全身を襲つた。彼は拳を握つて一團の中に飛びこんで行こうとした。が彼は思い直した。すると、その反動で、涙がぼろ〳〵と頬を傳い、情無さと口惜しさだけが残つて、怒りの感情は消え失せた。

山川はくるりと向き返り、相棒を促して再びトロを押して行くのだつた。

一方一團の方では、紙片を拾つた力造を取り囲んで、暫くの間はお澄と山川との関係に話題を集結させ、嫉妬に燃えた眼をギラつかせ、山川への羨望の言辞を吐き散らしていたが、工事主任、現場監督と何やら話している荒田の許へ、力造が走つた事に依つて、輪は解けた。

荒田は、紙片の文字を示されるなりふうむと唸つたが、表情だけは平靜に返り、

「おい、これ、俺が預かつとくぜ」

ズボンのポケットに無造作に入れた。

「山川よ、お前ええ女郎を引つ掛けたぜ、まあせいぜい可愛がつてやりな」

「この野郎、俺の先手をちやんと知らぬ間に打ちやがつた。神妙な面つきをしていやがつて、裏から何をしてるか分りやしねえ」

作業が終つて、飯場へのみちみち、彼等は山川に向つて、嫉妬と羨望と、憎惡の感情とを露骨に表わして、そんな言葉を投げかけるのだつた。

お澄に対しても、別のかたちで揶揄したのは勿論だつた。

山川は、その夜お澄の宿へ行く事を断念した。行こうと考えたにしても、荒田の鋭い眼は彼から離れなかつたに相違ない。

それから十日余りは過ぎた。

八月十三日。三日の休暇を貰つて、人夫達は親や妻子の許へ、町へと、大部分は山を下つて行つた。

故郷に親妻子を持たぬ山川は、同じような身上にある六七人の仲間達と一緒に人夫小屋に残つた。

人夫頭の荒田は十四日の晝過ぎ鳥取の街へ行くと云つて下りたきり、十五日の夕方になつても歸つて來なかつた。



狙う眼

その夜、山川は人夫小屋をそつと抜け出して、お澄の宿へ急いだ。

山川は翌朝人夫小屋へ戻つた。一夜お澄の宿に泊つたのである。彼は、現在自分の置かれた立場に思いを巡らしあの荒田さえ居なかつたら、としみじみ思つた。荒田の姿が、この工事から消えさえすれば、仲間達の眼など恐くない気持だつた。

が、その荒田が、その日の夕方歸つて來た。町で遊んで來たのである。

荒田は、人夫小屋に残つていた一人に、彼の留守の間の山川の行動を訊いた。訊かれた男は得意になつて、昨夜山川が人夫小屋を窃けた事を告げた。

テッキリ、女郎のとこへ行つたに違ひねえ　荒田は競争者の敏感さでそうさとつた。

彼は、どんな方法で二人の戀仲を裂いてやろうかと、いろ〳〵と策を巡らすのだつた。

――翌る日のまだ昼過ぎ、荒田は工事進行に関しての用事で、一里余り下つた事務所へ赴いて行つた。

山川は荒田が、再び町へ下りたと合点し、心中躍気の気持だつた。

彼は、日の高いうちに人夫小屋を出た。そうして途中で路を変えて、またもお澄の宿を訪れたのである。

昨夜の歓楽が、遂に山川をその蹤とつてしまつたのだ。

「山川さん私、考えれば考える程、私達のこれから将来の事が案じられます荒田は、いつまでも黙つてはいません」

「案じられるのは当り前だが、ではどうしようというのだ」

「いつその事、この山から逃げてしまつては……？」

「阿呆こけ、ズラかつたつて、たちまちその日から食うに困らあ」

「では私、炊事婦を退めて、里に帰ろうかしら、うるさい荒田と離れたいの」

「まあ、もう少し様子を見て、それからにした方がええよ」

荒田と遠ざかるという事は、同時に山川と離別する事だつた。お澄は口ではそう言つては見ても、愛する山川とはどうしても離れたくない。何という皮肉な運命だろう。

――山川とお澄は、夜遅く迄相抱いて語つた。話せども語れども盡きないそれに区切りをつけて、山川が帰つて行つたのは十時を少し過ぎてからだつた。外は強い風雨だつた。

話は変つて、盡過ぎ大野の事務所へ出掛けて行つた荒田は、寄圖迫る八時過ぎ人夫小屋に帰つて来た。

荒田は、山川の不在を知つて心中大いに憤つた。

然し、その憤りは沸々として煮えたぎるそれではなく、あくまで内に籠つた冷いものだつた。

斎生、今に見ていろ。

荒田は口の中でボソボソと呟いた。そうして彼専用の部屋に入つて行つて柳行李の底から、刃渡り七寸の七首を摑み出した。

ふふ……と荒田は冷笑する。彼が怒れば、人間一匹の生命なぞ犬の如く取り扱う気持になるのだ。

「五助」と蟲越しに呼んだ。

「へえ」

「お前の部屋にドブ酒が残つてねえか」

五助と呼ばれた土方は、ごそごそやつていたが、すぐに一升徳利を握つて荒田の部屋へやつて来た。

「飲まつしやるんで」

「当り前よ、お前もやらねえか」

スルメを裂いて、手酌でぐびりぐびりやり出した。

時折彼は、頭上の柱時計を振り見たその都度、時刻を呟くように独語した。頭が冴え返つて、飲んでも酔わなかつた。相手の五助は、五合ばかり飲んでノビてしまつた。

さて、山川の奴が帰らねえうちに、と荒田が腰を上げた時、雨が降るのか忽越しに閃光が瞳眼を刺した。

「降りやがる」

荒田は呻くように言つて、七首を懐中に入れた。

消えた生命



雨にびしよ濡れになりながら、草叢の中に荒田は呼吸をころして山川を待つた。千秋の思いだつた。人間の生命を奪う実感は、不思議に彼には湧いて来なかつた。

何の位待つたであろうか――来た！と荒田は心で叫んだ。

風雨の音にまじつて、足音が寸前に聞こえた。

黒影が、通り抜けようとした、その刹那、

「待ちやがれ！」

突然の、太い低音に鬼気を感じた黒影は、二三歩、無意識に飛んだ。

「誰？」

「俺だ」

荒田は黒影に近寄つて行つた。

「あ、荒田さん……」

その十ずつた声が消えないうちに、同じ主の、高い悲鳴が上り、次には早や苦悶に變つていた。狙い外れず、心臓の眞中を貫いたのだ。

荒田は、刺した七首を抜かず、手を離して相手の腰をどんと蹴り飛ばした。

荒田は、山川の死骸を背に担ぎ、そこから少し離れた溜め池迄運んで行き水音高く投り込んだ。

その後へ、血汐の着いた彼のシャツを、石にくるんで投げ捨てた。

――休暇が明けて、人夫全員集つた時、彼等は山川の姿が消えているのに気がついた。

――どこに行きやがつたんだろう。

――お澄が居るところを見ると、ズラかつたんじやあるめえしねな。――

彼奴、十六日の晩に、町へ下りてくると云つて出たつきり、一度もけえつて来ねえぜ。

土方連は色々と噂し合つた。然し、山川の不在と、荒田との行動を関連させて、口にするものは一人もいなかつた。

お澄は相変らず通つていた。突然、何の前触れもなく消え去つた山川が、恨めしくもあり、悲しくもあつた。去るなら、何故私も一緒に連れて行かな

かつたのだろう。お澄はそう思い、終日憂愁に閉ざされていた。

その彼女を、慰めてやろうといつた態度で、以前のような甘い言動を示し出したのは、荒田だつた。

「お澄ちやん、山川が居らんようになつて、面白くねえだろう」

荒田は、ニヤニヤ笑いながら、そんな皮肉を云つた。ライバルを征服した、誇りに満ちた微笑だつた。

お澄が、何も答えず黙つていると

「行先を教えてやろうか……山川は、この俺にだけ行先を知らせて、他所へ行つたんだぜ」

お澄は、涼しい瞳を円くして、知りたい表情をする。

「ふふ、言つて聞かせてやつてもええが、俺だつて、そう無償じや喋べれねえや……ね、そうだろう？」

荒田は口をいがめて、好色的笑いを洩らすのだつた。言葉の裏面の意味は山川の居所を知らせてやるから、その報酬にお澄の肉体を提供させよということなのだ。

お澄は、荒田の言を本気にして、山川の行先を知りたく思つたが、言葉の裏の意味を知つて断念した。

ところが荒田は、その戦法の不成功に見限りをつけてか、——此度は、あの夜の時のように強引な態度に出て來た。

まことと、なだめたりすかしたりであつた。

その日も、休憩小屋でお澄がモンペを繕つて居ると、荒田がぬつと入つて來て、強引な仕草に出て來た。お澄はようやくの事で小屋の外に飛び出し、危く難を免がれた。

——お澄は宿へ歸る路々、その事と恋人の山川との事で頭が一杯だつた。

俯向いたままでとぼとぼ歩いて行くのだつた。



と、描きながら、愛する山川は殺されたのだ。と思つた。

お澄は生きた心地を失い、まるで、夢遊病者のようにふらふらと倒れた。

大團圓

勝負に負けた荒田は、凝つと坐つて居れない衝動を覚えて、やにわに土間に飛び下りた。

どこへという当ては無い。彼の魂はものの怪に憑かれたように宙に浮いていた。

どこをどう彷徨したのかも意識せず正気に返つた時には、彼が一度も來た事の無い熊笹の中に立つていた。

ぞつとする、休の内外から言い得知れぬ寒気に彼は絶えず襲われていた。腕と度胸で喧嘩場を渡つて來た荒田でも、しんしんと肌身に喰い入る恐怖には抗しきれなかつた。

「助けてくれツ！」

眼前が眞暗になつた感じで、彼は救いを求めた。

「助けてくれツ！」

「助けてくれツ！」

居たたまれなくなつて、荒田は絶叫しながら、狂気のようになつて、熊笹を分け〳〵駈け廻つた。手足を擦りむかれ、血が幾筋か流れていた。

「死ぬ死ぬ！」と喚いた。

その時、頭上近く火玉が長い尾を引いて舞つた。哀れに、恨めしげに舞うのだつた。

荒田は、この時までしつかと握つていた骰子を、火玉めがけてハツシと投げつけた。

火玉は二つに割れて、二つが寄り添うて彼方にゆつくり消えて行つた。

荒田は、気を失つてその場に倒れてしまつた。

それから三日目の夕方、荒田は、懸命に山狩りを行つていた土方達に発見された。

荒田は茨の傷だらけになつて冷たくなつていた。

×　×　×

お澄はあの日から、宿にも、工事場にも姿を見せなかつた。

宿の肺病の娘は、耳の遠い老婆に、盛んに天井を指さしながら何かを知らせる風だつたが、唖であるので、老婆には全然何もわからなかつた。

＝おわり＝

裸の踊り子

アラベスク

一戸見野



第一話

踊り子と乳当ての南京玉

りべらるショーの踊り子——殊に豊満な肉体美に、百パーセントのエロテシズムを放散する九分の一の裸体の娘たちは、時々肩から吊つている乳当ての南京玉の糸を切断させる。

まさか、故意とやるわけではないだろうから、こういう機会にぶつつかつた人は、二千円くらいの宝クジに当つた程度に喜んでもいゝ。

とにかく彼女のお乳押えの南京玉の糸は時々切れる。殊に夏場は、一日に三回もの興行の時には、瀧のように流れる汗のためにすつかり弱つてしまつた糸は、彼女等の肉体の震動の度に、実にはら〳〵する程よぢれている。

そして突然ぷつつりといつてしまう。円形の障害物がはらりと落ちる。見物はハッと息をつめる。豊満な乳房が軽気球のようにゆれる。しかし彼女らは馴れたもので、落ちついてその円板を再び胸の上に引き上げて、極めて、優美なスタイルでそれを押えちやんと幕まで踊りつゞける。

第二話

ズロオスの破けに氣がつかなかつた踊り子

或る盛り場の実演専門の劇場で、裸の女王と謳われた、流行つ子の踊り子が来たことがあつた。

その最初の挨拶に、実は彼女は昨日迄地方を巡業して非常に疲れている上に、折りも折丁度、折悪しく彼女は月の病の最中なので、——といつたような事を述べたてたのである。

只でさえ、鼻の下の長い連中のことゝて、そんな事をきかされゝば変な気分に陥るところへ、又その人が、旨くきれいに喋べろうとした為、かえつて反対に、妙に悩ましい桃色の眼鏡をお客さんにかけしまつた。

お客さんの心臓はなんとなしに、そわそわにやにやしている。姿を現した彼女の小さな身体は、頭の天辺から足の爪先まで、お客の射る様な視線で舐めつくされた。

愈々「アラベスク」の踊りが始まつた。かぶりつきにいた連中が何んの気なしに彼女の方を見ると、——何んだか変なのである。おや？　と思つてその部分に一心に眼を据えていると、やつぱり妙なのである。



その中、踊りは次第にクライマックスに達して、右足でトウを立て、左足を思いきり持ち上げて、一小節の間のポーズをする。

彼女は客席に向つて一はいに肌をひろげて、につこりとしてポーズに移つた。今までおや？　とい思いつゝ、でも半信半疑であつたお客さん達は、この時に至つて遂に、アメリカ大陸を発見したコロンブスのように恍惚とした三昧境に入つた。

見よ！　彼女のズロオスは猛烈に綻びていたのである、しかし踊つている御本人は夢中だから全然そんなことには気がつかない。

それこそ大胆に悠々とポーズをとつて

（84）

女と契つた翌朝

清少納言

七月頃は、大変蒸し暑いから、夜などもすつかり何処も開け放したまゝで暮している

ので、月の明るい夜など、ふと起きてあたりを眺めるのは興味のあるものである。

かる

思いがけない眞垣の間などから、若い男と女の戯れている有様などが手にとれるよう

枕くら草さうし紙



夜明け方の、月が出ている頃も趣がある。

もう明け方も間近いというのに、艶やかな板椽の端近くに、美しい疊を一枚敷いて、三尺の几帳を奥の方へ押しやつて立てたりしているのはその奥の方で、どんな事が行われているのであろうかと、気がかりで仕方がない。

なんでもない時には、やはり端近くに立てゝおく方が、あらぬ好色の誤解を受けないでよいのではなかろうか。

昨晩の相手の男とゆうのはもうとうに歸つてしまつたらしく、若い美しい女が只一人で裏が濃く、表は少し色のさに見ることが出來て、涼みがてらの散歩も樂しみである。

闇の夜も又格別に變つた面白さがある。歩くのに足もとが心もとない心配はあるが、此方の姿を見られることがないから、一入大胆に軒近く寄つてゆくことが出來て面白い

その奥の方で、どこからか、月明け方の、艶やかな美しい指貫、狩衣、白い袴、どんな事が行われているのであろうかと、気がかりで仕方がない。

なんでもない時には、やはり端近くに立てゝおく方が、あらぬ好色の誤解を受けないでよいのではなかろうか。

昨晩の相手の男とゆうのはもうとうに歸つてしまつたらしく、若い美しい女が只一人で裏が濃く、表は少し色のさめた薄紫の衣を引きかぶつてる男も、自分のように、朝露を踏み分けて、慌て歸つて行つたのだなア」

と、思われて、今の自分の姿との対照が面白くて、好色的な眼で暫く見ていると、女が解けたまゝである。

紅い腰紐のしどけなく垂れている側に衣の裾から眞ツ白い素足が、ちらりと覗いているのも、昨夜の情痴の名残りを思わして、なんとなく惱ましい。

その時これは又、どこから來たのであろうか、明け方の深い霧の中を、二藍の指貫、絹の單衣、紅色の衣の重ねが霧にびしよ濡れになつたのを着て、一人の男がだらしなく近づいて來た。

此の男は、昨夜、女の所で泊つて朝露の乾かない間に急いで家へ歸ろうと思つて叢の小道を辿つているのであつた。

丁度、途中でこの家の格子が上つていたので、冗談に簾の端を少し上げてみると、さつきの女が、昨夜の男と別れたまゝのしどけない姿で寢そべつているのであつた。

「はゝあ、この女の戀人である男も、自分のように、朝露を踏み分けて、慌て歸つて行つたのだなア」

と、思われて、今の自分の姿との対照が面白くて、好色的な眼で暫く見ていると、女が解けたまゝである。

紅い腰紐のしどけなく垂れている側に衣の裾から眞ツ白い素足が、ちらりと覗いているのも、昨夜の情痴の名残りを思わして、なんとなく惱ましい。

その時これは又、どこから來たのであろうか、明け方の深い霧の中を、二藍の指貫、絹の單衣、紅色の衣の重ねが霧にびしよ濡れになつたのを着て、一人の男がだらしなく近づいて來た。

此の男は、昨夜、女の所で泊つて朝露の乾かない間に急いで家へ歸ろうと思つて叢の小道を辿つているのであつた。

丁度、途中でこの家の格子が上つていたので、冗談に簾の端を少し上げてみると、さつきの女が、昨夜の男と別れたまゝのしどけない姿で寢そべつているのであつた。

「はゝあ、この女の戀人である男も、自分のように、朝露を踏み分けて、慌て歸つて行つたのだなア」

と、思われて、今の自分の姿との対照が面白くて、好色的な眼で暫く見ていると、女が解けたまゝである。

紅い腰紐のしどけなく垂れている側に衣の裾から眞ツ白い素足が、ちらりと覗いているのも、昨夜の情痴の名残りを思わして、なんとなく惱ましい。

その時、人の氣配に女は被衣の中から見ると、一人の若い男が、緣によりかゝつていた。

見も知らぬ男に自分のあられもない寢姿を見られて彼女はゞしまつたゞと思つた。

「昨夜のお名殘と見えて、大そう御ゆつくりですね」

と男は皮肉たつぷりに、あつかましくも休を半分ばかり簾の中へ入れたので、

「朝露よりも早く起きて慌てゝ歸つて行つた戀人の事を思いながら、こうして寢ているのですわ」

と女は度胸をきめて、寢そべつたまゝで答えた。女の枕元にある扇を、及び腰になつて、自分の持つている扇でかき寄せようとする男を、女は自分に近づいて來るのかと思つて、胸をときめかして、衣の中に身体を引き込ませるのであつた。

「私のことを馬鹿によそ〳〵しく逃げるのですね」

と男は冗談まじりの軽い怨みごとを、言つたりしているうちに、夜も明け放なたれて、隣り近所の人声もはげしく、今にも朝日がさし出そうになつた。

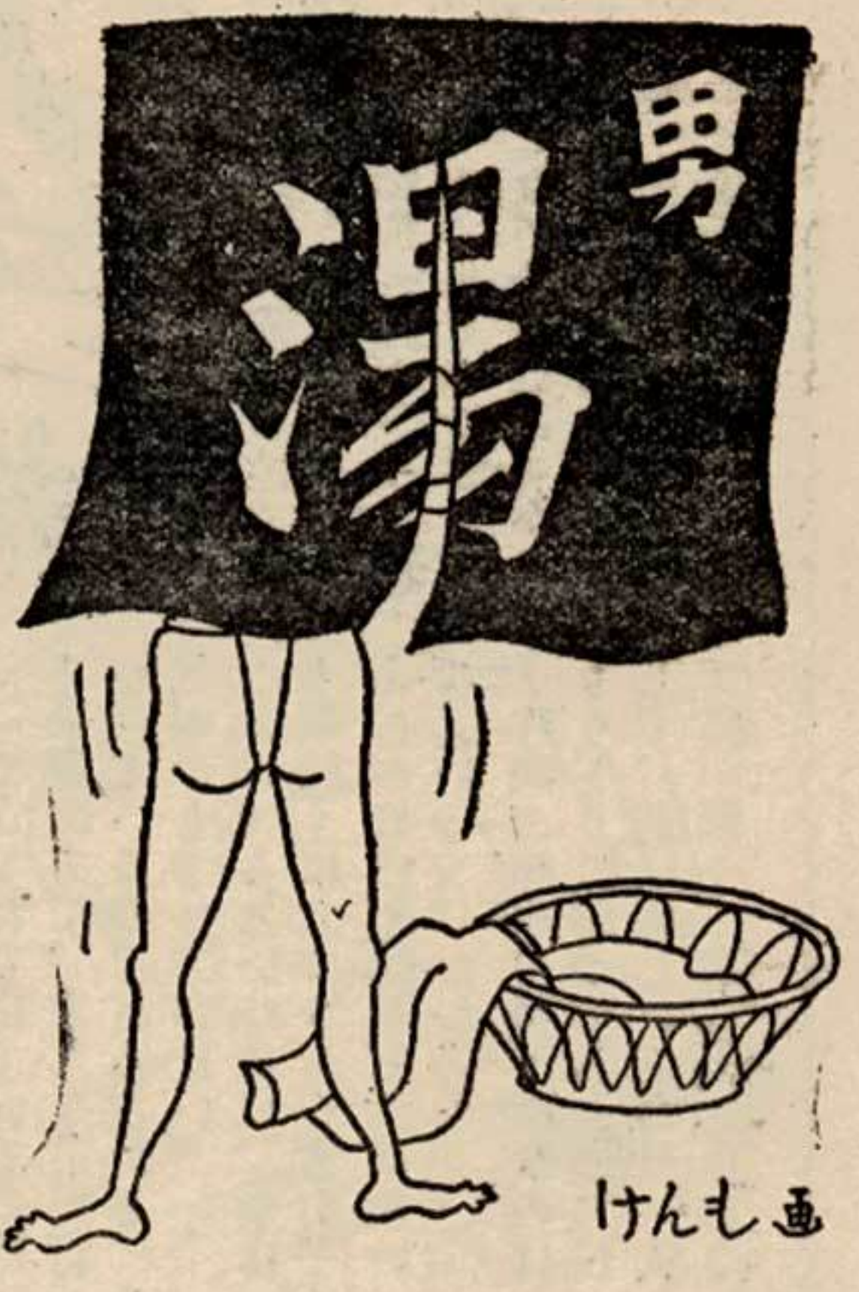
すると、この女の所から帰つて行つた男がいつの間に書いて寄こしたのか、萩の枝の露のついたまゝ手折つたのに手紙をつけて使いの者に持たして來ているのだが、この男が緣に頑張つているので、遠慮して出さない。

その手紙にはいゝ匂いの香がつよく焚きこめられてあつた。外は益々明るくなつて來たので、男はそこを立ち出たが、自分がこれから帰つて、手紙を出そうとしている別れてきた昨晩の女の処も、さぞかしこんな事だろうと思われて、くすぐつたくなつた。

——おわり——

◇……◇

◇……◇



けんもん画

番台娘の男湯のぞき

西原津夜子
沖研二

流れの淀んだ下水のドブの臭いが強く鼻をつく市内も郊外に近いあんまり生活力も香ばしくないサラリーマン階級の住宅街に建つ、草津温泉長命湯の一人娘、番茶も出花の娘さかりの民子さんの告白ばなし。

ふゝゝゝ変に気を廻わしちやあ厭よ。

何も男湯と限つたからと言つて不思議がらなくつたつていゝじやないの。

女湯の噂話が聞きたいなんて言う男の人の樂屋が覗きたいの。あら、あんたに「家内のが、來てないかい？」ですつて。

御冗談でしよう。今頃はあなたのお内儀さんが北海道産の、べたがれいの加工に忙しいことは先刻御承知じやありませんか。でも眞面目に返事をしてやらなきやならないの。

お母さんが番台に立つている時なんか決して聞かないんですつて。

あなたのお仲間とは言いませんが、番台に煙草の火をせがむ人があるのよ。

「机にありますわ」とマッチの大箱を指差すと、

「あそこ迄行くのは面倒くせえや」。

これでよく家迄（かがと）を減らさずに帰れること。結局マッチをすつてやると、青蛙の様な猪首（いくび）を延ばして、たしの膝にのびあがつて、煙草の話が出たから、ついでに、一つ二つ喫煙家の話をしましようか。

ねえ、煙草を吸う人はおつとり落着いた人でしよか、それとも、そゝつかしい人が多いでしようか。

机の上にあるマッチの大箱から軸木をとつて煙草に火をつけて、きつと灰皿と間違えたんでしよう。燃え

淫痴奇譚

——節を賣る娼婦——

いんちきたん
弓削忍

男とゆうものは、商賣女に倦きてくると、やがて食指は素人女へと向けてくる。終戰直後パンパンガールが繁昌したのも、つまり彼女たちの商賣人らしくない素人臭さが、男の嗜好に投じたものらしい。

従つて、今では完全に娼婦化したパン助たちには、昔の新鮮味はなくて遊廓の娼妓と大差ないまでに、企業化してしまつている。

大丸の女店員と稱する女、郵便局の女事務員保険会社のタイピスト、病院の看護婦等とそれぞれ稱せられる女達、畫は洋裁に通つていますというのが、彼女の常道である。

世はまさにアルバイト時代である。夜の商賣が本業であつても、副業であつても、お客にとつては、そんなことは大した事ではない。

彼女たちは、それを職業として生活しているのに、素人と稱するところに、「誇りと慰め」を持ち、「素人はいゝ」と喜んでいるのだ。

嘘をついても、それが方便なら坊主が嘘をついても許されるものであるらしいが女が男をだますとゆうのは、狐が人間をだますよりあたりまえであるらしい。

——弟が半身不隨で、小説家に成ろうとして一生懸命勉強している。毎日家に引込んでは、原稿用紙に小説を書いて暮している。

元よりその小説なるものは賣れる訳がないから姉弟二人の收入の道がない、しかも弟は毎日バットを十個位空けないと芸術的衝動が起らない。煙草がないと憂鬱な顔をして頭の毛を掻きむしつてばかりいる。

弟の芸術の爲、姉なる彼女は恥を忍んで、こうして身体を賣つている。弟が若し、こんな事を知つたら萬年筆を折つて自殺してしまうに違いない——

と深刻そうに涙ぐんで溜息をつくのである。

遊び慣れた嫖客氏にも、これがピンと來ないわけがない。然



けしじ画

てる軸木をマッチ箱に放り込んだのよ。そりや天井まで煙が登つたわ。あたしもう火事になつてしまつたんだと思つてぼうとしてしまつたわ。（嘘と思う方に一箱無駄にする気で大箱を試してごらんなさい）其の方は夢中で叩き落して踏みつけたわ。おヒゲと足首を少々火傷してよ。こんな方が焼焦のない着物と疊に縁のないつて方ね。

つい此の間よ。煙草をくわえて、すまして湯船に入つた人があつた。ところが直ぐ濕りが來て消えてしまつたの。立消えの煙草を持つて上つて來たから何をすだろうと、見て別の煙草を袂から取り出して火をつけてまたお湯につかつてたわ。

何んだかあたし、それを見て嬉しくなつてしまつたの、あら、そんな意味じやないのよ。

御宅が近いのに、ふだん着に一ばい膨らんだ紙入れを持つてくる方。

「お尻ちやん、預つて呉れないかが」

お湯屋は十円札一枚持つてくる処よ。つまらない見榮坊はおよしなさい。

角の酒場に可愛い〳〵人へ先方じやあうるさい人でしよう）があると自惚れている疊屋の源さん。い〳〵物を見せてやると紙切れを出したから、うつかりのぞいたら変な画だつたの。馬鹿にしてるわ、あたしの顔を見て、目茶苦茶に喜こんでいたわ。それが此の間も又別なのを持つて來たからと度げるから知りませんとはねつけてやつたの。そうしたら女中のお由さんをざるのさつて無理矢理に見せていたわ。

見せつけられた女の様子が見たいんでしよう。男つて、みんなこういう性質が強いんじやないかとあたし思うんだけど、どう？……

—おわり—



けんじ画

かも、姉なる彼女が弟の芸術と共に男の聞術なるものにも十分理解があつて、その肉体を大いに犠牲に供するんだから興行價値は百パーセントである。

寝物語りとゆうものは、そのよつて、次々と変つてゆくのであるから、このストーリーの作成も三文作家の一人も顧問に置いておかぬと、毎夜のことに追つつかぬかも知れない。（了）



とんま

此の頓馬野郎

粉屋の女房が色男と永車小屋で逢曳しているところへ亭主が戸を叩く、

女房「さ、早く戸の後へかくれて！あたしが開ける拍子にその蔭へかくれて、そして逃げるんだよ」

亭主（入つて來て）「何故早くあけねえんだ」

女房「だつて今、鼠を追拂うまじないをしているだよ。ら い易者に教わつたからねえ、そりやどんなまじないだ」

亭主「ふーん、そりやどんなまじないだ」

女房（小声で）「何故逃げないのさ気の利かない

色男「おいらも、そのまじないを聞こうと思つてるんだ、おいらんとこにも、えらい鼠がいるんだから」



奴の小萬

女道中

彼だて袴が

猛比古 須磨石しゆき 絵・緑

（一）

初秋の柔かい日ざしが、快よく絵日傘を通して、ゆきの襟筋をとろりと暖める——。

彼岸花の咲き乱れる長堀の河筋を、コロリ〳〵と木履を鳴らせて行くゆきの後姿は美しくも又あどけない娘らしい優しさを、あたりにまき散らしていた。婢女のかめがその後から、ドシリ〳〵と重たげに、大きな腰をプリ〳〵振つて、娘はん大事と附随うのも、微笑ましい、この島の内界隈のなごやかな風情であつた。

道行く人々は一様に振返つて、あれが浪花で一二を争う材木問屋で、木津屋はんの箱入娘——はつさい（お俠）のおゆきさんやがと、眼交ぜ袖引き合つてのヒソ〳〵声。ヘーンなんとあの顔でな。なんと大したもんやおまへんか、と耳にチラ〳〵入る噂もどこ吹く風と、クル〳〵と傘を廻してわき見もせず、憂いを含んだきれ長の瞼はさつと前を向いた儘、富士額の眉をチラリとしかめて、心持ち顔を右に傾けていそがずコロリカラリ——、人目を臆せぬ心憎いまでに落付き拂つた物腰である。

それが尚更に巾着切りのゴンタ安の胸を焦々かきたてるのである。かれこれ三丁許りも秘かに後を追つて機会を窺つているのに、根つからすきがない娘一人と侮どつてあつさり片附け様と思つたのに、些か当てが外れてゴンタ安はジリ〳〵していた。乱れた刷毛先に赤とんぼがスイと止つて疲れを休める。

「チエツ。とんぼまで俺を莫迦にしていやがる。ねらつたら外れつこのない俺の腕も、チツト鈍つたのかな。とんだ厄介なたのまれ仕事だい、こいつあ——」

ブツ〳〵つぶやいてとう〳〵三休橋詰まで来てしまつた。と云うのが勝気と男嫌いで、男の顔を見るのも吐気がすると云つた面持のゆきの激しい感情が、つい先日も道頓堀の中座の前で、故意にドシンと突き当つた男の出鼻を挫いたのだつた。

男はゴンタ安の兄弟分で、三下り半の傳次と云つて、これで女房を八回とり換えたと云う曰く因縁つきのうるさい奴、シドンと当つた拍子に彼の手がゆきの頭に延びていた。かんざしが抜きとられ様とした瞬間、ゆきはハツとして身を引いた。もう一秒と云

う処で惜しくも玉を逃がして、傳次は自棄くそ気味で、云いがかりをつけて来た。

「おいつ、嬢はん――。大の男に突き当つておいて一言の挨拶もせずに黙つて行くつもりですかい――」

ぐつと凄味をきかせて眉をつり上げる。大抵の女ならオロ〳〵して詫びる定石を破つて、一寸相手は勝手が違つた。

「オヤ、変ですね。後から来た人に私どうして突き当れますの。化物じやあるまいし後向に歩けませんからねー」

「アレツ、ツベコベとこの女め、ほざいたな。この俺様を誰だと思つていやがる、この界隈じや、ちつとは知られた……」

と淡呵をきる奴を軽く聞き流して、ゆきはフンと鼻で笑つた。まさか行儀の悪い鼻で笑つたわけでもないが、逆上している傳次には、さも鼻で冷笑された様に見えたに違いない。

人眼もあり、女に莫迦にされては第一顔がすたるし、男が立たぬと、いきなり武者振りついてくる奴の腕をギュツと捻り上げて

「アツ　チチチ……」

と眉をしかめるのへ、

「ホホホ……」

婉然と笑いこぼすと、

「傳次さんとやら、生憎く相手が悪かつたねえ。私は木津屋のゆき――。文句があるならいつでもおいで――。」

と云いきると、スタ〳〵拍子木に送られて、中座の桟敷に消えていつた。

と云うので、傳次口惜しくて耐らぬが威圧されてすつかり器量を下げてしまつた。で、今日も今日とて兄貴分のゴンタ安が、よし、それならこの俺様が眼にもの見せてくれるとなつた次第。

ペツと唾をはいて、

「ヘン、世間様から、男勝り、えらい娘つ子だと、チヨイトちやほやされりや、どうだいあの娘だてらにそつくり返り様は、何だいツ――、着物を剝げば唯の女、そんじよそこらの淫売女郎夜鷹と変りねえじやねえか。今に見ていろい。このゴンタ安の腕のいゝ処で吠面かゝしてやるから――」

クルリと裾をからげて、唐桟の袂に弥造をつくると、きおいこんで、さつとバタ〳〵かけ出した。

「急ぐんだ〳〵チヨイト御免よツ――」

ドンと擦れ違いざま、手練の早業は早くもゆきの巾着を懐ろに呑み込んでいた。――途端グツと彼の袂を摑んだものがある。

「やいツ、何しやがるんだい？……」

ギヨツとして振返ると、婢女のおかめが、満面に朱を注いで、死んでも離すものかと、ゴンタ安の袂を両手で握つている。

――失敗つたツ……と思つたが、こゝで弱味を見せてはならない。ぐつと胸を張ると、

「やい〳〵、急ぎの者を摑まえて何か用かい。てめえの様なお多福に俺ら交際いはなかつた筈だが……」

と、糞度胸を据えてシラを切る。

「かめ――離しておやり……」

「とんだ茶番で刻が経つたこと――さあ秋の陽は足が早いよ、一丁駕籠で飛ばすとしようかね――」

彌次馬をかきわけて、ツン出た駕籠に身を沈めると、ホイヨと宙に浮いて一散に天王寺向つて走り出した。

（二）

放生亀に経木書き、こぼれ陽にパツと飛立つ鳩の群――。

汐騒の如く響いてくる見世物、のぞきからくりの囃子の音。彩色の伽藍は香煙にゆらめき渡つて。彼岸の四天王寺は人で埋まつていた。雨霰と飛んでくる穴銭を避けて、賽銭箱の傍らにゆきは凝つといつ迄もきさはしにぬかづいていた。閉じた瞼の中を去来するものは、過ぎこし方の味気なき肉身の、桎梏だつた。

木綿問屋平野屋の三女と生れた身が親同志の定め合いから、聡明を買われて木津屋清兵衛の養女となつたものゝ幸福は三年と続かず、十五の歳に養父に死に別れてからは、家督相続の醜い争いが、渦を巻いてヒタヒタとゆきの身を押し包んでいつた。養母派の暗躍と親戚連中の小うるさい差出口は思春期のゆきにとつて只管煩わしい限りであつた。

そのことに増しての悲しみは、ゆく〳〵は婿養子を定まつた糸源の二男の源二郎の足が、近頃ピタツと止まつてしまつた事だつた。親族間の醜い争いは潔癖な源二郎にとつて、余りにも苦

々しい出來事許りで、好き合い、行末を契つた二人とは云え、いつしかゆきと源二郎の仲は日に日に隔たつて、今は昔に戻すすべもなくて、挙句の果は糸源からの縁組取消しで、ゆきは果敢なくも十六で淡い失恋にも似た憂目を見たのである。

明け暮れ泣き暮していたゆきが半年後、何が彼女をそうさせたのが、パッと夢の開くが如く目も綾に、天性迄も変り失せて、生れ変つて島の内に颯爽と現われた——。そこには嘗つて半年前迄の悲痛の色も落胆の色もなく、大道を濶歩して、物見遊山、芝居小屋にすら屢々顔を覗かす様になつた。男と見るとスイと顔を背け、男嫌い、片輪と蔭口云われるにつけ、ゆきの男を忌む心は益々ひどく、中座の芝居小屋の前で三下り半の傳次を見事肱鉄砲喰わせてからは、ゆきの名は褒貶こもごも道頓堀に響き渡り、ゆきが通れば、

「ホレ、男嫌いのゆきが來た——」

「成程あの顔じや、こちらで御免を蒙りまさ——」

とジロ〳〵見つめられ、そう云えばいつ出來たのかあの初々しい富士額の下ぶくれの色白顔に、右半面醜くい痣がどす黒くのさばり返つて、フト黄昏に見る人の胸を、妖しくどきりとさせずにはおかなかつた。

ゆきはよく道頓堀の芝居茶屋鳴瀬に遊んだ。鳴瀬の芸妓で千文と呼ぶ別に取柄はないけれど、人並外れた大柄で踊りならまだしも、何好んでか尺八を呼物にしている女があつた。みどりの黒髪を短かく切り、奴髪に結つて、いつも尺八を腰にさし、元禄袖のだんだら模様も派手な姿で道頓堀を我物顔にのし歩き、人目をひく凛々しさに、ゆきはいつしか、女同志の愛情で、千文を深く慕う様になつた。

千文の男を男と思わぬ俠気が、嬶てはゆきの環境を徐々に變え、彼女は好んで千文の言語動作に急速に近づいていつた。

フト瞑想から醒める——。

一瞬脳裏を、千文の粋なスタイル、男を虫けら扱いにする快よい胸のすく啖呵がスッと走り去つた。

——そうだ。いつそのこと、弱い女を援け世の悪をこらしめる仁俠に身を捧げることにしよう——。

余りにも弱い女の存在……。虐げられ、いじめられ、圧迫され、言いたい事も云えず、自由を奪われた女——。手ごめにされてもその儘泣き寝入りする女の群——。その女も男も同じ人間の筈——。

女のいじめる男を懲しめる女。なんて、ホホ、それも面白かろう——。

ゆきはもう一度深くきさはしにぬかずくと深く心に決した。

女俠客——。女勇み肌——。千文の姿を焼けつく様に瞼に描いてよく立上つた。

「おかめ——。私しや本日唯今より俠客になつたよ——」

「……俠客？……へエ？」

ボカンとするのに明るく笑つて、

「そうだよ、俠客。女幡随院だよ。さしずめおかめは三人力。私の一の乾分だね——」

いきなり揚島田の元結をピチリと切ると、バラリと崩れる黒髪を無造作にかきわけて、ゆきは男の様な大きな声で哄笑した。

そうだ奴髪に結おう。それがいゝ。そして元禄袖に角帯。尺八代りに赤鞘の角鍔——。ゆきではおとなしすぎる何と名乗ろう——。奴……、奴……の小千？　いや千の上を行く方ならどうだろう。そうだ奴の小万。それがいゝ奴の小万——。ゆきに物の怪につかれた様に人混みをかきわけ、ぞろ〳〵珍らしげに随いてくる彌次馬も気にならず、無我夢中で赤い裳裾を飜がえして奴の小万！　奴の小万とつぶやきつゝけていた。

（三）

「親分！　どうあつてもこれだけはたゞで済まされませんよ——」

派手な大柄の浴衣を、女だてらにクルリと尻まで捲くり上げ、太い白股をニユッと出してあぐらをかいた矢車小勘は、赤黒い顔をひきつらせて腹立ち気に小万にグイと近づいた。

かつての三人力の婢女おかめのその後の姿。こんな稼業が性に合うのかすつかりいゝ女になつて、稱して矢車の小勘とて丈夫女——。今一人の片腕はこれも婢女だつた泉州堺の漁師の娘でおいわ——。稱して白鷺の小仙、名前にふさわしくなくコロ〳〵した四尺そこ〳〵のすばつしつこい女。十七の生娘だが、いつぱし男をなめてかゝるだけの度胸がある。

ましてや、白百合の小新、天満の小俊、久賀の小源など、そう〳〵なる女俠が、小万の噂を慕い、仁俠を驅つてはせ集つていた。今や小万の身内三下奴にいたる迄総勢百六十人余、男禁制の女護ケ島。浪速名物の一つとして、日に〳〵虐げられた女の群で乾分は殖える一方だつた。

時に、延享二年——。江戸では九代将軍、小便公方家重将軍職を継いで、祝いに老若男女明け暮れ踊り狂つていた。

噂は噂を呼んで、奴の小万の行状記は、其頃の淨瑠璃作者並木文助が浅田一鳥と組んで早くも淨瑠璃に綴り、延享二年盆の興行に中座で市川龍藏が、「容競出入湊」と題して狂言に仕組んで、日夜押すな〳〵の大人気。桟敷に陣取る小萬とその乾分達のきりりとした艶姿と、市川龍藏演ずる奴の小萬の舞台姿とを両の眼に見て、観客はもうてんや、わんやの大騒ぎだつた。

この大人気を嫉んだか、船場を縄張りとする不知火半左一派と引くに引けぬ事件が捲き起つたのである。

事の起りはこうである。

小萬の使い走りで、大和の郡山から遙々訪ねて來たおくみと云う可愛いゝ女。つい半ケ月許り前に、やつと古都舞妓小さんと粋な伎名を貰つた許りの十六娘が、道頓堀の中座の前で、自慢たら〳〵親分小萬のいゝ事づくめの身内話に夢中の折、それが丁度通りかゝ

つた不知火身内の三ン下奴三人の耳に入つた。運の悪い時は仕方のないものそのうちの一人でへちやくれの甚六と言うのが、三下り半傳次と兄弟分の盃をしていた。話は折しも、ちぼを相手に廻した手柄談の一節。よせばよいのに、おだてられての嬉しさから、尾鰭をつけての仰山な話振り。それが甚六にコチンと響いた。

「さあ――その時、わてはもう胸がスー――ツとして、ボキンと折られた腕を抱えて、ペン〳〵頭下げて帰るチボの顔、あんた達に見せてあげたかつたわ……」

夢中で話しているところへグイと割り込んだ甚六――

「ヤイ、三下り半の兄貴が腕を折られたと……嘘こけツ――手前それを見たんか？――」

びつくりした小さん、ギョツとしたが今更引つ込みもならず、

「わては見いへんけど、見た姐御がチヤントいるんや――」

「阿呆んだら！　あることないこと喋り散らして俺等に恥かゝせる気か？」

「何もあんたらに……」

「やかましいやい。傳次は俺の兄貴分だゾ。チョイト資出しや、いゝ気になりやがつて、小萬がなんでえ、片輪じやねえか。女はなあ、淑やかで、優しいて、女らしうて、男に好かれるのが本当の女子じや。小萬女郎はな、あらら女子の恰好をした片輪や。女の味もしらん可哀相な女や。それにあの化物見たいな面は――見ただけでもゾ――ツとするわへへへ」

「ようも〳〵わての親分ボロ糞に云つたな。口惜――いツ！」

小さんは前後の見境いもなく、カーツとのぼせて甚六の二の腕に思いきりかみついた。

「イタタ……畜生！すべた奴。よしツどうするか見てゝやがれ――」

「おーい」と呼ぶとバラ〳〵と現われた不知火の三ン下達、日頃女衆に押され気味の鬱憤も手傳つて、いきなり小さんの手取り足取りしたかと思うとキャーツと悲鳴をあげる赤い唇をグツと押えつけて、その儘彼等の巣、本町溝池筋の場口場へかつぎ込んでしまつた。――ホウこの女が奴の小萬の身内かい、フン可愛いゝ面に似合わぬ末恐ろしい娘や。一ぺんヤキ入れたらんとあかん――と、寄つてたかつて無頼漢共の玩具にされた挙句、ぐつたり死んだ様になつた小さんを曳きづつて、三休橋の橋詰、柳の根方にうすもの一枚きりの素裸にされて、曝し者になつていたと云う、小萬身内にとつて、胸のカツとなる、煮えくり返る様な侮辱的大事件が起つたのである。

半病人同然の姿で担ぎ込まれた長堀の家で、うつゝたわ言に、親分に合わす顔ない、世間様に大手を振つて歩けなくなつたと、とぎれ〳〵に泣き喚いて、昨夜の丑満刻。介抱の寝静るを待つて、小さんはそつと抜け出すと、長堀橋から身を投げた。

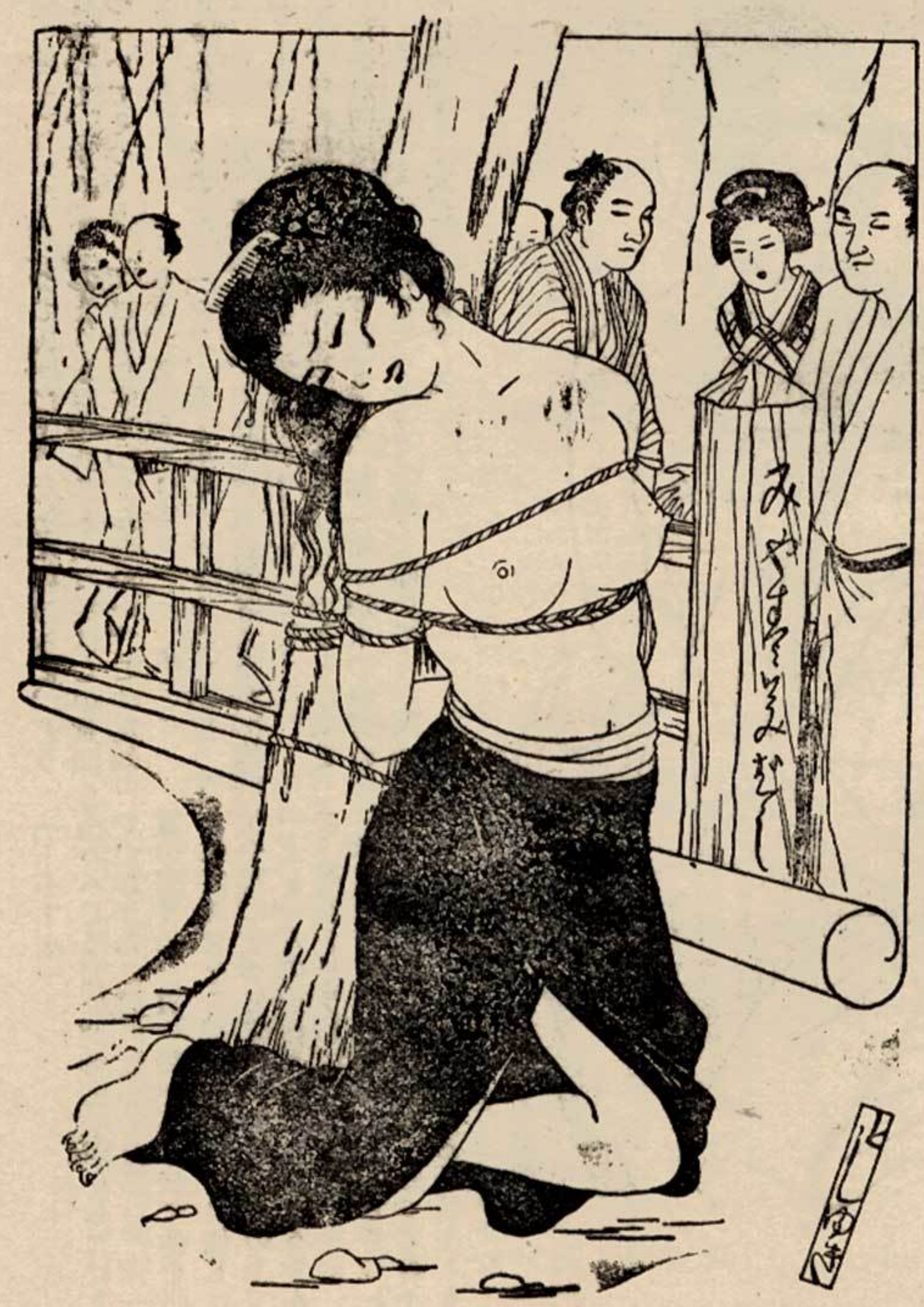
翌けて、浮いた四ツ橋の東寄りからかけつけた使いの者の知らせで、屍体となつて水ぶくれの小さんは戸板にのせられて哀れな姿り果てた姿で還つて来て――。

今も今。默然と涙ぐむ小萬にぐつと近附いて、小勘は再び声を尖らせた。

「口惜しいじやありませんか――親分默つてその儘泣き寝入りするんですかい――。」

どの面々も、激しい憤りもやる方なき憤懣で張ち切れそうに、まなじりをつり上げていた。小さん一人の命だけでなく、女への侮辱――。默つて引込めぬ宿命的な男女の争いを言外に含めて、一同は小萬の顔色を窺つた。

「皆んな、分つたよ。わしに覚悟もある。誰も手出しするんじやないよ。小



さんの無念はこの私がきつととつてやるから……。私一人で充分、皆騒ぐんじやないよ。おとなしくまつてるの、判つたね――」

じろりたしなめてから、小萬は如何なる成算あるのかきつぱり云い切ると素早く身支度を整え始めた。いつの頃からか由井正雪の生き方に心酔して眞似る様になつた薄物の黒羽二重に、菊水の紋散らしをさらりと身につけ、細身の刀をしんまり腰に打込むと、びんのほつれを撫で上げて、きおい立つ乾分を制して、すツと敷居を潜ぐ。カチ〳〵ときよめ石の火花を背にして、行く先は、云わずと知れた不知火半左の許――。

すらりとした容姿は黒二羽重の雪駄履きとマツチして、夕闇に惚れ〴〵とする後姿のあでやかさ――。素足もなまめかしく道行く人を振返らせて、半刻の後、小萬は不知火と対座して、恐るゝ色もなく膝を揃えて血相かえた男共に取り圍まれていた。

「ホホ、女一匹を大の男が仰山に取り圍んで、逃げも隠れも致しませんよだそれに何だい今の御挨拶は――。罪もない娘一人を散々手籠、嬲りものにしておいて、子分のやつたことはわしやしらぬと、それでも親分さんと奉られて乾分共の頭に納まつていられるのかね、それとも他まで知らぬ存ぜぬで押し通す気かね？――」

「俺の知らぬ事だあな。だい一女だてらにシヤキ〳〵とのさばり返つて痣（あざ）面さげてくる料簡が、気に喰わないよ。足許の明るいうちに、トツトと歸りな



「……」

不知火半左はせゝら笑つて、悠々妾に酌させ乍ら小鉢をつゝいてそつくり返つている。

「可哀相に嬲られた小さんは、それを苦にして佛になつたよ。半左さん、それでも当り前なんかね――。」

「小娘だてらに道頓堀で、男に楯つくのを、チヨイト料理したのが何故悪いの――。」

「女と男とどう違うんだね。――女だつて人間だよ。女なら死のうと、どうしようと勝手次第と云う掟はこの世間では通用するつてんのかい。この恥知らず、外道奴ツ！」

「フフ、女と男じやチツト造作が違うてんだ。口惜しければホイこうして裸になつて見ろい――」

不知火は憎々しげにバラりと單衣を脱ぎ捨てると、体一面不知火の刺青の肉をピチヤ〳〵平手で叩いてあざ笑つて見せた。

「……ハハどうだい。仲間交際いしたけりや、こうして裸になつて見ろい。裸一貫の賣り物、買い物。応と云や体を張る仁侠渡世なら裸が元金だ。口惜しけりや裸になつて見やがれツ。その上で一人と一人の挨拶もしようと云うもんさ。えゝ――どうしたい……」

誓し小萬はポツと頬を染めてじつと唇をかんでいた。出來ぬと知つての不知火の悪意地――。今更おめ〳〵とも

引つ込めぬ。ギリ〳〵と歯がみをした小萬は一生一代の意地で

「よしツ　なつてあげよう。親以外に見せたことのないこの肌だが、こうなりや私も意地と云うもんさ。なりやいゝんだろう。えゝいそこらの有象無象の三ン下も、雁首ならべてとつと弁天様のお肌を拝みやがれ。目がつぶれても知らないよ――」

いきなりさら〳〵と帯を解くや、あつと魂消る間もなく羽二重を滑らせて下着を脱ぐと目も眩ゆい眞白い女体を惜しげもなくサツと曝して、

「さあ、これでいゝんだろう半左さん一体この始末はどうおつけなんだい」

好奇と驚嘆の眼の集中攻撃の中に小萬は悪びれず端然と座り直すと、小気味よく啖呵を切つた。半左はグツとつまつた。まさかと思つたのがいきなり裸姿になつたので、この上は横車押すより術もない。

「ウーム、あばずれすべた奴。始末はこうだよ――」

いきなり理不盡にも俄破と小萬を抱きしめて、ぐつと引き寄せた。アツと叫ぶ間もなく自由を奪われ、そこは悲しい男と女の力の相違、ズル〳〵と曳き倒された。其の瞬間――パツと飛び込んで來た武士一人、

「待てツ！様子は総て外で立聞いた理非は何れとしても、可弱い女一人を何とするつもりじや。離せツうち虫」

凛と叫ぶや半左にパツと近附こうとするのを、辺りに群がる子分共

「えゝい。いらざる邪魔するな。三ピン――くたばれツ！」

颯つと長脇差を抜くと滅法に斬りかゝるのを、斜めに走らせてパンと足蹴にする。――やりやがつたな――と一斉にわつと打かゝる奴を、右に左に外しポン〳〵とあしらつたと見るや、ツツーと半左に近附いて、ウワツと驚く半左を目掛けて、スツと抜く手も見せず一刀は鞘を離れて、彼の右腕を附根からバサリと斬り落した。

ヒエツーつと悶絶するのを小気味よげに眺めると素早く小萬の手をとつて

「長居は無用じや。一先づ外へ……」

件の武士は力強くグイ〳〵小萬を引つぱつて――親分の仇ツ――と打つてかゝる乾分共を避けて戸外に走り出たワア――と追い掛けてくる奴らを尻眼にかけて、脊し〳〵、走る〳〵武士と裸女――。物見高い彌次馬もどん〳〵交り人混みは増える一方――。実は虚を呼んで忽ち船場界隈は大騒ぎ――。

「ウワ――ツ、噂に高い奴の小萬が裸で走つて行くで――」

「そらえらいこつちや。裸の小萬を拝まんとこら一生の損や。」

「なんやあの侍は、仲よう手をつないで、どないしたんやろ――」

「不知火の奴等追いかけて行くで。こら大喧嘩あつたんや。そら眼と鼻のところでの繩張り争い。わても、きつと一ぺんは喧嘩するやろ思てたんや。」

いやもう大騒動で、我も我もと小山の様に武士と小萬の行手〳〵をとり圍み、縺れて行く。十重一二十重、屋根に昇り、梯子を持ち出す物凄さに、流石の武士も困じ果てゝ、さつと戎橋の傍らの空番屋に飛び込んだ。

ホツと一息して始めて顔を見合す。武士の端麗な苦み走つた顔に安堵の色が浮んだ。小萬はポツと紅に頬を染めて始めて我が身の裸形に羞恥の色を濃くして、慌てゝ双手でムツチリしまつた両の乳房を抱えてしやがみ込んだ突嗟の事とて言葉を交す余裕もない程息が乱れている。それを見て武士は急にクル〳〵と着ていた帷子を脱ぐとフンワリ後ろから素肌の小萬に着せかけて

「小萬と申したな。とんだ迷惑じやつたな。もう大丈夫と思うさらばじや」

「あツ、お待ち下さい――。せめてお名前なりとも……」

思わず縋りつくのを、

「名もなき者、況して我も追われる身したがこれも何かの縁となろう。これはわしの筐（記念）――いづれ又逢う事もあろうぞ。」

ぐつと腰の印籠を抜きとつて、小萬に握らすと、その手に重ねて力を加えると武士は飛出した。

「待つて……待つて下さい。」

小萬は恥も外聞もなく、帷子の胸許を合せて、帯もせぬ儘に、乱れる裾を飜えし、踏みつまづきつゝ、懸命に武士を追つた。折柄曇つて來た空は生臭い風を誘つて、ポツリ〳〵の夏雨が沛然と気紛れな夕立に代つて、濡れて走る小萬の姿を稻妻が時々白く輝した。

轉びつ走る小萬の姿――。已れの醜くい痣に顔を反けず、優しいいたわりをかけた武士の男らしくも健気な思いやりに、男を毛嫌いする小萬の胸に始めて湧いた甘い慕わしい熱情。シンと冴えかえるものが脳裡を一曳つらぬいて、これが恋と云うものなら、見得も体裁もいらぬと、思いつめると矢も楯も耐らず、見え隠れる武士の姿を血眼で追つた。一心の力は恐ろしい。難波村の邊りでやつと追いつくと、滴る雨しづくを拭いもせず、

「お、お待ち下さい。せめてお名前……お名前を……」

一念の力に押されてか武士は、

「それ程までに斯の如き拙者を……名乗るも烏滸がましいが、名は浜松庄兵衛。遠州掛川宿の者――。やゝそちの顔は！……」

「えツ、私の顔がどうかしまして？」

「痣がない、否痣が消えた。あの醜くい痣の跡形もない。」

「では今の夕立で……」

「消えたと申すか？」

「ハイ。男嫌いと、男の誘いの手を拒む爲の私のはしたないつくりもの。したが、今からは最早痣をつくる必要もムいませぬ。」

「とはどうしたわけ――」

「私の痣の醜さを承知の、お優しいお心盡し。女の唇からお恥かしうムいますが、私しや庄兵衛様貴方様をお忘れ出來なくなりました。――」

「さて〳〵見れば見る程美しい。小萬殿。ではそれ程までにこの拙者を……」

「ハイ……」と消え入る声と共にそつと庄兵衛に寄り添つた彼女の肢態は、判然とうら若い一個の女性の姿そのものであつた。女侠も男嫌いも雨に流されて、女の眞性の美を類いなき麗顔に漂わせて、小萬は匂う頬をそつと彼の胸に始めて凭せかける。雨は又しても篠つく許りに降りしきる。

小萬の数々の崎行を知る者はあつても、日本左衛門と侠女奴の小萬の激しい恋愛の一頁を知る者は殆んどない。

（終）



シベリアのオバツイ小僧

畫家連中がすばらしいモデル女だとほめそやすセントラルのオツパイ小僧は日本ではなか〳〵見事な存在だろうがシベリヤに行けばあんなのはざらにある。いなあれ以上のがざらである。

和製オツパイ小僧は、なる程前から見ると胸全部がオツパイだが横から見ると、肩から垂直にペシヤンコで、たゞお乳がふくれで居るだけで、少しも美しい曲線で見られない。それにくらべシベリヤのオツパイ小僧はどうだろうか

先づ吾々日本人がシベリアの女を見て先づ目につくのは胸で圧倒されそうな驚異的な見事なオツパイが道行くどの女の胸にも躍り狂いて居る。まだ結婚前の十七八才の娘が子供を生んだ日本人でも見られない様な見事なオツパイを持つて居る。それも横から見ると肩からぐつとピラミツト型に隆起し今にもはち切れそうな青春の血の躍動が、美しい曲線となつて、あらわれて居る。

此の大きなオツパイと大きな腰部がシベリア美人の第一條件であるというのだから唯物論的ソ連人の一端がうかゞわれる。

だが何故かくも大きなオツパイを持つて居るのだろう。そこには体格、体質の遺傳性と言うものもあるが、なんと言つても彼女の性生活が大きく反映して居る。即ち愛撫動作としての男の仕事が大いに影響しているのだとソ連人自身が証言して居る。

だが、このオツパイは絶対と言つていゝ程人には見せない。田舎の小娘でも蕾がふくらみかけるとブラヂエアーをする。乳当ては女として離す事の出來ぬ、大切な裝具である。

或夏農場で仕事が終つてから、吾々日本人はすぐ近くの川で水浴をした。シベリアの夏は大陸的で物凄く暑い、一緒に働く女達の汗、髪の匂い体臭が吾々の鼻に鋭く匂つてくる。十二三人の二十才前後の彼女達も勇敢に吾々と共に水浴したが、ブラヂエアーだけははずさなかつた。

その上水浴が終つて、服を着る時も濡れたブラヂエアーをつけたまゝ、服を着てしまつた。日本人には一寸解しかねる事である。

此れ程、秘密にしていたのを一度私は見た事があるからシベリアのオツパイ小僧をほめるのである。

私の行つてた工場にはシヤワー式の風呂があり仕事が終れば自由に毎日はいれた。

或日仕事が早く終つたので空いてる上の女風呂へ友と二人ではいつて、いゝ気持になつて居るとどや〳〵と女達が入つきた。

飛び出すわけにも行かないし、困つてる内に女達は私のすぐ横にきて、じや〳〵とシヤワーをかけ始めた。物凄い蒸気だし、まさか日本人が居るとは思いも掛けぬ彼女達は私の目の前で一糸もまとわぬ白い肉体をさらけ出した。

私は食べる事にのみ追われていて、二年近くもすつかり忘れてしまつて居た若い焔が怪しくめら〳〵燃え出すのを感じた。その時一人の女が私のシヤワーに飛び込んできて「キヤー」と派手な悲鳴をあげとう〳〵発見され、もう少しで見事な肉体に袋叩きにされる所だつた。とんだ失敗談だつたが、センタラルの和製オツパイ小僧に満足して居る日本畫家連中に、あのシベリアのオツパイ小僧連中を見せてやりたいと思う。

シベリア女の貞操

貞操觀念　此れはシベリヤでは一世紀前の死語で、現代語にはない言葉である。

今日の日本の新聞には失戀自殺や、心中の書いてない日はない位だが「なにも死なゝくても、男は一人じやあるまいし」と言うのが常識で「まず欲望を滿すのが人生の最大にして全部の目的である」と言うシベリヤには心中や失恋自殺等は珍らしい出來事で滅

秋宵獵奇談集

僧の娘の怪

昔、奈良の大安寺の別当をしている僧の一人娘のもとに、毎夜通つてくる藏人があつた。それも夜だけでは足りないので晝も泊ることがあつた。

藏人がある時、晝　していると俄かにこの家の人々が泣き騒いでいるので、何んだろうと、怪しく思つて出て見ると、皆の者が大きな土器を持つて泣いていた。彼は不思議に思つて、よく見ると、鬼ですら飲みかねない程の熱湯を泣く〳〵呑んでいるのであつた。そして自分の傍に寢ていた女も、母親が來て呼び起し、連れてゆくので見ていると、女に大きな土器に熱湯をなみ〳〵と、入れて渡した。それを女は悲しい声を出して泣き〳〵飲むのであつた。女の美しい目や鼻からは、煙がゆら〳〵と上つていた。

何ということだろう、と情けないと眺めていると、母親はその土器を女から取り上げて

藏人にも飲ましよう、と言いながら、熱湯を溢々と注いだその大きな盃を持つてきたので、自分も又それを呑まねばならんだろうかと、はつと驚いて夢が醒めた。

丁度その時、女が彼のところへ食物を持つて來たが、なんとなく気持が悪くなり、食べずに家へ帰つてしまつた。そしてその後再びその女の処へ行かないようになつてしまつた。

シベリヤ軟派風景 二題

穴吹 武

多にない。

日本人の目にはどう見てもシベリアの彼女達に貞操観念があると見えなかつた。

「享楽するのも男女同権よ」

「自分一人でなく、お互いに楽しいのだから此れ位良い事はないでしよう」と言いつゝはつたり道で会つた名も知らぬ男に体をあたえる彼女達である。

彼女は本能のまゝに、赤裸々に進んで行く。アダムとイヴの楽園は眞晝の草原に、馬車の乾草の上に倉庫の中に廃坑の中に、いたる所に演じられ吾々を刺戟した。

此の様に彼女達は戦争で男を失い、何よりも生活において一番男に不自由して居た。腕の良いハンサム、ボーイなどは十人の女を持ち、女もそれを知りつゝ十日目毎の快楽を楽しみに生活してるのだつた。だから勇敢な日本人は彼女の腕の中に飛び込んで行つたが結局初めの内のみでうまく行かなかつた。と言うのは日本人にはとてもソ連の男の様な愛撫動作が出来ないのだつた。日本人はどこ迄も暴君的で女の心も考えずに、さつ〳〵と自分だけ満足すると終つてしまうが、ソ連の男は我々から考えると何かねち〳〵してじれつたく感じる程であるが、それだけ日本人は劣つて居るのであつて、とても、ソ連の男達と太刀打ちすることは、淡白な日本人には出来ない。

此の性慾をシベリヤではとんでもない事に利用して居るそれは或日一緒に働く女囚人がよく働くので「よく働きますね」と尋ねると

「一生懸命働けば男の囚人の所へ慰問に行けますからね。もう六月から男なしで……。もし姙娠でもすれば仕事は休めて、おいしい物は食べれるし、子供が生ればスターリンの子だというので國家が育てゝくれますから。」

何んと言うソ連的やりかた「性慾を餌に。」日本人の中にもこれにつられてゲペウのスパイになつた者が居るのである。

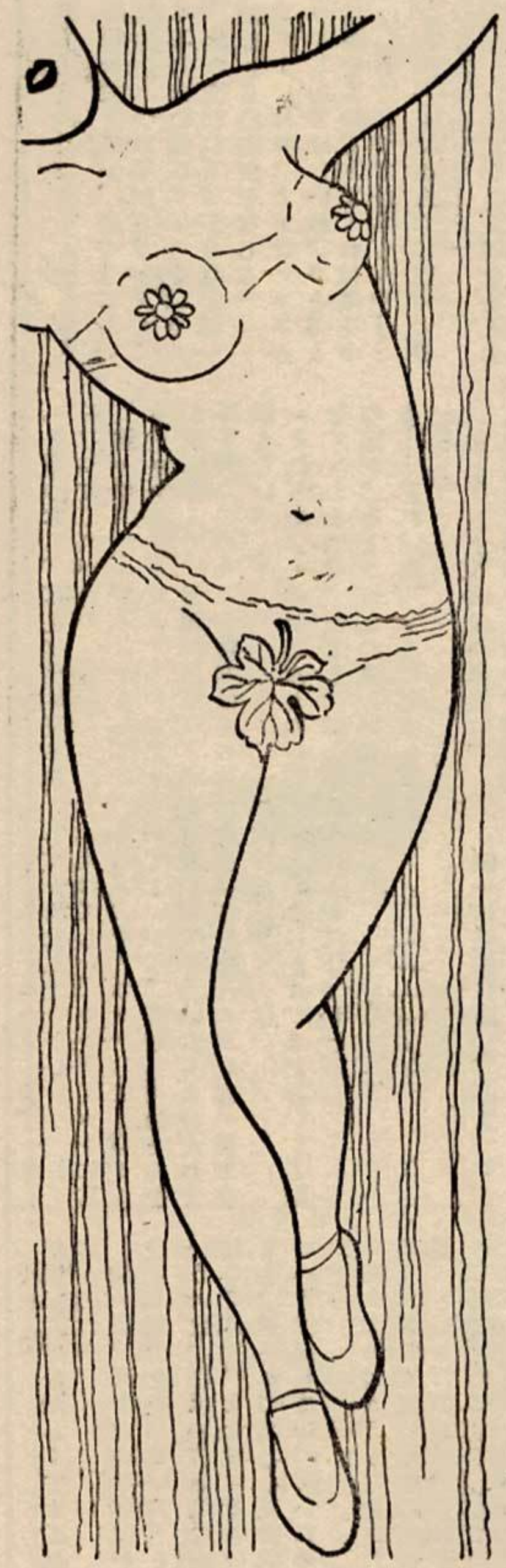
たまに飲んだ強いウオツカにいゝ気持になつた時、ドアが開いて全裸の美女が入つてきて、今流行のストリツプショーを演じる。ゲペウはにやゝ〳〵と日本人の顔を見つゝ、あの女、白い豊かな腰、大きな乳房、あの女を抱きたいと思わないですか私の言つた事を聞けばあの女を抱く事も美味しい食物も煙草にも不自由しないですよ。」

と言いゝつゝ日本人の眼の動きで脈がありそうだと見るや、その美女に合図をするや女は日本人の横にぴつたり体をつけて腰掛け、酒をすゝめ、肩に手をまわし、頬ずりつけ挑発してくるや、殆んどの日本人は、ふら〳〵と夢の中に署名してしまうのである。此のスパイの爲現にシベリヤの野に苦しむ同胞が数多く居るのである。

女は大小の差こそあれ、誰しも露出症的傾向があるがシベリヤの女は時にひどい様である。シベリヤの田舎には未だノーズロースの女が相当居る。その女達の牛の乳を搾る姿に、久米仙人になつてとんでもない怪我をした日本人も居る。とかく男と言うものは誰しも、ストリツプショーを見ても、その日はある一点に集中するものである。

私の働いて居た工場の便所は戸がこわれてなくなつてしまつて居た。或日私が用をたして居ると工場の若い女事務員がやつて來て、私が居るのを見るや、一寸赤くなりつゝ、私の眞正面の便所に立ち、にやつと笑いかけつゝ、スカートをめくつて、私の方をじつと睨みつゝ用をたしだしたのには、流石の私もめんくらつてしまつた。中には悪戯半分日本人に近づいて「スマトリ（見て見ろ）」と言いつゝパツとスカートをめくる女達も居た。

了





変態遺伝
コレクション
女の
腰巻を
蒐める男
兵庫一平
（絵）三平

（一）

「健ちやん、どうする、早う返事をせぬと、先方さまに失禮になるわ、それに昨日も媒酌人の森川さんが見えて、健ちやんはもう年頃やのにまだ色氣がついとらんのやろか、それともひとゝ逢つたとこがあるのやろかと、それはそれは失禮なこと言いはるねん、うちくやしいつたら、腹が立つてしんぼうてけへんだ……」

どうするねん健ちやん、このひとのどこに不足があるのかいな、新地一流の料理屋、堺芳のいとはんの由美子はんや、あんたも、度々見てるからくれたらどう……」

母親の文字榮が、疊の上においた寫眞をみつめながら、パチだこのできた白い指にピースをはさんで、紫の煙をたてながら息子健一の煮えきらぬ態度をなじる。

「どうしたの、ノーかイエスかはつきりしてほしいわ、ひとさまが耳緣をもつてきてくれはるときには相手になつておくもんや……それとも、あんたに意中のひとがあるのかいな……」

なんとかしてこの緣談をまとめたいと、文字栄は躍起になつている。

「不足なんか、あらへんけれど……」

「そやつたら、なんで結婚する氣になつてくれへんの……」

健一は二階の押入にかくしている、コレクション・アーテイクルが頭に浮んで、母親の言葉など馬耳東風、鵜の毛でついたほどの反應もない。

「それぢや、由美子さんとのお話をすゝめまつせ、わてもの顏が、みとうおまつさかいにあ……どれ、森川さんに電話してからにして下さい」

「あほらしい。サラリーマンになるなど、そんなケチなこと考えんかてよいがな、結婚して嫁さんを可愛がつてさえいたらよいんねや生活はお母はんの三味線一挺で充分や……」

「まあとにかく、まだ早いから斷つておいて下さい」

（二）

健一は強固に斷つてしまつた、健一としては、現在のコレクションの動機をつくつたのは、家へ稽古にくる、新地の藝者、〆奴の媚態からであつた。

「ぼんぼん、ぼんぼん」

と〆奴はくる度に健一の歓心を買うようにつとめ、なにかとまといついた、そのコケツトに富む身のこなし、健一が能動的にでれば崩れ折れてくるような媚態、故意に健一の好奇心を煽るように見せびらかす、緋の腰のもの、その緋の色に眩惑されて、健一のコレクションが病的に昂進していつた。

〆奴の着物の裾からのぞく緋の色を見なかつたなら、健一は健康な結婚生活へ突入していたゞろうに……

（三）

健一は、城東線や近鉄の高架線に乘るのが好きだつた。走る電車の窓から見える。遠く近くの家々の物干台、そこには風に吹かれて

ひらひら動いている緋色、桃色の女性の神秘境を隠す腰のものゝオンパレード、そんなシーナリーに男心が躍動する昂奮と、満足と愉悦を感じるようになつた、これが病状の第一期だつた。

治療法を誤しなければ病状は秒針の動きとともに昂進する、健一はとうとう、緋色、桃色が風になびく風景を眼で愉むだけの境地にとゞまつていることができなくなつた。

健一は公開できぬコレクションへ盲目的に突入した。西區の焼跡に建ちならんだ新築家屋の物干台から、コレクション一號を入手したときの歓喜、スリル、グラッド昂奮は、生への享楽を教えてくれた、コレクション・アーテイクルを愛撫することは、大閤が淀君を愛したよりも熾烈なものだろうと健一は思つた。

二階の押入のトランクのなかには、緋色、桃色、赤い柄のこれらの品で一ぱいになつた、その品々を眺めて愉悦にひたりつゝ日を送つた、病状は第二期である、こゝで名醫の診斷と、健一の自覺がなければ、救い難い大患に、おちいつてしまう。

(四)

健一は蒼褪めた顔の締めの三味線が聞えるはずなのに今日のこの時間は常軌を逸している。健一は、おどり場にしやがんで、きゝ耳を立てた、際對に出ているのは母親である。

「どうもまずいことですがね」

「どんな、御用でございましようわたし方は息子との二人暮し、警察の御厄介になるようなことをした、覚えはありまへんねやけど」

警察ときいて健一はどきりとして息の根がとまるように思えた。頭のなかにコレクションのなまめかしい華やかな色彩がぐるぐるとまわつた。

「どんな御用ですねん」

母親の言葉には怒氣がふくまれている。

「それがね、どうも言いにくいのです。息子さんのことについて投書が度々警察へくるものですから……」

「健一のことで……健一がなにかしたのでつか……あの子にかぎつて……」

母親はひどく狼狽しているらしい

「それがねどうも……」

「早く言つて下さい、健一が警察などへひかれると、わたしたちの生活が脅されまつさ、わたしのうちは真家のお嬢さんをお預りしてまんれやから……」

「ちやあ、こうしましよう、健一君に一度、いつでもいゝですから本署まで出頭していたゞきましよう。その上で……」

「言つて下さい健一がどんなことをしたか、早よ、言つて下さい」

「こゝでは言わんことにいたしましよう……とにかくね、待ちますから、あなたもよく健一君の挙動に氣をつけていて下さい。もし不審な點にお氣づきになりましたらお母さんから注意してあげて下さい。それで反省されたら、それにこしたことはありませんから……」

「そんな、えゝかげんなこと言わんと、健一のいたらぬところを、言つて下さい、たのんます……」

怒氣から狼狽、哀願と母親の態度が變化した。

「それぢや、一口だけ言います。これは犯罪を構成するコレクションです」

「まあ……」

母親の驚きの聲を最后に、ポリスの靴音が遠ざかつていつた。

(五)

健一は、一難を逃れてほつと吐息を洩したが、次にくる母親の詰問に備える態勢をとゝのえなければならなかつた、そつと部屋へ歸り、机の前に坐つて、階下の氣配に全神經を集中して、母親の行動を知ろうと眞劍になつた。

コレクションによりスリルも愉悦も感じられない。たゞ一途に母親の動向が氣になつてしかたがなかつた。

「健ちやん」

と呼ばれてふり返えると母親が立つていた。

「お母さん、すみません」

健一は疊の目をみつめたまゝ殊勝に謝つた。

「ことわり言うことなんかあらへん、母さんはなにもかも知つてまけど、いかんことや、はよやめてほしいねん」

母親の言葉に、健一は痴呆のように、ぼかんとした顔をあげてみつめた。

「血すじは爭えんもんや、これを見てみい……」

母親は持つてあがつてきた風呂敷包を、ぐいつと、健一の方へおしやつた。

そして、きつと健一の顔を見つめて、涙ぐみながら、

健ちやん……しつかりしておくれや、これが、お父さんのコレクションだつたんや、此の病氣のために、隣近所に迷惑をかけ、數多くの縁談にも相手にならず、丁度あんたそつくりだつた、途には警察の御厄介になる様の事になり、隨分親達をかなしませたものだつた。

それが、うちと結婚しなはつてからぴしやんと、やんでしまつたんや、嫁さんは、よいもんや。すぐそんな事、あほらしくなつてしまいまつせ。

それであんたも一日も早く由美子はんと結婚しておくれ、お母さんに、いやな心配させんとてんか。

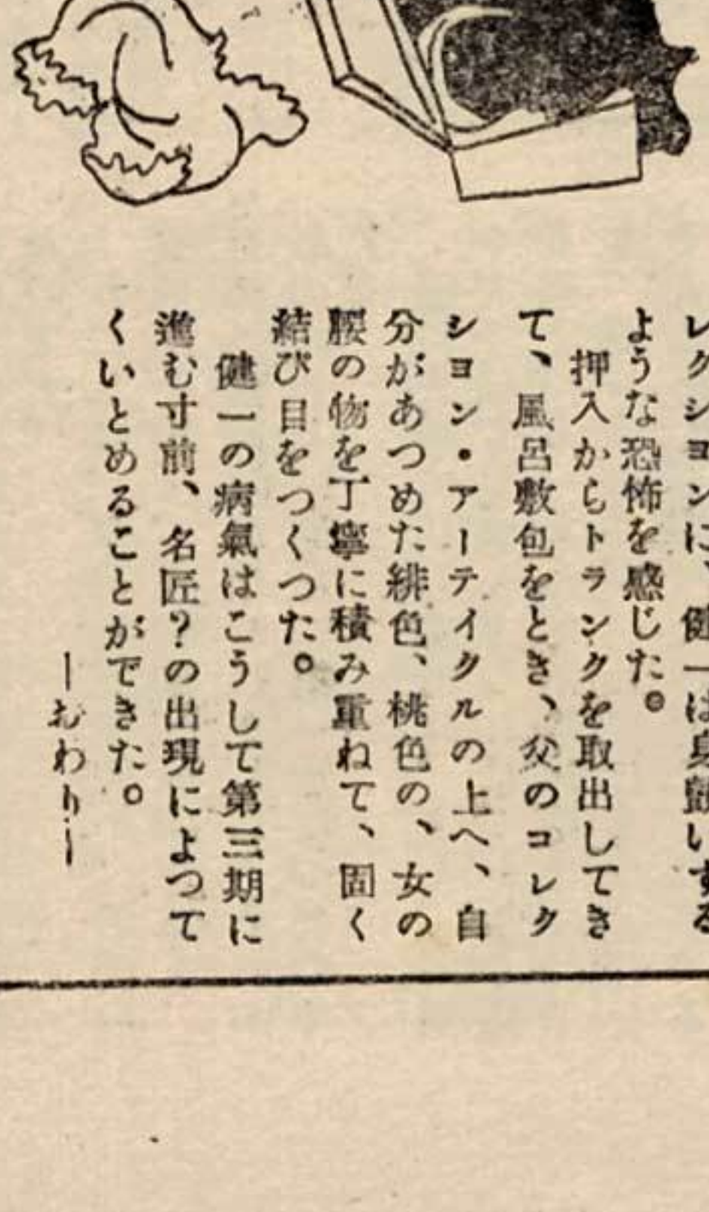
そう靜かに言い殘して、母親は下へおりてしまつた。

父子二代續いた、公開できぬコレクションに、健一は身顫いするような恐怖を感じた。

押入からトランクを取出してきて、風呂敷包をとき、父のコレクション・アーテイクルの上へ、自分があつめた緋色、桃色の、女の腰の物を丁寧に積み重ねて、固く結び目をつくつた。

健一の病氣はこうして第三期に進む寸前、名匠?の出現によつてくいとめることができた。

—おわり—



青空を瞬く手術話の内
大手術
徒の犯罪



杉山清詩

長妻玲子 画

……A……

看護婦は気が強いとか、よく人は申しますが、本当でしょうか？

もうこの頃では、無くなつたでしょうが、所謂深窓の令嬢なる人種と比べれば、なる程気も強いし、第二の心臓だつて健全でしよう。でも、虫も殺さないような顔をしていて、堂々とパンとしての資格を持つていたり、表面上品ぶつて、社交家のような顔している山の手令嬢の、人知らない余技の方が、余程気が強いように見えるのはあたしの僻みでしようか——？

あたしは女学校を出ると、家があまり裕福ちやなかつたので、何とか、将来自分で独立した生計を営み、親にも少しは安心させたいという、まるで男みたいなムホンを起して、三度の御飯を減らせてまで、あにしを女学校迄出して下さつた親の御恩を、少しでも返したい気持もあり、看護婦の試験を受けたのです。

更には保健婦になり、産婆の免状も取つてと、あたしは考えておりましたというのはあたしの家庭は、母親一人あたし一人という、淋しい生活でもあつたからなのです。つまり、あたしが将来は、家計の大黒柱にならねばならないという観念が、根強くあつたからなのです。

あたしは、京都府立医大の、看護婦養成所を出て、見習期間を過ぎると、巨椋外科病院に雇われました。それがあの呪わしい運命の第一歩だつたのです。

医科大学に居た頃には、よく、解剖や大手術も見学しましたし、かなり気も強くたり、どんな光景を見せられても、気を失つて卒倒してしまうようなそんなあたしぢやない筈でしたが、さすがに外科病院となると、頭が割れてよくまアまだ生きているというような患者や、電車にはねられて、手足が、皮だけでぶらんとくつついてるような患者、腸をぶら下げて、断ち割られた腹腔から、吃驚する程沢山な血を噴いている患者など、かなり凄惨を極める重症患者が、次々と運ばれて来ると、さすがに人間というものが、生きているという事が、とても恐ろしくなつて夢を見たりする事もありました。

やがては、あの凄惨な怪死体を発見して、死刑の宣告を受けねばならないあたしでしたが、まだその頃は、深夜に呻く重症患者の声ですら、まるで地獄からの慟哭のように、恐ろしく感じたものでした。

巨椋病院は、隆三郎博士が外科医の泰斗でもあり、よくはやりましたし、大阪府の堺三宝海岸に、精神科の分院もありました。京都の本院の方は、博士と、長男の郁夫さん、次男の郁次郎さんが、主治医として担当され、三男

の郁三さんが、堺の分院長をしておられました。看護婦は皆で五人、他に博士夫人と、運轉手の宿院茂夫という人とが、この病院に起居する者の全部でした。

菅原三四子という看護婦さんが一番古いし、一番美人でもあり、小型自動車も運轉するし、一寸した往診なら代診も出來る、至極便利な人でしたので最も重宝がられていましたが、何でも長男郁夫さんと、尋常一様の間柄ではなく、どうせ巨椋病院の若奥様に、將來は納るだろうと、あたし達プレ雀たちは、蔭で囁き合つたものでした。

また、それを非常に嫉んで、次男の郁次郎さんに、何かと言つては取入り戀人然として振舞つている浜寺波子さんという看護婦さんは、体裁のいゝ、パンパンのような事もするし、多情で嫉妬家で、多少お目出度い所もある、レデイメードの娘としては、標準型のような女の人でした。

看護婦さんはもう二人居ますが、これからあたしが語ろうとする話には、別に何の関係もありませんので、冗長な説明は省いておきます。

さて、あの恐ろしかつた事件を語るまでに、一寸した出來事を話さねばなりません。浜寺さんのような人から見れば、それはちよつとした事かも知れませんが、當のあたしにしてみれば、とても重要な事なのです。

やはりあたしも平凡な女でした。あたしは郁夫さんの、若くて精力的で、その頼もしい熱情に心惹かれ、圧倒されたのです。郁夫さんもあたしに気があつたのでしようか、それとも男心の浮気だつたのでしようか、偶然二人で堺の分院へ行く時、自動車の中で、あたしを抱きしめました。勿論あたしも、嬉しさに胸を焚いて、言われるまゝに唇を受けました。

そうしてその夜、あたしは初めて男の肌を知りました。生の悦びと、仄かな希望を味つて、あたしは処女を捧げた事を悔いませんでした。プラトニツクだつた時には分らなかつた、愛情というものを、友情の彼方から感じ取る事が出來たのです。

あたしのおのろけは、これ位にしておきますが、好事魔多しつて、本当だと思いますわ。この幸福の絶頂に、恐ろしい悲哀の魔口が、ぽつかりと赤い口を開けていたのです。

「稔子さん、僕は自分の行爲に責任を取る。愛の前には、どんな大きな障害だつて問題ぢやない。僕ははつきり告白するが、菅原君の肉体も、浜寺君の身体も知つている。しかし、今迄は遊戯の範圍でしかなかつたが、今度始めて、君によつて、愛情を発見し、幸福を感じた。僕は君との結婚の爲に、過去を清算し、出來得る限りの努力をする事を、こゝではつきり約束しよう」

郁夫さんは、あたしにそう言つて下さいました。でも、本当はその時、それぢやア菅原さん達が、あまりにも可哀想ですわ、と言おうと思つたのですが、どうしても言えませんでした。

浮気な男心も、女を得た時、誰もが言う言葉も、狂愛に溺沒している時には、顧みる余裕も、檢討してみる智性もないものです。

あたしはあの人の言葉を全幅的に信頼し、それだつたからこそ、本当に幸福だつたのかも知れません。

……B……

それから、一ケ月過ぎ、あたしと郁夫さんの蔭口も、誰彼がそろそろ感付き出して、何か言つているようでしたが、それが耳に入つて來ると、却つて愉しいような気持にさえ、なつたものでした。

そして、八月二十五日は來ました。その夜、何気なく、入院患者の部屋を廻つて、もう寢ようと思つて、調剤室の前まで來ると、電燈を消して、二三人の男女が、何かぼそぼそ話し合つているのが、洩れて來ます。あたしはその声が郁夫さんだと分ると、思わず呼吸を殺して、立聞きしてしまつたのです。声は、郁夫さんと郁次郎さん、それに菅原、浜寺両看護婦でした。

「郁夫さん、本当に貴方、境さんと結婚する積りなの？　本当に境さんを愛してらつしやるの？　いいわ、いいわそれならそれで、私にだつて考えはあるんですからね。若し結婚でも発表して御覽よ、外科用メスで、貴方も境さんも、殺してやるからー」

あたしは思わずぞつとして、その場へ釘付けになつていました。

「はゝゝゝ、三四子さん、君は本気になつて怒つてるのかい？　そりやア稔子さんが承知で、僕に身体を許してくれるんだもの、遊ばせて貰うくらいは還慮はいらないだろう。僕はこの病院の相続人だぜ。たかゞ新米の看護婦くらいに現を抜かして、あわてて正妻に迎える程、僕はお目出度くない積りなんだがね」

ま！　あんまりだわ！　男つて、男つて本当にそんなものなんでしようかあたしは郁夫さんに欺されたんです。郁夫さんはうまい事を云つて、あたしの処女を奪つて、弄んで、飽きればすぐ棄ててしまうつもりなんです。

色魔、色魔！　本当に外科メスがあつたら、あたしだつて突き殺してやりたい！

「おい兄貴。そう露骨に、人間性つてものを現すもンぢやないよ」

「郁次郎、お前は少し陰険すぎるぞ。浜寺さんと結婚して、俺を殺して、自分がこの病院を乘取る計画だとか、誰かが噂してるのを聞いたが、実際お前という男は、何を考えてるのやら、さつぱり分らんからなア」

「まさかネ、しかし、兄貴が何とかうまく死んでくれればいゝとは、正直な所思つてるがネ」

「どいつもこいつも物騒な奴ばかりだ俺は明日から又暫く堺分院へ行かねばならんから、その間に、ゆつくり毒殺計画でも樹てておき給え、さア、それぢやアこの辺で散会だ。三四子さんもそう膨れるなよ。この可愛いゝお顔が泣きますよ。」

「知らない！　憎くい人！」

「痛いよ、そう活発に抓つたら。」

「やれやれ、こんな所を境看護婦が見付けたら、又一騒動はまぬがれそうにもないぜ」

あたしは、それからすぐそこを離れてしまつたので、それから後の事は聞けませんでしたが、暫くして、みんな出て來たようです。

「境さん。もう寢たの？」

突然郁夫さんから呼ばれて、あたしはあわてて出て行きましたが、あの人の顏を見ると、口惜し涙がこぼれそうになりました。

「は…ァ、何か？」

「又分院の方が忙しいらしいんで、應援を賴んで來たんだが、明日、君も來てくれ給え。思出の三宝海岸で、何があつたか知つてるだろう。あの夜は月が綺麗だつたね。僕はあの晩から、青春の歡喜と、人生の幸福を知つたのだよ。君のお蔭でね。又明日の夜は、あの浜辺で君と会えるだろう。ねえ稔子さん——」

「アラ、何をなさるの、こんな所で、こんな所で、駄目ですわ。人が見ます——」

「ぢやァ僕の室へ行こう」

「い…いゝえ、あたし——離して下さい。お願いです」

「何を言つてるんだ、稔子さん。僕は君を——」

「いゝえ…いゝえ…」

あたしは泣いて拒もうとしたのですが、やつぱり駄目でした。女つて、どうしてこんなに弱いんでしよう。征服された女つて、どうしてこんなに弱いんでしよう。あたしはその夜も、二度目の羞恥を、両手で蔽つて、あの人の求めを拒ばむことが出來なかつたのです。

あたしは、いけない女なんでしようか。自己が処女を捧げた男の肉体は、心では憎みながらも、遂にあたしの深層心理が、生理が、最後までは憎みきれず、却つてその肉体を、忘れる事が出來ないものなんです。

痛ましくも悲しい、女性の微妙な心理の足跡、精神と生理の闘争、それは如何に悲惨なものであるとしても、そのなかには、ひとすじの透徹した美しささえ、見出す事が出來るのではないでしようか。若しこんな自己說慰が許されるならば——。

……○……

警察の供述調書より

「境稔子の逮捕狀を書いて下さい」

乙女探偵青空晴子さんにそう言つたのは、今度の巨椋郁夫殺害事件を担当した、本郷刑事部長だつた。

その調書によると、事件の概要は、大体次のようなものだつた。

八月二十六日、郁夫は朝から堺分院へ赴く予定の所が、鉄道事故で多数の患者が運び込まれたので、彼が病院を出たのは、丁度午後四時だつた。何しろ暑い最中でもあり、鞄一つ持つて、ワイシヤツ一枚の軽装で出かけていつて遲れておいでになるのでしよう」

五台程電車を待つてみたが、まだやつて來なかつたといつて、再び分院へ戻つて來たのが、彼女が分院を出ていつて、約五十分程後だつた。この時間が、非常に重要な問題になつたので、こゝで少し掲げてみると——

稔子分院着、午後五時二十分。五時半まで分院に休憩して、再び停留所へ向う、分院から停留所まで徒歩で約十分。

「停留所の時計は、五時三十八分でした。間もなくその電車が入りました。この時間は夕方のラツシユなので、殆ど七、八分間隔で電車が到着します。六時十分の電車の客が降りるまで待つていましたが、お見えにならなかつたので、仕方なく分院へ戻つて參りましたが、玄関の所にある時計は六時二十分でした。」

と彼女は言つているが、こんなに正確に時間を覚えていた事が、却つて彼女を、恐ろしい淵へ墜してしまつたのである

郁夫の到着があまり遲いので、分院の看護婦羽衣松子が、再び八時が鳴つて病院を出ると、彼を停留所へ迎えに行つた。所がその途中で、分院と停留所までの間の、淋しい松林の中で、無惨な郁夫の惨殺死体を発見したのだつた。

その死体というのが、実に凄愴を極めており、彼は全くの丸裸にされてしまつて、松林の中へ棄てられていた上に、外科用の鋸か何かで、首をチヨン切られて、首と胴体が別々になつて、血の海の中に横たわつていたのである。

急報により、堺市警察署は大活動を始め、直ちに死体は檢視されたが、致命傷は首の切断。それ以外に傷らしい傷も、毒死の狀況も何もなかつたし、兇行時間は、大体午後六時前後と断定された。

境稔子には悪い動機もあつたし、彼女は本院を出る時に、郁夫の外科医用器具を持つて出ており、その中には外科用鋸も、大きな解剖メスも、人間の首の二つや三つ、簡單に切断出來る器械は、何でも入つていた。更に彼女は丁度その時間に、郁夫を卽える爲に停留所へ行つていたというが、夕方のラツシユでかなり混雜していて、彼女が居た事など、駅員の誰一人証言してもくれなかつた。しかも彼女は外科看護婦、その上更に悪い事には、京都本院に紹介してみると、郁夫は確かに四時に京都を出ている。京都本院堺分院間の所要時間は約一時間五十分位。

これでは如何なる弁解も不可能で、彼女は直ちに逮捕され、京都市警本部へ護送されて來ると、恐ろしい殺人犯人として、送廳は決定されてしまつたのである。

「本人はたゞ泣くばつかりで、殺人事実を肯定しないんですが、これでは何とも仕方ないでしよう」

「止むを得ませんわ、これだけ傍証が確定的ならね。」

晴子だつて、彼女の犯人說には、何の疑義をはさむ余地もない。すぐ逮捕令狀が作成され、四十八時間の拘留期

間が過ぎると、彼女はすぐに檢察廳へ重大犯人として廻送された。

その受持檢事は、晴子さんの戀人でもあり、若き智腦犯主任檢事として令名も高い、鴨川檢事だつた。彼も稔子の斷罪を認め、一日の檢事拘留がすぎると、判事の手に移され、京都拘置所に未決囚として收監された。

もう九月に入つたある日、境稔子の殺人被疑事件に關する、第一回の公判が開かれる事になつたが、彼女は弁護士も選任せず、官選弁護人が立つという事だつた。

「晴子ちやン、実は僕も一寸弱つてる事があるんだがね。」

と鴨川檢事。

「まア、貴方でも弱られる事があるの？」

「そう眞綿で首しめるなよ。僕だつて弱る時は弱るさ。しかし、女は女同志という事もあるが、君、もう一度訊問をやつてくれんかなア」

「誰を？」

「境稔子、例の医者殺しの看護婦さ。君も知つてる通り、刑事訴訟法三三六條つて奴で、判決は証據によると規定されているが、判事の曰く、傍証は充分だが、決定的な確証はないものかと言うんだよ。それで又彼女を引出して再三調査はしたんだが、どこまでも犯行の承認はしないし、何を尋ねても、泣くばつかりで、全く話にならんのだ。」

「まア、とにかくその人に一度会わせて頂戴」

晴子は段々興味を感じ出したらしくやがて監房から彼女が引出されて來た。髪は油気もなく、顔は白紛気を失つてその絲衣は一層に痛々しくやつれ果てた哀愁の色は濃かつたがまだ純情の影は消えていない。楚々としたこの娘が、殺人犯人だなどとは、どうしても思えない程だつた。



「貴女、どうして医長さんを殺したりなんかしたの？」

晴子が暖い視線で彼女を捉えながらそう言うと、その女はハツとしたように、顔色を動かせたが

「犯人は私ぢやありません」

と、消えるように言つた。

「え？貴方犯人じやないつて？　ぢやア、どうしてこんな所へ來たの？」

「警察の人が私を勝手につれて來たのです。私がどんなに弁解しても、誰も信じてくれないから、私は重い罪を着せられるんです。私は日本の法律を恨みますわ。私が本当の事を言つて、それで死刑になるなら、なつても構わないんです。これから將來、私と同じ目に遭う人さえ出なかつたら、たゞ、それだけなんです。」

彼女は何か考え考え、ポツ〳〵とそう言つた。その間檢事は、少し緊張した様子で晴子を見た。もしこの陳述が本当なら、事件は忽ち逆轉し、それこそ、とんでもない事に、なるからである。

「ぢやア、君以外に、誰か郁夫君を殺し得たというんだね？」

「そんな事まで私は存じません。そんな事は警察でお調べになる事ぢやありませんか」



鴨川君は默つてしまつた。だから、女つて奴は、扱い難いという顔付である。

「貴女、自分が犯人でないなら、どうして弁護士をお頼みにならないの？」

「他人に弁解してもらう事なんかありません。自分の事は、自分が一番よく知つてるんですもの」

晴子は又暫く考えていたが、傍の司法事務官に、調書の筆記を依頼した。以下、司法検事補大谷喜美子さんと、被疑者境稔子の対談である。

「今迄貴女が仰言つた事は、全部間違いありませんね」

「えゝ、嘘は申していません」

「堺に於ける貴女の行動と時間も、御記憶に相違ありませんね」

「はい」

「貴女と郁夫さんとの交際関係は、どの程度でしたか？」

「身体を許したのは三度きりです。それは、私が進んで許したので、あの人は暴力に訴えたりなんか、全然しませんでした。」

「郁夫さんを憎んでましたか？」

「……いゝえ、最初、男の好奇心から処女を奪われたと聞いた時には、腹も立ちましたけれど、最初に処女を許した男の人は、心から憎み切れません。あの人が私の肉体に必要を感じられた時、私は再びあの人にお任せしましたこの愛情と熱意で、菅原さんに勝てるならと思つて――」

そう言つて、少し頬を染めると、視線を斜に逃げた。やゝ小柄なせいか、うなだれた彼女は一層しおらしく見え白い襟許に戦くパーマの髪が、手を触れれば露の落ちる、秋海棠のようになよなよしい。

動機が崩れた！　もうアリバイさえ確立すれば、彼女はこんな忌々しい縁衣と手錠から、今すぐにでも解放されるのに。しかし、この絶対鐵桶のアリバイは、果して崩れるだろうか。それはとても常識の世界ではないのだ。

「あたし、貴女の爲に　出來るだけお力になつてあげるわ。あたし、貴女と話してると、段々自信がついて來るの貴女はそんな恐ろしい人ぢやないわね貴女は人を殺したりするような、そんな悪い人ぢやないわ。ね、ね、そうでしょう？」

「私…私、あの人の事、本当に何も知らないんです……」

彼女はそう言うと、突然その頬からは、涙が堰を切つて溢れ、激しい嗚咽に、泣き崩れてしまうのだつた。

……D……

それから五日がかりで、部長が調べあげて來た事項――

一、兇器の外科鋸からは、指紋発見されず。

二、死亡時間、午後六時に間違いなし

三、兇行当日の関係者の動き。

イ、巨椋郁夫、境稔子は供述書の通り。

ロ、巨椋郁次郎、午後六時頃は入院患者見廻りの爲、確かに在院。

丁度その前後に、看護婦菅原三四子より電話があり、院長が取次いだので、時間的にも誤謬なし。

ハ、看護婦浜寺波子、五時半より八時頃まで、交通事故患者報告の爲、市警本部と京都駅へ出張。

ニ、看護婦菅原三四子、境看護婦と相前後して、午後三時半頃自動車で外出、ワクチンその他を取寄せる爲に、近くの病院や保健所を巡回、午後六時頃、九條保健所より、所定量が得られなかつた旨本院へ電話。それから山科保健所等を廻つた爲に、十時頃に帰院。

ホ、運轉手宿院茂夫、病気欠勤。

その他に、これらに対して、部長はこう報告した。

運轉手はたしかに一日中家に寝ていました。急性大腸カタルで、半時間おきぐらいに便所へ走つてましたから、全然外出など思いもよりません。

尚それからですね、晴子さんを前にして、一寸言い難い話なんですがね、あの兇行のあつた前夜、郁夫君は境看護婦を自室へ引入れたんですね。今迄肉体関係のあつた、菅原、浜寺両看護婦が、とても嫉妬して、境看護婦を、二人して物凄くいじめたと、他の看護婦が証言したんですがね」

「ふん、その二人の看護婦にも、郁夫殺害の動機は、可能性があるという訳だね。女の嫉妬には、万軍の将も降参したというからね」

「所が菅原君の方は、兇行のあつた午

後六時少し前に、たしかに九條保健所に居て、そこから電話をかけていた事は、郁次郎も病院長も、保健所の宿直保健婦なども証明しています。いくら自分が自動車を運轉していても、まさか五分もかゝらずに、京都から堺へブツ飛ばせて、そこで郁夫を殺す事は出來ません。また浜寺看護婦は、六時少し前に、市警本部の事故係に居て、新聞記者などと話してたそうです。これ又天馬に乘つても、一、二分では堺まで行けません。」

「完全なるアリバイだね」

「だからですね、これは逆に、前夜にいじめられた境看護婦が、二人の同僚への怨念を、その原因を作つた郁夫に向つて、爆発させたと考えては……」

「しかしあの娘は、そんな悪ズレした女のようには見えんがねえ」

「ちやア、犯人が無くなつちまうぢやありませんか。」

やはり事件は空轉するばかりで、決定的な証據はどこからも出て來ない。

稔子の母は、一人娘が人を殺して、死刑になると聞かされ、気も顛倒するばかりになつて、何度か涙で娘に会い何度か、檢事に嘆願したか分らなかつた。しかし、事件はもうこれ以上、二進も三進も行かなかつた。そしてもう公判は明日に迫つてしまつたのである。

「これが探偵小説なら、この辺で金田一耕助か誰か、名探偵が現れて、意外な犯人を引ぱり出して來る所やけど、実際事件では、もうそれ以上どうにもならないわ」

「晴子ちやんは、誰に嫌疑の重点を置いてるんだね。その人間が、例えば往年の小笛事件みたいに、証據がないばつかりに無罪になつてるとか、帝銀事件のように、九分九厘間違いないと思うが、極め手のデータがないので、自信が持てないとか……」

「えゝ、そうやわ。このまゝで終つたのでは、あんまり後味が悪うて、うちようよう寝まへんわ」

「ぢやア君の犯人説は」

「それはまだ分りませんけれど、稔子さんゝ犯人ぢやないと思うのです。そんな気がするんです」

「うン、しかし思うだけでは無罪になら ないよ。明日、公判だし、明日中に判決が決るかも知れないぜ」

「え、えゝ——あたし、ベストを盡して、最後まで闘つてみるわ。或は、貴方の論告を覆すかも知れないわよ」

晴子はそう言うと、何か決する所ある如く、巨椋病院への電話器を取上げていた。

「——お宅、あれから自動車お使いになりまして？　え？　運轉手がまだ休んでるから、ずつと使つてない。アそうですか、えゝ、いゝえ、何でもないんですが、この一ケ月間のガソリンの使用量、すぐ檢察廳までお知らせ下

……E……

公判廷に於て——

刑法第百九十九條。人ヲ殺シタル者ハ死刑又ハ無期若クハ三年以上ノ懲役ニ処ス。

さすがにその日は、傍聽席には、巨椋院長以下、みんなの顔振れもあつたし、隅の方には、何も始まらないうちから、泣いてばかりいる稔子の母親の姿もあつた。

やがて開廷が宣言され、裁判長ょ稔子に訊問したが、それは今迄の供述と何ら変る所はなかつたし、鴨川檢事は情状酌量論を述べ、懲役十年が適当と認めると言つた。官選弁護士は証據不充分に付、起訴すべきでないと言つたが、裁判長は傍証充分として、彼女を殺人罪として処断する様子だつた。審理は続行され、当然このまゝでは、この若く可憐な婦人被告に、十年以上の極刑が判決される事は、必至と見られるに至つた。

その時である。檢事席から立上つた若い婦人が、

「被告人境稔子は無罪と信じます」

と言つた。瞬間、滿廷わーッという

戰めき、何かとても割切れない異樣な空気が、次の爆発点へ向つて、ぐんぐん盛り上げられて行くといつた、急迫した感じだつた。

彼女は、眞実を語る旨宣誓して、証人台に立つた。何か意を決する所のある、青空晴子さんである。

「刑事訴訟法第三三六條により、推理は机上の空論として、犯行決定に何等無價値なものであると断定されれば、それまでの事でございますが、一応のあたしの推理経過を申上げ、それを参考として、もう一度事件の再審査を裁判長にお願いして、判決をその後に延して頂きたいと、願うものでございます」

彼女の麗音は、全ての人々の胸へ、喰下るように響いていつた。

「それは、あの死体に関しての疑問ではなく、兇行場所についての疑問でございます。と申しますのは、あの死体は、午後六時頃に殺害されたと断定されていますが、これは法医学上、間違いのない事でございます。しかし、午後六時頃に、堺三宝海岸で殺害されたとは、どの調書も報告も、書いてはありません、死体が堺で発見されたから堺で殺されたのだと、勝手に想像しただけの事で、実際は堺で殺されても、京都で殺されて堺まで運ばれても、午後六時には、変りないわけであります」

再び激しい動揺が傳わる。一体晴子は何を言おうとしているのだろう。恐ろしい大秘密の核心に触れる言葉に、誰もが片唾を呑み、次の言葉を待つていた。

「その第一の反証は、兇器と推定される外科鋸ですが、これは境看護婦が持つていたものとは限りません。あの鋸からは血痕も檢出出來ませんし、誰の指紋も採れません。それに第一境看護婦は、外科器具を一旦分院に置いて、それから後に素手で、停留所へ向つています。だからその途中で殺人を犯したとしても、彼女は外科鋸は持つていません。これは彼女に罪を被せる爲に誰かが他の外科鋸を使つたものと思います。

第二の反証は、彼女は犯行を否定する動機を否定しています。女の心理として、最初に処女を捧げた男性を、惨殺しようと思う気にはなれないものだからです。

第三の反証は、いくら人通りが少くても、日沒後の午後八時に、羽衣看護婦がすぐ死体を発見しているような場所に、ラツシュ時の夕刻から、二時間以上も誰も氣付かなかつたとは、考えられません。即ち、その八時前に、死体はあすこへ運ばれたのではないかと考えます。

第四の反証は、あの附近から、被害者の衣類が、全然発見されていない事です。

第五の反証は、境看護婦の衣類が、全く血で汚染されていない事。

第六の反証は、彼女が停留所から戻つて來た時、全く取乱した様子もなく

安政三年七月二十一日

領事ハリスは通訳兼秘書のヒユースケンを連れて下田に到着した。

下田の町は、津浪から受けた被害のためにぺろつと舐められたように荒廃していた。黄色い顔の小人共はだからそれを口実に上陸を拒んだ。

然しニユーヨーク生れの彼は、無雜作にそれをはね返えして、姉崎の玉泉寺を提供させることに成功した。

海岸に近いその寺は、この異國人には余り気にいらなかつた。彼等は自由に散歩することも許されなかつた。何故なら、おしやべりの黄色人種は、彼等の姿を見ると、あわてふためいて紙の家へ駈け込み、ひどいのは薄つぺらな板で、その赤ちやけた紙の上を掩い、かくしてしまつた。

潮風にも脆い板囲いの町家が出來ていた。そうゆう街並は、合衆國の南方あたり、砂漠の中に開拓された都市のように、不思議な活気を呈しながら、しかし、外見は見すぼらしい建築だつた。

五日に玉泉寺を領事館らしく整え六日に星條旗を寺院の一隅に樹てることが出來た。

怪しげなテーブルと椅子、それにともかくベツトも出來た。大経師が入つて、得体の知れない飾りつけをして、それでも異人館らしい感じを出したつもりだつた。

……そうゆう町の中で、御奉行所と闕乏会所が目立つた。外國船の闕乏品、しかし事実は、貿易のための商品を若干陳列したものだつた。

しかしニユーヨークで商人をしていたハリスの眼から見ると總價格は一万円もしないものばかり——塗物反物、瀬戸物、紙類、錦絵、玩具なんかだつた。

國書捧呈の問題が紛糾して、日が経つていつた。

退屈な日が続いた。

南國らしい蜜柑が色づいて、めつきり食欲が着く頃になつても、身体を二つに折つてお辞儀ばかりだつた。

そうゆう或る日の午後、ハリスが縁に出て日向ぼつこをしていると、何となく耳鳴りがして、その原因について考えているところへ独り歩きの好きなヒユースケンが、ぶらりと戻つてきた。

二人はいつものように散歩に出かけた。

烏帽子を押し立てたような下田富士を見ながら、次第にたそがれてゆ

平靜であつた事。これは加害者が女性であり、しかも兇行後一時間以内では冷靜に振舞えないからであります。

これを要するに、嫌疑を境看護婦に向ける爲に、誰かが仕組んだ、兇悪な智脳犯罪と推定致します――」

晴子が話しているうちに、いつか烈しくすゝり泣いていたのは、当の稔子だつた。

「即ち、兇行は午後六時に京都で行われ、その死体を堺へ運んだものと思います。こゝまで申せば、もうお分りでしようが、そうした一連の可能條件を持つているものは、関係人物の中にはたつた一人よりありません。若しあたしの推理が間違つてなかつたら、この容疑者として、看護婦菅原三四子の逮捕を要求します！」

おゝ、鉄槌は下つた！誰もの眼が、一斉に菅原看護婦を見た。彼女は紙のように蒼ざめた表情を硬直させて、懸命に失神をこらえているかの如くだつた。

九重の謎の扉は、美貌探偵青空晴子の叡智の前に、正に解明されんとしているのだ。

「しかし三四子は、午後六時には確かに九條保健所に居たし、宿直員も証言していますが……」

「だから今あたしが申上げたように、郁夫氏は午後六時頃、九條保健所附近で殺され、それから自動車で堺へ運ばれたのです。彼が堺で殺されたと考えたのが、捜査の大きな盲点だと存じます。

その第一の証據は、ガソリンの使用量です。



く野道を、いつとなく町から離れて歩いていた。ハリスは秘書がなぜ、こんな所へ自分をつれて来るかわからなかつた。

「もう、少し行くと、温泉がありますし」

ヒユースケンは何処で聞いて来たのか、そんな事を言つた。

やがて温泉のある村へ入つた。うす汚い小屋の窓から湯気が立ち上り、人肌の脂がとけた湯の匂いがハリスの鼻を感覚的にえぐつた。二人はそうゆう一つの小屋へ近づいた。

……ぼんやりとした灯のともつたもやもやとした湯気の中で、つゝまし く湯を使う音がする。ハリスは久しく喪がなかつた匂いをかいだ。

そして鬢だらけの顔をそつと中へ近寄せた。隙間洩れる風が、ゆらりと灯さしを揺すぶつた。こおろぎが堪え〳〵に啼きしきつて、人の足音に時折りかすかに掻き消える。

ハリスは、眞白な、ふつくらとした二つの膨らみを持つたお臀を、はつきり見た。濡れて光る肩から背に流れる曲線に食い入るように眺め入つた。

そつと肩に触れる手を意識してふりかえると、ヒユースケンが口に指を当てゝ、脇の高窓を指差しているハリスは鼻の穴をふくらませながらそつちへ廻つた。

壊れ物のような髪を技巧的に結つた若い女が、弾力のある乳房を桃色に染めて、湯壺から上つた。たくましい腿だつた。愛すべき反り返えつた足の指だつた。

くびれた腹部の滑らかさは、彼の嗜好を充してくれそうだ。そして、見てはならない日本娘の秘密を覗いたような気持だつた。

日本特有の米からとつた粉は、石鹸よりも効果的に肌をすべ〳〵にするらしい。湯玉がそこらあたりに飛び散るのを見ながら、自分の乾ききつた清教徒的な魂を、その中へ、どつぷりとひたしたい欲望に身悶えした。

「あらッ」

と叫ぶと、娘はどぶんと飛沫を上げて湯舟の中へとび込んだ。

……水音を後にして、彼は轉るように逃げ出した。

後をふりかえつてみると、着物だけ引つかけた娘が、月の光を浴びながら、カラコロと木靴のようなゲタの音を立てながら逃げてゆくのが見えた。

彼は自分の方から誘つてヒユースケンと歩く毎夜の散歩が、こよない樂しみに思われた。

やがて自分のペットが独りきりでは廣過ぎるのを感じてきた。どうしても此の空虚を充塡しなければならないような氣がしてきた。

そうして、それには、かの蓮台寺の湯場で眺めたような器でなければならないと考えた。

当人お吉は、このようにして探し出された一つの美しい品物であつた。

―おわり―

量です。それまで大体順調に使われていたのに、あの兇行の日　約十二ガロンが一度に消費され、それ以後全く止つています。これは京都大阪間を走るに要するガソリンの量は　大体四ガロンですから、その一倍半の往復に相当する距離を、その日、車は走つた事になります。

その第二の証據は、あの死体遺棄地点に、ダンロップタイヤの轍跡を認めました。

その第三の証據は、その自動車の車体の中から、高山式測定法により、少量の人血の滴を檢出しました。

その第四の証據は、六時京都発、八時前に堺着、それからすぐ引返して、帰院十時頃、この時間の一致であります。菅原看護婦は、薬剤が整わなかつたので、それから山科保健所へ行つたと言つていますが、山科迄行くのに、そんなに時間はかゝりません。又保健所は五時に閉鎖される事は、よく知つていながら、そんな時間遅くに山科へ行くなんて、考えられません。山科保健所の宿直員も、來客はなかつたと言つております。九條保健所の如きモデル保健所で整わないのに、C級よりまだ小さな、格外保健所へ行くなんて、常識でも考えられない事です。

まだ二三の証據はありますが、これを要するに、もう少し順序を立てて申上げますと、菅原は三時半頃、自動車で病院を出て、その附近で待つているうちに、郁夫氏が出て來ました。そこで、いつも自動車で行くくせがあるので、今日もこの自動車で、堺分院まで送りましようかといつて、彼を誘い込み、麻薬タバコか何かで昏睡させますそこですぐ殺したのでは、犯行京都説が動かなくなり、自分が疑われてしまいますから、愛人を取られた戀のライバル、境稔子と郁夫氏が分院へ着いた頃を見計らつて殺害します。

九條保健所附近は、塔南小学校と日本電池の工場、空地などが周圍にあり秘かに人の一人位殺せます。そしてすぐ病院へ電話して、自分が京都に居る事を、故意に知らせます。わざわざ保健所の電話を使つたのも、第三者のアリバイ立証者を得る爲です。そして死体を箱に入れ、堺へ運びます。偶然それから間もなく死体は発見されましたが、発見がたとえ翌日になつても、檢視によつて、死亡時間が午後六時頃と分ればいゝんです。

首の切断はそこで行われました。これは生体反能を調べれば、死体を切断したものか、生きている間に首を切つたものかは、すぐに分ります。そして運搬中の諸痕跡や何かを消す目的だつたのでしよう。死体を裸体にして遺棄したのです。衣類は重みか何かをつけて、海か池に沈めれば、発見は困難です。

恐ろしい嫉妬が生んだ惨劇、あの前夜に、二度も続けて、郁夫氏から濃厚に可愛がつてもらわなかつたら、境看護婦がこんなにも苦しまなくても済んだでしようし、こんな恐ろしい悲劇は起らなかつたかも知れませんね。

以上で、あたしの推理の概略はおしまいです。もう一度再檢討されます事を、重ねて裁判長にお願い致します」

稔子はワーツと泣き崩れ、滿廷愕然として声を呑んだ時、菅原看護婦はその場にバツタリと昏倒してしまつていた。

——了——

映畵スタ——異聞

ハンドバックの中味

「野性」で共演する、伊豆肇と原節子嬢。聲のテストの時、別にセリフの打ち合せもせずに、てんで映畵とは關係のない、會話をやりとり初めた。

伊豆「原さん、しばらくですね」

原　「本當にネ」

伊豆「それは何んですか？」

原　「これハンドバックよ」

伊豆「何にが入つてるんです？」

原　「どうしてです。何にが入つているんですか？　聞かせて下さい」

原　「困るわ」

伊豆「言つて下さい」

原　「困るわ」

一体、あの歳で獨身の銀幕の聖處女原節子のハンドバックの中には、何にが入つていたか。

キツスがしたいとて

千兩肌で白狐の銀三に扮する長谷川一夫は普ては女性に受ける點では右に出る者がないと言われた人氣者であるが、彼は何時でも旅行の先々で盜難にあつた。その盜難品とゆうのが、彼の吸つた煙草の吸殻なのである。

もろもろの娘サンが、せめて間接のキツスでも、と思いつめた結果の犯罪であることが後でわかつた。

此れを聞いた或る助平な男

「冗談じやない。俺の所へ來りや、女でありや、誰とだつて、キツスぐらいはさせてやる」

とは、どうかと思うネ。

眞ツ裸はごうも

時節柄、エロチックなポートレートを寫そう、とゆうんで、閉めきつた寫場に、スチールマンと一緒に入つたストリトバーの吾妻京子、いろ〳〵思案の末、素つ裸のをとることにきめた。

スチール・マンがカメラを向けると、彼女はふくよかな腰に被つている白い衣を、うるさそうに、指でひつぱり

「ねえ、いつそのこと、これも取つちやいましようか」

とは、アツイ、アツイ。



！おわり！

奇譚倶樂部會員募る

猟奇的趣味を有する男女會員を募る。會員の作品は優先的に奇譚クラブ誌上に発表し、其の他會員相互の連絡、行事、催物等を行う

會員には毎號奇譚クラブ三部宛無代送付す。詳細は返券封入の上御照會を乞う。

（讀者優待景品進呈）

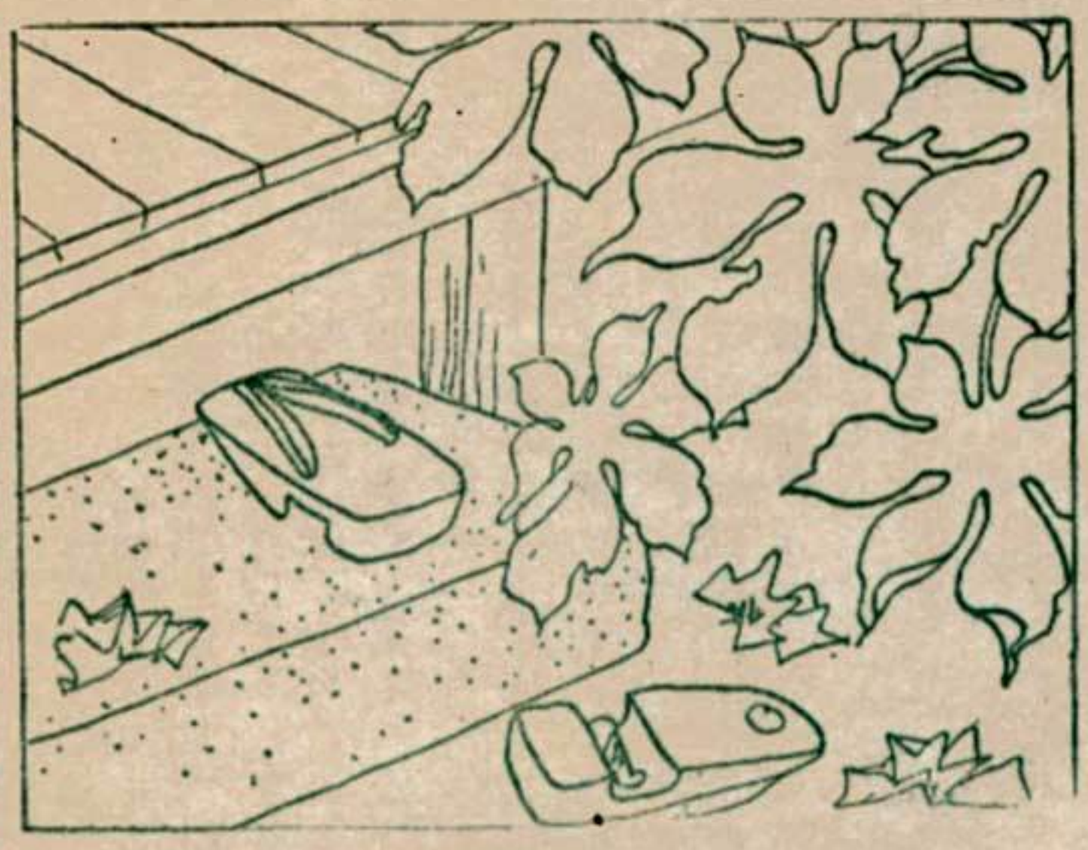
半年分六冊送料共
四百五十円（定價値上の際も据置）

右御支拂込の讀者の方々には

裸体（ヌード）**写眞一組進呈**

優秀モデルを使用した全裸美人各姿態五枚一組プロマイド印画紙焼付

隨時、珍しき景品、及び案内書等お送り致します



★原稿募集★

奇譚クラブといふ題字にふさわしい珍奇な内容を持つ傑作の御寄稿をお待ち致します

一、小説、讀物、挿繪、
二、探訪記、探險記、寫眞、マンガ、笑話、実話、
三、上品なエロチズム、ユーモアに溢れた軽快洒脱な作品を特に歓迎します
四、枚数には制限致しません
五、締切　十月十五日
六、採用篇には相当稿料御支拂いします
七、送先大阪府堺局内菅原通曙書房編集部宛
原稿受取後、出來る丈け早く何分の御返事差し上げ、優秀なる作者に対しては引続いて執筆御願い致します



STOP スト ッ プ。

讀者の聲

ハガキにてドシ〳〵讀者の頁係宛お寄せ下さるよう願います



小生は動乱の朝鮮に程近い對島の一寒村で半農半漁に従事している青年です。奇譚クラブは、特に小生の趣味にも合い毎號面白く讀んでいます。どうか働く者の娯樂になる記事を滿載して下さい。同好の方の御便りを待つ

（長崎縣對馬嚴原局區内久田村平間治郎）

○

はからずも驛の構内の賣店で手にした奇譚クラブが病みつきとなつて、今迄雜誌なんか讀んだことのない私が讀書嫌いになつてしまいました。地方田舎の記事もの丈けで買えませんか。折を見て私も一つ書いてみたいと思います。

（三重縣龜山町西町　寒川恭助）

○

表紙の乙女の瞳はいゝですね、四國から大阪へ歸る途中神戸に寄港した際那智丸にて買い入れました。内容は飛び切り面白いので一ぺんに氣にいりました

（愛媛縣周東郡櫻樹村楠濱、渡邊操）

○

毎日汗と脂にまみれて、抗内に働いてくたくたになつてしまうのですが、酒も煙草ものまない私は、奇譚クラブを讀むのが、又となき樂しみです。もう少し毎號早く出して頂きたいと思いますが外の本はあまり私にはぴたりと來ないように思いますので

（福岡縣三池郡三池町　吉開馨）

編集後記

大衆雜誌が讀者から倦きられて投げやりな編集をやつている雜誌は明け方の星のように、次々と自分から消えてなくなつて行つた

創刊號即ち終刊號なんていうのは今時珍しくもない

又それだけ、創刊號だから、何か新しいものがあるだろうかという期待ももう讀者は持たなくなつてしまつた。

雜誌は、はつたりや、ゴマ化しで賣れるものではない。大衆の眼は恐ろしい。誠心誠意がやはり勝を占めるのであつて、一時の思いつきは、そう永く續く性質のものではない。

古今東西の珍談奇聞を取り揃えて、奇譚クラブという特異な雜誌を作りたいという編集者の念願は、幸いに多數、愛讀者の御支持を得て、益々充實してゆくことは只々感謝の外はない。

派手な宣傳もやらなければ、讀者を釣るようなことはしないが、それだけ雜誌の上で、眞面目に讀者に奉仕してゆきたいと思つている。

公會堂で讀者大會をやつた時は雜誌社の潰れる時だと言われているが、そんな線香花火的なハッタリだけで行ける時代ではないことは確かである。

次號には、本誌獨特の地味な、しかも噛めば噛む程、味の出る新機軸の企畫によつて、御好評に答うべく準備をすゝめている。乞御期待！

奇譚クラブ　十月號
魅惑と獵奇特集　定價　七拾圓

昭和二十五年九月二十五日印刷
昭和二十五年十月　一日發行

發行所　堺市菅原通四ノ三〇　曙書房
編集印刷發行人　吉田稔